

第51回日独スポーツ少年団 同時交流 報告書 2024



BERICHT DES 51.JAPANISCH-DEUTSCHEN
SPORTJUGEND SIMULTANAUSTAUSCHES

..... 第 51 回日独スポーツ少年団同時交流報告書

目 次

第Ⅰ章 ドイツ研修の旅 ——日本団派遣の記録	2
■ 団長団総括(団長・総務)	3
■ 全体プログラム(前半)	18
■ 地方プログラム	19
■ 全体プログラム(後半)	38
■ 引率指導者レポート	39
■ 団員レポート	47
■ テーマレポート	61
■ お世話になった方々	66
第Ⅱ章 ドイツの友を迎えて ——ドイツ団受入の記録	67
■ 全体プログラム(前半・京都)	68
■ 地方プログラム	69
■ 全体プログラム(後半・東京)	127
■ ホストファミリーの声	128
第Ⅲ章 実施概要報告	135
(1) 日本団派遣	136
① 実施要項	136
② 日本団事前研修会(オンライン)	139
③ 日本団の編成	140
(2) ドイツ団受入	141
① 実施要項	141
② ドイツ団の編成	143
③ ドイツ団受入通訳一覧	143
(3) 日独スポーツ少年団国際交流協定書(2024-2027 年)	144

あとがき

第Ⅰ章 ドイツ研修の旅

●日本団派遣の記録



第51回日独スポーツ少年団同時交流 ～感動の連続で、次代を担うリーダーが羽ばたいた！～ 日本団団長 ^{けんじょう} 見城 ^{としはる} 俊昭

はじめに

第51回日独スポーツ少年団同時交流の日本団(団長団3名、引率指導者8名、団員44名の総勢55名)が令和6年7月29日(月)から国立オリンピック記念青少年総合センターで日本出発直前の研修を済ませ、30日(火)の日本団結団式を経て、31日(水)にドイツに飛び立ちました。

ドイツでは、ドイツスポーツユース(Jugend:Deutsche Sportjugend)をはじめ、ホストファミリーの皆さまなど多方面の方々から温かいご支援を賜りましたことに対し、心から深く感謝申し上げます。

また、通訳やコーディネーターの皆さんを始め、この交流の目的等をご理解いただき、交流全般にわたってご支援していただきました多くの皆さまに、厚くお礼申し上げます。

ドイツにおける交流は、日本団全員が無事に全てのプログラムを終え、大きな成果を土産に、少し日焼けした元気な顔で8月15日(木)に帰国しました。

ドイツ着から宿泊施設へ

およそ15時間(機内食が4食)のフライトを経て、ドイツのミュンヘン国際空港に降り立った日本団は、dsj 関係者など大勢の方々の温かい出迎えを受け、公共交通機関の S バーン(電車)で宿泊施設に向かいました。

宿泊施設での夕食後、dsj からオリエンテーションが行われ、団長団と引率指導者は引き続き指導者ミーティングに臨みました。翌日からのスケジュールを中心に確認し、22時半過ぎに宿泊部屋へ戻り、荷物の整理やシャワーを浴びるなどの諸々の活動を終えて床に就いたところです。

全体プログラム(前半)から地方プログラムへ

8月1日(木)は、ミュンヘン新市庁舎を表敬訪問。午前 11 時、新市庁舎前の広場には多くの住民や観光客が集まり、新市庁舎に設置されている「からくり時計」を觀賞されていまして、日本団も一緒に觀賞し、記念の集合写真を撮りました。グループに分かれて行われた市内オリエンテーリングでは、ドイツのランチやミュンヘン市内を堪能しました。



▲ミュンヘン新市庁舎での表見訪問

夕食後には、交流テーマに関するワークショップが dsj 側の進行で進められました。このワークショップは、地方プログラムでドイツの青少年等とディスカッションするための事前研修として開催されたものです。団員たちは熱心に、そして活発な発言で中身のある研修となりました。

翌日の2日(金)は、朝食後から8グループごとに分かれて、期待と不安を胸に引率指導者と通訳者、コーディネーターと一緒に電車や自動車で地方プログラムへと出かけて行きました。

団長団は、団長、総務、庶務に通訳と運転手を兼ねたコーディネーターの5名で、関東 I、近畿、四国グループの視察と参画、それにお世話になっている地方プログラムの受入団体の関係

者やホストファミリーの皆さまへのご挨拶とお礼、さらには受入地の市長への表敬訪問等を行うため、自動車でアウトバーン(高速道路)を移動しました。

移動の合間には、ドイツ皇帝が国を治めていた時代のお城や教会、バロック建築の建物が連なる市街地を散策するなど、ドイツの歴史や文化、市民生活の実態に触れる貴重な機会となりました。

最初に関東 I グループに合流

団長団が最初に視察し、参加した地方プログラムは、フルダ(Fulda)で受け入れていただいた関東 I グループです。

2日(金)の朝に8グループが地方プログラムに出発するのを見送った後、団長団はフルダ(Fulda)に向けて出発しました。移動の最中には、ニュルンベルク(Nürnberg)で中世から残る旧市街を散策し、日本とは異なる勇壮で豪華絢爛な文化の香りがする貴重な歴史資産にも触れて、緊張した自分がいました。そして夕方にフルダ(Fulda)の宿泊先に到着しました。

翌日の3日(土)に関東 I グループと合流し、午前中はハイキングやチャペル見学、午後からは災害による倒木などの被害地復旧(活用)を目的として整備されたヴァッサークuppeにあるアクティビティ「スーパースライダー」を体験し、快適な一時となる楽しい時間を過ごしました。そして、このヴァッサークuppeの草地に着座し、日独の青少年同士で交流テーマに関する意見交換会(討論)が始まりました。それまでグループで話し合った内容を中心に活発な意見交換がなされ、屋外の森の中で堂々と意見を発表する団員をリスペクトして、気づいたら拍手を送っていました。

4日(日)、関東 I グループはホストファミリーと過ごす日であったため、団長団はポイント・アルファやヴァルトブルク城を見学するなど、名所で英気を養ったところです。

5日(月)は、大聖堂などのバロック建築の市街地を視察した後、フルダ市役所を表敬訪問し、市長から熱い歓迎メッセージをいただきました。昼食後に関東 I グループとお別れし、近畿グループとの合流のため、団長団は次なる訪問先であるヴァイスヴァッサー(Weißwasser)へ移動を開始しました。

次は、近畿グループに合流

6日(火)、リーチェン(Rietschen)で近畿グループと合流し、伝統的な農家や工芸品の村を再現した施設を訪問しました。その後に小高い山のハイキングで絶頂からの眺望に目を奪われ、心が癒されました。午後からは、ポーランドに隣接する旧市街地を散策し、橋を歩いて渡って国境を超えるという日本ではできない経験をしました。

7日(水)の午前中は団長団プログラムとして、カーボン・ニュートラルの理念に合致した露天掘りによる石炭の採掘状況と技術革新の中で炉を炊き、石炭以外は熔融するという高度な技術等で運営されている火力発電の実態を視察しました。二酸化炭素の排出を抑える最新技術で火力発電が行われており、燃料の採掘後は、樹木の植栽で“新たな森”をつくるという素晴らしいエネルギー対策に感動しました。また、露天掘りで発生するくぼみに水を流して貯めることで、海のない地域に人口マリナーが誕生し、多くの人たちがボート遊びなど多様なマリンスポーツを楽しんでいました。

午後に近畿グループが体験している「溜池」でのスキューバダイビングや水遊びに合流し、バーベキュー(ソーセージとポテトサラダにパン)による昼食をいただきました。ボートや水遊びなど、ドイツの夏の楽しみ方を体験しました。夕方からは、フェンシングを中心に活動するスポーツ団体に参加し、全員の素人の団員たちが指導者から基本を習って、ドイツのベテラン選手と試合を行ったところ、きちんとした試合になっていたのに驚きました。夕食もフェンシングでお世話になった皆さんと一緒にバーベキュー(ソーセージとパンが主体)をいただいて、団長団は20時過ぎに宿舎に戻りました。

最後の地方プログラム、四国グループに合流

8日(木)は、最後の地方プログラムへの参加となる四国グループに合流するため、マクデブルク(Magdeburg)に移動しました。到着後はマクデブルク大聖堂の見学と昼食、また市内を散策して、団員たちが宿泊するユースホステルの見学をしました。

9日(金)は、カリ鉱山を見学後、昼食をはさみプールで遊泳。

10日(土)は、朝一番でヴァンツレーベン(Wanzleben)で市

長を表敬訪問し、大変温かく、心からの歓迎スピーチで迎えていただき、私からは答礼のあいさつに加えて、参加している団員たちが「ドイツで大きく成長した」ことがとても嬉しく思っていると報告させていただきました。そして、市役所からベルデスタジアムに移動し、ドイツ式の体力テストに四国グループと一緒に挑みました。団員はもちろん、ホームステイで受け入れてくれた家庭の皆さんやお世話をいただいている関係者のみなさん、そして団長団も一緒にドイツ式体力テストに臨みました。結果、総務の田中久美さんが金メダル、庶務の石田翔太郎さんが銀メダル、団長の私が追試験を受けて銅メダルの表彰を受けました。私は、気持ちは“若い”ものの、体は正直で基準スコアを超えることができず追試験となるなど、体力テストの結果は、日頃の運動不足を如実に表していると率直に受け止めて、帰国後は“運動”を生活のテーマにしなければと誓って、恥ずかしながら銅メダルをいただいたところです。

地方プログラムを終えて日本団全員がフランクフルトに集結

各グループに先行し、団長団は 11 日(日)、いよいよ最終訪問地となるフランクフルト・アム・マイン(Frankfurt am Main)の宿舎であるスポーツシュレヘ移動です。

到着後、夕食を兼ねてお世話になったドイツの皆様を招いて、団長団主催の「答礼夕食会」を開かせていただきました。ドイツではサービス業も「日曜休み」ということで、会場探しで大変ご迷惑をおかけしたようですが、ドイツらしい屋外テラスで、フランクフルト特有の料理を堪能しながら、今回の交流を振り返り、来年以降の継続を誓いながらの“楽しいタベ”となりました。



▲答礼夕食会:dsj 事務局長レオンさんとベナント交換

12 日(月)の午前中は、ドイツサッカー連盟のキャンパスを視察しましたが、流石にサッカー王国のドイツに相応しい施設で、充実した機能と運営の素晴らしさに感嘆しました。午後はスポーツシュレヘで地方プログラムから帰ってきた 8 グループを、次々と出迎えました。移動に電車を利用したグループが予定時間より遅れ、特に大幅に遅れた 1 グループは大変な苦労があったことと思います。すべてのグループが到着した後、団長団と引率指導者によるミーティングを行い、翌日から本格的に始まる全体プログラム(後半)に向けて気を引き締めたところです。

13 日(火)は、ドイツ側のコーディネーターが帯同のもと、フランクフルト市街に電車を出かけて、昼食を含めグループごとに散策となりました。団員も様々なお店に入ってドイツ文化を目の当たりにするとともに、日本へのお土産を買う様子が見られました。

午後には dsj をはじめとする関係者の皆さんと団長団評価会を行い、今回の交流を振り返るとともに、来年度以降の交流に向けて、率直な意見交換をすることができました。日本側からは「予定時間や突然のプログラム変更に戸惑ったこと」や「日本団は未成年の高校生が団員となっていることを踏まえて、プログラムは 22 時前には終了してほしい」等の改善を要望し、「あるべき交流のあり方」について、団長という立場からいろいろと申し上げたところです。

いよいよ、ドイツでの最後の晩餐会といえる「さよならパーティー」が日本団全員と dsj 役員や通訳、コーディネーター、地方プログラムの受入に関わった方々が参加して盛大に行われました。この「さよならパーティー」は、ドイツの特色が反映された素晴らしいパーティーであり、ビュッフェ形式の食事会から始まり、式典に移る流れでした。式典では、日独両国の代表者が挨拶し、次に出し物の披露です。ドイツ側からは柔道や空手がミックスされた「柔術」の演武が披露され、日本側から披露した「ラジオ体操」、「ソーラン節」、「ジャンボリミッキー」の踊りには、会場の全員が立ち上がって一緒に体操し、踊るという大変な盛り上がりとなって、ドイツの皆さんに喜んでいただきました。

庶務の石田さんが制作したスライドショーは、各グループから提供された映像と写真で構成した「第51回日独スポーツ少年団交流事業」の軌跡として上映されたものですが、この交流

の素晴らしさを改めて認識することができた素晴らしい出来栄で、強く心が動かされました。



▲さよならパーティー:dsj 国際交流課課長コリアさんと

テーブルと椅子を会場の隅に移動させて、「ディスコ」がドイツ側の企画・運営で始まりました。このディスコは、日本の団員が気持ちよく踊れるような選曲で、日本側とドイツ側の青少年が次から次へと会場中央に躍り出る姿は“若さ”と“未来のパワー”がみなぎっていただけでなく、国際交流の力強い“息吹”が伝わってきました。これこそが正に「親善交流」だと認識しながら、大きな拍手を送ったところです。このディスコは、事前の打ち合わせや練習はありませんでしたが、それぞれが相手国の青少年の手を引いて、一緒に踊り、時には声を出して、日本の出し物「よさこい」の振り付けで全員が踊るなど、時間の経過を忘れてしまうほど盛り上がっていました。日独交流の最後に相応しい風景を見て、この交流が成功したこと、そして大きな成果を残したことを確信したところです。

14 日(水)は、いよいよ日本への帰国です。全員が電車でフランクフルト国際空港まで行き、およそ 13 時間のフライト(機内食は3回)を経て、全員無事に東京国際空港に降り立ちました。手荷物を受け取った後、空きスペースで簡単な「解団式」を実施し、今回の「第 51 回日独スポーツ少年団同時交流」を締めくくりました。

おわりに

団員たちは様々な人たちとの交流や日本とは異なる生活、文化等に触れる中で、この交流の意義と目的を十分に理解し、常

に前向きな言動で自身の成長につなげる活動を展開してくれました。

また、全てにおいて「分け隔てなく、誰に対しても同じスタンスで対応する」という基本的な人権思想で活動すると同時に、どのような状況においても冷静で、かつ団員相互がリスペクトするという素晴らしい姿を見せてくれました。

さらに、今回の日独スポーツ少年団同時交流において、団員たちがホームステイ等でドイツの人たちと密に交流し、その貴重な体験を通じて帰国後の人生を豊かで、充実した有意義な生活につなげてくれるものと期待しています。これから様々な場面でリーダーシップを発揮し、地域社会はもとより、国を超えたグローバルな人材として活躍するための人格形成や術が養われるなど、“確かな力”が身についたのは間違いありません。

私は、団員の皆さんが地球規模の人生観を持って、住んでいる地域をはじめ、日本を超えて世界のリーダーとして社会貢献する人に大きく成長する姿が目に見えます。

もちろん、今回のドイツでの交流を通じて、スポーツの伝道者として、スポーツに深く係わる指導者として活躍する力もすっかり身に付いていますので、この点からの活躍の期待も大きいところです。

おわりに、団員が大きな成果を土産に日本に帰って来られたのは、8名の引率指導者の皆さんの献身的な支えがあつてのことだと認識しています。

交流に携わっていただいた全ての方に心から深く、そして厚く御礼申し上げます。

ダンケ シェーン(Danke Schon)！

第 51 回日独スポーツ少年団同時交流 ～新たな半世紀のスタートを～

日本団総務 たなか くみ 田中 久美

はじめに

昨年度に第 50 回の節目を迎えた本交流の新たな半世紀のスタートにあたる今年度、沢山の方々のお力添えにより、第 100 回を目指す 1 歩目に相応しい充実した交流活動が実施できましたことに心より感謝申し上げます。プログラム作成から準備、受入まで現地での交流活動に際して大変ご尽力いただいたドイツスポーツユエгент(dsj)事務局ならびに日本部会、地方プログラム受入団体の皆様、スポーツ・文化・歴史など幅広い内容で心躍る毎日を計画していただきありがとうございました。また、日本団員を家族の一員として受け入れ、温かく迎えてくださったホストファミリーの皆様、ありがとうございました。そして、言葉の不安を取り除き、日本人とドイツ人の心と心をグッと引き寄せていただいた通訳の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。

日本団事前研修会(5 月 17 日～18 日)

コロナ禍前は、5 月連休中に集合形態で実施されていた事前研修会ですが、昨年度に引き続きオンラインでの実施ということで、画面越しの初顔合わせとなりました。コロナ禍以降、機会が増えたオンライン会議ですが、ほとんどの団員たちが画面越しでもリラックスして意見交換している姿を目にして、新しい時代が到来していることを改めて感じました。各グループ内は、シニア・リーダースクールなど過去の活動で既に知り合った者同士がいたり、グループ編成の都合で随分離れた地域の団員と一緒にあったりと、かなり異なった状況でのスタートとなりました。

SDGs in Sports 井本直歩子氏のレクチャーでは、「不正解はありません。しっかり考えて、考えたことをどんどんシェアしよう。わからないことは、わからないと言って、何でも質問しよう。自分の殻を破ろう。」というルールのもと、グローバルな視点の

持ち方へのヒントを与えていただきました。このルールや視点は、ドイツ滞在中の我々の意識の中に潜在し、充実した交流に活かされたものと思います。

2 日間にわたるオンライン研修は、テーマディスカッションの準備や出し物の相談、ドイツの受入先にお渡しするお土産には何を準備するかなど、各グループでたくさんの議論がなされ、実り多いものとなりました。

日本団集合・結団式(7 月 29 日～31 日)

オンライン研修から 2 か月余り、緊張と期待が入り交じった団員・引率指導者が東京都の国立オリンピック記念青少年総合センター(オリセン)へ集まりました。画面越しではない、リアルな対面にホッとしながらも、まだまだごこない雰囲気でした。1 日目の全体会では、見城団長から「それぞれの自己実現に向けて、チャレンジしてください。大きく成長できる旅となるよう、仲間と心をひとつにして取り組みましょう。」とご挨拶がありました。

ドイツ講座では、本交流の通訳として経験豊富な櫻井麻美先生から、歴史的な背景や地理的なことをはじめ、実用的なドイツ語のご指導をいただきました。相手の目を見て、ゆっくりはつきり、握手はギュッと、団員も引率指導者も笑顔で練習しました。



▲ドイツ講座:ドイツ語であいさつの練習

2 日目午前は、グループごとにテーマディスカッション準備や出し物練習を行いました。対面での活動時間を重ねるごとに和やかな雰囲気になり、チームとしての一体感も高まっているように感じました。

午後は、日独スポーツ少年団同時交流に関する役員会議のため来日した dsj のベニー副本部長とキルステン理事から日本団に対して直接ご挨拶をいただきました。たくさんのプログラムが準備されていると思いますので、とにかくドイツを楽しんでくださいとのことでした。

その後、第50回日本団総務の守田香織さんから「派遣の心構え」として、レクチャーがありました。昨年の経験を踏まえて、見どころや、学びどころをご示唆くださいました。ドイツ派遣がスポーツ少年団活動のゴールにならないよう、学んだことを今後の活動に活かせるように頑張ってください、とのお話でした。

日本団結団式では、日本スポーツ少年団 富田寿人常任委員からスポーツ少年団旗がグループリーダー長の森田竜乃介さんに、ペナントが引率指導者長の後田健一さんに授与されました。8名のグループリーダーから頼もしい誓いの言葉が述べられ、いよいよ迫った出発の時に向けて、団員たちの気持ちが高まりひとつになってきている様子がうかがえました。

日本出国・ドイツ入国(7月31日)

早朝のオリセン出発時、スーツケースの鍵が壊れたり、空港までの移動で乗り物酔いして体調が悪くなったり、いくつかのトラブルがありながらも、何とか全員が出国、14 時間のフライトに耐えて無事にミュンヘン国際空港に到着しました。到着ロビーでは、大勢の dsj スタッフが待ち構えてくださっていました。懐かしいお顔をはじめましてのお顔、たくさんの笑顔に出迎えられて胸がいっぱいになりました。団員・引率指導者は、電車で宿舎であるザレジアヌムへ移動でしたが、電車の遅延で到着が予定よりも遅れることになりました。団長団は、この先の 2 週間で 1,500km を超える移動を共にしてお世話になる、エスコートのイベントウヴェ・デッベさん、通訳の鹿沼輝与志レオンさんと対面し、グループ荷物などを積み込んだ車に乗り込みました。宿舎までの道中、FC バイエิร์น・ミュンヘンの本拠地であるアリアンツ・アリーナを車窓に臨み、「お～！ドイツ来た～！ミ

ュンヘン来た～！」と実感が沸きあがってきました。予定より遅い時間になりましたが、全員が元気にザレジアヌムに到着し、準備してくださっていた大きなピザを夕食にいただきました。全体プログラムでお世話になる dsj 事務局のマズッフ古川実千子さん、日本部会のマティアス・ハイツマンさんをはじめとするスタッフの皆さんと対面、オリエンテーションが行われ、長い 1 日を終えました。

全体プログラム(前半)<8月1日>

ドイツでの最初の朝を迎えました。団員・引率指導者ともに長旅の疲れも見せず元気に朝食を摂り、電車でミュンヘン(München)の市街地へ移動しました。新市庁舎への表敬訪問の後、準備してくださっていたバタープレッツェルに舌鼓をうち、広場からドイツ最大のからくり時計を見上げました。



▲ミュンヘン新市庁舎

▼新市庁舎前で集合写真



午後は、2グループごとにミュンヘン市内のオリエンテーリングにまわり、与えられた課題をクリアしながら街並みを楽しめたようでした。団長団は、レストランで昼食をいただきました。おすすめのお料理を3つお願いして、団長と庶務・石田さん、私の3人で分け分けしていただきましたが、その量の多いこと、多いこと、、、「出されたものは残さずいただきます」という昭和方式で育った私ですが、「ごめんなさい」しました。そこで蘇る、<とにかく、すごい量ですからご注意ください>というオリセンで聞いた守田さんのお話。食後のコーヒーは？と尋ねられ「いただきます」と返事したことを後悔するほどのビッグなコーヒークップ(笑)。お腹が一杯すぎて、この日は夜まで苦しかったことを思い出すだけで笑えます。その後の滞在中は、いろいろな食べ物を石田さんとシェアしながら美味しくいただきました。昼食後は、満腹を抱えながらミュンヘン市内を散策、イギリス庭園の広大な緑からマイナスイオンをたくさん浴びて宿舎へ戻りました。

夜は、実千子さんから dsj についての説明を聞き、セム・メーヤーさんから出される問題に解答しながら SDGs とスポーツについて考えました。グループで選んだテーマごとに、自分たちの考えをまとめて発表したことで、事前研修会以降に各グループで準備してきたことの振り返りができ、地方プログラムで予定されているテーマディスカッションに向けて自信になったことと思います。

地方プログラム

<8月2日(金)>

いよいよ各グループが地方へ分散し、それぞれの交流がスタートします。電車移動のグループは、早朝の出発となりましたが、みんな笑顔で元気に駅へと向かいました。8グループそれぞれ出発式をして送り出した後、団長団は実千子さんと一緒にニュルンベルク(Nürnberg)へ向かいました。生憎の空模様でしたが、ニュルンベルク(Nürnberg)では、コンラートさん(コニーさん)が雨雲を吹き飛ばすような笑顔で迎えてくださり、昨年の日独スポーツ少年団指導者交流で知り合っていた石田さんとの再会を喜んでくれました。



▲再会を喜ぶ2人

コニーさんの案内で、お城や旧市街を散策し、美味しいニュルンベルク・ソーセージもいただきました。たくさん詳しい説明の端々に、この街に対するコニーさんの愛が溢れていることを感じました。見せていただいたご自宅はとても素敵なお部屋で、日本への愛も溢れていました。コニーさん、楽しい時間をありがとうございました。



▲ニュルンベルク(Nürnberg):みんなでアイス

ニュルンベルク(Nürnberg)を出発した後、思わぬ渋滞によって、予定より1時間近く遅れてのフルダ(Fulda)到着となりました。受入責任者のマイク・ティールさん、ハイケ・ティールさんご夫妻との夕食の後、街並みの向こうに花火を見ることができました。

<8月3日(土)>

関東Ⅰグループに合流し、クロイツベルクへ向かいました。標高 700mに建つ修道院やチャペル、十字架のモニュメントを見学しました。頂上付近の岩のところで、「この岩の上で、波乗りポーズをするのが庶務の任務だよ」と言われた石田さん、「聞いてないよ～」と言いながらも笑顔でポーズを決めました(拍手)。



▲岩乗りサーフィン

午前中のハイキングには、ある団員のお父様(ドイツでの勤務 4 か月目)が飛び入り参加してくださいました。「素敵で、貴重な体験をさせていただいているんだな、ということが大変よくわかりました」と安堵の表情で仰ったのが印象的でした。保護者の方々をはじめ、大勢の方にこの交流のことを知っていただきたいと改めて強く思いました。昼食は、クロイツベルクの中のレストランでいただきました。ここでいただいた、焼き立てのブレツツェルはとてもおいしかったです。午後は、ヴァッサークッペへ移動して、スーパースライダーを楽しみました。ヴァッサークッペは、フルダ(Fulda)で最も標高が高い(950m)ところで、初めて航空学校が作られた場所だということでした。現在は、グライダー博物館となって、空を目指した歴史に触れられる場所でした。しばらくスライダーを楽しんだ後、芝生の上にピクニックシートを広げてテーマディスカッションが行われました。絶景の中、手作りクーヘンや果物、ジュースを手にした話し合いで、堅苦しくならずに意見を出し合っているように見受けられました。



▲絶景の中でテーマディスカッション

帰る前には、マイクさん・ハイクさんの娘・ヤナさんが勤務する山岳救助隊の車両や装備を見学させていただきました。日本の消防とは違った車両などは大変興味深く、団員たちは交代で運転席に座らせてもらうなど貴重な経験ができました。夜は、マイクさん・ハイクさんのお宅でバーベキューを楽しみました。豚バラのぐるぐる串焼きは抜群においしかったし、実千子さんが育てた大葉入りのサラダ(通訳の児玉はるかさん味付け)もすごく美味でした。マイクさんのDIYによるお部屋やお庭はどこもとても素敵で、憧れる暮らしぶりがありました。

<8月4日(日)>

この日は、団長団プログラムでした。マイクさん、関東Ⅰグループ引率指導者の渡邊さんとそのホストファミリー、通訳の児玉はるかさんと一緒に行動しました。前日に楽しんだスライダーを作っている会社(マイクさんの息子・マークさんが勤務)をフェンス越しに見学してから、ポイント・アルファへ向かいました。マイクさんが子ども時代を過ごした地域の近くで、東西ドイツに分断されていた歴史を学べる場所でした。西側には米軍兵舎、監視塔、壁などの展示があり、東側には旧東ドイツの国境施設や監視塔がありました。当時、監視塔には見張り兵と狙撃兵が常駐しており、狙撃兵が発射するまでには 5〜7 秒かかるため、小学生の頃には、5秒で地面に伏せて身体を反すような銃の訓練を受けた、など生々しい話に胸が苦しくなりました。死と隣り合わせの国境警戒地帯が、真にそこに存在していたことを肌で感じることは、大学生の頃テレビに映し出されたベルリンの壁崩落のニュースで受けた衝撃以上のものでした。東西が統一され

て自由に行き来できるような平和な時代のありがたさを感じる一方で、現在も戦争や内戦が世界各地で起きていることに悲しみと憤りを感じました。



▲ポイント・アルファ:旧国境警戒地帯を望む

お昼は、チューリンガーブラートヴルスト(チューリンゲン地方のソーセージ)を頬張りました。ソーセージもパンもとてもおいしかったです。その後、ヴァルトブルク城を見学しました。マルティン・ルターが聖書をドイツ語翻訳したという部屋もあり、教科書の中だけのことでなく、現実に存在した人物だったのだな、と歴史に思いを馳せました。夕方は、作曲家のヨハン・ゼバスティアン・バッハ生家近くのカフェでケーキとコーヒーをいただきました。ゆったりと流れる時間の中、心も身体も癒されました。夕食をいただいたお店には、ケーゲルン(ボーリングの原型)のレーンがあり、食事やお酒を楽しみながら運動をするのだと教えてくれました。ドイツ人の生活には、スポーツが深く根付き、存分に楽しんでいることが窺われました。



▲ケーゲルン(Kegeln):見城団長の一投

<8月5日(月)>

フルダ柔道クラブが活動に使っている道場に集合し、施設を見学しました。学校の体育館に畳を敷いて活動をしているとのことでした。コロナ禍で改装したという体育館は、シャワー室を備えた更衣室や救護室もある充実した施設でした。その中の一室をクラブの事務所として使っていたり、倉庫にクラブの備品を保管するスペースをとってくれていたり、フルダ市がクラブに対してとても理解があり、協力体制が築かれている様子でした。その後、市の宮殿で市長さんから歓迎を受けました。フルダ市は、定演や博覧会、また大聖堂前でアーティストのコンサートを実施するなど観光に力を入れているようで、2023年には70万人の宿泊があったとのことでした。お昼は、フルダ川の流れて水車を動かし発電しながら、ビールを作っているレストランでビザをいただきました。関東Iグループとはここで別れて、団長団はヴァイスヴァッサー(Weißwasser)に向けて出発しました。480 kmの道中、いくつものお城が見えたり、カラフルな気球が飛んでいたり、美しく広大な景色が続いていました。到着後、責任者のレネー・ブルーメルさんとポーランドへ移動して夕食をいただきました。翌日から合流する近畿グループのテーマディスカッションが予定時間を大幅に超過するほど盛り上がったことや、今日から学校が始まったので団員たちが授業にも参加したことなどを聞きながら、ドイツよりも少し量が控え目なポーランドの食事を楽しみました。

<8月6日(火)>

近畿グループ(明るく元気な男性団員5名、歌声や笑い声に満ちていました)とミュンヘン(München)ぶりに再会して、プログラムに合流しました。エアリヒトホーフで木造の建築物を見学、木だけで建物を組み立てているので、解体して再度組み立てることが可能であったことなどを教わりました。人工の池を作って鯉を養殖していたことや、その池の水を抜いて鯉を獲ることで安定した供給がなされていたことなど、昔この地域で営まれていた生活の一端を知ることができました。その後、ゾーラント・アム・ロートシュタイン(Sohland am Rotstein)へ移動し、レネーさんの曾祖父が建てた農家を訪問しました。牛やウサギ、鶏を飼育しながら農業を営む知恵が詰まった建物でした。ハイ

キングは道なき道をゆくような、かなりハードなものであり、頂上に待ち受けていた展望台は、疲れた足腰に追い打ちをかける100段以上の階段でした。でも、その展望台からの景色は、頑張って登ってよかったなあと思える、大変美しい田園風景でした。昼食は、郷土料理ペルカルトツフェル(じゃがいもを茹でてバターやクリームなどと食べる)をいただきました。ニシンの酢の物と一緒に食べるのが、とてもおいしかったです。午後は、ゲルリッツ(Görlitz)へ移動して旧市街を散策、聖ニコライ教会を見学したあと国境橋を歩いて渡って、ドイツとポーランドの国境を文字通り、跨ぎました。歩いて国境を渡るという経験は、島国に暮らす我々にとっては本当に貴重な体験でした。この日はとにかく、たくさん歩きヘトヘトになりました。



▲ドイツとポーランドの国境を跨ぐ

<8月7日(水)>

ダイビングクラブ「アクアチーム」の施設で、スキューバダイビングの装備説明を受けました。酸素ボンベの残量確認など命を守るための大切な機器の説明を、グループ通訳の田恵子さんが丁寧に伝えてくださいました。近畿グループの団員たちは、その後、湖でダイビング入門したそうですが、団長団はコンラートさんの案内で露天採掘鉱山や湖港、クロムラウ公園などを回ったため、残念ながらダイビングの様子は見られませんでした。露天採掘鉱山を見渡せるシュヴェラー・ベルクの塔の階段は144段。広大な敷地で採掘している様子や遠く離れたボックスベルク発電所などが見られました。現在の露天採掘は、民間企業が実施していますが、国の事業として実施していた旧東ドイツ時代から継続して「掘ったら戻す」で一連の事業となっているそ

うです。採掘時に出る水に川からの水を合わせて人工湖が作られるなど、環境破壊にならないような工夫をしながら自然を大切にしてきた様子がよくわかりました。午後は、団員たちと一緒にSUPやアクアパークを楽しみました。夕方は、フェンシングクラブに参加し体験をさせていただきました。パリオリンピックで日本選手が大活躍した直後でしたし、貴重な体験でした。到着が遅れたため、子どもたちの練習終了間際になってしまったのが残念でした。準備していただいたバーベキューを楽しんだ後、近畿グループにお別れをしました。

<8月8日(木)>

マクデブルク(Magdeburg)へ向けて出発しました。途中、コト布斯(Cottbus)の露天掘り鉱山と未完成の人工湖を見学しました。そこでの展望塔の高さは31m、階段は173段でした。この頃になると、100段越えの階段にもだんだんと慣れてきました。湖が完成すると水深は6~8mになり、釣りや水泳、自然観察に利用される予定のようですが、設計ミスで水底に森が残るためアクアプログラムには問題が残るかもしれないとのことでした。「でもまあ、何とかかなるでしょう」とウヴェさんがおおらかな感じで解説してくれました。



▲コトブスの人工湖

マクデブルク(Magdeburg)の大聖堂で四国グループと合流しました。フンデルトヴァッサー・ハウスのカフェで受入責任者のラルフ・ザッハーさんとクリスティアンさんと一緒にコーヒータイム。甘くないワッフルが有名だということで、ワッフルという響きに油断して3種類のワッフルを団長団はそれぞれ注文しまし

た。もう何度目かわからないけれど、またもや大盛のお皿に驚愕の私たちでした。パイナップルとチーズのワッフルを頼んだ私だけが完食！空になったお皿を記念撮影しました。その後、ユースホステルに移動して施設の見学をしました。冬のかまぐらにヒントを得たという、秘密基地のようなドーム型でレンガ造りの宿泊棟の中を館長さん直々に案内してくださいました。自然の中で、子どもたちがスポーツをしたり環境学習をしたりすることができる、とても充実した施設でした。四国グループのメンバー、ラルフさん、クリスティアンさんと一緒にバーベキューを楽しみました。団員たちは食後、ドイツの青少年とビーチバレーボールや卓球をして交流していました。



▲ユースホステル：ドーム型宿泊施設

<8月9日(金)>

ツィーリッツ(Zielitz)のカリ鉱山を見学しました。晴れていたら太陽光で白く輝き眩しいらしい鉱山でしたが、生憎の小雨模様。この鉱山で働いていたというディーターさんが、露天掘りのことや環境保護のことなどを詳しく説明してくださいました。マクデブルク(Magdeburg)がすっぽり入るくらいの面積を有するカリ鉱山は、今後40年くらいは掘れるそうです。自然環境が守られるように、木を1本伐採したら6本植樹、6年観察して枯れたら新たに植樹する、などが法律で決められているとのことでした。昼食は、工場の食堂でミートボール、カレーブルスト、ニシンのフライから好みのメニューを選んでいただきました。曇り空で少し肌寒い感じでしたが、プールで1時間ほど水泳タイム。優雅に泳ぐウヴェさんの横で、泳ぎが苦手な私も、翌日のスポーツテストに向けて少しだけ泳いでみました。宿舎へ帰る前

に、エルベ川と交差する人工運河を見ました。川(下を流れるエルベ川)と川(上のマクデブルク水路橋を流れる運河)が交差している景色は圧巻でした。ドイツ国内の物流を支える運河は、トラックよりも効率的で環境負荷が少ないコンテナ船の運航を支えるものだと教わりました。



▲エルベ川と運河が交差する

夕食後は、ウヴェさんの団長団ファイルを見せていただきました。団長団エスコート役を担当してからの10年間分の記録がきれいに整理されていて感動しました。立ち寄った町や、施設での詳しい説明の裏には、事前の調査など丁寧な下準備があることも知り、頭がさがる思いでした。

<8月10日(土)>

朝いちばんで、ヴァンツレーベン(Wanzleben)へ表敬訪問をしました。マッツ市長の歓迎を受けた後、芳名帳に全員が署名をしました。



▲芳名帳に署名

▼マッツ市長 跳ぶ！



外階段で市長やホストファミリーの皆さんと集合写真を撮った後、ベルデスタジアムへ移動して、ドイツ・体カテストに臨みました。

マッツ市長もジャージに着替えてテストに参加されましたが、直後に議会が予定されていたようで、走って跳んで(50m 走、走幅跳)職務へと戻られました。私たちは、その後、立幅跳、縄跳び、砲丸投げ、水泳(50m 走との選択)に取り組みました。「あ～、もっと日頃から身体を鍛えておくべきだった・・・」という後悔と、とりあえず全種目やりきった達成感を抱えて、ピュッフェスタイルの昼食をいただきました。



▲後日、認定証とバッジをいただきました

食後は、モータースポーツアリーナでカーレースを見学、爆速で走り抜けるスポーツカーに爽快感を得ることができました。ラルフさんのお宅で、コーヒータ임을過ごしました。この交流の受入は 4 度目で、毎回、近所の方とも少し交流があって、皆さん日本ファンになってくれているのだ、というお話を伺い嬉しくなりました。団員たちはドイツの青少年たちと、夕方までビーチバレーボールを楽しんでいました。木陰で体力充電していた団長団 3 名に代わって、プレーヤーになって活躍してくれた通訳の輝与志さん、ありがとうございます。ラスト・マクデブルクの夜は、ホテルロビーで 35 年ぶりくらいのビリヤードに挑戦。輝与志・翔太郎ペア 対 ウヴェ・田中ペアで楽しく対戦、心の充電もできました。

<8 月 11 日(日)>

フランクフルト・アム・マイン(Frankfurt am Main)へ向けての移動日です。ウヴェさんの地元であるハノーファー(Hannover)を経由予定でしたが、サッカーの試合があって混雑が予想されるため変更、ヴェルニゲローデ(Wernigerode)へ向かいました。ミニチュアパークでは、実際の建物を縮小した精巧な模型が展示されていて、小人の国に迷い込んだような感覚になりました。お城の陰から、2 歳くらいの女の子がトコトコ出てきたときには、本当に小人が出てきたようで可愛いすぎました。



▲手前はミニチュア、奥に見えるのがヴェルニゲローデ城

周囲を見渡すことができる展望台への階段は 110 段(余裕です)。下まで滑り降りることができるスライダーは、フルダ(Fulda)でお世話になったマイクさんの息子・マークさんの会社が作ったものでした。バウムクーヘン・ハウスは休業日、それならば、と寄ったシュークリーム屋さんは大行列。ウヴェさんがすぐく申し訳なさそうでしたが、私たちのためにいろいろ考えてくれているその気持ちだけで本当に嬉しかったです。

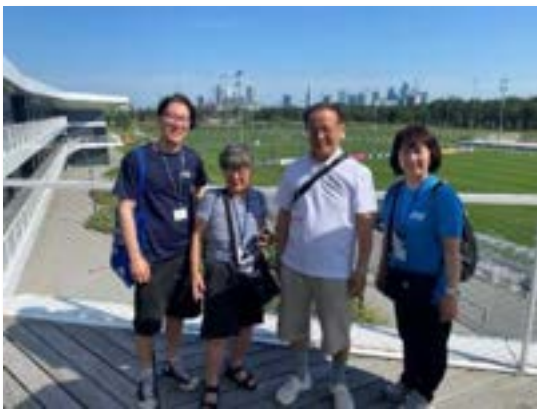
ヘッセン州のスポーツシュレに到着、夕方には元 dsj 職員・本交流レジェンドの高橋範子さんお奨めで、森の中の隠れ家的レストランで答礼夕食会を開きました。dsj 事務局長のレオンさんをはじめ、日本部会の方々にご出席いただき、まだ全体プログラム(後半)が残っていますが、今年のプログラムがここまで無事に進んできていることに感謝しながら、美味しい食事を一緒にしました。



▲答礼夕食会のあとで

<8月12日(月)>

午前中は、急遽、ドイツサッカー連盟のキャンパスを見学させていただけることになりました。レオン dsj 事務局長がサッカー連盟にお勤めだった時のつながりで実現したとのことで、人と人のつながりの大切さを改めて感じつつ、施設を見せていただきました。21 連盟が所属する世界で最も大規模なサッカー連盟だということでした。リラクシングルームや更衣室、トレーニングジムや宿泊室に加え、VR ゴーグルをつけてトレーニングができる科学ラボや公式規格を満たした屋内コートなど、充実した施設が整備されていました。屋外には、緑の芝生が眩しいほどに整備されたコートが 3 面と半分あり、さすがサッカー大国、そりゃドイツ人みんなサッカーするよね！という感嘆がもれました。



▲コートと芝生が青々と

午後になると、地方プログラムから各グループがぞくぞくと集結しました。団員たちの満面の笑顔と持ちきれないほどの荷物が、充実した地方プログラムの日々を表しているようで、とにかく全員が元気に戻って来られたことを喜びました。

<8月13日(火)>

電車でフランクフルト市街へ移動し、グループごとに自由研修をしました。団長団は、マティアスさん、ヘルムートさん、範子さんと一緒に市内見学とショッピングを楽しみました。雲一つない快晴のフランクフルトを散策した後、レーマー市庁舎前でソーセージをいただき、団長団評価会のためスポーツシューレへ戻りました。

団長団評価会は、dsj 課長のユリアさん出席のもと、事前に各グループから出された評価内容について報告しました。全般的には、スポーツ活動や文化活動、観光などさまざまなプログラムを準備していただき、温かく迎えてもらったことに日本団皆が感謝していることをお伝えしました。日本ではなかなか経験できないような射撃やクライミングなどのスポーツプログラムは良い体験であり、積極的に取り組めたようでした。その一方で、プログラムが盛沢山で終了時間が遅くなり、体力的に負担が大きすぎたとの報告もありました。初めての海外渡航である団員や、未成年の高校生も含むため、体調管理の面からもプログラム終了時間や休養の取り方などは、今後の検討課題であるとの確認をしました。

団員から挙げられた改善点のうち、海外での wi-fi 利用方法や、公衆トイレに関する情報(基本的には有料で現金払いであること)などは、日本団側が事前研修会などでもう少し丁寧に周知しておくことも必要であると感じました。ドイツの州によっては、交流期間中に夏休みが終了し学校が再開、昼間に交流ができないグループもあったようですが、学校の事情は仕方ないと思いつつ、残念に感じた点でした。日本団の参加人数が定員に満たないことが続いています、その解消に向けた対策の検討が日本側の最重要課題であるとの確認もされました。ここで挙げた様々な課題が検討されて、今後の日独同時交流に活かされ、更に充実した交流となっていくよう願っています。



▲スポーツシュレ内の会議室で団長団評価会

ドイツ最後の夜は、さよならパーティーが開かれました。ヘッセン州のスポーツクラブからの出し物の後、日本団からは英語版ラジオ体操とソーラン節、ジャンボリミッキーのダンスを披露しました。参加者みんなで音楽に合わせて楽しみました。食事の後は、恒例のディスコタイム。ドイツ人、日本人が入り交ざって時間の許す限り、ダンス・ダンス・ダンス、盛り上がりました。



▲ソーラン・ソーラン！会場が一体となりました

<8月14日(水)>

日本団全体評価会は、残念ながら日本団と何名かの通訳さんだけの参加で実施することになりました。各グループからの報告を聞きながら、51年間も脈々と受け継がれてきたこの交流の歴史に思いを馳せ、胸が熱くなりました。そして私は感極まり、うまく話すことができず失礼しました。団員の皆さんは、事前研修会の時にお願ひした「笑顔で、元気に、積極的に」をやり遂げてくれてありがとうございました。間近でその活動の様子を見られたことに感謝しています。スポーツシュレの出発前、dsjからお借りした荷物計量器が一時、行方不明になるという

残念なトラブルがありました。団員間で確実に連絡を取り合うなど、団体行動時に必要な基本的なことも事前研修会などで共有しておく必要があるのかもしれない、と思った出来事でした。

評価会の裏では、dsjスタッフが日本団のスーツケースを最寄駅のホームまで運んでくださいました。フランクフルト国際空港への移動やチェックインも助けられて、無事に予定の飛行機に搭乗することができました。約12時間のフライトを経て、羽田空港に到着、それぞれの地元へと帰郷していきました。この経験を今後の活動に活かして、各地で活躍してくれることを切に願っています。

おわりに

私事ですが、昨年度末に日本団総務のお話をいただき、第15回の団員、第43回の引率指導者として参加させていただいた私にとっては、とにかく魅力的でありがたいお話でした。二つ返事で即お受けしたいところでしたが、高校の保健体育教員として競技力向上指定校に勤務しており、ドイツ派遣はインターハイ期間をばっちり含んでいることに悩みに悩みました。諦めきれず、勤務校の校長先生に相談したところ、「お断りすると、貴女の今後の人生で後悔が残るでしょ、行ってきなさい」と背中を押してくださいました。さらに、「そこで得たことを生徒たちに還元してくれたいんですよ、競技は生徒たちが頑張るでしょう」と。人に恵まれ、環境に恵まれ、ここまで生かされてきたことに感謝しかありません。貴重な機会を与えてくださった日本スポーツ少年団の方々にも心から感謝申し上げます。今後も学校体育の指導者として、またスポーツ少年団指導者として、私にできることを地道に続けて参ります。

第15回で団員として参加した際にお世話になったホストファミリーと、22年ぶりの再会を果たした第43回。さらに今回、8年ぶりに再々会することができました。出会いから実に36年の時を経て、顔を合わすと“あの時”が蘇り、思い出話や未来の話で盛り上がるのができる大切な友です。



▲第15回日独同時交流のホストママ&友との再会

▼出会いから36年



今はインターネットが普及して、SNS はもちろんテレビ電話で世界中の人といつでもつながれる時代です。今回、団員たちの間に生まれた友情が、遠く離れていても心がつながりながら永く育まれ、再会を果たしながら深まり、続いていくことを願っています。

関わっていただいたすべての方に、心より感謝をこめて
「Vielen Dank und Auf Wiedersehen」

全体プログラム(前半)

7月31日(水)

- 東京国際空港出発(ルフトハンザ航空 715 便)
- ミュンヘン国際空港到着、ザレジアヌムへ移動



▲ミュンヘン国際空港に到着



▲日本とは違う大きさのピザに驚き

8月1日(木)

- 表敬訪問(ミュンヘン新市庁舎)
- ミュンヘン市内オリエンテーリング
- SDGs×Sport に関するワークショップ



▲表敬訪問の様子(ミュンヘン新市庁舎内)



▲SDGs×Sports に関するワークショップ

8月2日(金)

- 地方プログラムへ移動



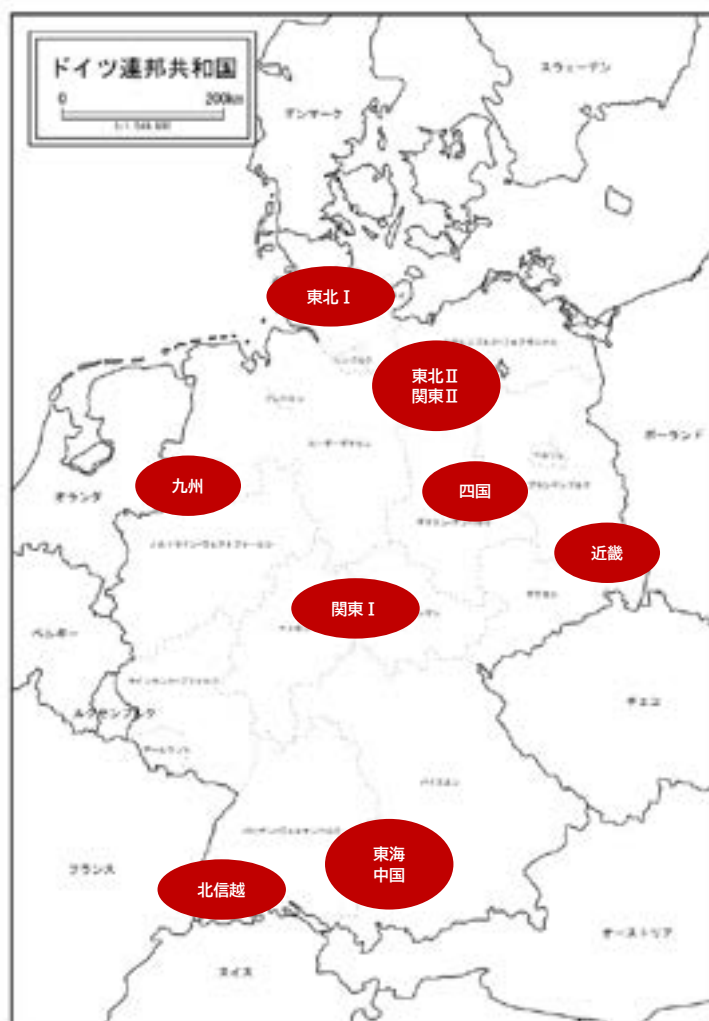
▲地方へ移動するグループをお見送り



▲ドイツ側受入担当者らと対面

地方プログラム

日本団グループ	ドイツパートナー	主な訪問地
東北Ⅰ	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	グロースソルト、キール、スーセル
関東Ⅰ	柔道	フルダ、リュデスハイム・アム・ライン
東北Ⅱ・関東Ⅱ	メクレンブルク＝フォアポメルン	ルートヴィヒスルスト
北信越	南バーデン	ヴァルツフト＝ティンゲン、フライブルク
東海・中国	ヴュルテンベルク	ビーベラハ・アン・デア・リス、アーレン
近畿	潜水	ヴァイスヴァッサー
四国	ザクセン＝アンハルト、ザクセン	アイレンブルク、ハルデンスレーベン、ヴァンツレーベン
九州	ノルトライン＝ヴェストファーレン	グローナウ-エベ
団長団	－	フルダ(関東Ⅰ)、ヴァイスヴァッサー(近畿)、マクデブルク(四国)



東北 I グループ

スポーツユージェント・
シュレスヴィヒ=ホルシュタイン

グロースソルト

キール

スーセル

グループスローガン

Let's enjoy with communication and teamwork!



▲グロースソルト市長 表敬訪問

▼小学校にて交流テーマディスカッション



日程

8月2日(金)

グロースソルトへ移動／ホストファミリーと対面

8月3日(土)

スポーツ活動(障害物リレー、マット等)／表敬訪問(グロースソルト市長)／グリュックスブルク城見学／フレンスブルク散策

8月4日(日)

ファミリーデー

8月5日(月)

小学校見学／交流テーマに関するディスカッション／フレンスブルク散策／ビール醸造所見学／スポーツ活動(スタンドアップパドルボート、ズンバ)

8月6日(火)

幼稚園見学／漁港見学／バイキング村跡見学／さよならパーティー

8月7日(水)

干潟の散策／港まつり見学／キールへ移動

8月8日(木)

オリンピック施設見学／表敬訪問(スポーツハウス理事)／ワークショップ(車椅子体験)／スポーツ活動(ビーチバレーボール)

8月9日(金)

スーセルへ移動／スポーツ活動(水上スキー)／リュウベック散策

8月10日(土)

ハンブルク散策／コンサートホール見学／スポーツ活動(カヌー)

8月11日(日)

スポーツ活動(一輪車、サイクリング)/さよならパーティー

8月12日(月)

フランクフルトへ移動



▲フレンスブルクのハーバー



▲ズンバ体験



▲パン焼き体験



▲ベルトリングハーダー・グローブの干潟を裸足で散歩



▲ビーチバレーボール U19 選手権 観戦



▲ホストファミリーによるさよならパーティー

関東 I グループ

ドイツ柔道ユージェント



グループスローガン

スポーツは、みんなを繋げる共通言語



▲交流テーマに関するディスカッション

▼柔道トレーニング



日 程

8月2日(金)

フルダへ移動／懇親会(フルダ柔道クラブ)／

ホストファミリーと対面／ビリヤード場見学

8月3日(土)

ハイキング／チャペル見学／グライダー博物館見学／

スーパースライダー体験／

交流テーマに関するディスカッション／

山岳救助隊ステーション見学

8月4日(日)

ファミリーデー

8月5日(月)

スポーツ施設(柔道)見学／パロック観光／

表敬訪問(フルダ市長)／市の宮殿見学／

水車見学／フルダ散策／柔道トレーニング／書道体験

8月6日(火)

マルテザ救急隊見学／ヒューンフェルト連邦警察署見学／

ポイント・アルファ見学／射撃競技体験

8月7日(水)

リューデスハイムへ移動／エルツ城見学／乗船／

リューデスハイム散策

8月8日(木)

ニーダーヴァルト記念碑見学／ハイキング／

ラインシュタイン城見学／ライン川下り／フルダへ移動

8月9日(金)

自然動物公園オリエンテーリング／

交流テーマに関するディスカッション

8月10日(土)

ドイツ体カテスト／水泳

8月11日(日)

ファミリーデー／さよならパーティー

8月12日(月)

フランクフルトへ移動



▲日本団出し物で合気道を披露



▲書道体験



▲ドイツ体カテストの様子



▲マルテザ救急隊見学



▲さよならパーティー



▲エルツ城前で記念撮影



▲レーマー市庁舎前で記念撮影

東北Ⅱ・関東Ⅱグループ

スポーツユージェント

メクレンブルク=フォアポメルン



ルートヴィヒスルスト

グループスローガン

挑戦



▲ルートヴィヒスルスト城

▼ルートヴィヒスルスト 電子コンパスを使って町探検



日程

8月2日(金)

ルートヴィヒスルストへ移動

8月3日(土)

ルートヴィヒスルスト城、庭園見学／市内オリエンテーリング／

表敬訪問(スポーツフォーラム・エルヴィン・ベルニエン)／

スポーツ活動(バレーボール、バドミントン等)／花火鑑賞

8月4日(日)

ベルリン散策

8月5日(月)

表敬訪問、スポーツ施設見学(メクレンブルク=フォアポメルン

州スポーツ連盟)／表敬訪問、見学(シュペリーン城)／

スポーツ活動(ボルダリング)

8月6日(火)

養蜂場見学／ホストファミリーと対面／

スポーツ活動(ボール投げ等)

8月7日(水)

市内クルージング／スポーツ活動(水上スキー)

8月8日(木)

農場託児場見学／歓迎会／博物館見学

8月9日(金)

工房見学／青少年の家見学／

交流テーマに関するディスカッション

8月10日(土)

ファミリーデー

8月11日(日)

スポーツ活動(テニス)／さよならパーティー

8月12日(月)

フランクフルトへ移動



▲ボルダリング施設で壁に映し出されるゲームを体験



▲ホストファミリーと対面(みんな緊張気味...)



▲みんなで水上スキーを体験



▲SDGs についてのディスカッション



▲さよならパーティーの前にみんなでテニス



▲さよならパーティーでは法被を着てよさこいを踊った

北信越グループ

バーデンスポーツユージェント・ フライブルク



グループスローガン

盤楽遊喜 ～Good communication～



▲交流テーマに関するディスカッション

▼体験型ミュージアム



日程

8月2日(金)

ヴァルツフト＝ティンゲンへ移動

8月3日(土)

交流テーマに関するディスカッション／

スポーツ活動(サッカー、バスケットボール)／

キャンプファイヤー

8月4日(日)

ファミリーデー

8月5日(月)

体験型ミュージアム／ハイキング／ビール工場見学

8月6日(火)

製粉所見学／ヴァルツフト散策／

表敬訪問(ヴァルツフト市庁舎)／

スポーツ活動(バレーボール)／さよならパーティー

8月7日(水)

ピアノ演奏会／フライブルクへ移動／ホストファミリーと対面／

歓迎式

8月8日(木)

フライブルク散策／サッカースタジアム見学

8月9日(金)

コルマール散策

8月10日(土)

ファミリーデー

8月11日(日)

交流テーマに関するディスカッション／書道／

さよならパーティー／

スポーツ活動(バレーボール、卓球、クップ等)

8月12日(月)

フランクフルトへ移動



▲バレーボール



▲歓迎式



▲Europark-Stadion 見学



▲コルマル(フランス)散策



▲交流テーマに関するディスカッション



▲書道

東海・中国グループ

ヴェルテンベルグ・
スポーツユエグント



グループスローガン

積極的に行動してみんなで楽しむ！



▲ホストファミリーと対面

▼射撃体験



日程

8月2日(金)

ビーベラハ・アン・デア・リスへ移動／シュタイフ博物館見学／
ホストファミリーと対面

8月3日(土)

ノイシュヴァンシュタイン城見学／射撃体験(洋弓、エアガン)

8月4日(日)

ファミリーデー

8月5日(月)

表敬訪問(ビーベラハ郡長)／ビーベラハ・アン・デア・リス散策
／交流テーマに関するディスカッション／スポーツ活動(ダイビ
ング)

8月6日(火)

野外博物館見学／スポーツ活動(クライミング)／
さよならパーティー

8月7日(水)

アーレンへ移動／ホストファミリーと対面／レクリエーション

8月8日(木)

スポーツ活動(柔道)／廃鉱見学／表敬訪問(アーレン市長)／
幼稚園見学／小学校見学

8月9日(金)

博物館見学／ビール醸造所見学

8月10日(土)

ファミリーデー

8月11日(日)

スポーツ活動(空手)／交流テーマに関するディスカッション／
水遊び／スポーツ活動(ビーチバレー)／さよならパーティー

8月12日(月)

フランクフルトへ移動



▲交流テーマに関するディスカッション



▲さよならパーティーで「よさこい」を披露



▲ホストファミリーとのレクリエーション



▲ドイツの教育現場見学



▲▼ファミリーデー



▲空手体験

近畿グループ

潜水ユージェント



グループスローガン

スポーツをより身近なものに



▲ゲルリッツの文化保護センター

▼Tagebau Nochten(露天掘り鉱山)



日程

8月2日(金)

ヴァイスヴァッサーへ移動／ホストファミリーと対面

8月3日(土)

文化保護センター見学／スポーツ活動(サイクリング)／
露天掘り鉱山見学／ロードデンドロン公園散策

8月4日(日)

ファミリーデー

8月5日(月)

ギムナジウム(学校)見学／表敬訪問(州議会)／
交流テーマに関するディスカッション／
スポーツ活動(フェンシング)

8月6日(火)

博物館見学／農家見学／ハイキング／ゲルリッツ散策

8月7日(水)

スポーツ活動(ダイビング)／水遊び／
スポーツ活動(フェンシング)

8月8日(木)

湖での救助活動体験／恐竜パーク散策

8月9日(金)

ドレスデン散策

8月10日(土)

バスタイ橋散策／さよならパーティー

8月11日(日)

ベルリン散策

8月12日(月)

フランクフルトへ移動



▲日本とドイツのスポーツ事情に関する意見交換の様子



▲交流テーマに関するディスカッション



▲ダイビング体験



▲フェンシング体験



▲ドレスデンの散策中に



▲さよならパーティーで書道を披露

四国グループ

ザクセンスポーツユーгент
ザクセン・アンハルトスポーツユーгент



グループスローガン

Prost an! Freundschaft ~友情に乾杯~



▲ホストファミリーと対面

▼交流テーマに関するディスカッション



日程

8月2日(金)

ドーバーシュッツへ移動／ホストファミリーと対面

8月3日(土)

ファミリーデー

8月4日(日)

磁器製作所見学／アルブレヒト城見学

8月5日(月)

交流テーマに関するディスカッション／

RB ライプツィヒファンショップ訪問／スポーツ活動(水泳)

8月6日(火)

ビール醸造所見学／ライプツィヒ散策／水遊び／

さよならパーティー

8月7日(水)

学校見学／ハルデンスレーベンへ移動／

ユースホステル施設オリエンテーション

8月8日(木)

ハンドボールアリーナ見学／サッカースタジアム見学／

マクデブルク散策／スポーツ活動(自由)

8月9日(金)

カリ鉱山見学／水遊び／ホストファミリーと対面

8月10日(土)

表敬訪問(ヴァンツレーベン市長)／ドイツ体力テスト／

交流テーマに関するディスカッション

8月11日(日)

ファミリーデー／さよならパーティー

8月12日(月)

フランクフルトへ移動



▲さよならパーティー



▲学校見学



▲表敬訪問で集合写真



▲ドイツ体力テスト



▲ディスカッションのワンシーン



▲お世話になった方とお別れ

九州グループ

スポーツユージェント・
ノルトライン=ヴェストファーレン

グローナウ-エベ

グループスローガン

繋心 ~rise as one beyond the border~



▲ホストファミリーと緊張の対面

▼バウンサーボールを体験



日程

8月2日(金)

エベへ移動／ホストファミリーと対面／歓迎会

8月3日(土)

スポーツ活動(バウンサーボール、室内アスレチック、バレーボール)

8月4日(日)

ミサ参加／教会見学／高等学校見学

8月5日(月)

公園散策／表敬訪問(グローナウ市長)／グローナウ散策／
ベントハイム城見学／夜警による街ツアー

8月6日(火)

足漕ぎボート／スポーツ活動(サッカー、ケーゲルン)

8月7日(水)

スポーツ活動(卓球、ブラインドボール、車椅子ゲーム、車椅子
サッカー)／交流テーマに関するディスカッション／
レクリエーション(バレーボール)

8月8日(木)

交流プログラム(ミニゲーム、ハンドボール)／大学見学／
ミュンスター散策

8月9日(金)

古城見学／フィールドアスレチック体験／
スポーツ活動(ドラゴンボート)

8月10日(土)

動物園散策／スポーツ活動(カヌー)

8月11日(日)

ファミリーデー／さよならパーティー

8月12日(月)

ケルン散策／フランクフルトへ移動



▲国境付近を散策。湖の向こうはオランダ



▲表敬訪問の様子は地元新聞に掲載されました！



▲湖畔でリラックス



▲パラスポーツを体験



▲「全ての人に健康と福祉を」をテーマにディスカッション



▲さよならパーティー

団長団



▲コニーさん(左)案内のもとニュルンベルク

▼マイクさん(前列真ん中)らフルダの皆さんと



日程

8月2日(金)

各グループ地方分散の見送り／ニュルンベルクへ移動／
ニュルンベルク散策／フルダへ移動

8月3日(土)

関東Ⅰグループと合流／ハイキング／チャペル見学／
グライダー博物館見学／スーパースライダー体験／
山岳救助隊ステーション見学

8月4日(日)

ポイント・アルファ見学／ヴァルトブルク城見学／
アイゼナハ散策／ケーゲルン体験

8月5日(月)

関東Ⅰグループと合流／スポーツ施設(柔道)見学／
バロック観光／表敬訪問(フルダ市長)／市の宮殿見学／
水車見学／ヴァイスヴァッサーへ移動

8月6日(火)

近畿グループと合流／博物館見学／農家見学／
ハイキング／ゲルリッツ散策

8月7日(水)

近畿グループと合流／露天掘り鉱山見学／
ロデーデンドロン公園散策／ムスカウ公園散策／／水遊び／
スポーツ活動(フェンシング)

8月8日(木)

人工湖見学／マクデブルクへ移動／大聖堂見学／
四国グループと合流／ユースホステル施設オリエンテーション

8月9日(金)

四国グループと合流／カリ鉱山見学／水遊び／運河見学

8月10日(土)

四国グループと合流／表敬訪問(ヴァンツレーベン市長)／
ドイツ体カテスト／モータースポーツアリーナ見学

8月11日(日)

ヴェルニゲローデへ移動／ミニチュアパーク見学／
フランクフルトへ移動／答礼夕食会

8月12日(月)

ドイツサッカー連盟キャンパス見学／各グループ出迎え



▲団長団からドイツ側へお礼の夕食会



▲レネーさん(左)・近畿グループとハイキング



▲フランクフルト市街を一望



▲ラルフさん(左)・四国グループとカリ鉱山見学



▲エスコート:ウヴェェさん(左)、通訳:輝与志さん(右)に感謝

全体プログラム(後半)

8月12日(月)

- フランクフルトへ集結
- 指導者ミーティング



▲各グループがフランクフルトへ集結

8月13日(火)

- グループ自由研修(フランクフルト市内)
- 団長団評価会
- さよならパーティー



▲グループごとにフランクフルト市内を散策



▲さよならパーティー

8月14日(水)

- 全体評価会
- フランクフルト国際空港出発(ルフトハンザ航空 716 便)



▲全体評価会の様子



▲フランクフルト国際空港へ移動。いよいよ帰国のとき...

引率指導者レポート

【東北Ⅰグループ】古谷 政信

「日独スポーツ少年団同時交流の経験を、今後どのように活かして活躍できるか」

この度の第51回日独スポーツ少年団同時交流を通じて、参加した団員並びに引率指導者として参加した自分は、数々の貴重な経験を積み重ねました。2週間という短い期間の中で、海外の価値観に触れ、異文化を理解し、チーム内での協力や各自リーダーシップを発揮した団員たちが、自分が立てた3つのテーマに対して、今後どのように活躍するのかを期待する内容を述べさせていただきます。

1つ目として、「海外の価値観に触れ、コミュニケーションの『スキルアップ』を図る」ことについてですが、団員たちはドイツでの交流を通じて、多くのスポーツ経験を経て多様な文化背景を持つ人々と直接接する機会を得ました。異なる言語、異なる習慣、異なる考え方に触れることで、彼らのコミュニケーション能力は飛躍的に向上しました。言葉の壁を乗り越え、自己を表現する力、そして他者の意図を理解する力を養ったことは、今後の彼らの活動において大いに役立つことでしょう。特に、国際的なスポーツイベントやグローバルなプロジェクトにおいて、コミュニケーションスキルが発揮されることだと思います。

2つ目として、「同時交流を通じて得られた異文化理解を『グローバルな視野』として広げる」ことについてですが、団員たちはドイツの文化や習慣、スポーツのスタイルに触れることで、海外の多様性について学びました。この経験で、彼らの視野は広がり、異なる文化に対する理解と尊重の気持ちが深まりました。今後、国際的な場面での協力や対話が必要とされる場面において、その視野と異文化理解が大いに役立つことだと思います。

3つ目として、「チーム協力など、その中で培われるリーダーシップによる『個人の成長』を図る」ことについてですが、団員たちはドイツでの活動を通じて、チームの一員としての役割だけでなく、それぞれがリーダーシップを発揮する機会もありました。異なるバックグラウンドを持つメンバーと協力し、共通の目

標に向かって進む中で、協力の精神が磨かれました。この経験は、今後の彼らの個人としての成長や、リーダーシップを求められる場面での自信に繋がるでしょう。その成長したスキルと経験が大きな力となり、チーム全体のパフォーマンス向上にも寄与することができると思います。

今回のドイツへの交流は、団員たちにとって多くの学びと成長の機会を提供してくれました。彼らがこれらの経験を基に、今後の活動でどのように成長し、どのように貢献していくのか、大いに期待しています。彼らには、今回の経験が大きな力となり、様々な分野で輝かしい成果を上げてくれることと確信しています。

最後に、初めて参加した日独スポーツ少年団同時交流事業に、引率指導者として携わったことで大変貴重な経験を積み重ねることができたことを感謝しております。日本で多くの準備ミッションを経てドイツへ。実際ドイツに行ってどれだけ活用できたかというと、スケジュール遂行やトラブル対応などの管理面では役立ちました。簡単な日常会話レッスンや手引き程度では、表敬訪問の際の自己紹介と日常的なあいさつしかドイツ語で話すことができず、付け焼き刃的でほとんど役に立ちません。通訳さんを通して会話をするか、文明の利器「スマホの翻訳アプリ」を活用してするなど、他力で力量不足を補うことに。それも大いに経験でしたが、何よりも受け入れ側のドイツの方々是非常に親切で、我々外国人を自分の親戚の様に対応してくれたことは非常に感謝しています。また機会があれば、今回の反省を踏まえた対応で今回以上に楽しむ成果を上げることが期待できると思います。

【関東Ⅰグループ】渡邊 友彦

「同時交流を終えて」

私たちの関東Ⅰグループは、「スポーツはみんなを繋げる共通言語」(設定理由:言葉は通じなくてもスポーツを通じて友達になれる)をスローガンに、6名の若者の団員と高齢の引率指導者である私の7名で、ドイツに元気よく旅立ちました。

全体プログラム後の地方プログラムで、本来の意味での同時交流がスタートしました。ホストファミリーとの対面会場には、日本とドイツの国旗を運動会の万国旗のように縦横に張り巡らせてくれ、各テーブルには生花が置かれていました。また手作りの料理でもてなしてくれ、本当に心温まる出迎えでありました。

私たちの関東Ⅰグループの受入先団体は、ドイツ柔道ユーゲント・フルダ柔道クラブでした。今回の団員の中には一人も柔道の経験者がなくちょっと危惧しましたが、プログラム責任者のティールご夫妻の緻密で心配りのプログラムにより、みんな仲良く楽しく元気に11日間過ごすことができました。また、ホストファミリーと団員もすぐに溶け込むことができ、親密感が一層深まったものと思います。

今回の地方プログラムでは、私達の希望に沿ったプログラムを作成していただき大変満足しました。見学・観光としては、古城を多々見学させていただきました。日本における城郭と同じですが、歴史の重み・深さを実感することができました。また団員達が一番望んでいたライン川下りも体験させていただきました。船に乗りライン川からの眺めは格別でした。ドイツの魅力を一段と感じたひとときであったのではないのでしょうか。また一般者は見学できない「マルテザ救急隊」「ヒューンフェルド連邦警察署」を特別に見学させていただき感激しました。また、「フバルテウス・シュタインバッハ」での射撃体験では実弾での射撃であり、団員である子供達にはどうなのかなと思いましたが、みんな真剣に前向きに体験をしていました。(実弾使用ですから、真剣であるのはあたりまえですね。心配無用ですね(笑))

同時交流の最大の目的であるテーマディスカッション「ジェンダー平等を実現しよう」では、事前の準備等が良くできており、パワーポイント等を使用し、わかりやすく説明しスムーズに進めることができました。柔道の体験では、全員柔道着に着替え、ドイツ団員との組み手・投げ技等を体験しました。日本団からの合気道では、迫力が素晴らしく拍手喝采でした。書道体験では、「日本」という漢字を書いていただきました。ドイツ団員の子供達はもちろんですが、ホストファミリーの親たちも生まれて初めて筆を持ったものと思いますが、上手に書いていました。体力テスト(バッチテスト)では、3000mに挑戦し無事に完

走しました。砲丸投げ・走り幅跳び・水泳等も頑張り、全員バッチもいただきました。

ホストファミリー宅では、私は片言のドイツ語・英語にてコミュニケーションをとろうと思いましたが、スマホの同時翻訳機により何とかコミュニケーションをとることができました。団員達は、労することなくホストファミリーの家族の一員のようにスムーズに溶け込んでいたようです。

今回の同時交流では、団員一人一人がグループリーダーを中心に、自主性・自律性のある行動をしてくれたため、16日間元気で楽しく過ごすことができました。プログラム責任者であるティールご夫妻そして通訳の児玉はるかさんに感謝感謝、そして「ダンケシェーン」の言葉を心よりお送りします。

最後に団員達には、今回の日独同時交流にて得た貴重な経験・体験を、今後のスポーツ少年団に還元するとともに、良き指導者となってくれることを期待しています。私自身も、スポーツ少年団の素晴らしさを広く社会にも伝えていきたいと思います。

【東北Ⅱ・関東Ⅱグループ】 岩男 光子

『第51回 日独同時交流』に参加して」

私の団では、この同時交流事業に、既に6名の参加者を出している。私の3人の子ども達も全員、参加させて頂いた。そして、今年は7人目の団員参加が決まっていた。保護者にとっても、団員にとっても、この交流事業はとても魅力的な少年団の事業である。過去に参加した団員は、交流事業での経験を通し、あるいは海外に目を向けるようになり、あるいは日本で「子ども達の育成とは？」に考えを巡らせるようになり、学校だけでは学べないことを習得して帰国し、社会に巣立っていった。我が子達も然りだ。そんな団員達を見ていて、機会があれば自分も参加してみたいとの想いが大きくなった時に、「引率指導者として参加」の話を頂いた。私の団から8人目の参加者は、指導者の「自分」となった。

当初、引率指導者としての参加は、気楽なものでは無かった。まず、コロナ禍を経てインターネット環境が整い、最初の全体研修はオンライン。このグループは、埼玉、山形、福島のメン

バーからなるグループで、地域事情が違いすぎて、話が進まなかった。グループ別の研修も、全員で集まることはできず、オンラインと現地のハイブリット。今一つ乗り切れないまま、当日を迎えることに。「引率指導者が、初参加の自分でなければ、団員はもっと時間を有効に使えたのではないか?」「有意義な交流になるのだろうか?」と考え込んでしまう時もあった。

そんな心配も、やはり会ってしまえば杞憂。東京での全体プログラムからの団員の活動の様子は、頼もしいものだった。ドイツ・ミュンヘンに到着する頃には、すっかりチームとなっていた(これもトランプのお陰?)。どんなにインターネットが発展しても「直接会って話をする」ということの大切さを実感した。

地方プログラムでは、メクレンブルクフォアポンメルンを訪問。最初にユースホステルに全員で宿泊。これがまた、仲間意識を強くするものだったのだと感じている。それぞれのホームステイ先も、同じ地域クラブで受け入れて頂き、複数家庭での食事が企画されたりして、日本団のメンバーを孤立させることは無く、全員がそれぞれにドイツの文化・生活・日常を楽しんだことを感じる。『この交流事業に参加した団員は、貴重な経験をし、成長して帰国する』というのは、受け入れ団体・受け入れ家庭の方々の細やかな配慮と温かい想いがあってこそものごと実感した。また、言葉が通じなくても、理解しようという気持ちが必要なことも再認識した。

自分は、ドイツといえば『ベルリンの壁』の印象が強かった。『壁の崩壊』は、当時、衝撃的なニュースだった。『ベルリンの壁』がどのようなものか見たかったし、歴史的な経緯はよく分からないままだが「東西に分断された、一般市民の生活や感情はどんなものだったのだろうか?」「統一後の生活は?」などと興味を持っていた。資料館での学芸員の方の説明は、旧東ドイツ時代の様子や統一後の混乱も少し想像することができ、興味深いものだった。また、残っている『ベルリンの壁』は予想以上に長く、また、東西を分けていた検問所の看板には、西側も東側もそれぞれ峻烈な文言が記述され、思い描く以上の厳しさだったことを感じた。今回、ホームステイでお世話になった家庭は、旧東ドイツの家族だった。その家庭のお母さんとは、ほとんど話が来ていない。私がドイツ語を話せなかったからだ。が、彼女は別れの時に『違う国の人がいる場所に、自分もいるというだけ

で幸せ』と言っていた。旧東ドイツ時代の経験からの心情なのだろう。日本人には無い考え方だと思った。地域・環境・歴史の違いで、抱く情感の違いを改めて感じた。このような想いは、現地で直に聞かないと感じられない。

現在のスポーツ少年団は競技活動に力点を置きがちだが、『交流』の場と機会を与え得る組織であることを忘れてはならないと考えている。特に、感受性が高まり、人間力が養われる十代後半に経験する日独同時交流ほど、その後の人生に大きな影響を与えるものはないと感じた。今回、この交流事業に参加し、長期間に渡り、準備に奔走して頂いた関係各位、また、私達の為に時間を割いてくれた全ての方々に深く感謝するとともに、「今後もこの事業に参加するような団員を育成していきたい」との想いを強くした。

【北信越グループ】 紙谷 実果

「第 51 回日独同時交流を終えて」

「若いうちに旅をきなさい、それは君の人生を豊かにするからね。」これは私が高校生のとき、本事業へ団員として参加した際に恩師から頂戴した言葉である。引率指導者として本交流への参加が決定したとき、何年も前にかけられたこの言葉が私の脳裏にふと浮かんできた。団員から引率指導者へと立場を変えて交流を終えたいま、時間を超えて感銘を受けるものがあった。だからあえてこの言葉にちなんで、私たちの「旅」をここに記そうと思う。

本交流は、半世紀続いてきた日独スポーツ少年団同時交流を未来へ繋げる、第 51 回目の記念すべき派遣であった。本年の北信越グループは、団員 5 名と引率指導者、通訳の計 7 名で構成された。7 月 29 日(月)から 8 月 15 日(木)までのおよそ 2 週間半の交流の中で、特に印象的だったことを、(1)プログラム概要、(2)地方プログラム、(3)テーマディスカッション、(4)おわりに、の項目に沿って記したい。

(1)プログラム概要

①全体プログラム(ミュンヘン)、②地方プログラム前半(ヴァルトフート＝ティンゲン チェス協会)、③地方プログラム後半(フライブルク・ザンクト・ゲオルゲン スポーツクラブ)、④全体プログラム(フランクフルト)

(2) 地方プログラム

【前半】ヴァルツフト＝ティンゲン 8月2日(金)～8月7日(水)

ミュンヘンから長時間電車で揺られ、夕方にヴァルツフト＝ティンゲンへ到着した。雷を伴った激しい雨が気まぐれに地面を濡らすような、ドイツでは珍しい天候であった。ホストファミリーの皆さんが駅のホームで歓迎をしてくださり、その日はすぐに各家庭へ解散することとなった。言語が異なることや、初めてのホームステイに不安を抱いていた団員たちだったが、翌朝の表情は穏やかでホストファミリーの手厚い歓迎に緊張はほぐれたようであった。3日(土)には黒い森の中にあるシュタイナバード・ボンドルフの夏祭りへ参加した。宿泊施設となっているこの建物は、かの有名な思想家のニーチェが療養をした歴史を持つ。ドイツの伝統料理のシュニッツェルやフラムクーヘンを味わい、バスケットボールやチェスのゲームに挑戦した。この日にはテーマディスカッションも行われた。5日(月)は体験型ミュージアムで五感を使ってアート作品を楽しみ、正午前にハイキングをしながら湖へと移動した。この日は大変気温が高く晴天で、湖に入って涼んだり、周辺を散歩して豊かな自然に触れたりした。その後は長い林道を抜けて、Rothaus ビール醸造所へ向かった。Rothaus はドイツ西南部では大変メジャーなドイツビールのブランドで、愛飲者が多い。その起源は修道院にあり、中世から現在に至るまで長い歴史を持っている。ビール工場の見学ツアーに参加したあとに、レストランにて皆で夕食をいただいた。6日(火)の夜には、さよならパーティーが行われた。日没前に地域の方々も巻き込んでビーチバレーに全力で取り組み、陽が暮れてからはバーベキューをして、楽しくにぎやかな一日を過ごした。最終日の朝、私たちだけのためにオルガンとピアノの演奏会が開かれた。壮大で繊細なメロディーに心を揺さぶられ、美しい音色の余韻を残したまま別れの時を迎えた。また必ず会おうと約束を交わし、次の地方へ向かう列車へ乗り込んだ。

【後半】フライブルク 8月7日(水)～8月12日(月)

ドイツ鉄道の遅延により、予定よりも遅れてフライブルクへ到着した。駅からは徒歩で街の地域クラブへ向かった。そこではホストファミリーの皆さんが歓迎会を開いてくださった。その日

は写真撮影と取材を終えて各家庭へ解散となった。フライブルクは多くの大学を有する歴史ある大学街で、活気に溢れている。そのためかフライブルクのホストファミリーは団員と同年代の少年少女が多く、団員が積極的にコミュニケーションをとることができたように感じた。8日(木)はフライブルクの中心市街地を散策した。街の歴史や成り立ちについてガイドの方よりお話をうかがった。フライブルクの市街地には小さな水路が張り巡らされており、この水路に誤って落ちてしまうとフライブルクの人と結婚をしなければいけないという言い伝えがあるらしい。街の中心にあるミュンスター教会を見学したあとは市庁舎訪問を行い、歓迎の言葉をいただいた。この日の最後のアクティビティに、ブンデスリーガ1部所属のSCフライブルクの本拠地であるサッカースタジアムを見学した。今期から日本代表の堂安律選手が所属している。選手がサッカーに集中することができるように丁寧に整備されたスタジアムからは、競技への高いリスクを感じた。スタジアムの上階にレストランやラウンジがあり、サッカースタジアムのアミューズメント施設としての側面を充実させようという努力が垣間見えた。9日(金)はフランスのコルマルへ観光に訪れた。少し足を伸ばして越境できるのは、フランスやスイスの国境に近いドイツ西南部ならではの楽しみだ。11日(日)は午前中からテーマディスカッションと書道体験を行った。書道体験では手本を見ながら書道に挑戦してもらった。団員たちがホストファミリーの名前を漢字で書いて渡したときには大変喜んでいただけたようだった。夕方からはさよならパーティーが行われ、地域のクラブチームの子どもたちがジャンプロープのパフォーマンスを披露してくれた。クラブチームの子供達と共にビーチバレーを楽しみ、その後は屋外で食事を楽しんだ。来年は日本へ行くから、と約束を交わしているファミリーもあり再会が待ち遠しいといったような明るい雰囲気では別れを迎えた。

(3) テーマディスカッション

北信越グループがディスカッションテーマとして選択したのは、SDGsの17の国際目標の4つ目の項目「質の高い教育をみんなに」であった。オンラインミーティングや事前研修の時間を使って、大学生の団員を中心に発表資料を作成するなど準備をしてのぞんでいた。北信越グループはテーマディスカッ

ションを行う機会が2回あり気付きの機会に恵まれたため、先のディスカッションを踏まえて反省会を行い、より伝わりやすいように資料の補足や修正を重ねていた。日本とドイツの教育制度や、その周囲をとりまく環境について話し合い、日本とドイツのお互いが共通して抱える問題についても共有ができたようだった。

(4)おわりに

本プログラムが決定に至るまでに、両地方のホストファミリーの皆様によって入念な調整が繰り返し行われたと伺った。スムーズなプログラム進行の裏側では、計り知れない心遣いや多くの準備があったことだろう。ドイツの皆様の「この交流を良いものにしよう」という熱意と、心のあたたかさが私たちを包み込んでくれた。そして言語も文化も異なるなか、親身に寄り添ってくれた優しさを私たちは生涯忘れない。北信越グループの全員が、かけがえのない思い出をドイツから持ち帰ることができた。

冒頭の言葉に少し触れるが、「旅」の醍醐味とは、多様な文化や価値観に触れることだと私は考える。異なる文化の中で体験するすべては、新鮮かつ喜ばしいものであったり、時に目を背けたくなるものであったりと実に情報量にあふれている。そんな情報の波に揉まれ、自ら会得してきた常識が通用しないことに気がついたとき、人は己が何者であるのかを顧みるのだと思う。オンラインの事前研修で初めて対面し、距離感を探り合う団員たちのぎこちない様子を今でも思い出す。あの時はきっと、互いに多くの不安を抱えていたに違いない。そんな彼らも本交流という「旅」で多くの経験を得て、ずいぶんと頼もしくなったようにみえる。初めての国際交流に時折こぼれる反省や弱音もあり、その度に自分たちで支え合い解決をしようと工夫をしていたようだった。自分の意思を積極的に伝える様子や、隠された才能を発揮する様子には目を見張るものがあった。団員たちの成長を傍で見届けることができたのは指導者としてなにより喜ばしいことだった。私の指導者として至らない部分を、団員たちが支えてくれたことにも大変感謝している。ドイツで得た経験が、彼らのこれからの人生を豊かにしてくれることを願っている。

最後に、本交流の開催にご尽力いただいた JJSA ならびに

dsj、ホストファミリー、通訳の皆さん、所属県のスポーツ少年団、団員のご家族、ご縁をいただいたすべての皆様にこの場を借りて深く感謝を申し上げたい。Besten Dank！本交流に参加させていただいたことを、ひとりの指導者として大変光栄に思う。本事業がこの先も未来へ続くよう祈り、私の引率指導者記録とする。

【東海・中国グループ】紅林 朋子

「笑顔で、元気に、積極的に!! の言葉を心に刻み、次の未来へ(*^~*)」

団員として参加してから40年ぶりにドイツを訪れました。訪問した街も違い、ほぼ初めてのような状態で参加しました。参加決定後の事前研修も当時の集合研修とは違い、全体でのオンライン。グループ分けも人数が少ないことから、団員は広範囲の合併ブロック。引率指導者も年齢の幅が広く、その中で間違いなく私が一番オンラインにも不慣れな引率指導者で、しっかり者の団員たちをはじめ、皆さんに支えられながらの前進でした。

いざドイツへ。

電車での移動は、大きなスーツケースを抱え階段の上り下りで手がパンパン！でも、外に出てみると素敵な風景に胸が躍りました。受入ドイツ団の方々が、手を振って駆け寄ってきてくれました。ドイツの方々は、とても好意的で、気質も似ているように感じました。この交流ならではのおもてなしの心に触れ、自然を生かしたプログラムの多さに感銘を受けました。ただ、7時間の時差による寝不足から、日本人特有の几帳面さや真面目な気質が前面に出ることもあり、その都度、団長団の先生方や引率指導者の先生方にご指導&対応いただき大変お世話になりました。

この交流で感じたことは、歴史ある街並みの迫力、自然の豊かさ、そしてテレビや携帯に支配されず時間にゆとりを感じる中、言葉の壁を越えて心をつなぐ最高の架け橋が「スポーツ」であることでした。ドイツで主流のスポーツクラブは、スポンサーや公的機関にバックアップを受け、さまざまな種目や利用者層も幅広く対応していることに驚きました。エアコンのない住みや

すい気候も魅力で、合宿は屋外テントを利用し、自然の中でエコな取り組みも多くみられました。また、ボランティアに対する意識が非常に強いことも印象的でした。

街中では、自転車専用道路が整備され、ベビーカー付きの自転車や荷物を載せられるボックスのついた自転車が多く走っていました。電車にも自転車が引いたまま乗れるスペースが確保されており、自転車が重要な移動手段として位置づけされていることがわかりました。さらに、E スクーターも電動自転車と同じくらい街角にレンタサイクルとして設置されていて、団員も練習して街の中や川沿いの自転車道をスイスイ走りました♪30代くらいまでの方が多く利用していましたね。70代くらいまでの方は、白髪にヘルメットを着用し電動自転車に乗る姿も多く、素敵だなと感じました。

ごみの仕分けも、毎週土曜日に行くという回収場を見学させていただきました。日本よりも細かく分別されており、環境への意識の高さが目に見えて感じられました。個人では、マイボトルをほとんど見かけませんでした。ペットボトルを購入し、蓋が取れないようになっていて、ラベルを剥がさず返却すると返金してくれるシステムを利用していました。

小高いところに行くと、草原が広がりますやウサギがいました。景色は広～いトウモロコシ畑の先にレンガ造りの建物が並び街が見え、絵本の中のような感じでした。朝晩、教会の鐘の音が響き渡り、心温まる国。

ぜひ、まだ行ったことのない人に言いたいです！この素敵な事業で、安全な環境で、海外を見て価値観の違いを味わってほしいです。日本の良さも再確認できます。ドイツ語、英語がかたことでも、チャレンジの気持ちさえあれば、日本人の良さを知っているとても優しい通訳さんが付いてくださり、たくさん助言もしてくれます。街ごとに担当者の方が、精いっぱい対応をしてくれます。ホームステイで親身になって接してくれる新しい家族ができます!! 苦楽を共にし全国の友もできます。ぜひ一歩踏み出してください。

最後に、この素晴らしい事業に携わったすべての方々に感謝の意を表します。日独交流がさらなる素晴らしい未来を紡いでいくことを願って…

【近畿グループ】大川 真弓

「日独同時交流が続くことを願って」

私は小学生の頃にスポーツ少年団に入団し、団員、リーダー、そして指導者として活動を続けてきました。高校生の時には、日独同時交流に団員として参加し、ドイツでの交流がいかにより特別で素晴らしいものであるかを深く実感しました。この交流がもたらす多くの学びと成長を、ぜひ多くの団員にも体験してほしいと心から願っており、その思いから引率指導者として参加することを決意しました。指導者としてまだ駆け出しの私にとって、異国地への引率は大きな挑戦でもありましたが、多くの苦悩を通じて有意義な学びを得ることができました。この交流を通じて、指導者としての意識がさらに向上し、今後の活動にも大いに役立つ経験ができたことは非常に価値のあるものとなりました。

5月の全体事前研修会は、2日間に亘りオンラインで開催されました。コロナ禍を経て、オンライン形式に抵抗感は減ったものの、積極的に議論を促しても思うように進まない場面が見られるなど、オンラインでのコミュニケーションを取る難しさの課題を感じました。共通テーマに関するレクチャーや個人ワークは、本交流に対する意欲をさらに高めてくれたと思います。自分自身の目標や考えを見つめ直す時間は、とても重要だと感じました。また、6月に行った対面でのグループ別事前研修を経てグループの結束感も高まり、良い雰囲気で行くことができました。

今回の近畿グループの受入担当は、ザクセン州にあるヴァイスヴァッサー(Weißwasser)地方の潜水ユークェントでした。渡航前から担当者のレネー(René)さんやマックスウェル(Maxwell)さん、ホストファミリーの皆様とオンライン交流を通じてお互いを知る時間を設けられたことは、私たちの不安を軽減してくれました。また、通訳の恵子さんが交流前から連絡をくださり、相互の調整をしてくださったおかげで、交流がより一層充実したものとなりました。

地方プログラムはホストファミリーの皆様からの温かい歓迎から始まりました。初めはお互い緊張している様子でしたが、様々な交流を通して徐々に距離を縮めることができました。現地ではサイクリングやハイキングを楽しみながら、美しい自然を

満喫し、歴史や文化について学びました。また、日本ではなかなか体験できないダイビングやフェンシングにも挑戦させていただきました。

スポーツ活動中は、日本人とドイツ人の間で自然に交流が生まれ、ドイツの青少年から技術を教わったり、一緒に試合を行ったりしました。その場には笑顔が絶えず、スポーツが人々を繋げる素晴らしさを再認識しました。フェンシング体験では、現地の指導者による実際の指導風景も見学しました。日本では指示を出すことが多い指導スタイルとは異なり、ドイツの指導者はその子の力を引き出すような姿勢を大切にしていました。このような指導法は、指導者にとって非常に重要であると学びになりました。

本交流のメインであるディスカッションには、ホストファミリーだけでなくホストファミリーの友人達も参加してくれました。全員が通訳に頼らず自分の言葉で伝えようとする姿勢がとても印象的でした。手探りながらも準備した内容で意見交換が多岐に渡り、白熱した議論となりました。この経験は異文化理解の深化に繋がり、日独同時交流の醍醐味を改めて実感しました。

今回の交流は、人生においてもかけがえない経験となり、現地の皆様からの温かい支援と理解が私たちの成長を支えてくれました。参加した団員が将来、指導者としてこの交流に参加し、貴重な経験を次の世代へと繋いでいってほしいと思います。私自身も本交流が永く続くことを願い、今後のスポーツ少年団活動の発展に貢献できるよう、引き続き努力してまいります。最後になりますが、dsj、JJSAを始め、日独同時交流の開催にあたり携わってくださった全ての皆様に深く感謝いたします。

【四国グループ】佐伯 登志男

「第51回日独スポーツ少年団同時交流に引率参加して」

5月の日本団事前研修会後に急遽、これまで経験したことがない引率指導者としての派遣が決まった私は、派遣前(いや派遣中においても)、与えられた役目がしっかりと務まるかどうか不安でならなかった。四国グループとしての事前(集合)研修会1回、ドイツ側受入担当者とのオンライン交流(地方プログラム受入先2ヶ所のうち1ヶ所のみ)1回の実施により、事業内容

の理解や団員の把握に努め、いざ7月29日、国立オリンピック記念青少年総合センター(オリセン)での日本団集合に臨んだのである。

オリセンには全国各地から派遣メンバーが続々と集合するも、四国グループの団員2名だけが決められた時間に遅刻する事態となり、初日の団長団・引率指導者ミーティングで時間厳守について団員を指導したいと発言したところ、見城団長からは「若い団員の自覚を促して楽しい派遣交流となるよう期待する」というような趣旨の挨拶もあり、改めて引率指導者の役割を自己認識したのである。そして、翌日の結団式等の行事を経て、7月31日早朝に大型バスでオリセンを出発し、羽田空港からドイツ・ミュンヘン空港へと向かった。

ドイツに着いてミュンヘンでの全体プログラムは、長時間のフライト後の時差などもあり、ドイツ側が用意するプログラムや対応事項に頭も体も慣れず大変疲れたが、初めて見るドイツの風景やドイツ関係者との会話に刺激を受けながら日程が進み、地方プログラムへの出発準備も終えることができた。

8月2日朝、いよいよ地方プログラムへ出発。受入先の方にワゴン車で送迎していただき、前半の受入先であるザクセン州へと向かう。午後の遅い時間にアイェンブルグ市の街に到着し、早速、プログラム責任者のカトリンさん一家が保有するガーデンで、ホストファミリーも加わっての歓迎(ティー)パーティーが用意されていた。私と各団員が自己紹介(ドイツ語で名前だけ)するも、すぐにニックネーム(ファーストネームの短縮形)を聞かれ、私だとToshi(トシ)ということになり、最初から一気にフレンドリーな雰囲気となった。そして、パーティーが終了し、団員も私もホストファミリー宅へ車で散っていったのである。

ところで、私にとってホームステイは初めての経験であり、これも外国で8泊もするという事で緊張していたが、ホストファミリーには大変親切にいただいた。特に年齢を重ねている私は、ご夫妻だけの家庭に受け入れていただいたのであり、本当に感謝している。

地方プログラムでは、全体プログラムと同様に「スポーツ×SDGs」をテーマとする交流ディスカッションのほか、前半のザクセン州では、水泳プログラムの体験、市庁舎の訪問、ライブツィヒ市内観光、マイセン陶器製作所やビール工場の見学など、

また、後半の受入先であるザクセン・アンハルト州でも、プログラム担当者のラルフさんのリードにより、ヴァンツレーベン市を拠点にしてスポーツ体力テスト、市長表敬、州都マグデブルグ市街やカリ鉱山の見学など、盛りだくさんの内容であった。ホストファミリーや関係者との交流も含め、団員には素晴らしい経験になったと思うし、フランクフルトへ移動しての後半の全体プログラムでは、さよならパーティでの両国の若者の盛り上がりを見て、派遣訪問の収穫を実感したところである。

引率指導者として若い団員たちにどう向き合うかは、年齢差がある私にとって大きな課題ではあったが、友達仲間とはいかないものの、団員と気軽に話せるような毎日であったような気がしており、その点は団員に感謝したい。そして、団員が成果を上げて(たぶん)、無事に帰国できたことに安堵しており、また、今回、このような貴重な経験をさせていただいた関係者の皆さんにお礼を申し上げ、私の報告としたい。

【九州グループ】後田 健一

「ドイツの若者の自発性と自立意識について」

活動に参加しながら、ドイツの若者の自発性、自立意識の高さに感心する場面を多く見る機会があった。活動だけではなく、その前後の準備や片付けの様子を見てみると、ドイツ団員は、指導者の指示を待つことなく、自主的、積極的に動いていた。疑問に思ったことや確認したいことがあると、ドイツ側指導者と対等に話をしている様子も見られた。

そういった作業を進めながら、日本団員に対する気遣いも忘れることなく、コミュニケーションをとったり、引率指導員の私に対して、自身が計画担当になっているプログラムの感想を聞いてきたりと、責任感のある行動も見られた。

本事業の重要プログラムであるディスカッションでは、テーマに沿ったプレゼンテーションを用意したのは日本側であったが、ドイツの若者たちは、プレゼンテーションを見るなり、内容に関する違和感や、聞きながら出てくる質問を、次々と発言していた。質問内容、伝え方も的確であった。

今回のような社会情勢に関するテーマであれば、政治との関連が大きいことも予想されるが、ここで日本の若者との大きな違いが見られた。ドイツの若者は、自国の社会情勢、政治情勢

について関心を持っており、自分たちが社会参加、政治参加することで社会、政治を変えることができることを理解し、自覚している。

政党の掲げる政策や公約についても関心をもち、理解し、支持する政治家、政党も決めているようであった。政治が社会に果たす役割を十分に理解したうえで、政治家に全てを委ねるのではなく、自分がすべきこと、自分にできることを考えている発言が出されていた。

日本側は、若者の政治離れ、マスコミや SNS に操作されている政治の在り方を語ることはできたが、そのうえで自分自身が、どのように政治参加しているのか、政治参加していくのかという「私は〇〇している。」「〇〇していきたい。」という発言には至らなかった。ドイツと日本を比較すると、積極的に政治や社会情勢について考える学習、経験が十分に準備されていないことが大きく違うことも分かった。政治家の怠慢、マスコミの偏向報道により政治離れの若者が増えていることを踏まえて、個人として次の行動を考え、動くことができるようになると、より良い社会参加、政治参加ができるようになると思う。

ディスカッション全体における発語量は、ドイツ7:日本3くらいの割合であった。ドイツ団員は、自分の持っている知識と経験でしっかり語ることができていた。日本団員の反省に「もう少し時間が欲しかった。」というものがあつた。これは、考えをもっと伝えたい意思の現れで、とても良い反省である。

ドイツ側の受入れ責任者が、高等学校教諭であることから、団員に対して、スポーツのスキルを高めるための指導だけではなく、発想力、判断力、決断力、表現力、責任感を求めており、その思いに団員がしっかり応えている姿が随所に見られた。これは、指導者が団員の個性、能力を十分に把握しているからであつて、日本側のグループ編成上、指導者、団員の関係性、指導とは大きく異なる。そのような状況で、今後もディスカッションを続けていくのであれば、事前研修や全体研修において、プログラムの重要性や自国の政治状況、日本を知る研修が必要になっていくと思う。

団員レポート

「異国化の学び」

【東北Ⅰグループ】 佐藤 蓮彰

私は2週間の日独交流のプログラムを楽しく関心を持って取り組みました。

ドイツに派遣されて特に関心を持ったことは指導法の違いです。日本は年上を敬う姿勢、上下関係を大切にしているため、監督や上級生から下級生に教える場合がよくあります。ドイツでは日本に比べて年齢を意識することがあまりないので、実力のある下級生が上級生に教える場合がある事が分かりました。このことから日本のような年功序列の文化がないことに驚き興味を持ちました。そのため、異文化についてより学びたいと思いました。

私はこの研修で、グローバルな視野を身につけることができました。多様な視点で物事を考えていきたいです。また学んだこと、経験したことを地域のスポーツ少年団、リーダー会に伝え、多くの人に興味を持ってもらい、日本や地域の活性化に繋げていきたいです。次は、指導者として日独交流に参加したいです。

「たくさんの経験や学びがあった Germany」

【東北Ⅰグループ】 佐々木 風音

私は、日独交流を通してたくさんのことを経験し、異文化に触れたたくさん学びがあったあつという間の2週間だなと思いました。最初は、不安があり、心配でしたが日本団と会い交流していくうちに楽しみのほうが大きくなりました。ドイツ側とディスカッションをすることが一番不安でしたが、地方プログラムに行った際、ホームステイ先や他の人とも仲良くなり良いディスカッションができたと思います。ドイツでは日本よりSDGsの対策が進んでいると感じました。例えば、ファミリーデーで海に行った際、近くでフリーマーケットをしていました。そこには海で拾った貝殻や石などを加工してネックレスやプレスレットにっていて日本ではフリーマーケットでしているところはあまりないなと思いました。

スポーツでは会話は難しいですがジェスチャーやちょっとした英語でスポーツを通して交流できました。驚いたことは、行くところの近くには必ず教会があり建物が立派で驚きました。日本と違うところがいくつもあって面白かったし、また海外に行ってみたいと思いました。

「日独交流で学んだこと」 【東北Ⅰグループ】 齋藤 和奏

私は去年、ドイツの方をホームステイ先として受け入れる側で日独同時交流に参加しましたが、今年は実際にドイツへ行きました。行く前はどの様にコミュニケーションを取れば良いのか、初めての国で2週間も過ごせるのかと不安が沢山ありました。ですが、初日からとても楽しく、不安はすぐに消えました。ホームステイ先では家族全員が温かく迎え入れてくれました。一緒に映画を見たり、散歩をしたりして交流を深めることが出来ました。こんなに仲良くなれると思っていなかったのでも嬉しかったです。

また、SDGsの「質の高い教育をみんなに」という目標についてディスカッションを行いました。私たち日本団からそれぞれのスポーツチームでどんな活動をしているのか、多くの方がスポーツに触れるためにどんな政策や行事が行われているのかを紹介しました。この題についてドイツ側からも意見をもらい、日本とドイツの文化の違いや教育の違いを知ることが出来ました。スポーツだけでなく、生活をしていく上で日本との違いを多く感じられました。このような経験を家族やチームのみんなに伝え、スポーツを通して国境を越えても交流を深められるということを沢山の人の人に知ってもらいたいです。

「のびしろ」

【東北Ⅰグループ】 石塚 花咲

ドイツでの2週間の交流を終えて率直に感じたことは、「スポーツの力ってすごいな」ということです。私は英語もドイツ語もほとんど話せません。そのため、ホームステイ先では言葉の壁が大きく、話についていけない話も聞き逃してしまうということが何度もあり少し悔しかったです。ですが、スポーツは言葉

など関係ありませんでした。ホストファミリーや現地の子どもたちと一緒にスポーツをした時、同じタイミングで喜び合ったり、悔しがったり、笑い合ったりできて、スポーツが世界共通の言語のように感じました。そして2週間ホームステイをして、今の自分の実力を知ったり、スキルアップ出来たと感じる瞬間があったり、ドイツのことだけでなく自分を学べたと強く感じています。最初は翻訳アプリを常に使って会話していたのに、いつの間にか自分の言葉で会話できていると気づいたときは本当に嬉しかったです。今後は職場やチームの後輩たちにもスポーツの凄さや楽しさ、異文化交流の楽しさを伝えていけたらいいなと思います。そして、ドイツで出会った最高の仲間たちとまた会える日を楽しみにしています。

「本交流を通して」 【東北 I グループ】 飯尾 月葉

今回の日独同時交流ではとても貴重な体験をすることができました。1つ目はドイツの文化や土地です。乾燥しており、平地が広がるドイツでは小麦畑や動物を飼育する草原が広がっていました。その小麦でできた黒いパンは日本では食べない味で、とても美味しかったです。初めて食べたドイツ本場のソーセージは、食べ方が分からず英語を駆使して店員さんに教えていただきました。

また何より、ホストファミリーを含めドイツの方と交流出来たことが最も貴重な体験だったと思います。年齢の差をもちもせず、互いに文化や言語を聞きあったり、スポーツやショッピングなどを楽しんだりすることで仲を深めることが出来ました。ドイツで得た経験や友人は生涯の宝物になると確信しています。

この経験を自団に持ち帰り、伝えていくことで、この日独同時交流をより盛り上げていきたいです。また、日本での受け入れや、来日したドイツの方のサポートなどでこの交流にかかわっていきたいと思っています。

「日独スポ少同時交流を終えて」

【関東 I グループ】 小川 桜

自身は初めての海外。しかも、ただの旅行ではなくスポ少の派遣でヨーロッパに約 2 週間。正直に言うと楽しみより不安が

大きかった。しかし、現地に着いてみるとその不安は嘘のようでドイツの人は温かく私たちを受け入れてくれて、さまざまなことを一生懸命教えてくれた。自分より年下の人たちも言葉の通じない私たちと積極的にコミュニケーションをとろうとしてくれた。その姿を見たとき、これこそがスポーツを通した若者のあるべき姿かもしれないと思った。そして、これがスポーツの魅力だと改めて感じた。私は、事前の課題作文でスポーツと社会の繋がりについて学びたいと書いた。国籍、使用言語、宗教、文化が違う者同士でも気持ちを繋げて、社会をより広いものにしてくれるのが「スポーツ」なのだと感じた。これから私は、指導者としてより専門的で責任ある立場になる。この経験をふまえて、子どもたちに積極性やスポーツとこれからの社会のあり方について教えていきたい。

「言語を超えた絆」 【関東 I グループ】 重松 楓

今回、日独同時交流に参加し、多くの経験を得て、貴重な体験を沢山することができました。私は人見知りをしやすく、積極的にコミュニケーションを取ることが苦手でも心配でしたがドイツ団の方々が温かく受け入れてくれたおかげで早く打ち解けることができました。私自身海外の方と接する機会があまり無く、世界についてあまり興味がありませんでした。ですが今回この交流に参加したことで自分の世界観を広げることが出来ました。恥ずかしながら、海外の方は少し怖いという固定概念が自分の中にありましたが、ホームステイ日目、初めての土地となれない環境で不安になっていた私に、ホームステイ先の方が夜ご飯に私が食べたいと言っていた料理を振舞ってくれました。その料理を食べたときにとても感動したことを覚えています。料理以外でも私がわかりやすいように簡単な英語で話しかけ、色々気にかけてくれて、私の悪い癖である、経験していないのに偏見や固定概念で物事を判断することをやめようと思えるきっかけになりました。また、この交流で沢山のスポーツをやていきました。やったことのないスポーツを体験したこともあり、やり方がわからなくて困っていた時も、ジェスチャーや簡単な英語で優しく導いてくれました。この体験から何事も偏見を持たずに、挑戦していくことが大切だと実感することが出来ました。ドイツから帰国後、学校が始まり周りの友達や先生に良い経験

が出来て雰囲気変わっていい感じになったねと褒められることが多くなりました。この交流に参加していなければずっと変わらなかったと思うし、素敵なドイツ団の仲間たちに出会うことが出来なかったと思います。少しの勇気でこんなに人生が変わるとは思わなかったのでとても衝撃です。これからは何事にも勇気を持って挑戦し、世界にも興味を広げ、沢山学んでいきたいと思いました。今回、開催して下さった本部の方々、受け入れて下さったドイツ団の方々、ホームステイの方々、同じグループの方々、背中を押してくれた家族、すべての方に感謝したいです。

「ドイツに行って知ったこと」

【関東Ⅰグループ】和久井 翔太

今年、スポーツ少年団がドイツに派遣され、その一員として参加する機会を得た。初めての海外遠征で緊張と興奮が入り混じる中、現地の人々の温かさに驚かされた。練習試合や親善交流を通じて、異なる文化や言語の壁を超え、友情が芽生えた。また、ドイツの練習環境は厳しく、それに比べて自分たちの練習スタイルにも改善の余地があると実感した。帰国後、その経験をチーム全体に伝え、今後の練習や試合に生かしていきたいと思った。この異文化交流の機会を通じて、自分自身も成長できたし、今後のチームの発展にも大きく貢献したいという意志が芽生えている。

「ドイツの寛容性」

【関東Ⅰグループ】佐藤 嘉柊

ドイツで行った交流会では主にSDGsの「ジェンダー平等を実現しよう」についてディスカッションを行いました。ドイツは法律や社会制度を通じてジェンダーレスに関する理解が進んでおり、社会全体が性別にとらわれない平等な環境でした。一方、日本は主にファッションやポップカルチャーを通じてジェンダーレスが広まりつつありますが、社会全体での受容にはまだ時間がかかる面があると感じています。スポーツにおけるジェンダー平等は、日本とドイツともにまだ解決策を模索している状態である事が分かりました。私の学校生活において、自分の意見を主張すると否定されていると感じる事が多々あります。しかし、ドイツでは人が主張していることを批判することはなく、その人

自身の主張を受け入れる寛容性を感じました。このことは、ホームステイ先でも強く感じ、日本と違ったドイツの寛容性がとても気に入りました。私自身も相手を尊重し、寛容性のある人間になりたいと思います。このような機会を頂き、本当にありがとうございました。

「日独スポーツ少年団同時交流を通して学べたこと」

【関東Ⅰグループ】熊谷 春花

私が日独スポーツ少年団同時交流を通して学べたことは、異なる言語間であっても、伝えようとする気持ちがあれば通じ合うことができるということです。はじめは、異なる言語であることを理由に、日本団とばかり話していました。しかし、ドイツ団と少しずつ交流を重ねて行くうちに、表情や身振りの使い方を工夫することで言いたいことが伝わりやすくなることに気づけました。それからは、ドイツ団とも積極的にコミュニケーションをとれるようになりました。そして、様々な人と交流することで、自分に自信が持てるようになりました。日本に帰ってから、ドイツ団との交流した経験を生かし、これまで以上に色々な人とコミュニケーションをとれるよう努めたいです。たとえば、団員の子もたちに身振り手振りを取り入れることでわかりやすく説明したり、雰囲気を作るために表情に気を配ったりして生かしていきたいです。

【関東Ⅰグループ】小林 千夏

今回の日独国際交流では、失敗を恐れずにチャレンジすることを目標にしていました。最初はやはり言語の壁もあって、ドイツ団と距離がありましたが、通訳さんを頼ってばかりではなく、だんだんと自分から声をかけに行ったり、英語での会話や質問をする事にチャレンジできていたと思います。地方プログラムで訪問したフルダという街はとても歴史が長く、1215年ほどに建てられた建物やバロック式の建物が多く、とても印象深かったです。ドイツ団とのディスカッションでは、グループのテーマであるジェンダー平等について自分の経験を通して意見を出す事ができました。最終的な答えは出す事が出来なかったのですが、みんなで意見を出し合い、ドイツ団とのディスカッションを有意義な時間にする事ができたと思います。ドイツでの気づき

としては、自転車の利用者が多かったり、税金が高い分電車の運賃がかからなかったり、道路の設備が整っているなどといった日本と違う特色にたくさん触れることができ、とても充実した2週間を過ごすことが出来ました。

「交流で学んだこと」【東北Ⅱ・関東Ⅱグループ】菅井 寿真

日本の夏と違い、過ごしやすいドイツで最高の経験ができました。ドイツには誰もが気軽に利用できるスポーツ施設がたくさんあり様々な体験をしました。ドイツ語ができなくても積極的に話しかけたりスポーツを通して仲良く交流できました。受け入れ先の皆様はどこに行っても歓迎してくれて、お城の歴史や食べ物なども優しく教えてくれました。養蜂場では質の良いハチミツを作るための工夫や環境保護について、難民の子どもや障がい者がいる施設では福祉が充実していて誰もが平等に暮らせる仕組みを学びました。

ホストファミリーとは対面後のレクリエーションですぐに打ち解けることができました。しかしディスカッションでは専門的なことをドイツ語で言われると理解できない部分があり悔しい思いもありました。それでもジュスチャーや英語でやり取りをし、全ての年代の人が健康を維持するためにどのように取り組むと良いか両国で話し合えました。今回の交流で学んだSDGsへの取り組みを、今後のリーダー活動で活かしていきたいです。

「ドイツで感じたこと」【東北Ⅱ・関東Ⅱグループ】笹沼 愛

交流に参加して1番感じたことは、住んでいる場所がどんなに遠くても、見た目や話す言葉が違ってても、スポーツを楽しむ気持ちと人間として温かい心を持っていることは同じであることだ。日本とドイツの違いがたくさんある中で私が強く感じた共通点である。

ドイツでスポーツクラブやスポーツ施設の見学をした。ドイツでは学校の部活動がないため、子どもたちはクラブに入ったり、施設を利用したり主体的にスポーツをしていると知った。日本とは違う形でスポーツを楽しむ環境が整えられていた。また、地方プログラムでドイツの高校生たちとスポーツをした。言葉は通じなくても一緒に楽しむことができ、みんなが笑顔になった。スポーツは人をつなぐことができると再認識できた。

ホームステイで初日は意思疎通ができない状況に絶望した。でも、積極的にコミュニケーションを取ると思いが伝わった。自分が英語を話せないことを悔しくも思ったが、言葉じゃなくても通じ合う素晴らしさを感じた。ホストファミリーは私が過ごしやすいようにと優しくしてくれた。急に来た日本人である私へ向けてくれた優しさがとても嬉しかった。こんなに遠い場所でも優しさや人を大切に想う気持ちは同じ人間として変わらないのだと感動した。

ドイツで学んだことやこの共通点を胸に、スポーツ少年団の活動を通してたくさんの人とつながり、もっと世界に目を向けていきたい。

「日独スポーツ少年団同時交流事業で得た経験とこれからの展望」【東北Ⅱ・関東Ⅱグループ】阿部 伍喜

今回の日独スポーツ少年団同時交流は私に様々な経験をもたらしてくれた。自身がグループリーダーとなって、グループの人たちと協力してSDGsについて考えることはこの交流ならではのメリットだなと思った上、自身にとってとても良い経験になったと思う。中でもホームステイなどによる現地の人々との会話やスポーツアクティビティによって「グローバルな視点」というものを特に深められたと思う。私は今回の交流派遣事業で得た経験を、今後の自身の所属するスポーツ団で、リーダーとして活用していきたいと思っている。今までは縁の下の力持ちとしてグループを後方から支えていきたいと思っていたが、今回の経験でリーダーとして活動していくことに対して自信をつけられた。団員たちをまとめ上げていくことに積極的に取り組み、いつかは地域内だけでなく、日本全体で、ひいては世界でも活躍できるようにしたい。

「ドイツで学んだこと」

【東北Ⅱ・関東Ⅱグループ】曾我部 優来

私は今回の日独同時交流に参加し、たくさんのことを学びました。その中でも特に印象に残っているものは、日本とドイツの教育やスポーツの在り方の違いです。日本では小学6年生で高校卒業後は大学入試を受け大学に進学するが、ドイツでは小学校が4年生で高校卒業時に卒業試験があり、その成績次

第で大学に行けるか決まることに驚き違いを感じた。スポーツの在り方では、日本は部活動があり放課後にスポーツを行うが、ドイツは学校単位の地域スポーツクラブに加入している子供が多く、そこでスポーツを行っていることが多いことが分かった。また、仕事や学校が早く終わる人が多いため、日本人に比べてドイツ人は余裕のある生活を送っているように感じた。スポーツ×SDGs のディスカッションでは、もともと日本の平均寿命に対して健康寿命が短い点を問題として挙げ、幼少期から運動習慣をつけることが必要と考えていた。子供から高齢者まで取り組むことのできる運動や障がい者スポーツを取り入れれば良いと考えていた。また、子供から高齢者と障がい者で障がい者スポーツを行うことですべての人とコミュニケーションを図ることが可能になると思う。ドイツでは地域スポーツクラブが多く存在し、多くの国民が地域スポーツクラブに所属していることから、幼少期からの運動習慣を身に付けることが可能になると思った。一つひとつの家の土地が広いと、プールがあったり地下に卓球場があったりと運動するスペースを作ることができる。また、家の近くに公園があり休日には家族で遊ぶことができると思った。この経験を活かし今後はスポーツ少年団で指導者となり子供たちに運動の大切さを伝え運動習慣を身に付けられる指導を行い、世界にも視野を広げ国際的にも交流のできる指導者を目指していきたい。

「ドイツで学んだこと」 【東北Ⅱ・関東Ⅱグループ】 杉山 愛

私は日独同時交流で、日本とドイツの生活文化の違い、ドイツスポーツユースと日本スポーツ少年団の取り組み方の違いを学びたいと思った。

日本では、部活動が当たり前の存在となっているがドイツではそれぞれのスポーツクラブの施設で活動することを知り、部活動の勝利主義よりも自主的にスポーツに取り組めると感じた。また、日本に比べてドイツは労働時間が少なく、太陽が出ている間が長いと夜は外で夕食を食べたり家族みんなでいる時間が日本より多いと感じた。また、地方プログラムの表敬訪問で訪れた障がい者が働く職場では各々ができることを協力して売り物になるまで作り上げるのを見学して何においても不可能なことはないと感じさせられた。

ドイツに行く前はコミュニケーションを取れるか不安だったが、コミュニケーションの取り方は英語だけじゃないと気づき、ジェスチャーやわかる単語をつなげて伝えてみたりいろいろな方法を試してコミュニケーションを取ることができた。このようにたくさんの考え方ができるようになり、行ってよかったと思う。今後の活動に活かしていきたい。

「日独同時交流」 【北信越グループ】 小岩 ひなた

今回の日独同時交流でドイツに行くことが私にとって初めての海外でした。私はドイツ語は全く、英語も少し聞き取ることができると感じるという感覚で言語の違いに大きな不安を抱えていました。今はスマートフォンに翻訳アプリをいれると簡単に伝えることもできるため、困ったときにとてもありがたかったです。しかし、もっと英語を勉強しておけば良かったなと思いました。

今回ドイツに行くにあたって私はいくつかの目標を立てていました。それはコミュニケーション能力の向上です。ドイツの方ははっきりと意見が言える人が多く、私も意見を伝えることを意識して生活していました。しかし、なかなか伝わらないことが多く伝えることの難しさを感じました。このように、ホームステイをする中で困ったことは何回もあったのですが、それを自分で伝えて解決することでこれから前に立ってリーダーをすることの成長にもなったと思います。今後はその成長した部分を活かして自分から進んで動くようにしていきたいです。

改めて貴重な経験をする事ができて本当に良かったです。今後、少しでもこの交流に興味がある子がいたらたくさん話していきたいです。

「交流で学んだこと」 【北信越グループ】 松田 彩夢

ドイツに行ってきたみんなと交流する中で多くのことを学びました。まずはコミュニケーションや表情の大切さです。私は話すことが得意でないため、この交流ではいつもより意識して話そうと決めていました。この目標を立てておくことで、交流中もいつもより勇気を持って自分から話しかけることができました。また、笑顔でいることを意識して活動しました。疲れていてもなるべく笑顔でいるようにし、疲れるくらいに楽しいことをたくさんしたのだとポジティブに考え、メンタル面でも成長することがで

きました。電車やバスのトラブルでも日本では体験することができないし、これも一つの思い出だと捉えてみんなで笑いあうこともありました。また、会話をする時も笑顔は必要不可欠でした。会話を円滑に進められ、質問をたくさんすることができました。笑顔でいるだけで自然と自分自身楽しくなり、さらに周りも笑顔にさせ良い連鎖が広がっていくと感じました。全てが良い思い出になりました。ドイツでは、日本よりも目を合わせて会話したり、乾杯したりと目を合わせるという意識が強いことがわかりました。相手と目をしっかり合わせた方が伝えたいことが伝わりやすくなります。日本では、目を合わせない人が多いためこれからもっと意識して会話をしたいと思います。次にスポーツについてです。言語が違ってスポーツはみんな同じように楽しめるし、言葉の壁を超えて通じ合えるものだと思えて感じました。年齢関係なくみんなが楽しむことができ、失敗しても誰も嫌な顔せず経験者がコツを教え合っていました。そして、成功した時には全員が拍手や声をかけていて、みんなで楽しもうと言う雰囲気を感じさせられました。

今回の交流は一生の思い出となり、たくさんの経験をすることができました。経験したことを周りの人に紹介し、後輩へと引き継ぎたいと思います。日本の文化を紹介、体験してもらえたことはとても良かったなと思います。とてもハードなスケジュールではありましたが、全てが楽しかったです。

しかし、観光が多くあり、スポーツ施設や学校などの見学をしてみたかったし、もっと英語ができればよかったと言う後悔もあります。また、小銭にくずさないとトイレに行けないためその機会を作って欲しかったです。トイレがある場所がわかるよう、トイレマップがあれば安心だなと思いました。ファミリーデーでは、ホストファミリーが仕事や、用事があり一緒に行動できない人もいました。反省点も含め、来年ドイツにいく人たちに伝えたいです。この活動が大成功に終わったのは本当に多くの人のご協力があってこそだと思います。運営やサポートしてくださった方々、ホストファミリー、関わってくださったすべての人に感謝しています。本当にありがとうございました。

「日本との違い」

【北信越グループ】 飯坂 心登

僕が日独同時交流で学んだことは色々な世代と一緒にスポーツをしていることです。またドイツでは、街の中に誰でも使えるようなスポーツ施設があるなど、スポーツをする環境がとても整っていると思いました。僕はビーチバレーの施設を皆で利用しましたが、そこには50代位の人も普通に利用していました。日本ではなかなか見られない光景だと思いました。

他にもドイツではボランティアでクラブチームの指導でやるなど日本よりドイツの方が、スポーツに関しての関わりが多いと気づきました。

またディスカッションでは日本とは違う教育制度について聞きました。ドイツでは中等教育の学校を先生が選ぶそうです。その際適当に選ばれてしまう事があることを知りました。それについては僕は、中等教育の学校はその子の人生を左右する大切なことなので、制度を変えた方が良くと思いました。

僕はドイツで学んだ色々なことを団員や友達に広め、スポーツに関心を持ってくれる人を増やしたいと思いました。またドイツで学んだことを活かして、今後の色々なことをやっていきたいです。

「2週間のドイツを振り返って」

【北信越グループ】 西野 耀史

大抵、私はレポートの最初に最も印象深かったことから書き始めているところ、今回は比べるのが失礼な気さえてくるような、本当に充実した、多くのことを体感できた2週間だったように思います。

私たち、北信越グループは前半を Waldshut-Tiengen という自然豊かな地域で、後半を Freiburg という歴史ある大学都市でと、対照的な二地域で過ごすことができました。交流中はスポーツ交流や表敬訪問はもちろん、隣国のフランス、スイスを訪れたり、現地の団体とチェスを指しながらピザを焼いて食べたり、言語を教えあったりと、本当に多くの経験ができました。現地ですでた友人とは帰国後1週間経った後に来た台風の心配をされるほど、帰った後も交流が続いています。

ドイツで印象的だったことの一つに、他人と関わるとき姿勢があります。日本では儒教文化が根強く、年長者や先輩を敬語

や姿勢など、形式的な礼儀作法と共に敬意を示すことが一般的ですが、ドイツでは市長さん相手に足を組んで会話したり、10代の青年が集団のトップの計画にダメ出ししたりと、日本では中々珍しい光景が日常的に見られました。どうも、意見を述べる上で形式に縛られないドイツの関わり方は立場関係なくフランクに意見を話せる雰囲気が出るので、考えたことが無駄にならずにアウトプットできる環境は、日本でよく求められる主体性を育てる上で良い影響を与えているように感じました。もちろん文化に優劣などなく、どちらか一方が良いなどというわけではありませんが、この特徴は話し合いなど、意見を引き出したときの空気感の作り方で大いに参考になるように思います。

今後、このレポートに収まらないほどに、様々な学びや経験を積めた本交流で得られた諸々を、送り出してくれた地元に還元できるよう努めていきたいと思います。

最後に、企画、運営をしてくださった皆様、そして現地で大変お世話になった Liebe Karsten, Lieber Heike, Liebe Elias. 本当にありがとうございました。

「日独同時交流を終えて」 【北信越グループ】 山森 祐海

私がこの交流で学んだことは、世界は自分の思うよりずっと広く、自分の存在だけでは測りきることなどできないということです。今回初めて海外に渡り、食生活や社会構造、人々の気質、時差からくる時間の流れ方、すべてが日本と違う環境で2週間を過ごし、自分がこれまで生きてきた世界がどれだけ狭かったのかを実感しました。米は少なく、たまにあってもタイ米だったり、デモが頻繁に起こっていたり、リサイクルやエコへの取り組みが日本より進んでいると感じたりなど、これまでの常識をすべて打ち砕かれたような心持ちでした。これまでは、海の外にも一人ひとりそれぞれの暮らしがあると頭ではわかったつもりになっていましたが、どこか別世界のことのような感覚でいました。ですが、いざ自分が海を越えてみて、島国として海で隔たれていても自分の意識と行動次第で世界とは繋がれるし、繋がったところから交流の輪を広げて行くこともできるのだと分かりました。今回の交流での経験をこれからのリーダー会活動や普段の生活で活かしていきたいです。

「人生の糧、心の糧」 【東海・中国グループ】 川鍋 悠斗

私は、今回の日独スポーツ少年団同時交流に参加して多くの経験をし、大切な仲間に出会い、たくさんのことを学び一生の思い出を作ることが出来ました。

最も印象に残っているのは、現地で体験したスポーツです。

日本独自の空手や柔道だけでなく、日本ではなかなか体験することが出来ないダイビングや射撃を現地の人と楽しく体験することが出来ました。体験を通して、スポーツは年齢、国、言語を超えて繋がることができるということを体験しました。

SDGs についてのディスカッションでは、日本とドイツの教育の違いを知ることが出来ました。

また、ホームステイでも SDGs の話を聞き、ドイツではペットボトル、缶や瓶の飲み物を買う時、保証金がかかり飲み終え返却する際に、そのお金が返ってくるという制度がありリサイクル率がとても高いなど、様々な事を知ることが出来ました。

ドイツの方との交流だけではなく、全国から集まった参加者や班員とも素敵な時間を過ごすことができて嬉しかったです。

これからも、交流会で知り合うことが出来た友達やホストファミリー、現地の人との繋がりを大切にしていきたいと思います。

「日独同時交流を通して学んだこと」

【東海・中国グループ】 田中 美羽

私はこの日独同時交流で多様な価値観や、文化に触れることが出来ました。

ドイツの人達の考え方は日本とは違い大雑把で、たまにスケジュールの問題で困ったこともありましたが、自由な考え方が素敵だと思いました。何よりも、日本人より心に余裕があつてのびのびした生活をしているところに感激しました。私たち東海・中国グループが選択した SDGs の項目は「質の高い教育をみんなに」です。そのためドイツの保育園、小学校を見学し、ドイツの教育について深く学ぶことが出来ました。日本とは何もかもが違い、私が今まで見てきた世界は本当に狭い世界であり今回知った世界もまた広い世界のほんの小さな一部分であることに気付かされました。私は今回の日独交流で沢山の素晴らしい人たちと出会い、その文化や習慣を学び、異文化交流をしました。この二週間はずっと心が躍っているような感覚で、すべて

が輝いて見えるほど楽しかったです。この素晴らしい交流がいっ
つまでも継続することを願って単位団の子供たちに教えたいで
す。この経験を自分の財産として自分のこれからの人生をより
良いものにするために活かしていきたいです。

「ドイツレポート」 【東海・中国グループ】 山岡 一心

僕が、ドイツに行って学んだことは、人は言語や習慣・文化ま
で違ってもスポーツを通せば国と国との壁を越えて仲良くな
れるんだと気づきました。ドイツのホームステイ先についたとき
あまりうまく英語が喋れず緊張もあってなかなかコミュニケー
ションが取れませんでした。そんな時ホームステイ先の人にバレ
ーボールに誘ってもらいやってみると皆とうまく会話をするこ
とが出来ないのでとても楽しくみんなと仲良くなることが出来まし
た。この時僕は、言語の壁が有る・無い関係なく、スポーツは人
と人をつないでくれるものだと思いました。

今までも、自分がやっているバドミントンなどの試合でいろん
な人たちと会い仲良くなっていたので、自分が思っていた以上に
にスポーツは人と人をつないでいるのだとドイツ交流で気づく
ことが出来ました。

これからはドイツ交流で学んだ経験を活かし、県のリーダー
会やスポーツ少年団などで、同じ県の人たちだけでなく色ん
な県、そして今回のようにいろんな国の人とみんなが仲良く・楽
しくスポーツ活動ができるように活かしていきたいと思いまし
た。

「日独スポーツ少年団同時交流を終えて」

【東海・中国グループ】 三上 遥輝

今回の日独スポーツ少年団同時交流のプログラムはとても
充実していました。

ドイツでの暮らしや歴史的な建物や工場見学をしました。日
本では全く異なる文化もあり、今まで以上に視野が広がりました。
また、スポーツ活動やレクリエーション活動への参加は貴重な
体験となりました。ドイツの方の印象としては明るい笑顔で何
事もポジティブです。僕も引き込まれるように何事もポジティブ
に参加ができていたような気がします。ホストファミリーには温

かく迎えてくださり、英語で会話をしたり、アプリを使ってコミュ
ニケーションを取ったりしました。

あと、僕はグループリーダーになっていたので常に「遊びに来
ているわけではない」という意識を持ち続けていました。リーダ
ーとして悩むことや困ったことは正直たくさんありました。指示
や返答がなく、悩みを抱え込んだ日もありましたがその都度、
楽しみながら過ごすことに気持ちを切替えていました。

この経験をスポーツ少年団活動に生かしていきたいです。そ
してまた機会があれば参加したいと思います。

「日独交流の振り返り」 【東海・中国グループ】 加藤 衣梨碧

今回の活動では、両国の文化や SDGs に対する考え方の相
違点を学ぶ事が出来たと思います。

まず、両国の文化では違う点ばかりではなく似ている点もあ
る事を知りました。今までは、ヨーロッパ諸国と日本とでは似て
いる点など何もないと思っていました。その事が間違いだったと
知り、世界が少し広がったと思います。

また、今回の経験から日本よりもドイツの方が、SDGs につ
いて理解が有りより深く考えている様に感じました。そしてジェ
ンダー面からもドイツでは女性選手が活躍しやすい環境になっ
ていると思いました。

私は、知らず知らずの内に間違ったイメージをヨーロッパ諸
国に対して抱いてしまっていました。それらの間違いを知る事
が出来ました。自分も無意識のうちに差別的な考えを持ってい
た事が衝撃だったと共に今後その様な考えを改善したいと考え
ました。

「ドイツに行ってみて」 【東海・中国グループ】 寺田 花那

ドイツの方々と関わる中で一番学んだことは、英語を流暢に
話せなくても伝えようとする姿勢があれば伝わるということだ
す。私は今回、分からなくても単語だけでも発してみる、簡単な
文章を言ってみることを意識して過ごしました。すると、共感し
あったりお互いの国について聞きあったり話題が広がり、仲
良くなることが出来ました。しかし、聞いてみたいことや話した
いことがあっても英語での言い方が分からずタイミングを逃し

てしまうということがあったのでもっと英語を勉強しておけば良かったなという反省点もあります。また、コミュニケーション以外に一緒にビーチバレーや柔道、射撃などのスポーツ体験をしたときは、いつもより心の距離が縮まったように感じ、改めてスポーツの人と人を結ぶ力の凄さを感じました。ホストファミリーとの生活を送る中では、ペットボトルや瓶を返却するとお金がかって来る仕組みを知り、ドイツの環境意識の高さに驚きました。このように、本当に日本では体験できないことをたくさん吸収して帰ってこられたと実感しています。また今回の交流で初めて会う人、違う言語を話す人などたくさんの人と関わってきて、前と比べて自分のコミュニケーション能力に自信がついたのでそれを今後の活動につなげていきたいです。

「日独スポーツ少年団同時交流を振り返って」

【近畿グループ】佐藤 希成

私が今回の交流を通じて最も成長できたと感じる点は、未体験の土地における異なる文化や風土、考え方について主体的に触れ、自らの知見を広めようとする姿勢を身につけることができた点である。

私自身は本交流に参加するまではコミュニケーション能力や多言語の理解について決して自信があるわけではなく、不安に思う部分が多かった。しかし実際に参加することで、多様な方々とアクティビティを経験したり、言葉だけでなくボディランゲージなどによってコミュニケーションを取ったりすることを繰り返していくうちに、相手のことをより知りたい、理解したいという気持ちが自然と芽生えてきた。SDGs に関するディスカッションでは、ドイツならではの文化や歴史、地理や気候といったあらゆる側面から相手の意見について考えてみることで、まだまだ私が知らない視点があったという気づきが得られる場面や、一方で、違っているようで実は似通っていた点があることについても実感することができた。2 週間という短い期間ではあったが、ドイツ側の受け入れ団体の方々と深く、親密な関係を築くことができたため、様々なことに気づき、自らを見つめ直すことができるような非常に有意義な経験を得ることができた交流となった。

本交流での経験を活かし、グローバル化がより一層進んでいる現代で必要とされるような、様々な視点を持ち、考え続けることができる人材に自らが成長することに加え、そういった人材を育成する担い手となるために、今後の単位団活動や日常生活を送っていきたいと思う。

「第 51 回日独同時交流(派遣)を通して」

【近畿グループ】伊藤 宏志郎

私は昨年も日独同時交流に申し込んでいたが、その時は行くことが叶わなかった。そのため、1 年越しの念願の派遣となった。

今回の派遣を通して私が学んだことは大きく 3 つある。まず、スポーツ体験である。我々を受け入れていただいたのはダイビングとフェンシングの団体で、私はどちらも日本で体験したことがなかったので練習や試合形式の体験などを含めとても良い体験になった。特にフェンシングは少林寺拳法と体の使い方が少し似ていると感じ、面白い発見だった。次に、ドイツの文化や考え方を学ぶことができた点が挙げられる。街にある教会は砂や土でできた建物が多く、柱の先端に精巧な銅像が設置されており、地震の多い日本では再現が困難な建築方法だと感じた。また、第二次世界大戦の時に同じような動きを取っていた国同士ではあるものの、ドイツは自国の歴史を幼少期から教わるということを聞いて日本史が選択科目になっている日本の現状を憂いた。最後に、言語能力が上達した。ドイツ人だからと言って英語が堪能でないことも驚いたと同時に、それも親くらいの年代は苦手で子供たちは喋れる事実が日本に近しいと感じた。お互いに英語のネイティブでないからこそ少しずつ歩み寄ったコミュニケーションが取れたと感じ、最終日には通訳の方に「英語上手になったね」と言われて嬉しかった。

この派遣は自分の人生にとってかなり大切に貴重な経験になったと感じている。行けてよかった。

「日独同時交流を終えて」 【近畿グループ】小西 勘太

私はこの日独同時交流において、これまで経験した事の無い事や普段見る、または入る事の出来ない場所に入る事が出来

た、とても貴重な機会だったと感じています。

まず、ドイツでは田舎と都会での建築に関する規制等は、都会では建物に関する規制はほとんど無いんだと感じました。ですが、ある地域では屋根を赤色にしないといけない、木材を切断せずにそれらをたくさん重ねる事で1軒の小屋を建てる、といった地域によって建築方法が異なっている事に驚きました。他にもトイレは有料の所もあれば無料の所もある、飲食店では水が有料だったり、どうしてこんなにも日本と異なった文化なのかと感じました。

次に交流テーマに関する議論について日本人とドイツ人ではスポーツに関する勝ち負けへの捉え方が全く違っていた事に驚きました。勝負の勝ち負けに関して日本人は興味を持った競技でない、または面白く無いと思った競技に関しては一切手を付けない。つまり、勝ちにこだわっている。ドイツ人は何でも(興味が無い競技でも)一生懸命取り組んで、頑張った分だけの結果が試合で出る、この事から過程を重視する。つまり、勝ち負けはあまり気にしない。と、考え方に違いがある事を学びました。一方日本では学校に通っている生徒の親がモンスターペアレントだと言われる親は一定数いる。しかしドイツでもそれは同様である事。また、家庭内問題や障がい者学級等に通う必要のある人が学校に通える様になっている等、日本とほぼ同じ様になっている事を知って、教育関係の問題は日本とあまり変わらないなと感じました。

この期間の交流でドイツの方とも仲良くなり、日本団の中でも他の地方の方達と仲良くなる事が出来る、非常に思い出に残った交流だと感じています。今度ドイツ側で受け入れをした方達が日本に来る時にはさらに充実した交流にしてあげたいと望んでいます。

「日独同時交流を終えてから」 【近畿グループ】 阪口 杏心

私は今回の日独同時交流で「ドイツは教育現場の日本との違い」を自分の目で確認するというのが私の目標でした。

ドイツには4種類の学校があり、中でも驚いたのはギムナジウムと呼ばれる大学進学資格(Abitur)を取れるのがこの学校しかないことです。しかし、専門学校などもあり日本と似ているところもあったりします。他にも、スーパーにペットボトル

を持っていくと25¢(約40円)ほどに変えてくれたりとSDGsに対してすごく前向きな考え方をしている国だなと思いました。

日本では競技思考が根強いですが、ドイツではその物事に至るまでの過程を重視します。自分は空手をやっていて競技思考になりがちですが、ドイツの考え方を体験してすごく大切な考え方で自分がこれから活動していくうえで後輩たちにもしっかり伝えたいと思います。

今回の日独同時交流で自分が掲げていた目標は達成できたと思います。それだけでなくドイツの方々などとても仲良くなり、日本団のリーダーたちとも仲良くなることができました。観光で行くことでは体験できないような体験などもさせていたでいて一生の思い出になるような交流になりました。

「日独交流で学んだこと」 【近畿グループ】 山畑 悠輝

まず今回交流した全ての人がとても親切に参加して良かったと心から思っています。振り返ると2週間が本当に短くて、あと1ヶ月はホストファミリーの家に残ったかったです。

今回の交流で出来たことは大きく三点ほどあります。

まずコミュニケーションについて、初めてホストファミリーと対面した時には、自分の英語が伝わらなくて少し不安を感じていました。しかし、会話を続けるうちにだんだん会話がスムーズになっていったので、ドイツの人との会話は本当に楽しかったです。失敗を恐れず話しかけた成果だと思います。

次にドイツの歴史について、自分はたくさんの文化遺産に連れていってもらいました。自然公園や城、彫刻など西洋でしか見られないものをたくさん見る事が出来ました。おかげで知識がただだけでなく、新たな感受性や価値観などを持つことが出来ました。

最後にドイツでの活動について、潜水、フェンシング、ツーリング、どれも初めての体験ですごく楽しかったです。先生方も丁寧に教えてくださってとても優しく、親しみやすかったです。

以上、学んだことをこれからも忘れず、後輩などに伝えていこうと考えています。

【四国グループ】 塚本 鳳真

私は四国グループの一員として、15日間ドイツにスポーツ少年団として派遣させていただきました。この貴重な経験を通じて、ドイツの文化や食生活について深く理解することができました。

ドイツの文化は多様で魅力的でした。例えば、地元の人々はとても明るく、友好的であることに感動しました。彼らの努力家精神や忍耐力も特筆すべきであり、スポーツにおいても真剣に取り組む姿勢が感じられました。

また、ドイツの食生活も興味深かったです。彼らの食事はバランスの取れた栄養豊富なものであり、特にパンやソーセージの種類の多さに驚きました。さらに、ヘルシーな野菜やフルーツも積極的に摂取されており、健康的なライフスタイルが一般的であることが分かりました。

ドイツの食文化を体験する中で、地元の人々との交流も楽しみました。彼らと一緒に食事をする中で、彼らの食への情熱や地域の特産品についても学ぶことができました。また、彼らの伝統的な料理や歴史的な建造物を見てドイツの文化を肌で感じることもできました。

この経験は私にとって一生忘れられないものとなりました。ドイツでのスポーツ活動を通じて、班の仲間たちとの絆が深まり、異文化への理解と尊重がより強まったと感じています。将来的にも、この素晴らしい経験を活かして、異文化交流の機会を求めることができればと思っています。私たちのサポートをしてくださった人たちのとても感謝しています。

「交流を通しての学び」 【四国グループ】 中島 煌蓮

私は、日独同時交流を通してコミュニケーションの大切さそして、思いを伝えられることの嬉しさを学びました。ドイツでは、主にドイツ語、英語が話されており、私達日本人は知っている英語、ドイツ語を用いて思いを伝えなければいけませんでした。そのため常に言葉の壁を感じながらの生活になりました。初めの頃は上手く思いを伝えられず黙ってしまったり、翻訳アプリに頼りすぎてしまったりして上手くコミュニケーションを取ることが出来ませんでした。それでも日を重ねるごとにジェスチャーや習ったドイツ語を活用し、自分が思ったことを伝えられるようにな

りました。それからは自分から積極的に話しかけるようになり、共感し合ったり、冗談を言って笑いあったりして仲を深めました。その日々の中でコミュニケーションの大切さ、思いを伝えられる喜びをととても実感しました。

また、新しいことに挑戦することの大切さをドイツでの生活の中で改めて感じました。ドイツは文化、建物、食べ物、習慣などほぼ全ての物が日本と異なっているため初めは少し不安で緊張していました。でも温かく見守ってくれるホストファミリーの方の助けもあり、ドイツ独特の食べ物だったり、文化、習慣などにも挑戦することができました。新しいことへの挑戦は楽しさはもちろん、新たな考え方や今までとは違った視点を与えてくれました。

今述べたことの他にもたくさんのことをこの日独同時交流で学びました。今回学んだことや経験したことを後輩達に伝えて、また自分自身も今後の生活で積極的に活かしていきたいです。

「挑戦して得られる経験」 【四国グループ】 新居 明果

私は、今回の交流で何事にも挑戦することの大切さを実感した。初めての海外でのホームステイ、二つの受け入れ先、受け入れの少年団が水泳であることなど最初は多くの不安があった。しかし、温かく迎え入れてくれた方々のおかげで、ドイツでの2週間は素晴らしい経験となった。

私自身、もともと好奇心旺盛な性格だ。ドイツへ行くまではこの性格に対して特に何も思っていなかった。しかし、ホームステイ先での食事でジュースを選ぶ際に、初めて見る味のものに”I try this!”というように言うと、ホストファザーがこの性格を褒めてくれたのだ。「いつも私が挑戦することを知っているが、そのようなことを誰でもができるわけではないそのような性格でずっといてほしい」と言われて、ジュースの選択ひとつに対しても価値を見出してくれたファミリーに感謝しつつ、自分の性格に誇りをもてるようになった。挑戦して失敗することはもちろんあるが、それ以上に挑戦で得られる経験値のほうが大それたと感じることができた。自分の県や所属している少年団の子どもたちにも自分の経験を話し、みんなの挑戦を後押しできるような存在になりたいと思った。

「第51回日独同時交流レポート」【四国グループ】 越智 健太

現地ドイツでの交流は日独双方にとって有意義なものだった。今回の交流によって日本とは異なる様式の建物や人の活動を記録し、日本との違いや、その違いの理由を広い視点で見て感じることができた。ドイツは日没までの時間が長く、日本では暗くなり始めるような時間帯でも集まることができるので、夕食後にスポーツ交流の時間や会議の場を設けることができたのは効率面でかなり良いと感じた。また、州によって木を伐採した際、新しく植える苗木の本数が詳しく規定されて国や州によってSDGsの意識を高く引き上げる努力がされていると感じた。

四国グループの交流は前半と後半で別の地域に移動して活動することになったが、前半ではホストファミリーデーでホストファミリーと十分なコミュニケーションをとることができたので、翌日以降の活動を円滑に進めるのにとても役立った。後半では、日数が前半に比べて少なかったが、ハルデンスレーベン・ユースホテルではスポーツのため設備や道具が充実していたのでスポーツ活動への移行が円滑にできた。さらに、自由時間に積極的なスポーツ交流でドイツの団員と親睦を深めることができた。また、スポーツによる交流は言語をほとんど介さないため全員で意欲的に参加することができた。

活動やディスカッションを通じて自分が今まで考えていたことと重なる部分から意識していなかった領域まで改めて考える時間ができたことで日々自分の価値観や考えが変わることを体感できた。

今回の交流で培ったドイツ側との人脈を用いて、次回の第52回日独同時交流でドイツ側の少年団が来日した際には、新しく交流に参加しようとしている人や下の世代に経験したことを伝えて日本でできることの幅を広げ、今後に活かしたい。

「交流を通して得られた学びと今後の課題」

【四国グループ】 森田 竜乃介

私は第51回日独スポーツ少年団同時交流に参加をし、ドイツで取り組まれている様々なSDGsについて触れることができました。日本とは違う形でSDGsに取り組まれており、社会的な取り組みとしてペットボトルのデポジット制度がありました。日本では多くのスポーツ大会などで、ペットボトル飲料が多く飲

まれます。そのようなときにデポジット制度があるとゴミを減らすことができると思いました。

また、テーマディスカッションでは「4. 質の高い教育をみんなに」についてドイツ団とディスカッションを行いました。日本の部活動地域移行など課題について話し合うことができたと思います。ドイツではスポーツユースでスポーツをすることが主ですが、現在の日本の中学、高校ではスポーツ少年団よりも部活動でスポーツがされており、どのように地域移行をされるかなど話し合うことができたと思います。

今後の活動では、地域との関りを大切にしつつ、スポーツを楽しむことのできる環境づくりに取り組みたいと思います。

「日独スポーツ少年団同時交流で学び、考えたこと」

【四国グループ】 下司 実侑

この日独同時交流で、私は言語の壁が一番の懸念点だった。しかし、すべてスマホに頼らなくても簡単な英語とポディランゲージでほとんどの会話が成り立つことが分かった。人間関係というものは言語が同じだからすぐに築けるというものではなく、心の問題なのだと改めて思わされた。ホームステイ時にホームステイ先の同年代の女の子と二人で寝る前に日本とドイツの違いやこれからの人生などについて話した。その時に生活の仕方が日本は昔のドイツのようだとわれ、働き方と生活の仕方を改善することがこれからの日本には必要だと考えた。お金を使うために働いているのに、日本人はお金を使う時間が少なかったり、休みの日でもすることを探して忙しく過ごしたりしている部分が違うと感じた。また、人間関係において考え方の違いなどがあると頭の中で理解はしていたが、実際いろいろな人と関わる中で違う考え方、新しい考え方に出会った。考え方を尊重すること、自分の考えを押し付けないことの大切さに気づかされた。

今回、初めての海外ということですごく不安が大きかったが、学んだこと感じたことが沢山あり、私の人生にすごく影響を与える交流となった。

「この交流を通して」 【九州グループ】 中山 陽夏乃

約2週間のドイツ研修と、6日間の事前研修を含めた日本団との交流を終えて思うことは、私にとってこの“日独スポーツ交流”は多くのことを学び、感じるための非常に貴重な機会だったということです。今まで日本国外はおろか、国内すらそこまで行ったことがない私には自分達と違う環境にいる方々への偏見や、固定概念が強くありました。しかし、今回の交流で、自分が思っていたこととは違う点を多く見つけることができ、世界に対して、いろいろな見方ができるようになったのではないかと思います。

東京のオリンピックセンターで行われた事前研修では、ドイツについての基本的な知識を学ぶことができ、知らなかったことが多くあって私にとって刺激となりました。現地に着いてみると、「え、なんで？ どうして？」と思うことが多くありましたが、現地の人々にしてみればこれが普通で、逆に疑問を持つ私たち日本人に対して疑問を持ったと思います。地方でのプログラムを日々こなす傍ら、きついな、もう帰りたいなと思うことが多々ありました。そんな中でも現地の子達とコミュニケーションをとりながら、自分が疑問に思ったことを尋ねたりしたおかげで私は自分自身の学びを深めることができました。

わからないことや、気づいたことなどは自分自身で尋ねることが大切。これが今回の交流で見つけることができた大きな成果です。

「スポーツで絆」 【九州グループ】 馬場 春佳

スポーツ最高！私はスポーツが大好きです。この交流では、おそらく通常の語学留学で味わえない経験をたくさんすることができました。それは、今まで自分がしたことのないスポーツを含めて、海外の仲間と交流し、ドイツの文化を知ることができたことです。この経験は今後の大きな糧となりました。

初めての海外だったので言葉の壁や不慣れな環境での生活に緊張と不安が最初はとても大きかったです。しかし、同じチームで得点を決めたらハイタッチすることで会話が弾み徐々に緊張もほぐれ、スポーツを通して活動することで言葉は通じなくても楽しむことができました。

私は小さいころから、主に東南アジアからのホームステイを家族と受け入れてきました。しかし、いざ自分の立場が逆転したときとても不安になりました。なぜならば私にとって未知だからです。今まで自分の家に来た海外の人たちも、こんな思いをしていたのかと、身をもって体験することができました。しかし、その不安もホストファミリーの温かい笑顔ですぐに和らぎました。また、ホームステイ先の子どもたちも共に団員として一緒に活動でき、2倍の楽しさがありました。

今でも数々の写真を見返すと、たくさんの思い出が浮かびます。この交流を支えてくださった関係者の方々、そして共に参加し、これからも絆を深めていきたい友と共にこの経験を団活動に活かしていきたいと思います。私たちを受け入れてくださったドイツ側の方たちと来年また会えることを楽しみにしています。

「この交流で得られた経験、考え」

【九州グループ】 山田 果穂

今回の日独同時交流に参加させていただいたことで私は大きく精神面で成長できたと感じました。私にとって、家族以外の人と海外に行き、一緒に生活することは初めてであり、出国前は不安でいっぱいでした。しかし、団員の方や引率指導者さん、現地の方に恵まれ、ドイツでも快適に過ごすことができました。中でも私はドイツ語が話せないため1番語学面が不安でしたがホストファミリーの方々が簡単な英語で話してくださったり、積極的に日本のことについて話しかけて来てくださったりして距離が縮まり、翻訳アプリを使うことなく交流活動に取り組みました。3月に提出した作文に書いた「自分の力で話して、コミュニケーションを取り、受け入れをした時のリベンジをしたい」という目標は十分達成できたように感じます。ディスカッションでは時間が足りず、私が特に話し合いたかった「日本人とがん」「日本人の自殺率」は割愛されましたが、「日本の少子高齢化」やその原因となる晩婚化や職場、政治については十分話し合うことができました。今の状況では選挙権すら持っていない私達に日本の社会問題を直接的に解決できるような力はありませんが、ドイツのことについて詳しく知れたおかげで日本とドイツの社会問題の差を学ぶことができました。そして、ディスカッ

ョンを通してドイツの子はやはり精神年齢が高く、政治に関心を持っている人が多いと実感しました。私達のために動いてくださった、ドイツの方々、日本団の方々、引率指導者さん等たくさんの方々のおかげでこのような経験を得ることができました。本当にありがとうございました。これからも、長崎県リーダー会で活動しながら、ほかのリーダーの子にも共有したいと思います。

「日独同時交流を終えて」 【九州グループ】 今井 歩南

今回の日独スポーツ少年団同時交流では、普段関わる機会のないドイツの団員や他県の団員、そして同じ九州グループの皆さんなどたくさんの素敵な人たちと出会うことができました。

地方プログラムでは、ドラゴンボートやカヌーなどのスポーツ活動、教会や歴史的な場所への訪問等をし、毎日が学びと感動で溢れていました。言葉の壁は大きく、コミュニケーションを取るのには容易ではなかったのですが、ホストファミリーをはじめとするドイツの方々は、私たちを温かく受け入れてくださり、意見や主張を最後まで聞き取ってくださいました。また、言語が違ってもスポーツや音楽、ダンスなどを通して絆を強めることができました。

「日本に帰りたくない」と思うほど、ドイツでの生活は充実し、受け入れ団体の方々との素敵な思い出を作ることができ、皆さんの経験を得ることができました。経験させて頂いたことをこれからの生活や、スポーツ少年団活動に活かしていき、後輩に伝えていきたいです。

最後に、今回の交流に携わり、より良い交流になるようご尽力してくれた全ての方に心から感謝します。ありがとうございました！ Vielen Dank！

「ドイツに行って学んだこと、活かしていきたいこと」

【九州グループ】 永池 陽月

今回の交流を振り返って、ドイツ側の地域スポーツクラブのあり方や生活リズムの違いなど、行ったからこそ深く知ることができました。特に地域スポーツクラブは私たちぐらいの世代が上に立ち活動を支えていて、まだ16歳の女の子が将来クラブを支えるために業務を請け負って引き継ぎを始めていると聞いて

た時はとても驚きました。日本ではまだ20歳になってもそういった上の役職に就くことはほとんどないと思います。また、ドイツの地域スポーツクラブは地域との連携がととてもよく取れており、地域からの金銭面の支援や施設利用などの仕組みがとてもスムーズで簡単に出来る印象を持ちました。日本に帰ってきてからは地域スポーツクラブのあり方を見直し、私一人では変えることができませんが、このドイツでの体験を多くの人に話し、興味が無い人には興味を持ってもらい、興味がある人にはドイツ側のスポーツクラブの仕組みを日本にも取り入れられるように協力していけたらなと思っています。まだまだ実現は難しいと思いますが、日本が部活動を地域スポーツクラブに移行しようとしている今、地域スポーツクラブを見直すことが大切だと思います。

「日独スポーツ少年団同時交流を通して」

【九州グループ】 大藪 凜花

私は、第51回日独スポーツ少年団同時交流に参加させていただきました。この交流では、沢山の感動、学びを得ることが出来たと思います。得ることの出来た学びとは異国の多くの人々とスポーツを通して繋がることの出来るすばらしさ、異国の歴史、文化などを実際に体験してよりグローバルな視点からの物事を考えることで自分の視野を広げることが出来たことです。地方プログラムでは受け入れて下さったホストファミリーの方々が考えて下さった様々なスポーツ活動を通して日本でスポーツをすることで生まれる楽しさとは一味違う喜びを味わうことが出来ました。私が多くのミスをしてでも責めることなく励まして一緒にスポーツを楽しもうとしてくれるドイツ人の人格にとっても感動しました。今後の私はドイツの地域スポーツ制度の充実さを今後のスポーツ少年団のさらなる発展に繋げることが出来て鹿児島県のスポーツ協会に貢献できるような人間になりたいです。

テーマレポート

共通テーマ:「スポーツ×SDGs」～スポーツが^{ひろ}拓く社会の持続可能性～

第 52 回日独スポーツ少年団同時交流(派遣)では、共通テーマのキーワードとして SDGs を掲げ、各グループは SDGs 目標のうち、目標 3、4、5 から話し合っ^ててひとつを選択。派遣先のドイツでは、グループごとに選択した SDGs 目標について、事前に調べて準備をしたうえでディスカッションに取り組んだ。ここでは、各グループが作成した共通テーマに関するレポートを掲載する。

<SDGs 目標>

- ・目標 3「すべての人に健康と福祉を」
- ・目標 4「質の高い教育をみんなに」
- ・目標 5「ジェンダー平等を実現しよう」

【東北 I グループ】

私達は、SDGs 目標 4「質の高い教育をみんなに」のもと、スポーツの教育についてディスカッションを行った。主に 2 つのことについて意見交換した。

まず 1 つ目は、みんなが所属しているスポーツチームではどんな活動をしているか、についてだ。日本団からは、普段の練習風景の写真や動画をドイツの人たちに見せて、先輩が前に立って後輩に教えるというやり方で、みんなが成長していけるような環境づくりをしていることを伝えた。一方、ドイツでは年齢ごとにグループを分けて週 2 回の練習があり、1 回目は年齢ごとに、2 回目は合同練習をしているということ、そして、指導者に言えば自由に自分のやりたい練習ができるということが分かった。日本では、年齢ごとに分けたり、合同で練習したりすることはあるが、みんなと一緒に練習する時間に自分のやりたい練習を自由にすることはほとんどないことなので、自由に自分の意見を述べやすい環境づくりができていてとても良いやり方だと感じた。

次に 2 つ目は、お互いの国で、「みんながスポーツに触れることができるように行われている政策や行事」はあるか、についてだ。日本団からは、部活動があることや体育の授業があり普

段やらないスポーツも体験できること、チャレンジデーという日があり地域ごとに運動量を競い合うことなどを伝えた。ドイツにも同じような日があることが分かった。それは、「走る Day」という行事で、毎年 1 回 1km を何分で走ることができるかという、日本で言うマラソン大会のような行事だ。それぞれの国で、国民みんなが取り組めるイベントが行われていることを知り、今度は、世界規模でもこのようなイベントが行われるともっとスポーツ界も盛り上がり、よりみんながスポーツに触れる機会が増えると考えた。

この 2 つのこと以外に、ドイツの学校の 1 日を聞いてみた。すると、ドイツの学校は 1 時間の授業が 3～4 コマと日本よりも少なかった。このことから、学業に短期集中でできるだけでなく、放課後の時間が長い^{ため}自分がやりたいスポーツや趣味などに使える時間をしっかり確保でき、様々な学力、知識、才能などを磨くことができると考えた。

このディスカッションを通して、ドイツは、日本に比べて自分で自由に物事を選択できる幅が広く、自分の意見を述べやすい環境ができてい^る一方で、日本は上下関係が厳しい文化で自分の意見が述べにくい環境が自然とできてしまったということ^をを改めて感じた。SDGs に関係なく、今の日本が成長していくために必要な課題だと思う。そして、日本以外の SDGs 事情や価値観を知り刺激を受けたことで、グループみんなが日本国内だけでなく、海外にも視野を広げて様々なことを考えられるようになった。

【関東 I グループ】

私たちが選んだ SDGs の目標は、「ジェンダー平等を実現しよう」でした。現地に行く前の日本団のみのディスカッションでは、そもそもジェンダー平等とはどのような状態なのか、スポーツを通してどのようにジェンダー平等が実現できるのかを考えました。また、日本とドイツの性別についての制度の違いについても調べ、それをパワーポイントにまとめて現地に持っていきまし^たた。私たちが持っている情報や直接ドイツの方々に聞きたいこ

とを画像やイラストをつけてまとめておくディスカッションはスムーズに行うことができました。

現地でのディスカッションは2回に分けて行われ、トータルで2時間半ほどでした。1回目は、8月3日にヴァッサーカップにて、2回目は、8月9日に道場で行いました。

まずは、ジェンダーについての考え方や実体験をふまえた意見を出し合いました。身近にいる同性愛のカップルのことや、自分の性別(LGBTQ)のカミングアウトについての話を聞きました。ほとんどの人は、否定したり差別したりすることはないようですが、やはり冷ややかな目で見える人もゼロではないそうです。それは、日本も同じだと思いました。

私は、ドイツに行く直前にドイツ語を少しでも勉強する機会がありました。そこで自己紹介における自分の職業をいうとき同じ職業でも男女で異なる言葉を使うことを知りました。性別というもの「男」と「女」だけではなく現代において、この男女で異なる言葉を使うことはどうなるのか疑問に思い、聞いてみました。すると今は男女共通で使える言葉、すなわち性別は関係なく誰でも使える言葉が主流になっているらしく、逆にその言葉を使わないといけないという風潮になっているらしいです。

スポーツにおいても、ドイツでは体育の授業は男女で分かれなかったり、評価の仕方も変わりつつあったりするようで、ジェンダー平等に少しずつ近づいているのではないかと思います。国籍や使用言語、宗教、そしてジェンダーが異なっている、誰もが平等にスポーツをして楽しさを分かち合える社会を作れるように、少しずつできる事を見つけていこうと思います。

【東北Ⅱ・関東Ⅱグループ】

私たちのグループはSDGsの3番の「すべての人に健康と福祉を」についてグループ活動やディスカッションに取り組んできたが、今回の交流事業を体験して、共通テーマ「スポーツ×SDGs」～スポーツが拓く社会の持続可能性～について考えたことがいくつかある。

まず一つ目は、私たちのような若い世代が持続可能な社会の維持について考えることの大切さである。今まではそのようなことは特に気にも留めてこなかった上に、それは政治家など

の他の大人たちが考えるべきだと思っていたが、今回のディスカッションを通じてその大切さに気付くことが出来た。現地の人達と議論し、精一杯思考することで、今の日本の現状を再確認し、世界の他の国と比較して、SDGsについての内容を深めることが出来た(具体的にはどちらの国にも高齢者を対象とした健康維持のためのイベントが各地で開かれていることや、ジムやプールで運動する人が多いなど)。

そして二つ目は、スポーツによる交流で得られる笑顔の多さについてである。今回の交流の、私たちの地方プログラムには、現地のスポーツ施設に行き実際に色々なスポーツをしたり、水上スキーを経験したりするものがあつた。かなり身体を動かす活動が多かったが、その全てを楽しむことが出来たと思うし、何より皆が言語の壁を超えて笑いあっていた。そこから、スポーツは国籍に関係なく人々をつなぐための架け橋として重要な役割を果たすことが出来ると心の底から実感し、スポーツの素晴らしさを垣間見ることができた。

私たちは、スポーツはSDGsととても相性が良いものだと思う。スポーツを通じて人々との交流の輪を広げ、世界中の人たちとずっと関わりを持てることが出来ればお互いが精神的に豊かになることができるはずであり、それはきっと言葉では表せないほど素晴らしいものであるはずだ。

【北信越グループ】

私達、北信越グループは「4.質の高い教育をみんなに」というテーマのもとでディスカッションをしました。まず、日本の教育についてスライドを使い発表をして、その後お互い質疑応答をしました。

日本とドイツの教育について話し合った結果、大きな違いを感じたことは学年の進級の過程です。日本では基本小学校、中学校、高校、大学というようになっていて中学校までが義務教育となっています。しかし、ドイツでは18歳までは義務教育で何かしらの場所に行き教育を受けなければいけないとなっているそうです。

小学校は6年生までであり4年生になると3つの学校に分かれて授業を受けることになっているそうです。これらの3つの学校は進学を目指していたり就職を目指していたりと学ぶこと

が違います。しかし、どの学校に行くのかは担任の先生が決めるらしく、中には自分にあっていない学校に入ってしまう、ついていけなくなってしまう子もいるそうです。また、ドイツでは公立の学校に行くことがほとんどで、そもそも私立の学校は少ないそうです。しかし、公立と私立の差はあまりないらしく日本とは違うということがわかりました。教員は公務員意識が高く、夏休みなどはしっかり休むことにも違いが見られました。

子どもたちがスポーツをする場合は学校ではなくほとんどクラブになるため指導者は教員ではありません。日本で言う部活はなく外部での活動が主になります。そして、指導者はボランティアで行っており、日本が目指している部活動の外部化がすでにできていました。ドイツの人は、スポーツに対して「勝つために」という意識はあまり強くなく、「楽しく活動する」ということがメインであるように感じました。また、ボランティアの指導者は何十年もその競技をやっている人や経験のある程度積んだ人が行っているそうです。ボランティアで指導するには心と時間の余裕が必要なのだなと思いました。

今回のディスカッションでドイツと日本の教育制度の違いや、教員のなり手不足が深刻化していることなど、多くのことを知ることができました。両国の良い点を取り入れて SDGs の目標達成に繋ぐことで、よりよい社会になっていくのではないかと思いました。

【東海・中国グループ】

私達、東海・中国グループは「4. 質の高い教育をみんなに」をテーマにディスカッションを行いました。地方別で2回行われたディスカッションでは、日本側が一人ひとりプレゼンテーションをした後お互いに質問をするという流れで行いました。日本側は日本の教育システムやスポーツ教育の現状、さらには世界の教育の問題やドイツとの違いなどを発表し、質問タイムでは両国の教育の差や良いところ等をお互いに聞きあったり教えあったりしました。最終的にスポーツに関連した、教育の問題を解決していく具体的な解決策を見出すことはできませんでしたが、ディスカッションしていく中でドイツのスポーツ教育について実際の声を聞くことができ、ドイツのスポーツ教育について参

考にしたいと感じることが多くありました。例えば、ドイツではスポーツクラブに入っている活動は週に2、3回と子供が他のやりたいことにも時間を使えるような余裕があります。しかし、日本の学生の多くが参加している部活動は週5、6回で夜遅くまで長い時間活動するのも珍しくありません。このように、適度にスポーツを楽しんでいるようなドイツに比べて、私達の部活動はハードなことが多く、負担になってしまっていることがあることに気づきました。また、私達が訪問した柔道クラブでは毎年クリスマス会等も開催したりと、スポーツ以外でも地域での交流としてみんなが積極的に参加しているのを見て、スポーツクラブが地域交流の役割を担っているということが実感できました。その他にも、年功序列や勝敗を重視しない文化、スポーツ以外の教育システムも日本が参考にすべきだと感じる部分が多くありました。短い時間のディスカッションではありましたが、多くの学びがあり充実したディスカッションになりました。今回のディスカッションで学んだことを今後の活動に活かしたいと思います。

【近畿グループ】

近畿グループはグループディスカッションや事前研修会でテーマを考える際に、それぞれに対して良い意見が出たため、3つのテーマ全て準備していくことにした。

まず、「すべての人に健康と福祉を」について、日本側は競技スポーツで障がい者と健常者が混ざって競技(1対1の試合やチーム競技)を行うことは難しいと考えていた。ドイツでは障がいの有無だけでなく、年齢によって区切りをつけているチームがあり、障がいも同様に「ハンデがあると一緒にスポーツを楽しむことは難しい」という理由からヴァイスヴァッサーでは混合でスポーツをすることはないようだ。

次に、「質の高い教育をみんなに」では、ドイツでは通った大学が将来の職業に直結するため、高校生の時点で将来を想像しておく必要があることを知った。また、日本のように思考の過程に重きを置く考え方はあるものの、学校でそれを直接教えることはないのが現実のようだ。日本側からは「家庭が学校に介入することで教育機関の負担が増えている」という意見があっ

たが、それはドイツも同様であるが「人とのやりとりの仕方を学ぶのが学校であり、家庭では代替できない」という発想があることが分かった。

日本側は「ジェンダー平等を実現しよう」をメインテーマとして設定した。スポーツ少年団の名称については、少年少女団として良いという結論が出た。合唱団など芸術系団体では「少年少女」が一般的であり、スポーツも同様にして良いと考える。次に、スポーツは男女混合で行うかについては「競技によって変える」という意見が出たが、体格差が怪我に繋がる可能性があるため、男女別々に行くべきだという結論に至った。特に、空手や柔道は男女別が適切であるが、バレーボールでは男女別でそれぞれの強みを活かせるとされ、反論が出ると考えられる。最後に、日本人とドイツ人の競技思考の違いについて、日本人は結果のみを重視するため勝った試合のみが注目され、途中経過に関心が薄い。一方で、ドイツ人は過程を重視し、ニュースでも試合だけでなく選手の普段の練習の様子が紹介されることも多いため結果は過程の積み重ねと捉えられており、たとえ結果が伴わなくてもプレイし続ける文化があるということが分かった。

ディスカッションを通して、各国の考え方に大きな違いはないと感じた。また、日本の現状を改めて認識することができ有意義な時間であった。

【四国グループ】

ザクセン地方でのディスカッションによる交流では、主に「グレーゾーン」いわゆる特別支援が必要な子どもたちについての議論や教育の機会について話し合いを行いました。日本ではグレーゾーンの子どもの数は近年で増加傾向にあります。また、教員の人手不足やグレーゾーンの境界の線引きの問題でも教育の機会や場所が限られています。少子化により学校が少ない状況の中でスポーツ少年団が社会学習の機会を持つことがこれから大きな意味や価値を持っていくと考えます。正直私たちは今まで生活してきてSDGsについて調べるまでは全く認知していない状況でした。しかし、交流をきっかけに達成すべきことや現状に興味を持ちました。このように、スポーツを通して議

論するだけでなく教育や認知の機会を増やしていくことが身近にできるのではないかと考えます。

ザクセンアンハルト地方では衣服、食料、水、移動手段に着目して普段の自分たちの生活レベルが地球にどの程度影響を与えるものなのかを検証しました。自分たちの生活レベルでは地球三個分の資源が必要という計算になり、この結果を受けて改善できることを常に意識するようになりました。ここで学んだ大事なことは「みんなが同じ目標を持つ」ということです。自分たちで考え、交流し発信、活動する。これらを皆が常に意識し広めようと努力するだけで大きな変化になると考えます。そして、国際的な価値観を体験した我々が考えることをやめないことが今できることだと思います。

そのためには、今後は意見を気軽に投げられる目安箱や個人の考えをいつでも受け付ける場所を用意してほしいとも考えています。

【九州グループ】

私たちはまず、グループ内で「両国が良くなるためには」というゴールを作り、ドイツ側にも共有した上でディスカッションを始めた。初めに日本の現状について発表した後、ドイツ側からの質問や意見などを聞いたり、こちらからも質問をしたりした。ドイツ側でも同じような問題があがっているようであったが、少子高齢化についての取り組みはドイツ側の方が進んでいると感じた。日本は特に男性が育児休暇を取得しづらい環境にあるが、ドイツでは男女共に育児休暇を取得しやすいようだ。また、両親合わせて2年間の休みを取ることができ、育児休暇期間もお金の援助が徹底していることが印象的だった。これらのことからドイツは国からの援助が手厚いということが分かる。日本も国からの援助がもっとシンプルな仕組みで受けられるようになる必要があり、その原因として若者の政治離れが挙げられた。ドイツでは16歳から選挙権があり、自分達が選挙で選択することができるという意識が根づいている。他にも小学5年生(10歳)から政党の人が学校に来て政治の授業を行っているため、若者の政治離れはあまりない。しかし、日本ではそのような仕組みはないため、政治に関して無知なまま投票権を持つ

てしまう。ドイツのように政党の人が直接話することは日本にとっても必要なことであり、私達は今マスコミから伝えられた一部の情報だけで政治を理解してしまっている。これでは本当の理解にはならないし、若者たちの興味・関心も薄れていってしまうだろう。政治に興味を持つということは国の政治体制が活発化することであり、政治体制が活発化することがよりシンプルで素早い国からの支援を受けられる手段であると考ええる。そのために、日本は政治や経済への関心を持ち、遠い存在ではなく身近なものにしていく必要がある。このことが日本全体で根づいてくると国からの支援も増えていき、全ての人に健康と福祉という問題の解決ができるだろう。また、ドイツ側もより政治や経済と関わりを深くし、全ての人に健康と福祉という課題を無くすことが大切であると思われる。

お世話になった方々

【東北Ⅰグループ】

受入団体: Sportjugend Schleswig-Holstein (スポーツユーゲント・シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン)

プログラム責任者: Svea-Mailyn Horn (スヴェアーマイリン・ホルン)

通訳: Can Demir (ジャン・デミル)

【関東Ⅰグループ】

受入団体: Deutscher Judo-Bund e. V. (ドイツ柔道ユーゲント)

プログラム責任者: Heike Thiel (ハイケ・ティール)、Mike Thiel (マイク・ティール)

通訳: 児玉 はるか

【東北Ⅱ・関東Ⅱグループ】

受入団体: Sportjugend Mecklenburg-Vorpommern (スポーツユーゲントメクレンブルク＝フォアポメルン)

プログラム責任者: Katja Kant (カティア・カント)、Lea Gammelín (レア・ガメルン)

通訳: 山口 久美子

【北信越グループ】

受入団体: Badische Sportjugend Freiburg (バーデンススポーツユーゲント・フライブルク)

プログラム責任者: Konrad Schönherr (コンラート・シューンヘア)、Gaby Gschwinder (ガービー・ゲシュヴィンダー)

通訳: 広瀬 くらら 由梨花

【東海・中国グループ】

受入団体: Württembergische Sportjugend (ヴュルテンベルギッシェ・スポーツユーゲント)

プログラム責任者: Daniel Engert (ダニエル・エンガート)、Jan Abele (ヤン・アーベレ)

通訳: Oliver Hockenberger (オリバー・ホッケンベルガー)

【近畿グループ】

受入団体: Verband Deutscher Sporttaucher e. V. (潜水ユーゲント)

プログラム責任者: René Blümel (レネー・ブルーメル)、Maxwell Nagorka (マクスヴェル・ナゴルカ)

通訳: 田 恵子

【四国グループ】

受入団体: Sportjugend Sachsen im Landessportbund Sachsen e. V. (ザクセンスポーツユーゲント)、

Landessportjugend Sachsen-Anhalt (ザクセン・アンハルトスポーツユーゲント)

プログラム責任者: Kathrin Niedermanner (カトリン・ニーダーマナー)、Ralf Sacher (ラルフ・ザッハー)

通訳: Maximilian Penkalla (マキシミリアン・ペンカラ)

【九州グループグループ】

受入団体: Sportjugend Nordrhein-Westfalen (スポーツユーゲント・ノルトライン＝ヴェストファーレン)

プログラム責任者: Michael Steinmann (ミハエル・シュタインマン)

通訳: 鹿沼 ケルツアー 和子

第Ⅱ章 ドイツの友を迎えて

●ドイツ団受入の記録



全体プログラム(前半・京都)

宿泊・会場：京都府 ザ・プリンス京都宝ヶ池

7月23日(火)

ドイツ団 関西国際空港到着(EK316)

JJSA-団長団ミーティング

7月24日(水)

代表者ミーティング(JJSA／団長団／グループリーダー／グループ代表団員)

歓迎式・JJSAレクチャー

「スポーツ×SDGs」基本レクチャー

(講師：プロサーファー 武知 実波氏)

京都府スポーツ少年団リーダー会との交流会

JJSA-団長団ミーティング

7月25日(木)

京都府内自由研修

通訳ミーティング

第1受入県-通訳ミーティング

グループ別ミーティング(ドイツ団／第1受入県担当者／通訳)

JJSA-団長団ミーティング

7月26日(金)

各グループ地方分散



歓迎式



歓迎式 ペナント交換(左: JJSA副本部長 遠藤啓一
右: ドイツ団団長 ティム・デューケ氏)



京都府スポーツ少年団リーダー会との交流会



ジェスチャーゲーム(猫)



武知氏と記念写真

団 長 団

山口県
岩国市

愛媛県
四国中央市
新居浜市

宮崎県
日之影町
高千穂町
五ヶ瀬町

日 程

**7月26日(金) 山口県(岩国市:グリーンリッチホテル
岩国駅前)**

山口県岩国市へ移動／岩国市表敬訪問／団員の民泊家庭との対面／Welcome Party

7月27日(土) 愛媛県(四国中央市:ホームステイ)

スポーツ交流(オリエンテーション・モルック)／愛媛県四国中央市へ移動／ホストファミリーと合流

7月28日(日) 愛媛県(新居浜市:東横INN新居浜駅前)

書道体験／さよならパーティー／伊予三島公園散策／書道パフォーマンス甲子園観戦／新居浜市へ移動／新居浜市の紹介・新居浜市とドイツの関わりについて／文化見学(太鼓台)／歓迎会

7月29日(月) 大分県(別府市:西鉄リゾートイン別府)

大分県別府市へ移動

7月30日(火) 宮崎県(五ヶ瀬町:木地屋)

宮崎県日之影町へ移動／日之影町・高千穂町・五ヶ瀬町表敬訪問／高千穂高等学校の生徒と高千穂峡観光／Welcome Party

7月31日(水) 宮崎県(同上)

モルック・ラダーゲッター体験／カレー作り／スポーツ交流(バスケットボール・バレーボール)／日之影中学校生徒とテーマディスカッション

8月 1日(木) 宮崎県(同上)

釜炒り茶体験／五ヶ瀬ワイナリー見学／流しそうめん／五ヶ瀬町スポーツ少年団とフロアカーリング

8月 2日(金) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

品川プリンスホテルへ移動



モルック体験



書道体験(中之庄公民館)



カレー作り

ブランデンブルク

ー北海道グループ

北海道
八雲町

北海道
江差町

日 程

7月26日(金) 北海道(渡島管内八雲町:千葉農園
(民泊))

函館空港でドイツ団と合流／八雲町役場表敬訪問／
千葉農園で歓迎パーティー

7月27日(土) 北海道(同上)

千葉農園で餅つき体験／熊友公房にて木彫り熊づくり
体験／千葉農園で流しそうめん体験(夕食)

7月28日(日) 北海道(渡島管内八雲町:遊楽亭)

八雲空手スポーツ少年団とスポーツ体験(空手道体験)
／八雲高等学校生徒とディスカッション

7月29日(月) 北海道(同上)

鹿部町で「盆踊り体験」、「浜のかあさん地元料理体験」
／森町で森町ミニバスケットボールスポーツ少年団とス
ポーツ活動(剣道・ドッジボール)／遊楽亭ホテルでさよ
ならパーティー



表敬訪問にて



ホームステイ先の千葉さんと



鹿部町「浜のかあさん」と♪



煮付け食します！



森町「スポーツ交流(ドッジボール)」

7月30日(火) 北海道(檜山管内江差町:ホテルニューエさし)

江差町到着・引継ぎ／江差町表敬訪問／ドイツ団とのミーティング／江差町運動公園見学／和菓子体験／江差追分会館・山車会館見学／江差追分体験

7月31日(水) 北海道(同上)

開陽丸記念館見学／お守りづくり／着物着付け体験／街並み散策、施設見学①いにしえ街道散策(街並み見学)②国重要文化財旧中村家住宅見学③北海道有形文化財 旧檜山爾志郡役所見学／茶道体験

8月1日(木) 北海道(檜山管内江差町・上ノ国町:かもめ島上キャンプ)

上ノ国高等学校生徒とのディスカッション／かもめ島散策／マリンスポーツ体験(SUP)／屋外 BBQ／温泉／花火／キャンプ体験

8月2日(金) 北海道(檜山管内江差町:ホテルニューエさし)

パークゴルフ／書道体験／サッカー少年団とスポーツ交流(フットサル)／さよならパーティー

8月3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

函館空港まで送迎／品川プリンスホテルへ移動



着物と刀と



ディスカッション(上ノ国高校)



さよならパーティーでサッカー少年団代表と記念撮影



初めての和菓子(五勝手屋羊羹)



カニ釣り(かもめ島)

7月26日(金)【ようこそ八雲へ!】函館空港でご対面! 多少、移動疲れが見えましたが、空港内のレストランで好きなものを食べて、「美味しい!」と満足そうにしていたのが、とても印象的でした。函館空港から八雲町へ向かう途中に、ドラックストアに寄ってほしいとの要望があり、予定していた表敬訪問の時間に余裕がありませんでした。臨機応変に対応するのは、もちろんなのですが、何があるか分からないので、プログラムを考案する際は、時間に余裕をもって考案した方が良いと感じました。八雲町に到着後、役場で副町長に表敬訪問を行いました。そのあとは、宿泊先の千葉農園で「歓迎パーティー」を行い、バーベキューを堪能し、ドイツではあまり経験のない花火を楽しんでいました。慣れない民泊なので、眠れるか心配でしたが、ぐっすり眠れたようで安心しました。(北海道八雲町: 沢 千尋)

7月27日(土)【文化体験の日】民泊、千葉お母さんの朝ごはんをお腹いっぱい食べたあと、「もちつき体験」を行いました! 千葉さんがもちつき体験用に用意してある「法被」を着て、頭に、はちまきを巻いて準備完了! 千葉お母さんに、合いの手をしていただき、ペッタン、ペッタンと上手について、出来上がったお餅を頬張る姿に、見ているこちらでも大変嬉しい気持ちになりました。他にも、いちご大福やあんこ餅をお腹いっぱいいただきました。午後からは、熊友公房で「木彫り熊づくり体験」を行いました。皆、真剣に取り組んでいました。さすがスポーツマンですね! 最後まで集中し、世界に1つだけしかない、オリジナルの木彫り熊が出来上がりました。彫刻刀で木を彫っていく作業なので、始めはどうなるのか心配でしたが皆、喜んでくれたので良かったです。(同上)

7月28日(日)【スポーツ活動・交流の日】民泊の千葉さんご夫婦に「ありがとう」を告げて、八雲町総合体育館へ向かいました。午前中は八雲空手スポーツ少年団と「空手道体験」でしたが、団員が少ないので、密に交流することができ、八雲の子どもたちにも大変良い経験となりました。この日の昼食は、ハーベスター八雲のチキンやピザにするか、お蕎麦屋さんに行くかのどちらかを予定していましたが、ドイツ団が好むチキンやピザにしました。ベジタリアンの子が、八雲にきてから満足に食事を取れているのか心配でしたが、彼が好きなピザを「美味しい!」と食べていたので、安心しました。午後からは、今回のプログラムで一番、不安な「八雲高校とのディスカッション」でした。雰囲気を見て、ダメな場合は、通訳さ

んが入ってくると親切なお言葉を頂いたので、安心して見守ることができました。ドイツ団が準備してくれたクイズやダンスで、子どもたちの距離が縮まったのを感じ、心が温かくなりました。八雲高校の子どもたちも、「楽しかった! 良い経験でした。」と良い思い出になったようです。ディスカッションの後は、ドイツ団の願いで、コンビニに寄り、好きなものを買いました。どんなものを買うのか興味深々だったので、子どもたちの様子を見ていました。カゴいっぱいにお菓子を入れていた子がいたので、聞くと、家族や友達のお土産でした。ドイツにはコンビニがなく、スーパーも早い時間に閉店するとのことなので、子どもたちにとっての「お楽しみ時間」になったようで良かったです。宿泊場所が民泊から「遊楽亭ホテル」に変わり、夕食後は自由時間を満喫していたようです。京都から八雲へ来て、たくさんのプログラムを体験し、疲れが出てくる頃なので、自由にリラックスできるホテルでの宿泊は良いと思いました。(同上)

7月29日(月)【鹿部町・森町プログラムの日】少しお疲れモードな子どもたちでしたが、午前中は鹿部町へ向かい「盆踊り体験」と「浜のかあさん料理体験」を行いました。「盆踊り体験」では、鹿部町盆踊りの会の皆さまに教えていただき、みんなで盆踊りをしました。ドイツ団からの提案で「ドイツのダンス」を踊ろうということで、みんなでダンスを楽しみ、心が1つになった時間でした。「浜のかあさん料理体験」では、今朝、沖で捕れたソイの煮付けに挑戦! 浜のかあさんに魚のさばき方を教えていただき、上手にさばく姿に感心しました。魚が苦手なメンバーもいましたが、出来上がった煮付けを美味しいと食べてくれたので良かったです。午後からは、森町でミニバスケットボール少年団とのスポーツ交流で「剣道体験」を行いました。竹刀に興味があるのか、講師の方が驚くほど、素振りや面打ちがとっても上手でした。何でも興味を持って意欲的に取り組むドイツ団に毎日、感心させられ、刺激をいただきました。森町プログラムを終えて、夜は、宿泊場所でお世話になった皆さんをお招きして、「さよならパーティー」を行いました。通訳さんが1人しかいないので、翻訳アプリを使ってお話を楽しみました。最後はドイツのダンスをみんなで踊り、笑顔でお別れとなりました。今回の交流がみんなにとって、素敵な思い出となり、一生忘れられないものになりました。何より、ドイツ団がプログラムすべてにおいて、喜んでくれたのが、とっても嬉しかったです。ドイツ団のみんな、どうもありがとう!! 道スポ職員の皆さま、貴重な経験を提供していただき、本

当にありがとうございました！！

(同上)

7月30日(火) ミーティングの際に、書道体験をしてみたいとの要望があった。4日目の行程に組み込めるよう調整することを伝えと皆一様に感謝していた。昼食の際、箸が使えるか心配していたが元々使ったことがあるとのことで、困難なくそばを食べていた。江差追分体験ではフレーズが気に入ったのか、何度も口ずさんでいた。初めて食べた蕎麦、羊羹、かき氷に対し、どれもおいしいとの感想を貰い、自分たちが考えた行程に間違いはないと少し自信が持てた。(北海道江差町:石橋 潤)

7月31日(水) 全日程に言えることだが、ホテル出発や移動の際など若干時間にルーズだった。開陽丸記念館を見学した際、展示してあるドイツ製の大砲がドイツの現存企業のものであることに驚いていた。昼食で出た寒海苔ご飯、ハスカップゼリーが気に入り、おかわりしていた。日本で着物を着て刀を持つことが夢だった、夢が叶ったと喜んでた。5日間の中で一番楽しんでいたように感じた。着物着付け体験は予定していたが、刀を持つことは当初予定になかった。案内の学芸員が刀を持ってきた際、ドイツ団の目の色が変わったように思えた。持つことが夢だったとまで言ってくれた刀は今後の受入でもマストなのだったと思った。(同上)

8月1日(木) 日本の高校生は意見交換が苦手だと聞いていたがそんなことはなく、近年稀に見る良いディスカッションであり、とても有意義な時間だったとの感想を後から貰った。ディスカッションでは、高校生と積極的に英語でコミュニケーションをとり、食事交流では雑談をし、打ち解けていた。冷たい弁当は苦手とのことであったが、もんじゅの弁当は日本に来て食べた弁当の中で一番おいしいと言っていた。マリンスポーツやキャンプ、BBQでは、江差の海、景色、食に満足し、ずっとこのキャンプ場にいたいと言っていた。海で泳げることが楽しそうで、代替は用意していたものの天候に恵まれたことがよかった。キャンプのためにポケットWiFiやモバイルバッテリーを用意したことに対し、ドイツ団から、あなたたちの対応は、常に僕たちの方を向いていて素晴らしい対応だ、見習いたいとの評価を頂いた。こちらは当たり前のことと思って準備していたが、そう思ってくれたことが嬉しかった。

(同上)

8月2日(金) パークゴルフでは、ゴルフ活動をしているドイツ団員が全員に指導を行っていた。念願の書道体験では皆真剣に取り組み、完成した作品に笑顔を見せていた。書道体験の後、時間が超過していたため引率1名がドイツ団と先に昼食に行き、残った職員で書道会場の片づけを行ったが、自分たちも戻って片づけを手伝いたいとの発言があり、受けた恩を返したいという優しさが見えた。サッカー少年団とのフットサル交流では、子どもたちにドイツ式の準備運動を教えていた。フットサル交流で、足をくじいた団員がおり、少し引きずっていたが大事な様子だった。書道体験では、書き順がわからなかったり、とめ、はね、はらいなどに苦戦しながらも楽しそうに取り組んでいる様子が見られ、急遽の要望ではあったが調整してプログラムに組み込めたことを嬉しく思うとともに、突然の要望にもかかわらず引き受けてくれた講師に感謝しています。さよならパーティでは、ドイツ団から、「江差にいた間は夢のような時間だった、パーフェクト」との感想を貰ったことが何よりも嬉しかった。(同上)

8月3日(土) 最終日ということもあり疲れが出たのか、函館空港までの車の中で全員睡眠をとっていた。別れを惜しみながら東京へ出発していった。受入前は、うまくもてなせるか、楽しんでもらえるか不安しかなかったが、満足してもらえたことが嬉しかった。あつという間の5日間であった。すべての関わって頂いた方に感謝申し上げます。(同上)

体操

一東北 I グループ一

青森県
青森市

岩手県
雫石町



日程

7月26日(金) 青森県(青森市:ホテル青森)

青森空港でドイツ団と合流／青森市役所へ表敬訪問
／ワ・ラッセでねぶた祭り体験／アピオ青森で歓迎レセ
プション

7月27日(土) 青森県(同上)

八甲田ロープウェイ体験／青森明の星高等学校生徒と
ディスカッション／AOMORI LANDLS スポーツ少年
団とスポーツ交流(ミニバスケットボール)

7月28日(日) 青森県(同上)

紫雲会スポーツ少年団とスポーツ交流(剣道)／三内
丸山遺跡見学と体験／メガ・ドンキホーテでショッピング
／観光物産館アスパム周辺散策

7月29日(月) 青森県(同上)

昭和大仏(青龍寺)で座禅・写経体験／浅虫水族館見
学／浅虫温泉足湯体験／日本料理あじ菜でお別れパ
ーティー



青森市役所へ表敬訪問



ねぶた祭り体験



紫雲会スポーツ少年団と交流



AOMORI LANDLSスポーツ少年団と交流



浅虫温泉足湯体験

7月30日(火) 岩手県(雫石町:ホテル鶯)

北洋ガラス見学／道の駅鹿角で雫石町へ引渡し／
雫石町役場へ表敬訪問／雫石中央公民館で歓迎セレ
モニー

7月31日(水) 岩手県(同上)

大村スポーツ少年団とスポーツ交流(レクリエーション)
／そば打ち体験／盛岡セイコー施設見学

8月 1日(木) 岩手県(同上)

ウォータージャンプ体験／アーチェリー体験／体操スポ
ーツクラブ体験(エムズスポーツクラブと交流)

8月 2日(金) 岩手県(同上)

雫石中学校ソフトテニス部交流／藍染体験／さよなら
パーティー

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

盛岡駅でお見送り／品川プリンスホテルへ移動



エムズスポーツクラブと交流



アーチェリー



大村スポーツ少年団と交流



藍染体験



そば打ち体験



ウォータージャンプ体験



雫石中学校ソフトテニス部と交流

7月26日(金) 青森空港で合流し、時間がなかったので昼食(サンドイッチ)ですませた。青森市役所表敬訪問の前に着替えたいと、ホテル青森へ行ったときに、グループリーダーの体調が悪かったため、ホテルで休んでもらった。急遽、ドイツ団長団の副団長が、来ることになったので、ホテルの手配をした。歓迎レセプションに参加してくれた。津軽三味線の演奏は、ドイツ民謡、ねぶた囃子(ドイツ団にも太鼓を打たせた)等、とても盛り上がった。(青森県青森市:山口 美智子)

7月27日(土) 大雨予報であったが、傘を準備して、八甲田山ロープウェイを体験、周りの景色は、ほとんど見えなかった。城ヶ倉大橋からの景色は見えていたので、バスから降りて、写真を撮っていた。帰る途中バスに酔ったのか、一人具合が悪い子がいてホテルで休んでもらった。明の星高校の生徒とのディスカッション後、色々な質問(コスメの話等)が話題に出たり、メール交換をしたり、楽しそうだった。ミニバスケットボールの交流は、最初基礎練習してから、AOMORI LANDLSスポーツ少年団とチームを作り対戦、汗びっしょりになりながらも楽しそうに走り回っていた。飲み物は、水と炭酸水をクーラーボックスに入れて準備していたので、自由に飲んでもらった。(同上)

7月28日(日) 紫雲会スポーツ少年団との剣道体験は、あいさつから始まって、竹刀を持たせてもらい、色々な形を習った。道場は広く、冷房設備が整っていたので動いていてもそんなに暑くなかった。小雨の中三内丸山遺跡見学した後、まが玉作り体験で、みんな真剣につるつるになるまで磨き上げていた。メガ・ドンキホーテで、二時間自由時間があり、広い店内を周りショッピングやゲームしたり、美容院に行ってきた人もいた。夕食は、ローソンで食べたいものを選んでもらったら、おにぎり、パスタの他お菓子類が多かった。(同上)

7月29日(月) 朝から一名、体調不良のためホテルで待機。昭和大仏(青龍寺)では、座禅体験をしたけど、正座ではなく、クッションに座りあぐらの体勢だったので、足がしびれることなくできた。写経体験は、名前をカタカナで書いて、漢字も一字一字丁寧に書けていた。浅虫温泉の足湯のお湯が最初熱いと言っていたけど、気持ちよさそうだった。ホテルに戻り着替えをして、体調不良の子も回復していたので、全員でお別れパーティーの会場へ。青森で印象に残ったこと、楽しかったこと、感謝の

言葉など和やかな時間をすごした。最後に準備して余った小物達をじゃんけんして、勝った人から順番に選ばせお別れパーティーは、お開きに。(同上)

7月30日(火) 北洋ガラス見学してから、次の受け入れ先の雫石町への引継ぎのためバス移動(東北自動車道)で中間地点の道の駅鹿角で待ち合わせた。お昼ご飯も好きなものを注文(フライドポテトとドリンク)食べながら、別れを惜しんだ。1時半雫石町に引継ぎした。(同上)

青森市からバス移動でドイツ団と通訳合わせて9名と、秋田県鹿角市の道の駅鹿角で合流。事前連絡で、数名の体調不良を聞いていたが、皆元気な様子。今回9名のため、10人乗りのハイエースで対応。キャリアケース等の大型の荷物がどのくらいの量か分からないため、箱型トラックで運搬することにした。雫石町に着き、雫石町営体育館にて着替え等表敬訪問の準備をし、雫石町役場へ。雫石町長への表敬を行い、通訳を介して、交流を楽しみにしている事を伝え、町長からプログラム中のおすすめポイントを教わりながら、お土産交換を行った。歓迎セレモニーのため、雫石町中央公民館へ移動。歓迎セレモニーは極力簡素に行い、セレモニーでの飲食は無く、出席者の紹介、挨拶を行った。歓迎セレモニー後、会場内にて、食事会という形で雫石町のPR動画を見ながら、町スポ少本部長、副本部長、町スポーツ協会長、職員と一緒に食事をした。アレルギー、ベジタリアンについても、事前の情報をもとに対応できた。ドイツ団員の中の山間部の出身の団員は、魚介・甲殻類は苦手なようで、あまり手を付けませんでした。

(岩手県雫石町:伊藤 卓哉)

7月31日(水) 朝食後、旧大村小学校へ移動し、大村スポーツ少年団の団員とレクリエーションをし、その後そば打ち体験を行った。レクリエーションでは、年齢差があったが、それぞれを混ぜてチームを作り、ドイツ団員が積極的に話しかけてくれたおかげで、年齢差を感じることがないくらい、早く打ち解けることが出来た。円滑に進むよう、ゲームの準備をしたためスムーズに行うことが出来た。2名が若干の体調不良となったため、見学となった。そば打ち体験に移り、皆初めての経験により、真剣に取り組み、楽しんでいる様子が見えた。場所を近くの公民館に移し、大村スポ少も交え、昼食をとった。自分たちで打ったそばの他に、おにぎりも自分たちで握り、用意したそばと自分たちのそばの食べ比べをした。ここまで、

日程が30分程早く進んでいたため、その場で大村スプ
少の団員が他の活動の神楽をお披露目してくれ、日本
の文化に触れることができた。神楽の衣装を試着し、記
念写真を撮るなどもした。また、そば打ち体験や、そば・
おにぎりなどの準備をお願いした地域の方々とも交流を
持つことが出来た。暑さ対策のため、大きめのクーラーボ
ックスに20本程度のドリンク、経口補水液を準備し、
いつでも自由に飲めるように移動車に用意しておき、補
充しながらどこへでも持ち運びできるようにした。ドリンク
は、水、炭酸水、甘い炭酸水、経口補水液、紅茶などを
準備した。午後は、2名の体調も戻り、盛岡グランドセイ
コーの工場見学へ移動した。ドイツではあまり浸透して
いないが、大谷翔平がスートパーに贈った話でも有名に
なった時計工場で、工場自体が国立競技場を設計した
隈研吾氏が設計であることも注目された建物です。こち
らが意図した所では無い所に興味を持つ団員もあり、建
築の方法で質問する団員もいた。グランドセイコーの係
りの方も、英語での説明のためスムーズに見学すること
が出来た。青森からの移動日の翌日ということもあり、
落ち着いたプログラム設定は良かったと思われる。プロ
グラム中に体調を崩してしまった時の休憩場所なども
考えたほうが良かったと思った。宿に戻る際に、スーパー
に寄り、各々買い物をしていましたが、セルフレジの使い方も
慣れていて、心配することもなかった。宿に戻り夕食をと
った。(同上)

8月1日(木) 朝食後、体調不良者1名を宿で休ま
せ、町内にあるウォータージャンプ施設へ移動した。天候
にも恵まれ、水に入るには最高のコンディションでした。
安全確保のため、全員にウエットスーツとライフジャケット
を着用させた。プロスキューターのデモジャンプを見て、希
望があればウォータージャンプをさせようとしたが、水遊
びのみとなったが、皆楽しそうに過ごした。アーチェリーセ
ンターに移動し昼食、アレルギー・ベジタリアン対応した
サンドウィッチ等を用意、宿で休んでいる1名へも用意し
たものに加え、栄養補助食品、のど飴、おやつ、ドリンク
を届けた。昼食後、アーチェリー体験を行った。皆スポー
ツをしているだけあり、のみこみの早さで、短い距離の体
験にとどまらず、50mの体験まで行った。アーチェリーに
名残を残しつつ、隣接してある体操教室に移動し、トラ
ンポリン、マット、鉄棒で体操をした。体操ユージュント
として経験者も多く、得意な種目のためのびのびと行って
いた。体操教室に参加している小学生とも交流することが
出来た。宿に戻り、夕食時に体調不良者が倒れたと担

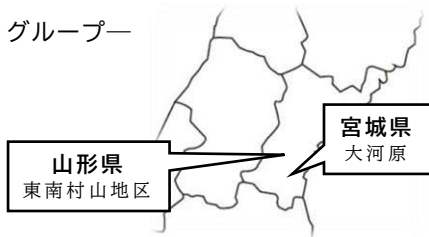
当者に連絡があり、町内の病院に連絡を取り、通訳、グ
ループリーダー、団員1名と担当職員2名で対応、診断
は扁桃腺炎ということで、薬で様子を見ることとし、宿に
戻った。(同上)

8月2日(金) 朝食後、前日に引き続き体調不良者
1名、グループリーダーが付き添いのため宿に待機となる。
体調不良者は前日から食事を取れておらず、栄養補助
食品・経口補水液を準備し、その他宿の配慮で特別食
を出してもらい休息となる。雫石町総合運動公園テニス
コートにて、雫石中学校ソフトテニススポーツ少年団と
交流。当初、年齢が近くお互いに照れがあったが、中学
生も積極的に話しかけ、しだいにコミュニケーションも
うまく取れ、仲良く交流出来た。昼食は、徒歩で運動公
園近隣のビザ屋へ移動。事前に注文していた分と追加
注文は口に合ったようで喜ばれた。アレルギー・ベジタ
リアン対応も、事前に店と打ち合わせしていたため、上手く
できた。前日同様、宿で休息している2名にも、テイクア
ウトで届けた。前日体操教室で参加している小学生の
中に、店の娘さんがおり、そこで再度交流することが出
来た。午後は、藍染体験をしに、盛岡手作り村へ移動し
た。最初は戸惑いながらも、工夫しながら体験をした。
休息している2名分も皆で手分けして作るなどし、出来
上がりに満足した様子だった。1日を通して、グループリ
ーダー不在の中、団員リーダーがきちんとまとめていた。
宿に戻り、さよならパーティーの際、いろいろと振り返り、
プログラムの感想をもらい、夕食後花火を行った。花火
はドイツでは制限があり、なかなか出来ないとのことで、
楽しんでいたし、楽しむ様子は日本もドイツも同年代の
団員は同じだと思えた。(同上)

8月3日(土) 朝食後、少し余裕もって盛岡駅へ出
発。体調不良者もいく分回復の方向だったが、まだ介助
が必要な状態だった。帰日もキャリーケース等荷物運搬
に移動者と別の車を使用した。体調不良者の負担も考
え、盛岡駅の近い場所で降ろし、車を駐車場へ移動した。
体調不良者を涼しい待合室で休ませ、新幹線の時間ま
で待合室付近に荷物を置き、担当職員が預かり、団員
は駅ビルにてショッピングや見学を行った。時間となり、
ドイツ団員より担当職員にお礼の言葉をいただき、改札
前で見送った。(同上)

バイエルン I

一東北Ⅱグループ



日程

7月26日(金) 山形県(山形市、上山市、天童市、山辺町、中山町:ホームステイ)

山形空港でドイツ団と合流／上山市役所表敬訪問／上山市体育文化センターで歓迎会／ホストファミリーとの顔合わせ

7月27日(土) 山形県(同上)

山辺野球スポーツ少年団とのスポーツ交流(ティーボール)／山辺町ふるさと資料館見学／浴衣着付け・お茶体験会／中山町のYouTube ラジオに出演

7月28日(日) 山形県(同上)

天童市内バレーボールスポーツ少年団(3団体)とのスポーツ交流(バレーボール)／書き駒体験／ホームステイ先プログラム

7月29日(月) 山形県(同上)

山形市立商業高校剣道部とのスポーツ交流(剣道)／芋煮作り体験／花笠踊り体験／さよならパーティー



ホストファミリーとの顔合わせ @上山市



昼食そば @山辺町



書き駒体験 @天童市



浴衣着付け体験 @中山町



見送り @山形市

7月30日(火) 宮城県(角田市:グリーンホテル角田)
 歓送式／山形市スポーツ会館でお見送り／宮城県へ
 移動／JAXA角田宇宙センター見学／角田市仙南シ
 ンケンファクトリーでウェルカムパーティー

**7月31日(水) 宮城県(七ヶ宿町、丸森町:メルキュ
 ール宮城蔵王)**

長老湖でSUP体験／蔵の郷土館齋理屋敷見学

**8月 1日(木) 宮城県(白石市、蔵王町:メルキュ
 ール宮城蔵王)**

白石城見学／甲冑着付け体験／蔵王お釜見学／こけ
 し絵付け体験

**8月 2日(金) 宮城県(柴田町、村田町:柴田町ホテ
 ル原田inさくら)**

仙台大学施設見学／武道見学・体験／仙台大学生と
 ディスカッション／村田伝統的建造物群保存地区案内
 ツアー／ホテル原田inさくらでさよならパーティー

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)
 仙台青葉城見学／仙台駅へ送迎／品川プリンスホテル
 へ移動



甲冑着付け 白石城



七夕短冊づくり村田町観光案内所



SUP体験 七ヶ宿町長老湖



仙台大学ディスカッション



丸森町齋理屋敷



仙台市青葉城見学

7月26日(金) 前日、京都のホテルでドイツ団と合流し、伊丹空港から山形空港に移動した。昼食は伊丹空港でラーメンやたこ焼きなど自由に選択して楽しんでいた。市長表敬訪問のため、上山市役所へ向かった。市長訪問では、通訳を介して、今回の交流で楽しみにしていることや、山形で食べたいものや観たいものなどを伝えた。表敬訪問後は上山市体育文化センターへ移動し歓迎会を行った。そちらには、初日からホームステイでお世話になるホストファミリーや第51回日独スポーツ少年団同時交流受入事業実行委員、東南村山地区スポーツ少年団関係者計51名を招いた。食事の提供ではなく、軽食としてケーキと飲み物を準備した。各テーブルでのコミュニケーションに不安があったが、英語での会話や、スマホの翻訳アプリを活用しての会話、ポディーランゲージを駆使してコミュニケーションをとっている様子で安心した。歓迎会後にホストファミリーへのお願いとドイツ団との打ち合わせを行った。初日であるため予想よりも時間を要したため、ゆとりある計画が必要であったと感じた。

(山形県:齋藤 春樹)

7月27日(土) ホームステイ先で朝食後、山辺町の役場に集合してバスで旧作谷沢小学校へ移動し、山辺町の野球スポーツ少年団の子どもたちとティーボールを中心に交流。ドイツ団と年齢差はあるものの、ルールを工夫したゲームでみなさんが楽しめているように見えた。1人につき500ml ペットボトルの1本を用意していた。しかし、予想以上に汗をかいていたので、シャワーができる環境があるとよかったかもしれない。その中でも更衣室の中で制汗スプレーや冷感シートを渡して何とか次の活動に支障なくうつれた。昼食のそばも大変満足していた。午後は中山町の中央公民館で浴衣の着付け体験をした。そのまま、お茶の体験会をし、日本文化に触れ合う機会となった。ドイツ団の中には抹茶を飲むことを大きく期待していた方がいらっしやだったので、大変満足できる活動内容で、浴衣を着たままお茶体験ができるという、中山町の担当者の工夫が感じられる内容であった。最後に中山町のYouTubeのラジオに出演したが、ホストファミリーも母国の家族もドイツ団の様子が見ることができいい内容であった。終了後はホームステイ先で夕食をとった。

(同上)

7月28日(日) ホームステイ先で朝食後、天童市スポーツセンターに集合し、天童市のバレーボールスポーツ少年団の子どもたちと交流。こちらもドイツ団と年齢差

はあるものの、ルールを工夫したゲームでみなさんが楽しめているように見えた。そのまま同じ会場にある冷房設備のある部屋で書き駒体験を行った。前日までにホストファミリーと名前や好きな言葉を漢字で書く練習をしてきており、熱心な指導者の下、集中して体験を行っていた。作成した書き駒はさよならパーティーでプレゼントできるように準備した。活動終了後、昼食の時間からホームステイ先のプログラムを計画して、流しそうめんや空手体験、花火体験や登山など、各々工夫を凝らした活動を行っていた。

(同上)

7月29日(月) ホームステイ先で朝食後、山形市スポーツセンターに集合してバスで山形市立商業高等学校へ移動し、剣道部と剣道体験会で交流した。木刀や竹刀をお借りして、素振りや打ち込みの練習や、剣道部の校内試合の見学をした。防具もつけて写真を撮ったり、剣道部とSNSで繋がったり、満足感の高い活動であった。昼食は芋煮を自分たちで作った。団員の中にはハラル対応の必要な方もいたので、それ用のしょうゆを使った鍋も用意した。午後は上山市の「高源ゆ」というリカバリー複合施設で花笠踊り体験を行った。山形大学の花笠サークル「四面楚歌」の方々に来ていただいて、山形のお祭りで踊られる「花笠音頭」を覚え、さよならパーティーで披露するための練習をした。シャワーや温泉もある施設なので、希望する団員は汗を流すことができた。山形県独自の体験とドイツ団の希望する内容を繋ぎ、汗の処理まで考えていただいた市の担当者の努力が伺えた。その後会場を「蔵王ライザレストラン」に移動し、さよならパーティーを行った。外の会場でBBQをする予定だったが、雨が降っていたので外で焼いたものを屋内に持ってきて食べる形をとった。上山市長はじめ上山市教育長、各市町の本部長等、様々な方に御出席いただいた。内容としては練習した花笠踊りを出席者全員で踊った。ドイツ団からもペアで踊るダンスを披露していただき、交流の場となった。プレゼントとして天童市プログラムで作った書き駒をホストファミリーから贈呈した。

(同上)

7月30日(火) 山形市スポーツ会館で歓送式を行った。本部長からの挨拶やホストファミリーからの送る言葉、山形市からタオルのプレゼント等でドイツ団を見送る式典を行った。バスに乗り込む前には、ホストファミリーと離れたいほどに強い関係性を築いていたことが感じられた。宮城県に引継ぎをしてバスに乗るドイツ団を見送った。

(同上)

山形市スポーツ会館でドイツ団員と合流。団員の体調も良好、元気な様子であった。バス乗車後、昼食会場のおぐりっとかくだへ向かった。昼食後は、店内での買い物やヤギのエサやりを楽しんだ。店内では、ずんだシェイクが好評であった。JAXA 角田宇宙センターでは、国産ロケットやエンジンの仕組みの説明を受けた。団員の積極的な質問に対しセンターの吉田博士に回答していただいた。予定時間を1時間近くオーバーするほど有意義な時間となったようだ。JAXA の見学時間が伸びたため、道の駅かくだを割愛した。ウェルカムパーティーは、仙南シンケンファクトリーで開催され、ドイツ団リーダーより団員紹介が行われた。日本語を勉強してきて会話ができる団員もあり、パーティーは和やかな雰囲気であった。14年ぶりの日独交流となり、各市町の担当者もわからないことが多い中での受け入れとなった。事前の情報が少なく、近々になり、食事や日程が変更となったが担当者で協力しながら対応できたので良かったと思う。ただ、食事については食べ残しがあったり、全く手を付けられないものもあり作ってくださった方にも、団員にも申し訳ない気持ちになった。早い段階で、正確な情報がほしかった。また、時間の都合上カットされたプログラムもあり改めて、ドイツ団員の受け入れは時間にゆとりをもったものにすべきと感じた。（宮城県角田市：馬場さおり）

7月31日(水) 宿泊先のメルキュール蔵王にて、スポーツ少年団と合流。バスで長老湖に移動し、湖畔にてSUP体験を開始。講師の中村さんから説明を受けるも、数人が説明途中の時点でやりたくて仕方がない様子が印象的でした。スタートしてからは時間が足りなくなるほど全員SUPクルージングを楽しんでおり、昼食・移動のスケジュールが遅れることになりましたが、七ヶ宿での活動は盛り上がりました。水の絡む体験で事故もなく、予定の遅れも出ましたが楽しい時間になったのが良かったと思います。滞在に関してSUPは日本のスポーツ体験になったと思いますが、少年団の交流の部分では同年代の学生や町民などに関わる機会はなかったため、全体で交流の時間づくりも考える必要があると感じました。

（宮城県七ヶ宿町：高橋 航）

七ヶ宿町からバスで移動してきたドイツ団9名、七ヶ宿町担当者2名と齋理屋敷前で合流。引継ぎを行った。午前中の体験が楽しかったようで、皆さん笑顔を浮かべていた。齋理屋敷を見学。昔の日本の雰囲気に興味津々の様子だった。祭りの際に使われる絵灯籠や、当時の街並みを再現したミニチュアなどの展示を熱心に見学

していた。見学後、猛暑のためドイツ団にジェラートを提供。複数の味があったので、それぞれの好みの味に舌鼓を打っていた。最後に写真撮影をし、バスに乗って宿泊先まで移動。途中でコンビニに寄り買い物。あんパンなどを好んで購入していた。到着後、明日の予定を確認し解散した。（宮城県丸森町：八巻 吏玖）

8月1日(木) ホテルからバスで白石城へ移動しガイドの説明を受けながら城内を見学した。見学後は、甲冑着付け体験を実施した。日本の歴史や文化に触れ、楽しめているように見えた。炭酸飲料等を多めに準備していたが、ミネラルウォーターを好む団員が多かった。

（宮城県白石市：長田 滉一）

日独交流事業の機会に当町スポ少団員を交流させた。対面時、日本語及びドイツ語で挨拶をし、全員で握手を交わした。その後バスに乗車し、移動中、当町について紹介（特色、農産物など）。蔵王山頂（お釜）へ到着し、お釜について説明。ドイツ団（特に女性陣）はかなりこの場所を気に入っていたようで、ポーズを決め何度も写真撮影をしていた。当町の団員の中にも地元でありながら、はじめて訪問したという子もいた。その後、みやぎ蔵王こけし館へ移動し、はじめ、こけしの概要、歴史の解説を受け、こけしの絵付け体験へ。ドイツ団と当町団員を隣どうしに座らせて実施。ほとんど言語は通じないながらもお互いコミュニケーションを図っていた。最後に全員で記念撮影。こけしの絵付け体験を終えるとドイツ団を宿舎まで送り、別れ際、日本語とドイツ語で挨拶。ドイツ団は名残惜しそうにしていた。

（宮城県蔵王町：増子 俊介）

8月2日(金) 仙台大学施設見学プログラムに記載のない体験が追加され、各見学・体験で時間の大幅な遅れが出てしまった。プログラム中に事務局が中断するべきだった。剣道体験では、居合道や日本刀、竹刀といった日本独自の文化に触れることができ、ドイツ団がとても喜んでいて。ディスカッションに関しては、ドイツ団8名がそれぞれテーマを基にしたプレゼンテーションを行った。各自のテーマを発表に、50分かかった。今回の形式でディスカッションのテーマや進め方の説明、ドイツ団の各自のテーマの発表、ディスカッションといった流れで行う場合、120分程度時間を確保する必要があった。昼食に関して、オードブルから各自好きな料理を選ぶことができた点は、各自のアレルギーや宗教上、取り込めないものを避けることができる点が良かった。食事

の中で施設見学やディスカッションに関わった教員・学生との交流を図ることができた点も良かった。しかし、かき氷や緑茶など、ドイツでは馴染みのない食べ物に関しては、あまり手を付けていなかった。さよならパーティーについては、事前に確認をしていたドイツ団のベジタリアン及びイスラム教は2名だったが、パーティー当日にもう1名ベジタリアンがいることが分かり、対応できなかった。ドイツ団の事前情報をいただいていたが、交流事業中の状況を確認すべきだった。ベジタリアンやハラルに対応した食事を提供したとしても、ドイツ団に馴染みのない食べ物（茶碗蒸しや日本風の麻婆豆腐や天津飯等）は受け付けなかった。できるだけ、本人が料理を選択できるようにすべきだった。（宮城県柴田町：佐伯 健太）

午前の部である柴田町のプログラムが1時間程度押ししてしまったことにより当初予定していた浴衣体験を中止し、村田町村田伝統的建造物群保存地区の案内のみ行った。しかし、当日は気温も高かったため、村田町ヤマニ邸・村田商人やましょう記念館の建物内を中心に約30分程度案内した。その後、休憩も兼ねて事前に準備していたミネラルウォーター（1人につき 500ml）、アイス（ハーゲンダッツ）を用意し、七夕の短冊づくりを体験いただいた。浴衣体験を中止したことにより時間に余裕ができたため、さよならパーティーの準備等を考慮してプログラムを予定より早く切り上げてホテル原田（柴田町）へ向かった。午前のプログラムであるディスカッションは予定より時間を多く有する可能性があるため、その後のプログラムはその点を考慮した上でのプログラム構成が必要だと感じた。全体をとおしてスケジュールが過密なように感じたため、休憩の時間を多く取りながらプログラムを実施することができよかったと感じる。

（宮城県村田町：半澤 快斗）

8月3日（土） 当初の予定は、関上方面散策であったが、ドイツ団の希望により前日に予定を変更し、青葉城を見学することとなったため、当初の予定より出発時間を1時間早め、8時出発となった。ホテル朝食時間が7時からとのことだったので、時間に余裕がなく心配していたが、みんな元気に、出発時間に余裕を持ってホテルロビーに集合していた。バスの中では、今回本町での活動がなかったため、拡大写真を何枚か見てもらいながら、大河原町の紹介と青葉城と伊達政宗について簡単に説明を行った。青葉城到着時に、1人ずつ 500ml ペットボトルのミネラルウォーターを配布した。外の気温が上昇しているようだったので、直前まで冷やしたものを

配布したら、みんな喜んでいただようだ。青葉城では、青葉城資料展示館と政宗像等を見学した。青葉城資料展示館では、鎧兜や刀などの展示に興味を示していたようだった。中には、興味なさそうに途中ゲームをしていた子もいたが、ほとんどの子がシアターの上映なども鑑賞していた。政宗像の前ではポーズをとったりとてもいい笑顔で記念撮影をしていた。公園から望む仙台中心部と太平洋の大パノラマに多少興奮気味で動画撮影等をしている子もいた。護国神社でお守りを購入している子もいた。日差しが強く暑さが応えていたようだった。仙台駅に到着してからは、荷物を1か所にまとめ、90分くらい昼食購入等で自由時間とした。仙台駅は土曜日で夏休みということもあり、人が多かったが、時間厳守で集合時間前にはみんな荷物のところに戻ってきた。ドイツ団に何か興味があるものがあつたか尋ねると、日本のグミキャンディーを何個か購入した子や、最中アイスを食べている子がいた。駅が広すぎて疲れたと言っている子もいた。新幹線の時間に合わせ、改札で見送った。半日だけの交流だったが、見送りながら少し寂しい気持ちになった。通訳の方との話の中で、夏であれば、日本らしいお祭りや盆踊りなどを体験させてあげられたらいいのかもしれないというなお話もあった。

（宮城県大河原町：中河原 ひろみ）

柔道

ー関東 I グループー



日程

7月26(金) 千葉県(千葉市:ホームステイ)

京葉線 千葉みなと駅でドイツ団と合流／ホテルポートブラザチバでウェルカムパーティー/テーマディスカッション

7月27日(土) 千葉県(同上)

千葉市弓道連盟指導の弓道体験／木更津市清和大学柔道部とスポーツ交流(柔道)／千葉ポートタワーで市内眺望

7月28日(日) 千葉県(同上)

ホストファミリーデー

7月29日(月) 千葉県(千葉市:ホテルポートブラザチバ)

東京ディズニーランド見学



テーマディスカッション



千葉ポートタワー見学



弓道体験



柔道体験



東京ディズニーランドにて

7月30日(火) 群馬県(前橋市:ホームステイ)

ホテルポートプラザちばで見送り・群馬県に移動／群馬県庁まで移動／臨江閣で勢多農林高校と文化交流／群馬県庁内で歓迎パーティー／ホストファミリーと合流

7月31日(水) 群馬県(同上)

箸久で箸づくり体験／県内高校生とスポーツ交流(柔道)／ホストファミリーと合流

8月 1日(木) 群馬県(同上)

ホストファミリーデー

8月 2日(金) 群馬県(前橋市:前橋市赤城少年自然の家)

富士見温泉入浴体験／群馬県スポーツ少年団リーダー会とテーマディスカッション／さよならパーティー

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)
箕郷レクススポーツ少年団とレクリエーション交流／高崎駅で見送り／品川プリンスホテルへ移動



和太鼓体験



スポーツ交流(柔道)



茶道部体験



市立前橋高校と部活動体験交流



箸づくり体験



箕郷レクススポーツ少年団とレクリエーション交流

7月26日(金) 京都駅から新幹線で移動してきたドイツ団8名と千葉みなと駅で合流。新幹線乗車・富士山眺望と事前の希望がなかったドイツ団は元気に暑い千葉市に到着。ホテルポートプラザちばに移動して千葉県スポーツ少年団本部長北林栄峰氏、同事務局長後藤氏をゲストに迎えてウェルカムパーティーを実施。ホストファミリーのメンバーも多数参加し、顔合わせと簡単な懇親を行う。各ファミリーは、英語での交流に問題がなさそうで安心した。約1時間のウェルカムパーティー後、会場レイアウトを変更、一つのテーブルを囲みテーマディスカッションを行う。初めにドイツ団が全員で分担してテーマについてプレゼンを行い、次に千葉県がプレゼンを行った。小学5年生が英語でプレゼンを頑張ってくれ頼もしく感じる。両国ともプレゼンではWHOの「健康」についての定義からその内容を掘り下げて病気でないことが健康ではない、身体的、そして社会的な関りで健康を保って生活することが大事であるというテーマに対する共通の認識が得られた。スポーツ環境・課題等に対する両国からの質問事項・疑問点を回答、意見交換してディスカッションを進めた。会場の都合により疑問点を少し残したのが残念ではあった。また、お互いにPPによるプレゼン資料を準備し、より理解を進める努力をしたが、各母国語での資料であったことが残念であった。翻訳した形であればより興味、理解、意見交換が進んだとも思えた。資料作成のスケジュールなどをもう少しきめ細かく確認すれば準備が出来たのではと思いました。加えて、テーマの設定年齢とホストファミリーの想定年齢層に乖離を感じた。精神性にまで踏み込んだかなり高度なテーマ設定で少年団のホストファミリーは基本小学生、そのメンバーが参加するディスカッションにおいてテーマについての基本的な理解が難しいと準備段階で思わせられました。派遣の団員は、高校生・大学生、ドイツ側もほぼ同じ年齢層、一方受入ではホストファミリーは小学生中心、ドイツは受け入れと同じ高校生・大学生、その年齢層のマッチングとテーマの難易度の設定を乖離の無い形で工夫できないかと思った。今回千葉ではすべてのプログラムにホストファミリーの帯同をお願いし、ほぼ参加していただいた。終了後各ホストファミリーに移動して千葉の生活をスタート。(千葉県千葉市:佐倉 和明)

7月27日(土) 千葉市青葉の森公園「青葉の森弓道場」前に集合。千葉市弓道連盟の指導者に弓道の歴史、成り立ち、道具等の説明を受けた後、「射法八節」の実技指導を受ける。ホストファミリー及び我々も参加

して体験するが全員初めての体験でうまくできたり、なかなか進まなかったりをむしろ楽しむ。実射の体験では近的では当たることもあったが、遠的は難しかった。それでも初めてでの近くまで飛ばす子もいてスポーツ能力の高さを感じる。朝から暑い日で弓道場は比較的古い様式の建物、歴史は感じたが暑さに関しては屋外状態で水分補給等に気を使った。昼食はうどんを食べることに。スムーズに選択ができるかを事前の打ち合わせでは危惧したが問題なく対応してくれた。昼食後は、車で約40分の木更津市・清和大学に向かう。午前の暑さと弓道体験の疲れを車の中で癒して到着時は相当元気を回復し、本日のメインの柔道体験に臨む。清和大学柔道部は部員105名を要する県内の強豪校でその中から20名が迎えてくれた。内容的には大学の普通の練習に交じって練習をする形で行われた。ウォームアップ段階では逆立ち歩行など初めての経験の様であった。その後、相手を変えて乱取りを行い最後にいくつかの技の模範演技を見学した。大学生でしかも強豪校の部員とは少し体力的にも差があり良い経験ではあったが体力的には厳しい内容だったと思われる。約1時間の移動後千葉ポートタワーにおいて千葉市内を眺望してもらったが雲があり富士山が見えなかったことは残念だった。見学後ホストファミリーの車でホームステイ先に移動。(同上)

7月28日(日) ホストファミリーデー。鎌倉見学、空手体験、九十九里海岸見学等を楽しんだと聞いている。(同上)

7月29日(月) 早朝7時千葉みなと駅集合、東京ディズニーランドを十分に堪能してもらう。JR・京葉線で舞浜駅移動、入場に伴うチェックを受けて、少し早くなった開場時間に入場。シンデレラ城をバックに記念写真撮影。大変な暑さのせいか月曜日と言う曜日の関係が園内は思ったほどの混雑ではなく、ファストパスも幸運に複数入手出来て多くのアトラクションを楽しむことが出来た。ホストファミリーも多数参加し一緒に行動で楽しんでもらえた。当初の計画では個別に自由に行動してもらう予定であったが、ファストパス等の関係もあり、大人数で行動することに。結果としては大変楽しく複数回のお土産の購入も味わいながらプログラム最後のパレードも良い場所で堪能してくれた。ホテルのチェックインは22時を過ぎていた。千葉の彼らの活動の集合写真を額に入れたものをプレゼント。千葉の思い出を持ち帰ってもらうことに。千葉県における受け入れ時には東京ディズニーラ

ンド見学を固定のプログラムとしていたが、チケットの高騰、猛暑への対応、大人数での行動等の課題・負担を感じる一方で一日ホストファミリーと行動する事での交流の深まりは大きな魅力でもある。次回以降の課題としたい。ホテルポートプラザちばに宿泊。（同上）

7月30日(火) 朝食後チェック・アウト。バスにて群馬へ移動。（同上）

千葉市からバスで移動してきたドイツ団8名と群馬県庁で合流した。来日後数日経っていることもあり、団員は時差ボケ無く、元気な様子。歓迎パーティー会場の群馬県庁 31 階ギンガムに荷物をおいてもらうとともに、通訳を通じて、前橋市での交流の内容や予定を伝えた。その後、徒歩にて日本的建物で有名な臨江閣へ移動し、県立勢多農林高等学校郷土芸能部と八木節などを通し、文化体験交流を行った。言葉の壁はあるが、同年代ということもあり、身振り手振りで大変盛り上がっていた。勢多農林高等学校の生徒も、中々できない体験ができたことに大喜びであった。約1時間の交流後、また徒歩にて群馬県庁31階の歓迎パーティー会場ギンガムに戻り、通訳を通し進め方等を説明、準備を行った。「歓迎パーティー」には、本日からホームステイでお世話になるホストファミリーや、群馬県スポーツ少年団リーダー会の皆さんにもゲストとして参加いただいた。パーティーの食事については、事前にアレルギー等を確認していたため、成分が分かりやすいような食事を準備するとともに、ビュッフェ形式にするなどの工夫を凝らした。パーティーの各テーブルには、コミュニケーションが取りやすいように、ぐんま日独協会派遣通訳に入っていた。途中、リーダー会が中心となり折り紙の余興などを行ったが、真剣に取り組んでいる姿を通し、交流に対する意欲を感じた。言葉の交流には不安があったが、英語での会話や、スマホの翻訳アプリを活用して会話が盛り上がり、安心してた。終了後は、笑顔でそれぞれのホストファミリーと家路に向かった。（群馬県前橋市：金子 周之）

7月31日(水) 午前中は、箸専門店である箸久というお店で箸づくりを体験。ドイツ団は疲れも見せずに元気に取り組んだ。ただ、時間の都合もあり、今回は自分の好きな絵付けのみを体験。それぞれ個性があり、団員によっては、とっても細かく几帳面に絵付けする姿が印象深かった。また、日本的な物には、大変興味があるらしく、全員がお土産として箸を購入していた。時間があれば、材料から選び、形を整えたりして独自の箸ができ

れば良かったが、それでも、見せ合いながらはしゃいでいる姿は楽し気であった。終了後は、タクシーを使用し、途中昼食を挟んで、ALSOKぐんま総合スポーツセンターへ移動。武道館で、群馬県柔道連盟が主催する中学校体育連盟の練習会に合流し、参加していた群馬県内の高校生と段取りを通じてスポーツ交流を行った。日本式の練習は初めての体験であり、最初は練習相手を探すのに戸惑いを隠せなかった。また、練習がとてつもなくハードであったため、ドイツ団員の疲れは相当なものであった。日本式の練習を通して、日本人のスタミナはこういった練習の積み重ねによって培われるものなんだと気づいた団員もいた。中には、ドイツのユース代表であった団員もあり、今回のリーダーであるヴァネッサから、代表に戻りたかったらこの練習についていけないと叱咤激励されていた。途中、ドイツ団員の強さも垣間見られた。ハードであったが、お互いに学ぶべきものがあり、素晴らしい交流になったと思う。怪我なく終了できたことの安心感と、シャワーを浴びた後の心地良さ、更には疲れもあり、ホストファミリーが迎えに来るまで寝ている団員の姿に微笑ましさを感じた。この時期は日本の暑さ、特に群馬県は日本の中でも暑い地域であるため、熱中症等体調不良を起こさないよう、当初からスポーツドリンクを多めに携行し、団員の水分補給に対応できたのは良かった。ただ、スポーツドリンクは口当たりが甘いので、そればかりではどうかと思ったが、その心配はいらなかった。（同上）

8月1日(木) 終日ホストファミリーデーとなるため、ホストファミリーの工夫を凝らしたプログラムで楽しんでもらった。観光名所や避暑地に行ったり、自宅で花火や食事の準備を一緒にしたりと、言葉の壁や、文化の違いはあるが、お互いに楽しんでいる様子が伺え、今回ホストファミリーを引き受けていただいた皆様に感謝したい。（同上）

8月2日(金) 午前中は、前橋市立前橋高等学校で部活動体験を行った。夏休み中にも係わらず多くの生徒が笑顔で迎えてくれたのは感動であった。特に、予定になかった同校のプラスバンド部員40数名による歓迎セレモニーは圧巻であり、ドイツ団員にとってもインパクトのあるものであったと思われる。その後、体育館へ移動し、ドッチビーを楽しむ。初めてということもあり、最初はルールも分からず戸惑っていたが、身振り手振りを交えた中での会話により、最後はもう少しやりたかったという団員もいたほど楽しんでいた。場所を移動し、日本の

伝統文化である茶道を体験してもらう。茶道室が狭いので、男女に分かれて行った。神妙な面持ちではあったが、日本文化に触れたことで大変喜んでくれた。また、順番が来るまでは、生徒達と折り紙で楽しむなど、会話が弾んでいるようであった。通訳も、団員の打ち解けている姿に驚いていた。最後は参加者全員で坂本九さんの「上を向いて歩こう」を合唱し、プログラム最後を締めくくった。別れを惜しむ姿に、もう少し時間を取れたら良かったという想いと、短い滞在時間にも係わらず、学校側のきめ細かい、そして温かいおもてなしに感謝の想いでいっぱいになった。ドイツ団員側も、夏休み中なのに多くの生徒が参加してくれたことに驚いていた。今回の交流は、学校側にとっても大変貴重な時間となったようで、先生方からも、また機会があれば積極的に係りたいとの話をいただき、交流の意義を改めて気づかされた。特に、学校側が歓迎の横断幕や歌詞カードを手作りで用意し歓迎してくれたことは、予想外の大変うれしい出来事であった。午後は、会場を富士見温泉に移し、昼食を摂りながら、温泉施設でゆっくりと身体を休めてもらった。食事のメニューは、ラーメン、そばなど麺類を中心にあったが、団員の中には枝豆のようなサイドメニューで済ませる団員もいて、少し気掛かりな部分でもあった。入浴体験については、文化の違いもあり、受け入れてもらえるか心配であったが、入浴しない団員もいた半面、こちらが心配になるほどゆっくり入浴した団員もいた。中には、来日のハイライトの一つに挙げてくれた団員もいて、安心させられた。言葉が通じ合えればと強く思ったところである。夕方からは、温度差が10度違う大変過ごしやすい赤城山湖畔にある、前橋市赤城少年自然の家に会場を移し、群馬県スポーツ少年団リーダー会とのテーマディスカッション「スポーツ×SDGs～スポーツが拓く社会の持続可能性～」を実施した。お互いの意見や考えを述べ合い充実したプログラムであった。最後に、野外のキャンプ場でバーベキューによる「さよならパーティー」では、ホストファミリー、群馬県スポーツ少年団リーダー会はじめ関係者と談笑しながら、前橋市での最後の夜を楽しむとともに、別れを惜しんだ。途中、両国の余興の時間なども、大変打ち解けた雰囲気でもとても良かった。バーベキューの内容については、野菜を多めに用意してもらっていたため、ベジタリアンの団員であっても、自分の好きな野菜を好きなだけ焼いて食べていたことは良かった。また、肉や野菜を焼いて上げたり、お皿に取って上げたりしたことは、コミュニケーションを深める一因ともなった。このことは、何よりも天候に恵まれたこと、そして、

準備から片付けをリーダー会はじめ、施設のスタッフのご協力によるものであり、皆様に感謝したい。宿泊は、これも施設の配慮により、当日は、貸し切り状態であったため、入浴も存分に楽しんでいただこうであり、部屋にいても歌を口ずさむなど、とてもリラックスした姿が伺え、就寝時間を過ぎてても楽しんでいただいていた。印象に残った体験になったのではと思う。夜分に差し掛かった中にも、赤城山湖畔まで駆けつけていただいたホストファミリーはじめ、関係者の皆様には最後まで盛り上げていただき、本当にありがとうございました。（同上）

8月3日(土) 午前6時30分起床。遅くまで談笑していたためか、何人かは眠そうな顔。施設のルールに則り、午前7時より「朝の集い」を行う。健康確認のあと、本日の抱負について、ドイツ団代表、リーダー会代表から発表があり、そして、リーダー会が中心となって、全員でラジオ体操を行った。身体を解したところで、食堂に移動し朝食を摂る。ここでも、配膳、片付けをリーダー会が率先して手伝ってくれたことに感謝。食事の内容は、洋食を用意してもらった。好きなものをおかわりする団員もいて安心した。ただ、食後にコーヒーを飲みたがる団員がいたが、特に用意がなくて、たまたま持ち合わせた缶コーヒーで対応した。今後の参考と捉えたい。食後は部屋に戻り、各自の布団の片付けと部屋の掃除を行い、次のプログラムに備える。それぞれが、施設のルールに則ったものとなるが、寝具類のたたみ方は、団員にとっては中々理解し難く、最後はリーダー会に確認をしてもらい、施設の点検を受ける羽目となった。これも、日本の良い風習と捉えてもらえればありがたいと思っている。交流事業の最後のプログラムは、会場を施設内の体育館（艇庫）に移し、箕郷レクスports少年団とのレクリエーション交流。湖畔が目の前に広がる素晴らしい景色の中、ドイツ側からもゲームを提案するなど、双方で4ゲームを行った。小さい子も参加してくれたが、年齢に関係なく楽しめるゲームで、とても打ち解けた楽しい時間はあっという間であった。午前11時にバスが配車となり、箕郷レクスports少年団並びに群馬県スポーツ少年団リーダー会に見送られ、一路高崎駅へと向かった。高崎駅では、帰りの新幹線の時間に間に合うように、集合時間を設定し、一旦ドイツ団と別れ、各自好きな昼食が摂れるよう自由行動とする。30分前に、新幹線の改札を通り抜けたところで、最後の挨拶を含めたセレモニーを行った。その中で、最初に絵付けをした箸を、各自に渡した。出来栄は大変すばらしく、とても喜んでくれた。別れの挨拶

埜は、前橋市、ドイツ団双方の代表により行った。集合写真を撮った後、いよいよ別れの時。わが子を送り出すような一抹の寂しさを各々感じながら、新幹線ホーム13番線からドイツ団を見送り、第51回日独スポーツ少年団同時交流事業の全てを締めくくった。最後に、交流期間中は天候に恵まれ、暑い日本の夏を体験できたが、反面、慣れない環境や生活のために、熱中症など体調を崩さないか心配であったが、前橋市における5日間は、体調を崩すことなく、また、スポーツ交流により手の指の皮を擦りむいたりという多少の傷は作ったが、大事に至るような大きなケガすることなく、最後まで、明るく元気に終了できたことはありがたいことであった。これも、「ドイツ団に喜んでもらいたい、一つでも、二つでも心に残るような内容にしたい」という、ホストファミリーはじめ、群馬県、前橋市、市内学校関係者、群馬県柔道連盟など、交流事業に関わった全ての関係皆様のまごころの結果であり、素晴らしい成果であったと思う。その一つとして、今回のドイツ団のリーダーであるヴァネッサから、「今回の交流が心に強く残った」という報告をいただいたのは、成果の表れであり、うれしい限りである。改めて、関係者皆様に感謝したい。特に、通訳の秋山さん、群馬県の担当者には、交流事業の準備から終了に至るまで、各プログラムでの確かなアドバイスと協力をいただき、事業が円滑に進められたこと、そして、充実した内容となったことに感謝したい。

（同上）

ヘッセン

ー関東Ⅱグループ



日程

7月26(金) 埼玉県(上尾市:スポーツ総合センター)
大宮駅でドイツ団と合流／歓迎レセプション／ホストファミリー対面式／埼玉県スポーツ協会専務理事表敬訪問／ウェルカムパーティー

7月27日(土) 埼玉県(さいたま市・川越市:ホームステイ)
県立伊奈学園総合高校にて柔道体験／川越散策

7月28日(日) 埼玉県(同上)
ホストファミリーデー

7月29日(月) 埼玉県(同上)
埼玉県スポーツ少年団リーダー会とテーマディスカッション／スポーツ交流(モルック)／華道体験／さよならパーティー



歓迎レセプション7.26@スポーツ総合センター



スポーツ交流@伊奈学園総合高校



生け花体験@スポーツ総合センター



ディスカッション@スポーツ総合センター



さよならパーティー@大宮

7月30日(火) 茨城県(古河市:ホテルルートイン古河駅前)

大宮駅散策／茨城県古河市へ移動／教育長表敬訪問・歓迎レセプション／ウェルカムパーティー・ホストファミリー対面式

7月31日(水) 茨城県(古河市:ホームステイ)

古河第三高校を見学、部活動体験、調理・昼食、テーマディスカッション／ホストファミリーと合流

8月 1日(木) 茨城県(同上)

ホストファミリーデー

8月 2日(金) 茨城県(同上)

古河市スポーツ少年団とスポーツ交流(剣道、少林寺拳法、ミニバス)／篆刻体験／さよならパーティー

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

ショッピングモール散策／古河駅でお見送り／品川プリンスホテルへ移動



教育長表敬訪問 (古河庁舎)



華道体験 (古河第三高校)



スポーツ交流(ミニバス) (はなもも体育館)



篆刻体験 (篆刻美術館)



弓道体験 (古河第三高校)



スポーツ交流(剣道) (はなもも体育館)

7月26日(金) 京都駅から移動してきたドイツ団を大宮駅で出迎えた。出迎えにはレンタカーをとホストファミリーに協力をしてもらいゆとりを持った人数割にした。身体が大きいドイツ団のため8人定員の車に5人しか乗れないとの主張。ゆとりを持った配車をして結果としてはよかった。ホテルから京都駅までのバスが予定よりも遅れたため、昼食の購入ができないというトラブルもあり、東京駅で昼食の購入を行ったため、埼玉県への到着が予定よりも遅れることとなった。その結果、会場のスポーツ総合センターでの休憩時間が十分に取れず、ドイツ団には不便をかけた。また、ウェルカムパーティーまでの流れをここで丁寧に説明ができなかったことも改善すべき点である。歓迎レセプションは、時間が遅れたこともあり、ホストファミリーも参加をすることができたため結果としてよかった。対面式に関しては、言語の壁がある家庭もあり、通訳の配置等にもう少し配慮をするべきであった。埼玉県スポーツ協会専務理事への表敬訪問は、記念品の交換を行い、埼玉県のマスコット「コバトン」の達磨を日本団からは送った。その後、ウェルカムパーティーを同施設内の食堂で実施。立食式で行い、ファミリー毎に過ごしてもらうような配慮も行った。今回、運営員を担ってくれた役員たちはいずれも過去に同時交流に参加をした方々だったため、その方々を中心にゲームを通してドイツ団とホストファミリーが交流できるようなプログラムとし、自然と会話が生まれいい雰囲気でも終了した。今回、初めて埼玉県本部としての受入れとなったため、拠点地とした上尾市のスポーツ総合センターから若干距離があるホストファミリーもいるので、ゆとりをもって早めにプログラムを終了した。(埼玉県:小林 タ紀恵)

7月27日(土) 拠点地であるスポーツ総合センター(上尾市)にホストファミリーの送迎で集合。近隣のホストファミリー同士で協力し合って送迎を輪番にして負担を減らす工夫などがされていた。拠点地から県立伊奈学園総合高校へはレンタカーで移動。1人の団員が、全体集合に遅刻をするトラブルがあった。ホストファミリーが新しくなった日程表を見落としており、集合時間を間違えていたことが原因であった。直接会場に送り届けてもらったが、団員からは、「正しい時間を伝えても、大丈夫！しか言われなくて、少しストレスだった」という話もあり、改めて、ホストファミリーへの翌日の時間の周知を徹底することとした。伊奈学園高校では近隣の高校の生徒も参加し、柔道のドイツ団も一緒に練習に参加をした。武術に興味がある団員達であるので、日本の

高校生と一緒に柔道体験ができたことは非常に良い経験だったとドイツ団も話してくれていた。また、日本人の指導者に教えてもらう経験も貴重だったと話していた。女子団員が1人、生理痛を訴え、薬を服用した。本人が普段から飲んでいる成分のものであるということで、本人の判断での服用となった。移動の途中、リクエストのあった天ぷら、うどんを食べ、午後は川越の伝統的な祭りを散策した。浴衣のレンタルが好評であったが、履ききれない下駄に足を痛める団員も多かった。チャレンジしてみたいとのことだったが、もう少し配慮が必要だった。夕方には、ホストファミリーが合流、または集合場所まで団員を送り届け解散。(同上)

7月28日(日) ホストファミリーデー。特にトラブルなど連絡はなかった。ミーティングも兼ねて、通訳さんと事務局でランチ。ドイツ団の様子や不安に思っていることなどを少しでも解消できたらと思い実施。通訳さんも初めての同時交流参加のため、疲れが溜まっていたところだったようで、話をすることができてよかった。通訳さんは交流事業の軸となる存在であり、コミュニケーションを密に取っておくことが重要であると改めて認識した。(同上)

7月29日(月) 各自ホストファミリー宅からの送迎により、スポーツ総合センターへ集合。午前中は日本団員とのディスカッションであった。ドイツ団からの寸劇によるプレゼンがあり、その後2つのグループに分かれて実施した。やはり日本の団員の多くが積極的にディスカッションに参加することに壁を感じているようであった。特に英語でのやり取りがやはり難しく、思っていることがあっても言葉にできないことが多い印象であった。全体のテーマが大きく、事前にもう少しドイツ団との打ち合わせの時間を持ち(できれば来日前)ある程度テーマを絞っていければ、日本の団員ももう少し、事前の準備ができるのではないかと感じた。お昼は、会場近くの市場に行き、グループごとに昼食をとった。午後はスポーツ活動として、モルックを実施。スポーツの強度としては高くないが、スポーツをしながらの交流としては非常にいい時間であった。また、当日誕生を迎えたドイツ団員がいたため、サプライズでお祝いをし、その時間も、団員間の距離を縮めるいい時間となった。スポーツ活動のあとは、生け花の体験を行った。どの団員も真剣に取り組んでいて、講師の先生の手直しを受けながら、それぞれが作品を完成させた。完成させた作品はその日の夜に行ったさよならパーティーでホストファミリーへの感謝の気持ちとしてプレ

ゼントにし、良い贈りものとなった。その後、大宮に移動し、レンタルスペースにてさよならパーティーを行った。ドイツ団からの発表や、自然発生的に起きたダンスタイムは非常に盛り上がった。日本のパーティーではなかなか見ることのできない光景で、最初日本人は恥ずかしがっていたが、最後はみんな楽しそうに踊っていたのが印象的であった。また、最後に4日間のスライドを作成、ホストファミリーからドイツ団へのメッセージも重なり、最後の夜を楽しみ、別れを惜しんだ会となった。全日程の中で最もプログラムが多い1日となったが、大きなトラブルもなく終了した。(同上)

7月30日(火) スポーツ総合センターに集合し、全体で集合写真を撮り、大宮駅へ移動。自由散策の時間とした。何名かのホストファミリーも同行し、各々、買い物を楽しんだり、食事を楽しんだりした。全体のプログラムの中に、自由散策の時間はほぼ取れていなかったため、リラックスした時間を過ごせていたようであった。最後、大宮駅でホストファミリーとのお別れの時間では本当に別れを惜しんでいる様子が伺え、短い時間ではあったが、有意義な交流の時間となったことを再認識した。その後、在来線で、古河駅まで送り、駅近くの集合場所で古河市の担当者に引き継いだ。大宮での自由散策の時間や在来線の移動も大変になるので、スーツケースなどの大きな荷物は事務局が車で運び、移動の簡便さをはかった。例年、距離が長くなると借り上げバスでの移動としていたが、在来線で30分程度の距離であったため、今回は電車での移動とし、荷物のみ車で運ぶこととしたが、これは取り入れてよかったと思う。費用も抑えられ、時間の有効活用にもつながった。5日間を通し、大きな事故・トラブルもなく終了することができた。また、不安を多く抱えていたホストファミリーからも多くの感謝の言葉をかけてもらい、初めて県本部として受入を実施し、不慣れなこともあったが、有意義な交流ができたのではないかとと思う。(同上)

大宮駅から電車で移動してきたドイツ団9名と古河駅で合流した。駅近くのレンタルスペース(COKOGA OFFICE)にて1時間ほど休憩し、着替え後、古河市役所へレンタカーで移動。(レンタカー:14人乗りハイエースコムーター)ドイツ団は電車移動だったが、大きい荷物は埼玉県スポーツ協会職員が車で古河市まで届けた。古河市役所古河庁舎に到着後、庁舎内の職員の歓迎を受け、教育長へ表敬訪問を行った。教育長表敬訪問の際に本交流事業の趣旨・概要説明、古河市とドイツ

団双方の挨拶を行った。表敬訪問終了後、引き続き茨城県スポーツ少年団・古河市スポーツ少年団の本部長および役員出席の上、歓迎レセプションを実施。終了後、宿泊先のホテルへ移動し、50分ほど休憩した。その後、ホテルから徒歩5分のレストランで、ウェルカムパーティー・ホストファミリーとの対面式を行った。事前に日程間の余裕を持つ方が良いとの情報があったので、スケジュールは全体的に余裕を持たせた。古河駅到着から教育長表敬訪問まで約2時間あったが、休憩や着替え・ドイツ団リーダーとの打ち合わせを行ったため、時間的には丁度良かった。各プログラムの合間で休憩時間を設けることができた。教育長表敬訪問とスポーツ少年団が主管となる歓迎レセプションは、通常であればそれぞれ10分程度で終了する式次第だが、通訳する時間を考慮しそれぞれ30分とした。結果的にそれぞれ30分ほどかかった。また、水分補給については毎日500mlペットボトルの水(硬水)を用意したが、お茶やスポーツドリンクでもよいとのことだった。ウェルカムパーティー・ホストファミリー対面式では、飲食店を貸し切りにして実施した。席次も1テーブルにホストファミリーとホームステイ予定のドイツの方を配置した。今回、ホストファミリーに英語やドイツ語の堪能な方が複数組いたため、積極的にコミュニケーションをとっていた。当日に誕生日を迎えるメンバーがおり、バースデーイベントも行い、打ち解けた雰囲気のまま会は終了した。県間移動の解釈を間違えて、初日をホテル泊としたが、1人1部屋だったこともあり結果的にはドイツ団メンバーには好評であった。

(茨城県古河市:山本 裕一郎)

7月31日(水) ホテルで朝食後、レンタカーで古河第三高校に移動。当日活動していた弓道部と吹奏楽部と軽音部を見学した。弓道は弓を触ることはできたが、安全上の問題から実際に弓を引き矢を射ることはできなかったため、ドイツ団からは体験できないことが不評だった。今後は体験中心のプログラムを考慮したい。その後の華道体験(生け花)は満足できた様子であった。校内施設を見学した後、調理実習室でお茶漬け、豚しゃぶ、サラダ、白玉あんみつなどを調理し、生徒と会食した。特にアレルギーはいなかったが、ベジタリアンのメンバーがいたため、学校側が配慮し、食材を自分で選べるお茶漬けメニューとなった。教員の方がかき氷をふるまってくれた。ここが休憩ポイントとなったが疲れがあったのか1時間ほどそこから動かなかった。学校側がいろいろ考えてくれた結果ではあるが、タイトなスケジュールに疲れも

あったため、無理に予定通りに進めなかった。結果的にテーマディスカッション 2 時間の予定が、約 1 時間に短縮となったが特に問題はなかった。英語が話せる生徒もあり、生徒会と英語部だけでコミュニケーションは問題なく、インスタグラムのアカウントや連絡先の交換などしていた。終了後、古河庁舎へ移動し、ホストファミリーと合流。事前確認で布団のレンタルを希望した家庭には事務局が一括して手配し、メンバーと同時に引き渡した。

(同上)

8月1日(木) ホストファミリーデー。特にトラブルなど連絡はなかった。関東 2 グループは先に埼玉でファミリーデーがあったため、行先やイベントのカブらないよう、配慮してほしいとホストファミリーに伝えていた。また、移動時間が長いのは好まないことも加えて伝えていた。当初は東京・埼玉方面に外出予定のホストファミリーが多かったが、実際は栃木県や海に行かれた世帯が多かった。

(同上)

8月2日(金) 各自ホストファミリー宅からの送迎により、古河市はなもも体育館に集合。スポーツ少年団とスポーツ交流を実施。(種目は剣道・少林寺拳法・ミニバスケットボール)ドイツ団メンバーを3グループに分けて、順番に3種目すべてを体験した。メンバーに帯同する通訳は少林寺拳法に配置し、ホストファミリーのドイツ語と英語の堪能な方に協力いただき、それぞれ剣道とミニバスについても言うことで言葉の問題は解決できた。3競技とも体験中心にと事前に説明していたので、メンバーからの不満はなかったと思う。体育館内のシャワー施設を利用したのち、会議室で希望者とともに弁当を食べた。後で通訳に聞いた話で、メンバーはあまり弁当を好まず、料理として提供される方が良いとのことだったが、この日の弁当は揚げ物中心の若者向け・子供向けのものであったためよかったとのことだった。幕の内などの仕出しに近いものは不評らしいとのこと。昼食後、レンタカーで篆刻美術館へ移動。移動途中のコンビニでアイス休憩を入れたのは喜ばれた。もなかや餅を使用したアイスクリームが好評だった。移動後、篆刻美術館で篆刻体験を行った。ホストファミリーの子どもに限定して一緒に体験を実施した。実際に手を動かし、自分で選定した漢字のハンコがいろいろお土産になった様子であった。レンタカーで、さよならパーティー会場(公共施設)まで移動。さよならパーティーでは、ドイツ団メンバーからの武術パフォーマンスの披露があった。また、交流期間中の写真・動画を

事務局職員が編集してムービーとして上映したため、盛り上がった。パーティー終了後、ホストファミリーと帰宅。この日の夜 11 時頃にホストファミリーから連絡が入り、メンバーの一人(15 歳女性)が嘔吐していると連絡があり、リーダーの宿泊先ファミリーと連絡を取り対応した。嘔吐したものの、発熱等なく、少し落ち着いたため、病院等は受診しなかった。原因は、生理痛(頭痛)のため日本の鎮痛薬を飲んだことによる副作用もしくは食べ過ぎがあったと思われる。リーダーもドイツ団本部と対応を協議し、様子を見る対応となった。薬の使用については特にアナウンスしていなかったが、今後は日本スポーツ協会から事前に、薬の服用や通院について具体的な指示は必要と思われる。

(茨城県古河市:峰 淳一)

8月3日(土) 古河庁舎に集合し、レンタル布団を返却。全体記念撮影を行った後、ショッピングモールに行きたいとの要望があったため、当初の予定を変更し、午後の電車の時間まで埼玉県羽生市にあるショッピングモールへ移動。1 時間ほどの自由行動の後、モール内で昼食をとり、古河駅に帰着。予定通りに古河駅を発ち、品川へ向かった。移動中の配慮とまではいかないが、前日程でお土産にチョコレート菓子を買って入っているメンバーがいたため、車中でチョコレート保管のために大きなクーラーボックスを用意した。

(同上)

スキー

ー北信越グループ

福井県
大野市

富山県
入善町

日 程

7月26日(金) 福井県(大野市:奥越青少年自然の家)

越前大野駅でドイツ団と合流／大野市役所へ表敬訪問／奥越青少年自然の家で歓迎レセプション・ディスカッション・レクリエーション／ミルク工房奥越前で夕食・星空ハンモック体験

7月27日(土) 福井県(大野市:ホームステイ)

そば打ち体験／弓道体験／茶道体験／自由時間(ホストファミリー)

7月28日(日) 福井県(同上)

ホストファミリーデー(東尋坊、恐竜博物館、ショッピングセンター ほか)

7月29日(月) 福井県(大野市:フレアール和泉)

禅体験(禅、写経、写仏)・郷土料理体験／ニューススポーツ体験／さよならパーティー(途中ドイツ団のダンス披露)



大野市長表敬 (大野市役所)



禅体験 (瑞祥寺)



ニュースポーツ (エキサイト体育館)



さよならパーティー (フレアール和泉)

7月30日(火) 富山県(入善町:〔指導者〕かしはら館、〔団員〕ホームステイ)

大野市役所にて挨拶／バス移動／福井駅から新幹線で富山県へ出発／黒部宇奈月温泉駅で合流／入善町役場表敬訪問／入善町内観光／歓迎夕食会

7月31日(水) 富山県(同上)

桃の収穫体験／ファミリーレストランで昼食／ホストファミリーとスポーツ交流(カローリング、ビーチボール)

8月 1日(木) 富山県(同上)

海水浴／回転寿司で昼食／スーパー銭湯入浴／ショッピングセンターで買い物

8月 2日(金) 富山県(同上)

空手道体験／富山県スポーツ少年団リーダー会とレクリエーション活動、ディスカッション／ホストファミリーと七夕祭り

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)
ホストファミリーと自由時間・お別れ写真撮影／黒部宇奈月温泉駅でお見送り／品川プリンスホテルへ移動



入善町観光



海水浴



歓迎夕食会



スポーツ交流(空手)



桃の収穫体験



スポーツ交流(アルティメット)

7月25日(木) 全体プログラム(前半)の会場であるザ・ホテルプリンス京都宝ヶ池でドイツ団と夕食、打合せ。まずは通訳さんとプログラム全体について話をしながらコミュニケーションを取った。ドイツ団と通訳と県事務局で自己紹介を行い、翌日のロビー集合時刻やルームキーの回収についての共通理解を図る。通訳を通し、できるだけ一人ひとりとコミュニケーションを取るよう努めた。翌日以降訪れる施設や体験等の簡単なパンフレットをドイツ語版で作成しドイツ団に渡すと、皆食い入るように確認し喜んでた。通訳の方にも渡すと喜んでた。今回、北信越の通訳さんが初ということで、かなり緊張されていた。翌日の歓迎レセプションでの県本部長および開催市町本部長のあいさつ原稿は渡したが、市長表敬時の市長、議長のあいさつは短いため原稿の準備はなかった。話を聞くと、市長表敬が一番緊張するというところで、慣れていない方へは簡単な原稿を渡してあげてもよいのかなと感じた。(福井県:水上 恵介)

7月26日(金) 全体プログラム(前半)の会場から在来線→新幹線→在来線と乗り換え受け入れ地の大野市へ移動。来日後数日経っていることもあり、ドイツ団の皆さんは時差ボケ無く、元気な様子。昼食は福井駅から越前大野駅までの電車で弁当を予定していたが、予想以上に電車が混んでおり電車内では食べることができず、大野市についた後のバス移動時に食べるようになった。平日は普段ほぼ座れるという情報の基、昼食の計画をしていたが、別の方法を検討しておくべきであった。それに伴い、大野市表敬時には待たせることになってしまった。また、ドイツ団の送迎については、マイクロバスを準備していたが、あまりにも荷物が多かったため、入りきらず、別の公用車にも荷物を入れた。その後の移動では主に荷物用とハイエースを利用したため、そのような車があると何かあった時に対応しやすいと感じた。その他、途中で喉が渇いた団員もいたため、急遽麦茶を購入したが、あまり口に合わないようでほとんどの団員が手を付けなかった。ドイツでは水や炭酸水をよく飲むということであったので、27日(土)の弓道体験や29日(月)のニュースポーツ体験等の際には水に加えて炭酸水も準備することとした。

(福井県:水上 恵介、大野市:末永 大和)

7月27日(土) スターランド阪谷で、ドイツ団員とそれぞれのホストファミリーがグループになりそば打ち体験を行った。参加できないホストファミリーもあったので、

ドイツ団員同士のグループもあった。楽しそうに体験しており、体験後は自分たちの打った蕎麦を食べた。口に合ったかどうかははっきりとは分からないが、美味しいと言う団員はいた。食事後は施設の方のサプライズで、オカリナ演奏団が登場し、歌と演奏を披露してくれた。サプライズ後はさらに店主が飼っているヤギ2頭が登場し、ドイツ団員がかなり興味を示し、餌をあげていた。その後、大野市エキサイト広場へ移動し、弓道を体験。かなり興味を示すドイツ団員が多く、何度も何度も弓を引き、的を狙っていた。会場は屋外ということで、かなり暑かったがこまめな水分補給や業務用扇風機等で対策を講じた。結果、体調不良者は出なかった。茶道体験は同じく大野市エキサイト広場の会議室および和室で行った。ドイツ団は慣れない手つきで慎重にお茶を入れていた。

(同上)

7月28日(日) ホストファミリー説明会時には、参加者より恐竜博物館や海、川、東尋坊、永平寺等の意見があがっていた。寒冷地から来訪するドイツ団員に大野の暑さが耐えられるか心配しているホストファミリーもいたが、実際、ホストファミリーデーに訪れたところを聞いた際、勝原園地(川)に行っていた方が数組いた。いずれも川の中に入り、楽しんでたとのことであった。その他にも、海や釣り、東尋坊、越前大野城、ダム、そして恐竜博物館など屋外での活動を含め市内外の様々な場所に訪れていた。また、ホストファミリー宅では、お好み焼きやたこ焼き、寿司をはじめとした日本ならではの食事やスイカ割り、花火、家庭用ゲーム等で子どもたちと楽しく交流している様子も伺えた。中にはお好み焼きソース等の味を気に入り、実際にスーパーで購入している団員もいた。(福井県大野市:末永 大和)

7月29日(月) 禅体験については、事前に資料を渡していたこと、説明を聞くよりも実際に体験した方が早かったこともあり、説明をあまり必要としなかった。20分間ほど禅をし、静寂な時間が流れた。終了後、参加者に20分間ほど実施していたことを伝え、体感時間よりも長かったことに驚く団員及びホストファミリーがいた。禅体験終了後は残り時間を使って写経写仏の体験してもらい、各々集中して書き写していた。また、1名宗教上の理由から体験を断った団員がいた。禅・写経写仏体験終了後は徒歩で昼食会場に移動し、郷土料理を食してもらった。店の前では店員がサプライズでサバの炭火焼きを披露し、団員もその様子をじっくりと見てい

た。そのサバは食事でも提供され、捌き方を習った後、難しそうにしながらも一生懸命捌いていた。食事後は、エキサイト広場に移動し、ニューススポーツ体験(モルック・囲碁ボール・インドア雪合戦)を実施した。大野市スポーツ推進委員8名を指導者として招き、その他にも大野市スポーツ少年団員、市内高校生にも参加していただき、総勢53名で交流した。モルックについては既に知っている団員もいたため、スムーズに進めることができた。また、囲碁ボールやインドア雪合戦についても、複雑なルールではないこと、事前に資料を渡していたこともあり、円滑に進めることができた。終了後、団員から、空き時間を使って鬼ごっこをしたいと希望があったので、10分程度参加者全員で氷鬼を実施した。その後、シャワー等で時間がかかり、集合時間が遅くなってしまった。さよならパーティー時のBBQは大野市と県の職員が焼き場を担当。焼き場は3つあったが、参加者約30名に提供するには足りなかった。また、量が足りず全て焼き切った後にお腹をすかせているドイツ団員がいた。(同上)

7月30日(火) 宿から大野市役所への移動の際に、せっかくなので大野市のスキー場を見てもらうため、ルートを変更して九頭竜スキー場の前を通った。その後、大野市役所へ移動し、課長挨拶。終了後、福井駅へ移動。到着後、改札を通るまでに10分程時間が合ったため、ドイツ団はコンビニで軽食を購入したり、トイレに行ったりしていた。新幹線の座席は切符の手配が遅れた関係もあり、車両の真中付近となった。荷物がかかなり多かったため、JSPO さんが手配してくださったように車両の最後列の手配ができると良かった。出発後、富山県の担当者へ予定通り福井を出発したことを連絡。

(福井県:水上恵介、大野市:末永 大和)

福井県から新幹線でやってくるドイツ団 10 名を黒部宇奈月温泉駅で迎え入れた。大きな荷物を持ち改札に向かって歩いてくる姿に遠くから手を振ると、小さく笑顔で手を振り返してくれた。それでも、日本に来て1週間。全員に少し疲れが見えるような気がした。その後、入善町内の食事処で昼食をとり、そこで通訳との簡単な打ち合わせを行なった。入善町役場へ移動し、庁舎入り口で出迎えた入善町のマスコットキャラクター「ジャンボ〜ル3世」に歓喜の声が上がった。可愛いキャラクターは、言葉を必要とせずとも喜ばれたようだ。表敬訪問では、入善町長をはじめ、受け入れ側の紹介、ドイツ団員の紹介を行なった。町内観光では、「杉沢の沢スギ」を散策し、国内唯一の植生をもつ沢スギや、海底林に興味を示し

ていた。老舗の料亭「清八楼」では、お抹茶と和菓子を堪能し、ここでも日本庭園を楽しむ姿が見られた、自然に対する興味が強いと感じた。外にいたことが多かったため、蚊に刺された人が多く、虫よけスプレーをかけておくべきだった。夜は、ホストファミリーとの対面式を兼ねた歓迎夕食会を行い、ここでドイツ団からのダンスの披露も行なった。ドイツ団員は、受け入れ先のホストファミリーと同じテーブルで交流を図れるようにした。言葉の心配はあったが、簡単な英会話や携帯電話の翻訳アプリを活用して、コミュニケーションをとる様子が見られ、和やかな雰囲気があった。テーブルごとに写真を撮って回ると喜ばれた。歓迎夕食会終了後は、そのままホストファミリーと帰宅した。(富山県入善町:若島 風沙)

7月31日(水) 集合場所の総合体育館には、全員が時間通りにホストファミリーに送られ集まった。何事もなく入善町での1泊目を終えられたようで安心した。

まずは、桃の収穫体験へ向かった。桃の取り方を習っている際には、許可を取ってから1個の桃をドイツ団員で順番に食べる様子が面白く、男女関係なくそれをできることが微笑ましかった。肩車をして高いところの桃を取ろうとするペアや、大きな桃を1人でじっくり探す人、個性があった。自分で収穫した桃は、器用に包丁を使って剥いていた。その後は、「舟見城」と茅葺き屋根が残る「山の本陣」へ移動した。舟見城の最上階から見下ろすことができる入善町の景色をじっくり堪能している様子があった。昼食は、ファミリーレストラン「ココス」へ行き、ロボットが音楽を鳴らしながら料理を運んでくる姿に面白がっていた。また、ドイツには、かき氷が無いようで、お腹いっぱいと言いつつも1人が頼んだかき氷を、結局は皆で食べていた。午後は、カローリング、ビーチボールでホストファミリーとスポーツ交流を行なった。カローリングは、ルールが複雑であり、より簡単なルールで行う予定ではあったが、説明に手間をかけてしまった。言葉での説明はなかなか伝わりづらく、実際に競技してみる方がより良かった。ビーチボールは、バレーボールに近い競技であるため、説明がなくても勝手に楽しく遊んでいる程で安心した。スポーツ交流後は、入善町特産のジャンボ西瓜を振る舞い、ホストファミリーと共に帰宅した。(同上)

8月1日(木) 総合体育館に集合後、海水浴へ向かった。ドイツ団員は、集合時からすでに水着を着用しており、準備万端だった。途中のお店で、追加の浮き輪を購入し、海岸へ向かった。浮き輪の空気入れを皆で交

代したり、待ちきれずに海岸沿いをひたすらに歩いて行ってしまう人がいたり。早速海に入るドイツ団は、とても楽しそうで、約1時間しっかり遊んでいた。海へ行くことは、事務局側として、安全面からより注意しなければならない活動として気を張り、海と一緒に入ることができるスタッフが帯同した。海水浴場の遊泳可能区域を出ないよう団員もルールを守り、怪我なく楽しめたことに安堵する。ドイツ団員が家に忘れた財布をホストファミリーが届けに来た際は、本当の我が子のように接する様子が見られ、微笑ましかった。昼食は、回転寿司へ。福井県でもホストファミリーと行ったのか、お店のシステムをよく理解している人もいれば、待ちきれずに他のお客さんの注文品を取ろうとする人もいて焦ったが、その後ルールを理解し食事を楽しんでいた。タッチパネルは英語表記にし、食べたいものを好きに注文した結果、最後はお皿のタワーができていた。皆の満足した顔といい、写真の撮りがいいがあった。昼食後は、皆でお風呂入りに行った。特に、公衆浴場という場にも抵抗は無い様子で、かけ湯等のルールを教えると、その後はお風呂を大いに楽しんでいた。ショッピングセンターでの買い物は、それぞれに買いたい物を探した。お土産用にスナック菓子を大量に買う人や、日本が大好きで浴衣一式を買う強者までいた。特に印象的だったのは、5本指の靴下が人気だったことだ。後日、ホストファミリーからも5本指の靴下を買ってきて自慢していたと聞いた。買い物後は、総合体育館へ戻り、ホストファミリーの迎えで帰宅した。(同上)

8月2日(金) 午前は、空手道協会の子供達とスポーツ交流を行なった。用意した空手着は、事前の調査で聞いた身長サイズで用意したが、パスポートに記載されている身長だったらしく実際は20cm以上身長が伸びていた。ドイツ団員の中で交換するなどで対応していただき、無事に全員着ることができた。ドイツ団自ら集合写真を撮るなどしており、喜んでいただけたようだった。空手道は、見よう見真似でも行うことができ、ドイツ団は大変真面目に取り組んでいた。昼食はお弁当で済ませ、ドイツ団員は疲れからか、お昼寝をしていた。休憩時間を長めに予定しておいて良かった。期間中、各種飲料を用意していたが、大半はミネラルウォーターを飲んでいて、午後からは、県スポーツ少年団リーダー会のメンバーらや、ホストファミリー宅の子どもを交えて自己紹介ゲーム等のレクリエーションを行なった。特にフリスビーバスケは、ドイツ団員にもルールが分かりやすく、笑顔を見せながら全力で楽しむ姿が見られた。その後、県スポーツ少

年団リーダー会の中学生とディスカッションを行なった。会場にはWi-Fi環境が無いため、ドイツ団だけでもWi-Fiをつなぐことが出来るように準備した。夕方からは、ホストファミリーとともに入善ふるさと七夕まつりへ行った。各ホストファミリーが団員に浴衣を着せてくれたため、ドイツ団員は和装文化を楽しめたのではないかと感じる。最後は、会場に特設されていたウォーター 슬라이ダーでホストファミリーと大いに楽しんだ様子が見られた。(同上)

8月3日(土) 最終日は土曜日ということもあり、集合時間を遅らせてホストファミリーの自由時間をとった。家でのんびりする家庭や海岸へ行った家庭もあったようだ。東京への新幹線に乗り遅れることが無いよう、集合場所を総合体育館とした。ホストファミリーと集合写真を撮り、ドイツ団1人ひとりの感想を聞き、ホストファミリーとの別れを惜しむ場として十分に時間をとることができた。大半のホストファミリーとは、ここでお別れだったが、駅まで赴いて見送りをしたいという家族もいた。余裕をもって駅に到着したが、大きな荷物を持った彼らとホームに向かうのは中々に時間がかかった。あっという間にドイツ団は新幹線に乗り込み、東京へ向かって行ってしまった。事務局としてもドイツ団員たちとの別れを惜しむことができたのは、単なる帯同者としてではなく、受入れ手として彼らに何をしてあげられるかを考え、一緒にこの事業を楽しむことが出来たからではないかと考える。(同上)

ヴェルテンバルク

ー東海グループー

岐阜県
岐阜地区

静岡県
富士宮市

日 程

7月26日(金) 岐阜県(羽島市・岐阜市:ホームステイ)

岐阜羽島駅でドイツ団と合流／羽島市民会館第3会議室にて歓迎の食事会／羽島市民会館2階ホールにて羽島市・羽島郡のスポーツ少年団団員とボッチャの交流会／岐阜市役所にて岐阜市長表敬訪問／ホームステイ対面式

7月27日(土) 岐阜県(岐阜市:ホームステイ)

岐阜市内観光(岐阜大仏・ロープウェイ・岐阜城・リス村・うかいミュージアム訪問)／中部学院大学学生とディスカッション

7月28日(日) 岐阜県(同上)

ホストファミリーデー

7月29日(月) 岐阜県(本巣市:ホームステイ)

美濃もとす太鼓保存会による和太鼓体験／生け花見学／悟道館による合気道体験・居合抜刀道の見学



ボッチャ体験 (羽島市)



ディスカッション (中部学院大学)



岐阜公園



合気道体験 (本巣市)



和太鼓体験 (本巣市)

7月30日(火) 静岡県(富士宮市:ホームステイ)

各務原市スポーツ少年団と弓道体験／さよならパーティー／店舗駐車場でお見送り／静岡県へ移動／岐阜県各務原市でピックアップ／市長表敬訪問／ウェルカムパーティー

7月31日(水) 静岡県(同上)

富士宮北高等学校相撲部とスポーツ交流(相撲)／にじまつかみどり体験／バーベキュー／ダルマ絵付け体験

8月 1日(木) 静岡県(同上)

ホストファミリーデー

8月 2日(金) 静岡県(同上)

富士宮西高等学校ワングル部とスポーツ交流(ワングル)／富士宮東高等学校生徒と文化交流(おにぎり作り)／同高校生徒とディスカッション／同高校美術部と文化交流(黒板アート)／さよならパーティー

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

浅間大社参拝／イオン散策／品川プリンスホテルへ移動



弓道体験 (各務原市)



ダルマ絵付け体験 (杉山ダルマ店)



相撲交流 (富士宮北高等学校)



ニジマスつかみどり体験 (杵塚養鱒)



交流した学生たちと (富士宮東高等学校)



黒板アート交流 (富士宮東高等学校)

7月26日(金) ドイツ団10名(通訳含む)と岐阜羽島駅にて合流し、羽島市民会館第3会議室にて歓迎の食事会をした。ドイツ団の飲み物でお茶とオレンジジュースを人数分準備したが、お茶はあまり飲んでいない様子だったのでジュースを準備すればよかったと思う。食事会后、2階へ移動し羽島市スポーツ推進委員会協力のもと、羽島市・羽島郡のスポーツ少年団員63名とボッチャの交流をした。ドイツ団員、スポーツ少年団員ともに初めは緊張しているようにみえたが、ボッチャ交流が始まるととても楽しんでいる様子だった。交流会後、ドイツ団よりスポーツ少年団員へのプレゼントがあり、スポーツ少年団員はとても喜んでいて。(岐阜県羽島市:豊島 優)

岐阜市役所にて岐阜市長表敬訪問を行い、ドイツ団員の自己紹介、地方プログラムで学びたいことを共有した。岐阜市役所に到着後、着替えや手土産の準備などにより表敬の時間が押してしまった。事前にドイツ団と表敬訪問の流れについて直接連絡を取り合えると良かった。(岐阜県岐阜市:武藤 拓弥)

7月27日(土) 岐阜公園周辺の観光を行った。集合時間に遅れる家庭があったため15分ほど遅れて出発した。岐阜大仏や岐阜城見学は、数名のドイツ団員が興味を持たず退屈そうにしていたが、リス村では楽しそうにリスと触れ合っている様子であった。猛暑日かつロープウェイを下車してから岐阜城まで軽く登山をしたので、かなり疲労が溜まっている様子だった。そのため川原町散策を取りやめ、直接うかいミュージアムへ移動した。各種チケット購入の間、待機時間ができてしまったので事前に購入しておくのと効率的であった。※他市のホストファミリーが急遽当日参加されたので、事前に正確に参加者数を把握したい。通訳の方がドイツ団を上手に率いてくださったため、コミュニケーションの不安は感じなかった。(同上)

7月28日(日) ホストファミリーデー

7月29日(月) 美濃もとす太鼓保存会による和太鼓の実演では、パワフルな演奏に圧倒されているようにした。和太鼓体験では、1曲演奏することを目標にし、保存会の指導を受け、熱心に練習をしていた。ドイツ団の皆さんの飲み込みが早く、最後に素晴らしい演奏をすることができた。ドイツ団からは、「太鼓はスポーツであり、素晴らしい芸術」、「とても楽しい。忘れられない思い出」などの感想を頂いた。昼食の際、お座敷で生け花の実

演を行い、日本のおもてなしの心を感じて頂いた。

(岐阜県本巣市:八木 康太)

午後からは、合気道の体験と居合抜刀の見学。合気武道スポーツ少年団の年代が同じ中学生高校生と交流し、双方ともに和気あいあい良い交流になった。真夏の昼間の体験のため、エアコンのある場所は必須のため、市内公共施設ではなく本部道場で行った。最初の実演で、投げられるところを見て少し尻込みしていたようだったが、講師の巧みな話術と身を守るための術であることを説明してからは、「やりたい!」と積極的に体験していただき、「もっとやりたかった」「人を投げることは良くないと思いますが、投げる技術がいくつかあって、その少しの部分を実感出来てよかった」「難しかったけど、いざというときに役に立ちそうです」など感想をいただいた。居合の抜刀見学では、日本刀による実演を近い位置で見学し、とても印象に残った様子で「目の前で見るのができ感動しました」と感想をいただいた。暑い日だったので、飲物はミネラルウォーターを中心に1人数本ずつは用意し、アイスクリームや梨も好評だった。言葉は、通訳さんが間に入っていただけのも幸い、身振り手振りとスマイルで通じていた。(瑞穂市:藤橋 佐智子)

7月30日(火) 各務原市弓道場で各務原市弓道協会の進行と、岐阜各務野高校弓道部の協力により弓道体験を行った。実射の体験は危険なため行わなかったが、講師や岐阜各務野高校弓道部の実演見学や、弓道の歴史を学んだ。また、胴衣を着て弓を引く練習で弓にとっても興味があったようで、講師へ熱心に質問などをしていた。ただ交流を図るためスポーツ少年団中学野球部員にも参加してもらっていたが、ドイツ団への説明が主となってしまい、うまく交流を図ることができなかった。さよならパーティーは岐阜地区最後のプログラムで、ホストファミリーと共に各務原市内の飲食店で開催した。平日であったがたくさんのホストファミリーにも参加していただき、それぞれの家庭で過ごした思い出話などで盛り上がりつつあった。ピュッフェ形式は、好きなものが選択できるのでドイツ団にも好評であった。パーティー後は、ドイツ団はホストファミリーとのお別れを惜しみながら、駐車場に待機していた富士宮市のバスに乗り込み静岡県へ向け出発し、すべてのプログラムが終了した。全体を通して、各関係者のご協力により大過なく無事に終えることができ、特にホストファミリーの多大なるご協力には感謝の念に堪えない。(岐阜県各務原市:永井 吉浩)

岐阜県各務原市でドイツ団 9 名と合流した。特に疲

れている様子はなく、バス車内でもずっとおしゃべりをしているようだった。車内で食べるお菓子を用意していたが、直前の昼食で満腹のようで、バスでは配らなかった。途中給油が必要となり、行程に遅れが出てしまった。市役所到着後、揃いの T シャツに着替えるための控室を用意しておいてよかった。市長表敬訪問では、通訳を通じて、本事業の目的などを市長ら出席者に伝えたウェルカムパーティーは、ホストファミリーの顔合わせも兼ねて立食形式で行った。歓迎の挨拶を 2 名にしたため式典パートが間延びしてしまった。挨拶の人数を減らすか、事前に挨拶文を準備しておくかと思った。ホストファミリーとは、ほとんど通訳を介さずコミュニケーションを取ることができていた。残った料理を持ち帰れるようにプラスチックバックを用意しておいてよかった。

(静岡県富士宮市:太田川 実沙)

7月31日(水) 相撲体験はとても盛り上がった。特に好奇心旺盛な男性団員は相撲部員に何度も挑み、勝ち負けにかかわらず相手を称えていた。熱戦のあまり足を負傷する団員がいたが、持参した救急箱で対応した。体験終了後は、相撲場横にあるシャワー室でシャワーを浴びたため市民体育館でのシャワーをカットした。次の行程までに時間ができたため、バーベキュー会場近くの滝へ行き、水浴びをした。ニジマスのつかみどりは、水が想定以上に冷たく、団員にとっては厳しい環境であった。獲ったニジマスはその場で捌いてもらい塩焼きにしたが、団員の半分は食べてくれなかった。他にもニジマスの刺身などを用意したが、やはり魚はあまり好きではないようだった。肉ややしそばの材料も用意してあったものの、想定外に団員の食が細くやや余りが出てしまった。ダルマ店では、カタカナで自分の名前を描く体験をした。想定よりも早く終わってしまい、市役所へ戻る時間が大幅に早まってしまった。そのため、ホストファミリーが迎えに来るまでの時間を持て余してしまい、団員たちを待たせてしまった。(同上)

8月1日(木) 終日ホストファミリーデー。1 件だけホストファミリーから問合せがあったが、特に問題なく過ごしている様子。(同上)

8月2日(金) ワンゲル部との交流で、特にボルダリングが盛り上がっていた。部員を凌駕する勢いで壁を登る姿に、高校生たちも驚いていた。先生が指示することなく部員主導で動いてくれていたため、学生同士の交流

ができていた。次の交流の前に市民体育館でシャワーを浴びられたことが好評だった。おにぎり作りでは、通訳を頼らずに生徒たちが説明をするなど、積極的な交流が見られた。おにぎり文化はドイツでもある程度浸透しているらしく、抵抗なく食べてもらえた。テーマディスカッションは、進行の仕方がドイツ側から共有されていなかったため、高校側が思い描いていたものにならなかったように感じた。黒板アートでは、部員たちから進行の案内がなく、ドイツ団が困惑してしまう場面があった。最後にはアートを完成させ、団員たちも満足そうだった。この日は行程がスムーズに進み、さよならパーティー会場にちょうどいい時刻に到着した。しかし、道路状況により多くのホストファミリーが遅れて到着したため、急遽開始時刻を遅らせる対応をとった。さよならパーティーでは、ホストファミリーと宿泊している団員をそれぞれ同じテーブルに配置し、食事を楽しんでもらった。終始笑顔の絶えないパーティーとなり、団員とホストファミリーの絆を感じられる良い機会であった。(同上)

8月3日(土) 余裕をもった集合時間を設定したため、団員とホストファミリーの別れの時間を十分にとることができた。浅間大社での参拝と散策は暑さのため早めに切り上げ、イオンでの買い物のおち富士宮やしそばを昼食とした。やしそばの味は人気であったが、小規模な店のため提供時間に差ができてしまった。(同上)

重量挙げ

一近畿 I グループ



日程

7月26日(金) 滋賀県(大津市:ホームステイ)

JR 大津駅でドイツ団と合流／一会和堂セミナーハウスで絵付け体験(大津絵)／滋賀県青年会館でホストファミリーと合流 welcome パーティー

7月27日(土) 滋賀県(同上)

ホストファミリーデー

7月28日(日) 滋賀県(大津市:東横INN京都琵琶湖大津泊)

オーパルオブテックス(株)でカヌーとヨシ笛づくり／大津市リーダー会とディスカッション／皇子が丘公園体育館で空手道大津本部スポーツ少年団と空手体験／あたか飯店でさよならパーティー

7月29日(月) 滋賀県(同上)

大津市役所へ表敬訪問／膳所焼美術館でお茶体験／大津港でミシガンクルーズ



Manma (昼食)



オーパルオブテックス(株) カヌー体験



大津市役所へ表敬訪問



マクシミリアン・ティム・ヤーロン&川添家・中村家



なぎさテラスで夕食 (chocola)

7月30日(火) 兵庫県(姫路市:姫路市宿泊型児童館星の子館)

兵庫県姫路市へ移動／JR 姫路駅でお別れ／姫路駅でドイツ団と合流／姫路市蔵合福祉会館にて歓迎会およびJSPO-ACP体験／兵庫県リーダー会とイオンタウン姫路にてショッピング

7月31日(水) 兵庫県(同上)

兵庫県立飾西高等学校にてテーマディスカッションおよび部活動体験／星の子館にて望遠鏡で夏の1等星観察

8月 1日(木) 兵庫県(姫路市:太子ヴィラSUN庭園)

姫路市役所へ表敬訪問／姫路駅ピオレお土産館にてショッピング／浴衣着付け体験／国宝姫路城周辺の散策と登城／太子ヴィラにてお好み焼き作り体験／姫路市スポーツ少年団リーダー会と宿泊

8月 2日(金) 兵庫県(同上)

兵庫県立武道館にてトレーニング／姫路市平和資料館および慰霊塔見学／姫路市立水族館見学／姫路市スポーツ少年団リーダー会と宿泊

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

太子ヴィラにて壮行会／姫路駅ピオレお土産館にてショッピング



テーマディスカッション



休憩中



姫路城の前で ①



姫路城の前で ②

7月26日(金) JR京都駅から移動して来たドイツ団6名と大津駅で合流しました。軽トラへ自分の大きな荷物を軽く持ち上げる姿を見て重量挙げのすごさを感じました。ドイツ団の荷物は、welcomeパーティー会場で預かっていただくことなので役員が運んでくれました。ドイツ団と他の役員は、大津絵付け体験会場近くの家庭の店に行きました。前もってお寿司というリーダーからの希望でチラシ寿司を作っていただきました。他和食のおかずもあり、皆さん残さず食べてくださいました。お店の方も気さくな方で片言の英語で楽しくドイツ団と会話をしてメニューを説明していただきました。大津絵の絵付け体験では、大津絵の歴史の説明を聞きながら和菓子とお茶をいただきました。そして魔除けになる鈴に鬼の絵大津絵を自分の好きな色で絵付け体験をしました。みんな真剣に黙々と描いて、とてもきれいで素敵な世界に一つしかない魔除け鈴ができました。お土産の一つになりました。大津絵を書いている姿を見学し、長等神社にお参りました。Welcomeパーティーで、ホストファミリーとご対面。ここから、ホストファミリーである家族の一員となりました。最初は、笑顔やコミュニケーションがなかなか取れなくて心配をしていましたが、ドイツ団の会話の中でジンギスカンの会話を聞き、ジンギスカン知ってる？って聞くとうなずいたので、大津市リーダー会がレクを考えてくれていたのですが、みんなでジンギスカンを踊らない？と言うとわかっていただき日本のジンギスカンをみんなで踊りました。ホストファミリーもドイツ団もとても楽しく笑顔満開でとても盛り上がりました。その後、ドイツのジンギスカンを教えていただき、みんなで踊りました。楽しかった時間から解散し、それぞれのホストファミリーの家に向かいました。(滋賀県大津市：山本 由美)

7月27日(土) この日は、ホストファミリーでの出来事となります。(同上)

7月28日(日) ドイツ団は、各ホストファミリーと一緒にオーパルオブテックス(株)ヘカヌーとヨシ笛づくり体験にきました。カヌーでは、一人乗りのカヌーにのり、一例に並びカヌーの上を渡り歩くドイツ団、びわ湖に落ちるドイツ団リーダー。カヌーで鬼ごっこもしました。その後、プールでキャーキャーと遊びました。その後、ヨシ笛づくりに挑戦。講師の話をよく聞きヨシ笛が完成し、音もすっかり鳴りました。ここで、ホストファミリーとお別れです。濡れた服や洗濯物を持って帰るよと家族の一員としてドイツ団に声掛けもしていただきました。さて、お昼ご飯、とて

もお腹がすいていたのか、ご飯のお代わりを塩をかけて食べているドイツ団の男の子ふたり。とてもよく食べる二人と知りました。大津市リーダー会とディスカッションをし、ドイツ団から見て日本のいい所と国の違いを知り、ジェンダーについても話をしました。さて、つぎは、空手道大津本部スポーツ少年団と空手体験の為、皇子が丘公園体育館へと向かいました。大津市リーダー会は、夜のさよならパーティーに向けて、ドイツ団一人一人への二日間のアルバム作り&大津市役員とホストファミリーからのメッセージ(プレゼントサプライズ)を皇子が丘公園体育館の会議室で写真貼り付けをしてくれました。その間、ドイツ団は、空手道着に着替えて、正座を教わり空手の見学をしました。正座は、すぐにあぐらとなりリラックスする姿や、最後まで正座をするドイツ団もいました。さあ、つぎは、空手を実際に指導者に教わりながら、弱々しいから、強さを出してきました。あたら飯店(中華)で、さよならパーティーです。ホストファミリーと今日でお別れです。大津市リーダー会からのサプライズ、アルバムとメッセージ記載をしながら会話と写真撮影です。会話はなかなかとまりません。最後になりました。お店からホテルへ向かうドイツ団に手を振るホストファミリーたちの寂しそうな顔が忘れられません。今でも家族の一員のように心配したり、きにかけたりしてくれています。今頃どうしているかな・・・元気かな・・・とわたしも同じおもいです。

(同上)

7月29日(月) ホテルへ、ドイツ団を迎えに行き、大津市役所へ表敬訪問に伺いました。市長から、ドイツ団へどこへ行きましたか・・・？の質問でほとんど、ホストファミリーが連れて行って下さった場所を話しされました。写真の報告をホストファミリーからいただいていたので、すぐにわかりました。ホストファミリーとの思い出は、家族一員と受け入れていたので、とても深く感動し、心に残っているのでしょう。ホストファミリーからの写真や言葉の報告をみて強く感じました。ホームステイの経験は、非常に重要です。私も過去にドイツ団のホストファミリーとなり、とてもいい経験をしました。たくさんの方々に経験をしてほしいと思います。次は、お茶体験をしに移動しました。説明を受け、お茶をたてていただき、和菓子もいただきました。次は、ドイツ団一人一人にお茶をたてていただきました。正座をし、静かに教わりながらできました。その後、館長から、一人一人の似顔絵をイラストで色紙に書いていただいたものをドイツ団にプレゼントされ、とても似ているイラストでみんなビックリして喜んでいました。お昼

を食べに、ミシガンクルーズ近くのアーカスへ行きました。お昼を食べ、ゲームセンターで自由行動としました。UFOキャッチャーで盛り上がり、店員さんに取りやすく何回もして下さりゲットし、大喜びするドイツ団の男の子たちでした。女の子は、カラオケにいていました。大津港に向かいミシガンクルーズを楽しみました。琵琶湖の景色をゆっくりと見ながらくつろぎました。船を降り、とても暑かったので、ロッテリアでデザートを食べて休暇タイム。その後、夕食へなぎさのテラスへ向かいます。ドイツ団は、横並びで琵琶湖を見ながら夕食タイム。ホテルへ送り、今日も一日お疲れ様でした。（同上）

7月30日(火) ホテルへ大津市リーダー会と一緒に迎えに行き、歩いて JR 大津駅に行きました。大きな荷物は、軽トラで役員が運んでくれました。役員とリーダー会は、ドイツ団と大津駅でさよならをし、私と本部長が JR 姫路駅まで送り、姫路駅で、姫路市をお願いをし、ドイツ団 6 人とお別れをしました。（同上）

姫路駅にてドイツ団と合流。疲れも見られず。姫路市総合福祉会館にて兵庫県リーダー会、姫路市リーダー会との歓迎会を行う。最初は双方緊張が見られたが日本式ジャンケンを行ううちに緊張がほぐれドイツ VS 日本にて勝負をしドイツ団が勝利した。最後にリーダー会主導にて ACP、ドイツ団からもダンスを習い楽しく歓迎会は終了した。又、翻訳アプリを使用し兵庫県リーダー会と共にショッピング体験を実施したがスムーズに終了した。（兵庫県姫路市：井元 愛）

7月31日(水) 兵庫県立飾西高等学校 STEAM 探求科と午前中ディスカッション実施。ドイツ団よりテーマの提示がなく STEAM 探求科が進行をおこなった。午後からはバトミントン部、書道部の体験を実施。バトミントン体験では白熱した試合をして盛り上がっていた。書道体験ではドイツ団の名前を漢字に置き換えてもらい部員指導の下で扇子に清書を行った。又、ドイツ団よりお礼に指導部員の名前を扇子に書き贈らせてもらった。年齢層に近い事や英語での会話が出来た為、グループに分かれて実施することが多かったが大人の介入がほとんどなくスムーズに実施できた。夜は周辺にて望遠鏡で夏の 1 等星を観察する。（同上）

8月1日(木) 午前中に姫路市市役所表敬訪問。その後姫路駅前にてショッピング。午後から浴衣の着付け体験を実施し、浴衣はお土産として各自持ち帰って頂く

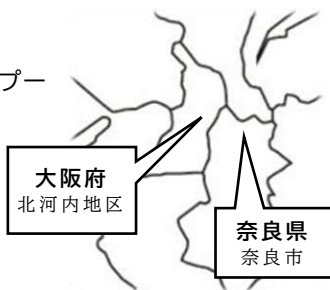
ようにした。その後、浴衣着用のまま国宝姫路城を散策。天守閣まで登ってもらった。姫路リーダー会の 1 名が少し体調を崩したが概ねスムーズに実施できた。夕食はお好み焼きを個人で焼いてももらい関西の定番の食事体験と料理体験をしてもらった。グルテンアレルギーの方はお好み焼き粉を米粉に代用し実施した。宿泊施設は民泊施設を一棟貸し切りドイツ団及び姫路市リーダー会会員と実行委員の指導者が宿泊する。（同上）

8月2日(金) ドイツ団より要望があったトレーニングを兵庫県立武道館にて実施。上級者向け設備があり 2 時間じっくりトレーニング出来る。午後から平和資料館、姫路水族館を見学。見学前に平和資料館にてドイツ団には姫路市スポーツ振興課からの要望で来年（2025 年）2 月に実施される姫路城マラソンの応援ビデオを撮影させてもらったが楽しんで撮影に望んでくれた。宿泊施設帰宅後は少林寺拳法、空手道の子供たち、姫路市リーダー会会員と共に皿回しを体験。最後はドイツ VS 日本にて皿まわし時間の勝負を行いドイツ団が勝利する。ドイツ団 1 名が皿を回さずのせていただけだったのはドイツ団だけの秘密になったが、その作戦を実行したのがドイツ団の中で少し孤立が見られた団員だった為ユーモアが出た事に安心。その後は少林寺拳法、空手の演武を見学。最後にスポーツチャンバラ体験をして大いに盛り上がった。（同上）

8月3日(土) 宿泊施設にて朝食を兼ねた走行会を実施。姫路市スポーツ少年団本部長の挨拶のみ頂き、後は朝食を食べながら団員、指導者とも今回の交流会を振り返った話に大いに盛り上がった。又、姫路市リーダー会会員より色紙の贈呈（会員が前に英語 or ドイツ語で文書を考え記入）し、ドイツ団からもプレゼントを頂いた。又、指導者から持ち寄った日本らしい物のプレゼントを選んでもらったが、アニメキャラクターの物が男子の団員に好評だった。昼食は姫路駅周辺で各自好きな物をセレクトしてもらったが 8 月 1 日午前中にも同じ場所でショッピングをしてもらっていた為、通訳の帯同無く各自でスムーズに食事、ショッピングを楽しんでいた。（同上）

バイエルンII

一近畿IIグループ



日程

7月26日(金) 奈良県(奈良市:ホームステイ)

奈良市役所で受入式／ホストファミリーと合流

7月27日(土) 奈良県(同上)

奈良市スポーツ少年団とスポーツ交流(ミニバス、軽スポーツ)／ホストファミリーと過ごす

7月28日(日) 奈良県(奈良市:奈良ユースホステル)

弓道体験／昼食会／ディスカッション

7月29日(月) 奈良県(同上)

写経体験／東大寺散策／さよならパーティー



受入式 (奈良市役所)



写経場内



スポーツ交流 弓道 (奈良市弓道場)



写経場前



ディスカッション (ユースホステル)



さよならパーティー (ユースホステル)

**7月30日(火) 大阪府(枚方市、門真市、大東市、
交野市、寝屋川市:ホームステイ)**

JR奈良駅でお見送り／大阪府へ移動／JR天王寺駅
でドイツ団と合流／枚方市役所へ表敬訪問／枚方市
スポーツ少年団とスポーツ交流(少林寺拳法、空手、剣
道)

7月31日(水) 大阪府(同上)

門真市役所へ表敬訪問／パナソニックミュージアム見
学／大枝公園で相撲体験

8月 1日(木) 大阪府(同上)

ユニバーサルスタジオジャパン

8月 2日(金) 大阪府(同上)

祈祷体験／書道体験／テーマディスカッション／
さよならパーティー

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

大阪道頓堀見学／新大阪駅でお見送り／品川プリ
ンスホテルへ移動



祈祷体験 (機物神社)



昼食 寿司 (枚方市駅)



スポーツ体験 空手道 (枚方市立渚市民体育館)



さよならパーティー① (寝屋川市市民会館)



USJ訪問@USJ



さよならパーティー②

7月26日(金) 奈良市役所にて受入式を開催する。ドイツ団と奈良県スポーツ少年団関係者及び奈良市スポーツ少年団関係者が通訳を通じて自己紹介をする。ドイツ団は頑張って覚えた日本語で自己紹介しており、努力の跡が見られた。受入式後にドイツ団及びホストファミリーと食事のアレルギーやスケジュールの確認を行う。終了後、それぞれの宿泊地へ向かう。

(奈良県奈良市:佐々木 正義)

7月27日(土) 午前9時より、ホストファミリー運転の自家用車にて奈良市西部生涯スポーツセンター体育館に集合し、奈良市スポーツ少年団の子どもたちとミニバスを中心に交流する。ドイツ団とミニバスの少年団の間には年齢差・体格差があったが、ドイツ団が未経験のスポーツであったため双方楽しむことが出来たと感じた。スポーツ交流の後にシャワーをし、ホストファミリーの自家用車にてそれぞれの家庭へ移動する。(同上)

7月28日(日) 午前9時より、ホストファミリー運転の自家用車にてロート奈良弓道場に集合し、奈良市弓道協会の指導の下、弓道の練習を行う。本番では、それぞれの近くまで矢を飛ばすことが出来た。時間があれば、さらに上達が見込めるほどの腕前であった。ホストファミリーも交えて昼食会を開催する。デザートや配膳ロボットの話題で会話を花を咲かせていた。ディスカッションでは、ドイツ団と大学生がSDGsや双方の教育制度について英語にてディスカッションを行った。非常に意欲のある大学生との活発なディスカッションはドイツ団にとって、より日本に関心を持っていただくことができたと感じた。ドイツ団は教育制度に関するクイズを用意してくるなど事前準備を行いつつ、ゲーム性のある工夫を凝らしており、参加者全員が楽しめた。スポーツ少年団本部役員によるSDGsと奈良の関係性についての解説があり、翌日の東大寺散策をより理解できる内容となった。(同上)

7月29日(月) 午前10時より、東大寺の指図堂にて写経体験を行う。墨汁ではなく、墨を磨るところから始めるなど、日本人でも馴染みが薄い体験をしてもらうことが出来た。それぞれ2枚ずつ書くことが出来たため、1枚は持ち帰り、もう1枚は8月7日の「大仏さまお身拭い」の際に、大仏さまの胎内に奉納することとなった。昼食後、ガイドと合流し、東大寺散策を開始する。南大門、大仏殿と難解な話を聞いて進みながら、大仏殿の柱の穴ぐりに、子ども観光客達に交じりドイツ団リーダー、

通訳が挑戦したところ、引っかけり時間がかかりながらも見事に2人とも成功したため各国の観光客から賞賛を浴びていた。ドイツ団メンバーは鹿に笑顔で優しく鹿せんべいを与えており、鹿から襲われることもなく驚くほど鹿の扱いが丁寧であった。大仏殿を出た後、休憩をはさみ、二月堂まで登坂を上る。小高い寺院からの眺めを堪能してもらった後に宿泊地へ戻り、暑いため、さよならパーティーまで時間を長めに取り休憩時間に充てることとした。パーティー会場に料理の用意がないため、全て事務局で用意することとなったが、必要量がわからないまま迎えることとなる。さよならパーティーの用意中、料理を追加で増やすこととしたため、余分な時間と労力が発生してしまった。パーティーは形式的なものではなく、参加者がアイデアを凝らしたものであった。日本人が学校で習う曲を子どもたちが一生懸命リコーダーで練習し、ドイツ団に披露したことはドイツ団にとっては新鮮だったようである。また、ドイツ団が自分たちの行うスポーツをジェスチャーで表現することはクイズのようで参加者からは好評であった。プレゼント交換があったが、かさばるものを避けることに苦心した。さよならパーティー後に日本の夏の風物詩である手持ち花火を体験したことは奈良最後の夜の良い思い出になったかと思う。(同上)

7月30日(火) 奈良県スポーツ協会職員の方がJR奈良駅から大阪府へ引継ぎに行っていただく。ドイツ団、通訳いずれも好感の持てる人物であった。(同上)

奈良からJRで移動してきたドイツ団6名と天王寺駅で合流した。通訳さんを通して自己紹介を行った。天王寺駅から大東市マイクロバスで枚方市役所へ移動。枚方市内にある寿司屋で昼食を行ったが、お箸もドイツ団の方は上手に使われていた。昼食後、枚方市長表敬訪問を行い、通訳を通じて、今回の日独交流で楽しみにしていることや、大阪での5日間の活動予定を伝えた。お互いに記念品交換をして和やかな訪問になった。枚方市渚体育館へ移動し日本の武道である、空手、少林寺拳法、剣道の実技の見学や演舞の披露などがあり、ドイツ団の方は真剣な眼差しで見学をされていた。その後、各団で準備している胴着に着替え、実技の体験を行った。真剣な取り組みに、一同大きな拍手で歓迎した。空手の蹴り体験では、ドイツ団の蹴りの力に圧倒されたり、指導者をドイツ団が投げ倒すなど実技も大変盛り上がりを見せた。少林寺拳法では護身術に女性の方が興味を示されて、細かなところまで質問されていて関心した。各団との記念撮影の時にお互いに記念品の交換もされ

て本当に意義のある交流になった！体験会終了後は、それぞれのホストファミリー宅に移動して、各家庭での歓迎のおもてなしを受け、入浴、楽しい日本食事等、笑顔いっぱいの日本家庭を楽しまれた。通訳がいないため、ホストファミリー宅でのコミュニケーションに不安があったが、応援の若者団員の英語での会話や、スマホの翻訳アプリを活用して会話が盛り上がりお互いに本当に楽しいひと時を過ごせた。（大阪府枚方市：関 輝）

7月31日(水) 大東市立市民会館からマイクロバスで移動してきたドイツ団6名、通訳者1名を門真市役所前で出迎えた。今夏の異常な暑さにもかかわらず、皆さん明るく元気な様子。門真市長に表敬訪問を行い、通訳を通じて、今回の交流で楽しみにしていることなどを報告。終始なごやかな雰囲気の中で記念のペナントの交換と、写真撮影を行った。その後、市役所近くの店舗にて昼食。皆さんソースやマヨネーズに興味津々、たこ焼きなどを食べ楽しんだ。事前に箸の使い方を練習されたとのことでスムーズに食事をされていたことに驚いた。時間に余裕があったため買い物をしたいとの希望があり、近辺で自由時間をとった。プログラム中にもっと買い物などの自由行動の時間があればよかったと思う。午後は市内のパナソニックミュージアムを訪問し、多くの展示資料に興味深く熱心に鑑賞した。展示キャプションには英文も併記されていたが、可能であればはじめに館職員による簡単なオリエンテーションなどがあれば、なおよかったのではないと思った。（大阪府門真市：佐藤 友美）

この後マイクロバスで守口市相撲連盟の子どもたちと日本伝統の相撲の交流を行った。本格的な土俵の上でドイツ団と年齢差はあるものの、基本のしこふみ、すり足、ぶつかり等ルールをしっかりと説明され、守口市スポーツ少年団員、ドイツ団員みなさんがしっかりと体験出来て、見ている私たちをワクワクさせて頂きました。最後に守口市団とドイツ団との団体戦が組まれ大いに盛り上がり一番一番本当に見応えが有りました！土俵上で記念撮影お別れのハグでは守口市団の子供達の名残惜しそうな一人一人の顔が交流会の意味を我々に教えてくれたようでした。気温が高くなりそうな天気予報であったため、ペットボトルを用意していたが無事に終わって又お互い楽しい時間を過ごせました。この後ホストファミリーと合流しそれぞれの家庭へ移動。家庭での団らんを楽しんで頂き今日の疲れをいやしていただいた

（大阪府枚方市：関 輝）

8月1日(木) 各ホームステイ先で朝食後、大東市立市民会館に集合・合流し、全員で住道駅からユニバーサルシティ駅まで電車で移動し、10時頃にユニバーサルスタジオジャパンに到着した。大阪府でのプログラムは3日目でだいぶ時差ボケも落ち着いてきていたようだが、当日は最高気温が39度だったため、朝から暑さにまいていたように感じた。ドイツ団員は初めてのUSJでパーク内を一度各自で見て回りたいとのことだったため、12時30分まで一度自由行動とした。12時30分に集合し、全員でパーク中央に位置する『ドライブイン（ハンバーガー屋）』にてまとまって昼食時間を楽しんだ。昼食時間も12時30分と、一番混雑する時間にしたため、まとまって座る場所の確保に時間を要した。また、団員の中には、昼食施設内の騒々しさがしんどく、施設外のオープンスペースにて昼食をとった団員もいたが、各々で対応していた。昼食後、午後からも各自で行動したいとのことだったため、17時を目途に入口付近に集合と伝え、再度自由行動とした。パーク内では、午前午後ともに3種程度は乗車し楽しむことができた。また、ジェットコースターに初めて乗った団員もいたが、楽しかったとのことだった。しかしながら、日本も夏休みに突入していたため、通常の平日よりも待ち時間が多く発生し、希望であったニンテンドーワールド（マリオ）に入場することができなかったことは残念だったが、（整理券は20時～のみだったため、入場できず）ハリーポッターには入場できた。ドイツでもニンテンドーワールド（マリオ）やハリーポッターは人気であるため、行きたがっている団員は多かった。17時頃に退場し、ユニバーサルシティ駅から住道駅まで電車で移動。道中は、JR線の遅延と帰宅ラッシュの時間帯で、とても満員の電車に乗ったが、団員の1人は普段体験できないような満員電車に乗ることができたと言っていた。反省・課題として、ドイツの気温が最高でも30度程度とのことなので、酷暑の中、熱中症対策をしつつ、また日本の夏休みとかぶる時期は待ち時間も長いため、ユニバーサルスタジオジャパンへ行くことについては、今後検討していくことが望ましいと考える。北河内地区全体として、プログラムを詰め込みすぎていて、自由時間が少なかったように感じた。奈良県の方では自由行動の時間があったと聞いている。大阪に来たら道頓堀に行きたい（ホームステイ先の方が連れて行ってくれる）と思っているドイツ団員が多いため、ホームステイ先に任すのではなく、プログラムとして入れておくのがいいのではないかなと思う。

（大阪府大東市：高田 海地，四條畷市：藤井 桃子）

8月2日(金) 午前10時に京阪交野市駅にて待ち合わせ、交野市内の機物(はたもの)神社で祈祷体験を実施した。宮司さんより家内安全の祈祷をあげてもらい、その後質疑応答の時間を設けたところ、「日本人の死生観」「神棚におかれた神具の用途」など、たくさんの質問がドイツ団からあがった。ドイツ団の中の1名の方はたくさんの質問をしておられ、それにより他のメンバーの方も興味を刺激されているように感じた。昼食は寿司屋で、和室の個室を準備してもらった。典型的な日本の和室であったが、部屋に入ったところで感嘆の声があがったので、とても喜んでいただいたと感じた。昼食後、書道体験を実施した。すごく真剣なまなざしで書道に取り組んでおられる姿が印象的であった。また書道の先生が所有している様々な筆にとっても興味を示しておられた。先生に見本で様々な文字を書いて頂いたが、食い入るようにその様子を観察していて、「こんな文字を書いてほしい」というような要望がたくさんあがっていた。

(大阪府交野市:絹川 誠)

交野市からバスで移動してきたドイツ団6名と大東市立市民会館で合流した。7月30日に大阪入りし、数日が経っていることもあり、皆さん笑顔で挨拶し、大阪に慣れてきている様子。また、市民会館の来場者からも話しかけられる場面があり、スポーツ少年団の交流で来日している旨を伝えていました。その後、グループディスカッションでは、アイスブレイクで自己紹介とドイツ団によるクイズを行った後、ドイツと日本の教育の違いについて討論しました。国によって、こんなにも違いがあるのかと学生たちは驚いていました。そして、さよならパーティーでは、ホームステイ先のホストファミリーや、各市スポーツ少年団の関係者が出席した。またゲストに関西外国語大学チアリーダー部と少林寺拳法の皆さまをお招きし、チアダンスや少林寺拳法の演武を披露しました。チアリーダーのしなやかなダンスから少林寺拳法の迫力ある演武を間近で堪能し、日本の文化に触れあうことができたと思います。(寝屋川市:多田 大介アンデルソンソーザ)

8月3日(土) 各ホームステイ先の送迎で、JR新大阪駅に集合。出発が30分程度遅れたが、JR新大阪駅からなんば駅に移動し、なんば駅到着後、全員でまず戎(えびす)橋に行った。戎橋への道中の商店街の様子なども珍しかったのか、たくさん記念撮影をしていた。戎橋では人が多く、全員集合写真は撮れなかったが、色々な雑誌などにも掲載されているスポットに大変興奮されていた。その後、昼食はお好み焼きを食べた。ベジタリアン

の3人は、もちチーズ焼きを用意し、最初はあまり食欲がないとのことだったが、お店ではほぼ全員1枚完食した。その後1時間程度、自由時間を取った。どこか目的地に向かうのではなく、商店街を歩いていたようだ。1時間後、再度集合しなんば駅から新大阪駅まで移動し、新幹線に乗るのを見送った。(大阪府枚方市:有村 知夏)

ザクセン＝ ザクセン・アンハルト

ー中国グループ



日 程

7月26日(金) 山口県(岩国市:ホームステイ)

新岩国駅でドイツ団と合流／岩国市表敬訪問／ホストファミリーと合流／ウェルカムパーティー

7月27日(土) 山口県(同上)

岩国市スポーツ少年団と交流(モルック)／IDBスポーツクラブとスポーツ交流(ハンドボール)／錦帯橋観光

7月28日(日) 山口県(同上)

ホストファミリーデー

7月29日(月) 山口県(同上)

ホストファミリープログラム



岩国市長・教育長と記念写真



書道体験



錦帯橋



団員と昼食



ホストファミリープログラム (西本家)

7月30日(火) 広島県(広島市:広島県スポーツ会館)

お別れ会／広島県へ移動／山陽高校にて文化交流(茶道・和太鼓体験)／徳川(お好み焼き屋)にて歓迎パーティー

7月31日(水) 広島県(同上)

廿日市市 宮島観光(弥山登山・もみじ饅頭づくり体験・しゃもじづくり体験)

8月 1日(木) 広島県(広島市:ホームステイ)

広島平和記念資料館見学／市内観光(広島城)／観音空手道スポーツ少年団とスポーツ交流／ホストファミリーと合流

8月 2日(金) 広島県(広島市:広島県スポーツ会館)

崇徳高等学校でテーマディスカッション／広島市長表敬訪問／エディオンスタジアム(新サッカースタジアム)見学／さよならパーティー

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

広島駅でお見送り／品川プリンスホテルへ移動



山陽高校 和太鼓体験



ウェルカムパーティー (徳川)



宮島観光



広島観光 (広島城)



弥山登山

7月26日(金) 新岩国駅でドイツ団と合流しました。元気な様子でした。市長表敬訪問を行い、岩国市長、教育長と面会しました。ドイツ団から市長へプレゼントがありました。ウェルカムパーティー会場の岩国市総合体育館会議室へ移動しました。ホームステイ先の家族と個別に通訳を交えて面会、アレルギーや心配していることなどをお互いに伝えました。ウェルカムパーティーでは、岩国市スポーツ少年団(小学生)が作成した横断幕で歓迎しました。山口県スポーツ少年団本部長が歓迎のあいさつを行い、ドイツ団代表へ記念品(大内塗の夫婦箸)を渡しました。岩国市スポーツ少年団からは、扇子のプレゼントがありました。その後、軽食(ピザ・お菓子)を食べながら歓談しました。ドイツ団からは、歌の披露があり、盛り上がりました。コミュニケーションは、スマホ翻訳アプリや英語で行っていました。ホームステイ先で家族と一緒に折り鶴を作成するよう宿題を出しました。

(山口県:岩国市)

7月27日(土) 午前中、岩国市総合体育館でスポーツ少年団団員(小学生)と交流を行いました。はじめにアイスブレイクとして簡単コーディネーショントレーニングや両国のじゃんけんを行い、子どもたちもドイツ団に馴染んだように見えました。その後、チームに分かれモルックを行い、ブロックごとのリーグ戦、順位のトーナメント戦を行いました。昼食は、子どもたちとマクドナルドのハンバーガーと手作りのフライドポテトなどを食べました。午後、IDBスポーツクラブ(小学生)とハンドボールを行いました。子どもたちとドイツ団はすぐに馴染んで、ハンドボール速攻の練習・ゲームを行いました。(子ども対ドイツ団)次に、錦帯橋の観光へ行きました。前もって観光パンフレット(英語版)を配布していたので、各自で事前に錦帯橋について調べており、実際に渡ることを楽しみにしていたそうです。下から眺めるために河原へ降りた時に暑さのあまり川へ入っていたドイツ団員もいました。名物のソフトクリームを食べたりした後、ホームステイ家庭のお迎え場所にて解散しました。

(同上)

7月28日(日) 山口県立岩国高校集合(宿題の折り鶴回収)午前:書道部、茶道部書道部では、色紙に漢字のあて字でドイツ団員の名前が書かれており、大変喜んでいました。筆で字を書く練習を生徒がそれぞれのドイツ団員について指導しました。最後に好きな文字を選んで白紙の「うちわ」に筆で書いてお土産にしてもらっていました。茶道部では、外部指導者からお菓子の食べ

方、お茶の飲み方を教わり、実食した後、お抹茶の立て方を教わっていました。昼食は、手作りの素麺と巻きずしを高校生と一緒に食べました。午後:剣道部、スポーツチャンバラ、テーマディスカッション剣道部では、竹刀の握り方、振り方などを教わり、実際に打つ練習も行いました。その後剣道部による迫力ある試合を見学しました。グループリーダー(パウル)は道着を着せてもらい喜んでいました。スポーツチャンバラは、剣道より安全にできるスポーツとして紹介された後に実際に対戦しました。少し疲れているように見えました。テーマディスカッションは、少人数のグループに分かれ、ドイツと日本の医療制度の違いについて、それぞれの国で良いところ、悪いところを抜き出してまとめを発表しました。結果、高齢化が共通の課題として挙げられていました。コミュニケーションは、英語とスマホ翻訳アプリでした。終了後、ホームステイ家庭のお迎えがあり解散しました。※この日のプログラムは多すぎたような気がします。

(同上)

7月29日(月) ホームステイ家庭のプログラム※午後9時までに、ホームステイ家庭から5枚程度選んだ写真を事務局(岩国市スポ少)へ送信するように伝えました。(お別れ会でのスライドショーで紹介するため)

(同上)

7月30日(火) お別れ会※当初、10時からの開始としていたがドイツ団の方から「別れを惜しみたい」との申し出により9時30分に変更されました。それぞれの、長が挨拶をした後、みんなで折った折り鶴の説明を行いました。折り鶴で「平和」の文字が書かれているパネルを披露しました。パネルの上部に「世界人類が平和でありますように」とドイツ語で書いています。その後、4泊5日中に撮影した写真をスライドショーで披露しました。その後、岩国市スポーツ少年団(小学生)が作成した横断幕をバックに記念撮影を行いました。最後にホームステイ家庭代表による三本締めを行って次県(広島県)のお迎えバスへ移動しました。※三本締めは、通訳の配慮で事前にドイツ団へ動画を配信し、練習しておくように伝えてくれていたため、全員揃ってバッチリ決まりました。お別れの際は、ホストファミリーとハグをするなどをして別れを惜しんでいました。

(同上)

岩国市総合体育館でドイツ団10名(通訳さん含め)と合流した。そこからバスにて宿泊先となる広島県スポーツ会館へ移動し、昼食のお弁当をとり、少し休憩。昼食中にドイツ団のメンバーと会話をすると広島での交流

を楽しみにしているとの事。食べ物についてアレルギーはないと事前の連絡を受けていたが、受入の前日である7月29日にベジタリアンであること、受入当日に肉魚が食べられない団員がいることが発覚したため、食事の準備が大変であった。休憩後、山陽高校にて茶道、和太鼓の体験をした。特に和太鼓の体験については参加者全員が感動するほどの体験ができ、ドイツ団はとても喜んでいた。夕方から、お好み焼きを体験できる徳川にて歓迎パーティーをした。各テーブルでアプリや身振り手振りでコミュニケーションをとっており、日本人側がドイツ団側と思ったより交流できており安心した。その後は宿舎である広島県スポーツ会館で宿泊。宿泊については、和室の大部屋を用意することができ、ドイツ団も畳の部屋を喜んでくれた。（広島県広島市：岩田 直樹）

7月31日(水) 朝食を近場のお店で済ませて、バスとJRに乗り宮島へ。宮島で厳島神社の鳥居を近くで見たり、弥山の登山をしたり、しゃもじ作りを体験した。ドイツの人たちはハイキングが大好きであったため、登山を取り入れたのは好評であったが、登山に大部分の時間がかかってしまったため、予定していた体験（もみじ饅頭づくり体験）の時間に間に合わなくなり、お店側に迷惑をかけてしまった。宿舎に戻り、ドイツ団の指導者と団員の中のリーダーと今後のスケジュールの確認と、宿泊施設では他の団体もいるため就寝時間やお風呂等の時間も守らないといけない旨を含めミーティングをした。事前にもっと日本人とドイツ人との文化の違いを理解していれば避けられたかもしれない。（同上）

8月1日(木) 前日の朝食ではあまり食べていない団員もいたため、急遽朝食を別の店のモーニングへ変更。ドイツ団は全員完食してくれたので安心した。広島平和記念資料館を見学後、約3グループに分かれて市内観光へ、広島城を見学したり、買い物をしたグループもありそれぞれ有意義に過ごした。夕方からは観音空手道スポーツ少年団と空手を通じたスポーツ交流をした。ドイツ団員と観音空手道スポーツ少年団の団員と一緒にACP(アクティブ チャイルド プログラム)で体を動かして遊んだり、空手の基本の突き・蹴り・形を小中学生の子供達がドイツ団員へそれぞれ教えたりするなど言葉が通じなくてもコミュニケーションをとることができていた。スポーツ交流の後にはホームステイが予定されており、各団員ホストファミリーと合流し、それぞれの家庭へ移動。ドイツ団もホームステイを楽しみにしていたため、実現で

きてよかった。その際、猫アレルギーを持っていることがホームステイ先に着いてから判明することもあり急遽対応に追われる家庭もあった。（同上）

8月2日(金) ホストファミリーでの朝食後に、一度全員が広島県スポーツ会館へ集合。健康状態や、昨日のホームステイの体験等をそれぞれ会話しながら移動。崇徳高校にてスポーツ×SDGsのテーマディスカッションをした。ドイツ団から、ドイツの国の健康保険制度についての発表後、4つのグループに分かれて英語を使つてのディスカッションでお互いの健康保険の良い点、悪い点もあげることができていた。その後、広島市役所で広島市長表敬を行い、ドイツ団の指導者からの挨拶、広島市長からの挨拶。昼食を広島市役所の食堂で各自好きなものを食べてもらい少し休憩。この際ドイツ団が食事代を気にしており、食事代について心配しなくても大丈夫な旨をもっと伝えておけばよかったと思う。昼食後は新サッカースタジアムであるエディオンスタジアムを見学。サッカーが盛んな国であるので、ドイツ団はすごく喜んでくれた。夕方からは団員宅でよならパーティーを開催。この数日間で観音空手道の団員とも交流をしてきて、お互い言葉の壁もだいぶ乗り越えてコミュニケーションが取れるようになった。パーティー終盤ではドイツ団によるダンスや歌の披露、お互いの団員が一緒にゲーム等することができ、とても思い出深い日となり、団員同士の仲も更に深まったと思う。（同上）

8月3日(土) 朝食後、広島県スポーツ会館まで見送りにきていた観音空手道の団員、ホストファミリー達と別れを済ませ、バスで広島駅へ移動。予定時刻の新幹線にてドイツ団は通訳さんと共に東京へ出発。全体の感想として、ドイツ団も受入側の日本人側も交流の初めはお互い緊張しており、なかなか積極的に話をしたりできていないところもあったが、最終的には別れを惜しむまでになっていたので、お互いにとても良い交流になったと思う。特に小中学生の団員達は何年間も新型コロナウイルスの影響を受けていた世代であり、こんなにも密に国際交流の体験ができる機会はなく、また、国際交流自体もなかなかできない事でもあるので、大人も子供も含め貴重な体験になったと思う。後日の受入について参考にしてほしい事として、食べ物・各アレルギーなどもっと早期の段階で詳しい情報を各団へ通知が欲しい。当日にアレルギー持ちであることが判明した際は対応できない場合も出てくるし、最悪な場合は病院等の手配など受入

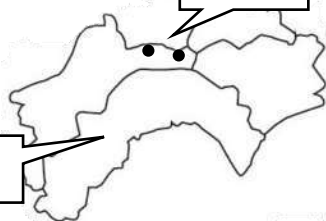
団への負担が大きくなりすぎる。実施の時期としても温暖化や気候の問題もあり、日本の夏は暑すぎて来年度以降は外での交流活動が出来なくなるかもしれない。両国の団員の健康面を考慮すると日独同時交流の時期も見直す時がきたのではないかと思う。 （同上）

ラインラント プファルツ

ー四国グループー

高知県
土佐町

愛媛県
四国中央市
新居浜市



日 程

7月26日(金) 愛媛県(四国中央市:ホームステイ)

伊予三島駅で合流／三島高校の案内および学生と交流／部活動体験(柔道)／三島高校でホストファミリーと対面／中之庄公民館でウェルカムパーティー／中之庄小学校でスポーツ交流(キンボール)

7月27日(土) 愛媛県(同上)

川之江体育館で市内スポーツ少年団団員とスポーツ交流(ミニバス・バレー)／ホストファミリーデー

7月28日(日) 愛媛県(四国中央市・新居浜市:新居浜市ホームステイ)

中之庄公民館で書道体験／さよならパーティー／伊予三島運動公園プールで遊泳／伊予三島運動公園体育館で書道パフォーマンス甲子園観戦／新居浜市へ移動新居浜市役所／新居浜とドイツの関わりについて説明／ホストファミリー対面

7月29日(月) 愛媛県(新居浜市:ホームステイ)

瑞応寺にて座禅体験及び諸堂拝観／新居浜市市民体育館でウエイトリフティング体験後地元高校生とポッチャ・モルック交流



スポーツ交流 キンボール (中之庄小学校体育館)



部活動体験 柔道 (三島高校)



ウェルカムパーティー(中之庄公民館)



うどん作り (中之庄公民館)



座禅体験 諸堂拝観 (瑞応寺)

7月30日(火) 高知県(土佐町:石原コミュニティセンター)

あかがねミュージアムで出発式／高知県土佐町へ移動
／愛媛県新宮IC(道の駅霧の森)で高知県担当者とは
合流／桂浜散策、桂浜水族館見学／土佐町役場へ表敬
訪問／土佐町内(フォーラム末広)で歓迎パーティー

7月31日(水) 高知県(土佐町:ホームステイ)

バームクーヘン作り体験・川遊び／嶺北高校生とのデ
ィスカッション／ホストファミリーと合流

8月 1日(木) 高知県(土佐町:ホームステイ)

土佐町スポーツ少年団と交流(剣道体験)／早明浦湖
で水上スポーツ体験(カヤック)／ホストファミリーと合
流

8月 2日(金) 高知県(土佐町:石原コミュニティセンター)

土佐町内観光(棚田風景、高須ふれあい牧場、たい肥
センター、早明浦ダム)／川遊び／土佐町内(道の駅土
佐さめうらバーベキューテラス)でさよならパーティー

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

高知龍馬空港でお見送り／品川プリンスホテルへ移動



川遊び



桂浜散策



剣道体験



高須ふれあい牧場



さよならパーティー
(道の駅土佐さめうらバーベキューテラス)

7月26日(金) 京都駅から新幹線で移動してきたドイツ団9名と伊予三島駅で合流し、車で三島高校へ移動した。三島高校ではインターアクト部がお茶席を設け、お茶やお菓子が振る舞われた。日本の遊びや書道で名前を書いてもらうなど、同世代で交流を深めた。その後、部活動体験として県内でも強豪の柔道部で柔道を体験。ドイツ団も専門種目は柔術ということで、一緒に練習を行った。お互いの技も教え合い得意種目のスポーツを通して交流することにより、文化や言葉の壁を越えて仲良くなっていくのを感じ、大変有意義な交流となった。ただ、日本の暑さにも慣れていないためか、軽度の熱中症になってしまい、後体調を崩す団員もでた。休憩を多く取り、スポットクーラーを準備するなどの対策はしていたが、運動量については充分に注意する必要性があると感じた。その後、柔道場でホストファミリーと対面式を行った。部活動体験後は、ホームステイ先へ移動し、その後中之庄公民館でウェルカムパーティーを行った。四国中央市スポーツ少年団本部長やホームステイでお世話になるホストファミリーをお招きし、食事を楽しみながらお互いに出し物やうどん作りなどを体験した。様々なオードブルを用意していたのでドイツ団もしっかりと食事を取れていた。パーティー終了後、ホストファミリーと親交を深める為に、中之庄小学校でスポーツ交流(キンボール)を行った。ホストファミリーと団員でチームを組みプレーすることにより親交が深まったのを感じた。その後の会話が積極的に行われていた。全体の反省点としては、プログラムを詰め込みすぎてしまい予定より時間が1時間以上押してしまった。ちょっとした説明や、着替えなど想定より時間がかかるため、簡単な内容でも1つのプログラムに1時間30分程度は時間を取るべきだった。ただし、ドイツ団はプログラムに関して大変喜んでいただけた。

(愛媛県四国中央市:井川 方典)

7月27日(土) ホストファミリーと朝食後、川之江体育館でスポーツ交流をホストファミリーが所属している少年団を中心にスポーツ交流(ミニバス・バレー)を行った。始めに、ドイツ側、日本側にスポーツ少年団における日独の実情の違いについて説明した。ドイツ側の団員を2班に分けてミニバスとバレーボールを交互に実施した。世代に差はあったが、お互いゲームを楽しみ、最後はプレゼント交換を行った。川之江体育館でシャワーを浴びた後に昼食として、牛丼を提供した。牛丼は食べたことが無かったようで大変喜んでた。昼食後は、ホストファミリーと合流しそれぞれの家庭へ移動。いくつかの家

庭から、今日は一緒に地元の祭りに参加すると伺い、ドイツ団も大変楽しみにしていた。何名かは地元のお祭りで一緒に踊っており有意義な交流が来ていると感じた。
(同上)

7月28日(日) 最終日もホストファミリーで朝食後、中之庄公民館で書道体験を行った。講師には四国中央市で手すき和紙を製造している方をお願いし、和紙についての説明を行った。その後、書道を体験した。講師がドイツ団の各々書いて欲しい漢字を書き、それを見本にして書道を行った。上手に文字を書く団員もあり大変驚いた。その後、昼食も兼ねてきよならパーティーを行った。きよならパーティーでは、これまで撮ってきた記録写真を流してみても盛り上がったのではないかと感じた。その後、書道パフォーマンス甲子園を観戦するために、伊予三島運動公園体育館へ車で移動した。予定には入れていなかったがドイツ団側からプールに入りたいと要望があったので、急遽30分程度、伊予三島運動公園の敷地内にある市民プールで遊泳した。ドイツにはスピードの速いスライダープールはあまり無いようで特に楽しんでいた。その後、隣接する体育館で書道パフォーマンス甲子園を観戦した。書道パフォーマンスに興味津々で、様々な質問があった。観戦後、ホストファミリーの方もお見送りに来てくれ、最後までお別れに名残惜しんでいる様子を見て、受け入れて良かったと感じた。また機会があれば是非協力、交流したい。
(同上)

15時30分ごろ四国中央市より新居浜市役所に来訪。本市文化スポーツ局長より歓迎のあいさつに続き、新居浜市(別子銅山)の近代化技術とドイツのつながりについて、本市職員がスライドを交えて説明。興味深そうに聞き入っていた。その後、庁舎1階に併設されている防災センターの地震体験装置に興味を示したため、プログラムにはなかったが、特別に体験していただいた。地震体験後は、ホストファミリーと顔合わせを行い、同行いただいた通訳の方の助力や翻訳アプリを使いながら、色々質問をするなど、会話を楽しんでいた。その後それぞれの家庭へ移動し、各ホストファミリーでドイツ団をおもてなししていただいた。地区の夏祭りへの参加、ショッピングモールでの買い物など。ドイツ団のアレルギー情報が直前で変更されるなど情報の伝達に問題があると感じた。幸い大きな問題にはならなかったが、重篤なアレルギーや宗教的に食してはならない場合などを考慮し、適切な時期までに、正確な情報提供をお願いしたい。

(愛媛県新居浜市:松本 大輔)

7月29日(月) 午前中は、本市瑞応寺にて座禅体験等を行っていただいた。まず、本プログラムで来られたドイツ団の道中安全を祈願の般若心経・焼香をおこなったあと、住職よりお寺の由来、本尊の解説を受けた後に座禅を体験してもらった。宗教的な内容は、翻訳ににくいと思うが、事前に原稿提供ができなかったため、通訳の方には苦勞をかけたと思われる。午後は本市で盛んなウエイトリフティングを体験してもらった。ロサンゼルスオリンピック52Kg級銅メダルを獲得した、真鍋和人氏より本市ウエイトリフティングの歴史等について説明いただきウエイトリフティングの競技を指導いただいた。また、合わせて本市選手らとも交流を行った。体験ということもあり、比較的軽い重量で始めたが、挙げ方のコツやフォームを学び、徐々に重量を増やし、自身の限界に挑んでいる姿はさすがの一言であった。結果予定していた時間よりオーバーすることとなったが、これまで体験したことのないスポーツだったとのことで、大変興味深く楽しめたとの感想をいただいた。ウエイトリフティング体験後は、本市の高校生とニュースポーツを通じた交流を行った。ドイツ団、高校生のミックスで3班に分け、長縄跳びを行い、打ち解けてもらった後、ボッチャ・モルックの競技で交流を行った。また、高校生が折り紙を用意しており、紙ヒコーキ、折り鶴などを用意しており、お互いに名前を呼びあいながらじゃれあうなど、比較的近い年代ならではの打ち解け具合であり、終了予定時間をオーバーしてもインスタのアドレス交換や話が続ぎ、高校生に依頼してよかったと感じた。本日のプログラムは、ホストファミリーも参加可能としており、座禅やニュースポーツなどを共に体験できたこともよかったのではないかなと思う。29日は3プログラムとしていたが、それぞれに興味を持たれて、質問や体験をされるため予定時間をオーバーすることになった。1日での体験・交流プログラムはあまり多く組み込まない方がよいと思った。(同上)

7月30日(火) 本市にある総合文化施設(あかがねミュージアム)で出発式を行った。本市市長よりドイツ団出発に際してのあいさつを行い、その後グループリーダーより謝辞が述べられた。その後出発までの時間はホストファミリーとの別れを惜しむようにギリギリまで交流を行い、高知への出発時は、ドイツ・日本の国旗を振りお見送りを行った。全体を通じて、問題なく日程を終えることができた。日中のプログラムは一部を除いて冷房が完備されている場所を確保できたが、ドイツ団は日本の暑さは厳しいようである。スポーツ交流を行う場合に、冷

房が確保できない場合は、熱中症にならないよう、スポーツのメニューを考慮して行う必要があると感じた。

(同上)

愛媛県から車で移動してきたドイツ団10名と新宮IC(道の駅霧の森)で合流した。来日後数日経っていることもあり、皆さん時差ボケは無く、元気な様子。その後、高知市内に移動。昼食後、桂浜に移動。桂浜散策、桂浜水族館見学を行ったが、今年一番といえる暑さもあり体調を心配したが、それぞれに楽しんでた。土佐町に到着後、町長、副町長、教育長に表敬訪問を行い、通訳を通じて、今回の交流で楽しみにしていることなどを伝えた。表敬訪問後は土佐町保健福祉センターあじさいホールに移動しホームステイ家庭と対面。堅苦しくないような雰囲気を作るため家庭ごとに椅子のみで輪を作り自由に会話をしてもらった。フォーラム末広に移動し歓迎パーティー。歓迎パーティーには、事前に対面を済ませたホストファミリーや、土佐町スポーツ少年団の本部長、副本部長が出席。通訳が1名であるため、パーティーの各テーブルでのコミュニケーションに不安があったが、英語での会話や、スマホの翻訳アプリを活用して会話が盛り上がっており安心した。(高知県土佐町:森 啓)

7月31日(水) 朝食後、バームクーヘン作り体験を行った。バームクーヘンはドイツ発祥ということも聞いており、楽しんでもらえるか心配だったが終始笑顔が見られ、楽しんでもらえているようだった。生地は事前にスタッフが作成しており、棒に垂らし炭火で焼きながらの作業を何回も繰り返し大きなバームクーヘンを作ることができ、その場で切り分けておいしそうに食べていたので安心した。次のメニューまで時間があつたので近くの川に行き川遊びを楽しんだ。後述もするが今回のメンバーだけなのかもしれないが水に入るとことは他のメニューよりもとても楽しんでた。ここまでのメニュー及び昼食は宿泊した石原コミュニティセンターで過ごしたため時間的に余裕があつたと思う。昼食後、れいほく教育魅力化・交流支援センターに移動。ここで嶺北高校生とのディスカッションを行った。当初、通訳者も含め大人は入らないようにということであつたが通訳者には入ってもらった。結果的に通訳者が入ることでディスカッションが成り立ったと思う。受け入れ側の英語力も必要と思われる生徒数の少ない嶺北高校ではそういった生徒が絶対的に少なく、通訳者が入らなければ成立しなかったと感じた。事前に資料等は送付していたがディスカッションテーマが少し難しかったのではないかなと思われる。ゲームなどを

してからディスカッションに入ればもう少し話ができただけではないかと思われる。終了後、土佐町役場に戻り、それぞれのホストファミリーと合流した。ドイツ団の荷物が大きかったので石原コミュニティセンターから土佐町役場までは教育委員会の職員がディスカッションの間に運んでおいた。（同上）

8月1日(木) ホストファミリー宅で朝食後、土佐町小中学校武道場に集合。土佐町側は少年剣道の子どもたち、土佐町中学校剣道部の部員も参加し、交流を図ることができた。まず少年剣道指導者であり土佐町スポーツ少年団副本部長でもある高石清賢さんが剣道についての基本的な座学を行い、その後、じゃんけん剣道、新聞を竹刀で実際に切る体験、胴と垂をつけての基本的な素振り、子どもたちの模範稽古の見学を行った。ドイツ団はそのすべてを真剣に取り組んでいた。すべてのプログラムが終了後、ドイツ団の男子3名が面をつけての立ち合いを望んでおり、短い時間であったが実践することができた。土佐町小中学校武道場はとても暑く、熱中症を心配したが高石清賢さんの工夫により、体調を崩す方もおらず無事終了することができた。昼食後、さめうら湖（早明浦ダム）に移動。ここではカヌー体験を行った。ホームステイ家庭から大人2名、子ども1名の参加もあり体験を行った。元オリンピック選手である指導者よりカヌーの乗り方などについて説明を受け、それぞれがカヌーに乗り込み、体験とともに湖の気持ちよさも体感していただくことができたと思われる。カヌー体験終了後は浮桟橋から湖面に飛び込むなど自由な時間を過ごすことができた。終了後、土佐町役場に戻り、それぞれのホストファミリーと合流した。（同上）

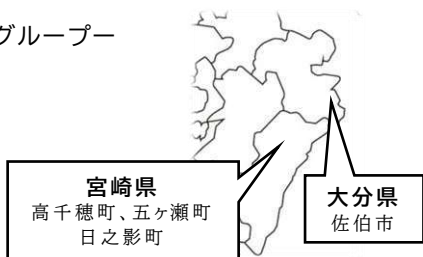
8月2日(金) ホストファミリー宅で朝食後、土佐町役場に集合。大きい荷物も持参していただき、ドイツ団が活動している間に教育委員会職員が宿泊場所の石原コミュニティセンターまで運ぶようにした。土佐町役場を出発し、町内巡りを行った。高須地区の棚田風景を見学、高須ふれあい牧場見学、土佐町たい肥センターに立ち寄りバスの中で説明、早明浦ダム直下からダムを見学した。昼食後、当初は宿泊場所である石原コミュニティセンターに戻り、さよならパーティーまでの間、休憩をする予定であったが、ドイツ団の希望により川遊び（本山町の汗見川）を行った。川遊びの場所は5～6mの高さから飛び込みができる場所があり、多い人は6回、7回と飛び込みを行っていた。同じ場所には少し浅瀬もあ

りどちらでも楽しんでいた。予定時間をオーバーするほどであった。その後、土佐町役場に戻り建物内の和室で全員が休憩をとった。さよならパーティーではホストファミリー単位で席を作り、土佐町最後の夜をゆっくりと楽しんでもらった。パーティーの終盤ではホストファミリー単位で感想などを発表してもらい、それぞれの家庭でも交流を楽しんでくれたようだった。宿泊場所である石原コミュニティセンターに戻るとスタッフの方がアユの塩焼きを準備してくれており、気に入った人は2匹、3匹と食べていた。その後、花火やダンスを楽しんだ。（同上）

8月3日(土) 朝食後、ゆっくりと出発準備を行い、午前9時30分出発。南国市内のレストランで早めの昼食をとり、高知龍馬空港へ移動。午後1時30分の東京行きの飛行機で高知県を離れた。（同上）

チェス

ー九州グループ



日 程

7月26日(金) 大分県(佐伯市:佐伯セントラルホテル)

大分空港でドイツ団と合流／佐伯市役所へ表敬訪問／ホテルチェックイン／佐伯散策(空の公園)／歓迎レセプション／ジョイフルにて夕食

7月27日(土) 大分県(佐伯市:ホームステイ)

そば打ち体験／昼食(自分で打ったそば)／コンビニで買い物／着物体験／抹茶体験／座禅体験／ホストファミリーと対面

7月28日(日) 大分県(同上)

佐伯鶴城高校とスポーツ交流(バグー・室内ベタンク)／高校生と昼食(パンをオードブル形式で)／高校生とディスカッション／高校生とスポーツ交流(ドッジビー)

7月29日(月) 大分県(佐伯市:佐伯セントラルホテル)

豊後二見ヶ浦を見学／県教育長へ表敬訪問／パークプレイスで自由時間(ショッピング等)／さよならパーティー(ホームステイ先家族と)



着物体験 (観光交流館)



高校生とスポーツ交流 (佐伯地区公民館2)



抹茶体験 (汲心亭)



県教育長・本部長表敬訪問 (大分県庁)



座禅体験 (洞明寺)

7月30日(火) 宮崎県(五ヶ瀬町:木地屋)

大分県佐伯市で宮崎県担当者と合流／日之影町へ表敬訪問／高千穂町へ表敬訪問／高千穂高校生徒の案内で高千穂峡観光／五ヶ瀬町へ表敬訪問／五ヶ瀬町木地屋で歓迎パーティー

7月31日(水) 宮崎県(同上)

日之影町スポーツ少年団とレクリエーション交流(じゃんけん列車・風船パレー)／日之影町キャンプ場でカレー作り体験／日之影中学校で生徒とディスカッションおよびスポーツ交流

8月 1日(木) 宮崎県(同上)

宮崎茶房で釜炒り茶体験／五ヶ瀬Gドームで流しそうめん体験／五ヶ瀬町スポーツ少年団とスポーツ交流

8月 2日(金) 宮崎県(高千穂町:ホームステイ)

あまてらす鉄道でグランドスーパーカート乗車／高千穂高校生徒と文化交流／高千穂町スポーツ少年団とニュースポーツ交流／農泊家庭と対面式／農泊家庭へ移動

8月 3日(土) 東京都(港区:品川プリンスホテル)

宮崎空港までお見送り／東京へ移動



農業体験



ディスカッション (日之影中学生)



高千穂峡観光 (高千穂高校生案内)



文化交流書道 (高千穂高校生)

7月26日(金) 関西空港から飛行機で移動してきたドイツ団と合流した。その後は空港で各自昼食を取り、車で佐伯市へと向かった。遠距離移動ということもあり、空港→佐伯市までドイツ団員は熟睡だった。佐伯市長に表敬訪問を行い、通訳を通じて挨拶や、日本語での自己紹介、プレゼント交換などを行った。その後、先にホテルにチェックインし、大きい荷物を自分の部屋に置き、佐伯散策(空の公園)へと向かうつもりだったが、ホテルに到着後、部屋の割り振りや朝食の選択に時間がかかり、30分ほど出発が遅れた。かなり時間が押していたが、何とか時間内に空の公園に到着し、15分ほどの時間ではあるが写真撮影など景色を堪能した。その後は、歓迎レセプションの会場に向かった。歓迎レセプションには明日からホームステイでお世話になるホストファミリーをゲストとして招いた。ホストファミリーごとにグループ分けを行い、お菓子やジュースなどを置いて、お互いの距離を縮めてもらった。歓迎レセプションの入退場時に、拍手でドイツ団をお迎えしたが、曲(歌)が流れているとなお良い、とご指摘をいただいたので、準備をしておけば良かった。その後は、ジョイフルに向かい、あらかじめ予約しておいた席で各自夕食を取った。予算を1人1,200円とっていたが、食事とドリンクバーを合わせて1人1,200円以上かかってしまった。あらかじめ、メニューの種類や値段を確認しておく、もう少し改善できたかもしれない。最後はホテルへ送迎し、1日目は終了となった。

(大分県佐伯市:池田 和樹)

7月27日(土) ホテルで朝食を取り、9:30にホテルのロビーへ集合。だが、朝食は6:00~8:00の間しか取れず、朝食後1時間弱部屋で待たせてしまうこととなった。ドイツ団も疲れが溜まっており、結果的には良かったが、事前に朝食時間を確認しておけば、心配せずに済んだかもしれない。連日猛暑が続く、飲み物の確保が必須なので、大きめのクーラーボックスを用意し、氷水を入れ、常に冷えた飲み物を準備しておいた。糖分の確保も必要のため、水だけでなく、アクエリアスやコーラなどの炭酸飲料も準備をした。この日はホテル→大水車の郷へバスで移動し、そば打ちまで少し時間があつたので、大水車で写真を撮ったり、近くの川で水遊びをした。その後、そば打ちを体験。全員とても器用だったので綺麗なそばが完成し、自分で打ったそばをそのまま昼食として食べた。その後は、大水車の郷→観光交流館に移動予定だったが、少し時間があり、昼食が足りなかったそうなので、途中でコンビニに寄ることに。そこで上手く時間

を使い、予定通り観光交流館に到着した。冷房の効いた部屋で涼み、2人ずつ、着物の着付けをしていただいた。全員着物が良く似合い、お互い写真を撮り合っており、気に入った様子だった。その後、汲心亭に行き、抹茶体験を行った。作法を学び、本格的な抹茶を飲み、これをきっかけに抹茶が好きになった団員もいた。その後は、30分程度自由時間とし、汲心亭の庭園で写真撮影や休憩をする様子が伺えた。この時もクーラーボックスを携帯し、いつでも水分補給が出来る状況を作っていた。その後、観光交流館→洞明寺に移動し、座禅体験を行った。ここではホストファミリーの方も自由に参加していただき、座禅を組んだまま15分間心を無にして座禅を行った。その後の感想では、普段考えないことや日常の色々な音を感じ取り、15分間とは思えないほどすぐに時間が経過した。と述べている団員がたくさんいた。そして、洞明寺→佐伯市役所に戻り、ホストファミリーへ団員を引渡し、イベント盛り沢山な2日目を終えた。(同上)

7月28日(日) ホームステイ先で各自朝食を取り、9:30に佐伯地区公民館へ集合。遅刻することも考慮し、スポーツ交流の開始時刻を10時にしていた。ドイツ団員は全員9:30までに到着し、佐伯鶴城高校の生徒には集合時間を10時と伝えていたため、ドイツ団員が30分待つことになってしまった。そこで、スポーツのルールの説明がてら、送迎をしていただいたホストファミリーとドイツ団員とでスポーツ交流を行った。その後、予定通り10時からスポーツ交流開始。最初は異国同士で自己紹介やジャンケンをしてもらい、仲を深めていきました。スポーツ交流では、バグジー、室内ペタンク、ドッチビーを行った。バグジー、室内ペタンクは、日本人ドイツ人ランダムチームになるようにチーム編成をし、あらかじめ準備しておいたくじを引いてもらい、5人×4チームの混合チーム(A, B, C, D)でチーム戦を行いました。どちらの競技も思いのほか盛り上がり、応援やハイタッチをする様子が伺えた。2競技の合計得点により優勝チームを決め、Dチームが優勝となった。その後ドッチビーをする予定でしたが、時間がなかったの先に昼食を取り、ディスカッションを終えた後にドッチビーをすることにした。昼食では、日本人ドイツ人交互に座り、世界共通のゲームをしたり、ジェスチャーを交えながら会話をしていた。ディスカッションでも同様に交互に円状に座り、全員の顔が見える状況で話を進め、日本とドイツの学校の違いや、施設の違い、教育方法の違いなどを英語とジェスチャーを用いてコミュニケーションをとっていた。その後のドッチビ

一では、先ほど優勝のDチームと最下位のBチーム、2位3位のA、Cチームに分かれ、1回目は前者、2回目は後者が勝ち、引き分けに終わりましたが、楽しそうにドッチビーをしている様子だった。少ない時間でしたが、終了時には、プレゼント交換や写真を撮っている様子も見受けられ、お互いにとって貴重な体験となった。（同上）

7月29日(月) ホームステイ先で各自朝食を取り、9:30に佐伯市役所へ集合。大きな荷物はそこで預かり、職員がホテルへ移動させ、ロビーに置いた。佐伯市役所→大分県庁までの移動を余裕を持たせて2時間とっていたため、観光スポットである豊後二見ヶ浦を見学後、大分県庁へ。大分県教育長に表敬訪問を行い、通訳を通じての挨拶や、日本語での自己紹介をした。表敬訪問後は、パークプレイス大分に向かい、3時間程度自由時間として、ショッピングや食事を楽しんだ。16時に入口集合にしていたが、全員10分前には集合し、余裕をもって出発をすることが出来た。予定より30分早くさよならパーティー会場に到着したので、先にチェックインし、荷物を自分の部屋に置き、パーティー開始5分前にロビーに集合するようにした。パーティー会場は隣接されているため、すぐ開始できと思っていたが、ドイツ団から出し物(劇)をやりたいと頼まれ、その準備に少し時間がかかり、およそ20分スタートが遅れた。その分終了時間を20分遅らせた。当日、各プログラムの詳細や必要なものを通訳さんと確認していれば、改善できたかもしれない。さよならパーティーではドイツ団員からの感想とホームステイ先の代表者から感想をいただき、笑いあり、涙ありのさよならパーティーとなった。（同上）

7月30日(火) ホテルで朝食を取り、9時半前にロビーへ集合。次の受入先である宮崎県高千穂町職員の方も9時40分頃には到着し、余っていた飲み物を1人1本取ってもらい、予定通り10時に佐伯を出発した。ホストファミリーの方達にも来ていただき、佐伯でのプログラムを終了した。（同上）

大分県佐伯市でドイツ団9名とドイツ団長団3名、通訳2名と合流した。佐伯市での研修を終えたばかりだが、元気な様子だった。宮崎県に公用車で移動し、日之影町、高千穂町、五ヶ瀬町を表敬訪問した。高千穂町では高校生の案内で高千穂峡を散策した。柱状節理の深い深谷美に感動していた。猛暑日で、気温が最も高くなる午後2時からのおよそ1時間の散策であったため、団員はもちろん案内役の高校生らに熱中症の危険があっ

たかもしれないと反省した。夕方は、宿泊施設のレストランで歓迎レセプションに参加した。通訳が2名であるため、パーティーの各テーブルでのコミュニケーションに不安があったが、英語での会話や、スマホの翻訳アプリを活用して会話、また、ドイツ団から無言劇の出し物があり、大いに盛り上がりつつあり安心した。

（宮崎県高千穂町：佐藤 純子）

7月31日(水) 朝食後、公用車で日之影町へ移動し、日之影町スポーツ少年団の子どもたちとレクリエーション交流。ドイツ団と年齢差はあるものの、ゲーム内容を理解されて、みなさんが楽しめているように見えた。昼食を兼ねた「カレー作り」では、英語での会話や翻訳アプリ、ジェスチャーを交えながら料理をして、参加者と大いに盛り上がりつつあった。参加者とドイツ団とで一緒に昼食をとった。一緒に作ったものを一緒に食べることで、より打ち解けることができたと感じた。昼食後は、日之影中学校へ移動し、「スポーツ×SDGs」をテーマにディスカッション。ドイツ団はドイツの教育制度を、日之影中学生は学校紹介を英語でプレゼンした。子ども達だけでの英語の会話に心配をしていたが、なんとかコミュニケーションを図れていた様子だった。交流後は、宿泊先の木地屋へ移動。団員1名が体調不良となり、午前中はリーダーが付き添い、休憩とし、団員2名は、午後からのプログラム参加となった。（宮崎県日之影町：中山 麗央）

8月1日(木) 朝食後、公用車で宮崎茶房へ移動し、釜炒り茶体験。実際に茶畑へ向かい、茶摘みを実施。茶畑の景色に感激されていた。その後釜を使って手炒り体験、様々な茶のテイスティングを行った。渋みのない爽やかな味わいを堪能している様子だった。昼食を兼ねた「そうめん流し体験」では、箸を使い、流れてくるそうめんをすくうことに大変苦労していた。初めて食べるそうめんの感想は、あっさりして美味しい、暑いときには最高とのこと。地元の小学生含めみなさんが楽しめているように見えた。昼食後は、五ヶ瀬町スポーツ少年団の子どもたちとスポーツ交流。非常に暑い中での交流だったが、子どもたちとチームになり、自己紹介やチーム練習を通して打ち解けた様子だった。ドイツ団との年齢差があったが、ドイツ団の皆さんは、子どもたちと仲良くフロアカーリングを楽しんでいた。得点が入った際にはハイタッチをしたりと、小学生もドイツ団も終始笑顔だった。交流後は、宿泊先の木地屋へ移動。昨日から体調不良であった団員1名が病院を受診。午前中はリーダーが付き添い、休

憩とし、団員とリーダーは、午後からのプログラム参加となった。
（宮崎県五ヶ瀬町：西麻 亜沙）

8月2日(金) 朝食後、公用車で高千穂町へ移動。あまてらす鉄道のグランドスーパーカートを乗車した。高さ130m鉄橋から望む山々と深い溪谷に圧巻されていた。高千穂高校生徒との文化交流では、ダンス同好会のダンスを見学後、高校生からダンスレッスンを受けた。同世代ということもあり、かなり盛り上がっていた。書道体験では書道部から道具説明を受け、半紙に練習をした後、うちわに好きな字とあて字で作った自分の漢字の名前を書いて完成。オリジナルのうちわに団員それぞれ満足の様子だった。昼食後は、高千穂町スポーツ少年団の子どもたちとニュースポーツ交流を行った。フィンランド発祥のニュースポーツ「モルック」は、ドイツ団員も初めての経験で、子どもらと良い勝負だった。農泊家庭と対面し、農泊家庭の車で、各家庭へ移動。最後1泊は、高千穂町での農家民泊を体験。一昨日から体調不良であった団員は、農家民泊体験はせず、宿泊先へ移動。今回の受入に関し、暑さ対策や水分補給が十分であったか、特に初日のタイムスケジュールが密ではなかったか、もっと時間に余裕を持たせ、自由時間を組み込むと良かったと反省した。
（宮崎県高千穂町：佐藤 純子）

8月3日(土) 朝食後、農泊家庭から高千穂町コミュニティセンターへ集合。体調不良が続いていた団員も宿泊先を出発し、コミュニティセンターで合流。元気な様子で安心した。農家民泊家庭と記念撮影後、マイクロバスに乗り込み、宮崎空港へ移動。
（同上）

全体プログラム(後半・東京)

8月2日(金) (東京都:品川プリンスホテル)

団長団ホテル着

8月3日(土) (同上)

ドイツ団ホテル着

JJSA-通訳ミーティング

通訳ミーティング後、地方プログラム担当通訳は解散

ドイツ団ミーティング

8月4日(日) (同左)

スポーツ交流(獨協大学体育館)

さよならパーティー

8月5日(月) (同左)

JJSA-ドイツ団長団ミーティング

都内自由研修

ドイツ団 羽田空港出発(EK313)



ミニ運動会9人10脚(スポーツ交流@独協大学)



ドイツ団出し物(さよならパーティー)



集合写真(さよならパーティー)

ホストファミリーの声

出逢いに感謝…

北海道(北海道) 千葉 彦太郎

今回、ご縁があり、ドイツ団の皆と2日間共に過ごして感心したことが3つあります。

一つは、時間をきちんと守ること。起床、食事、出発時間を守り、行動していたのは、今まで民泊の受入をした中で一番でした。

二つ目は、用意した食事を何でも食べてくれたこと。受入前は、好き嫌いはあるのだろうか…、どんなものを好んで食べるのだろうか…と、考えると不安でしたが、朝も夜も、「美味しい！」とたくさん食べてくれたことが大変嬉しかったです。

三つ目は、リーダー(クラス)とメンバーの信頼関係ができていたこと。クラスとメンバーは、友達のような関係性でしたが、クラスの指示をしっかりと聞いて行動している姿に感心しました。また、クラスは身の回りの整理整頓もしっかり行い、帰る日の朝は、自分が納得いくまで、布団を畳み直していました。

そして、通訳さんが宿泊してくれたおかげで、安心して皆のことをサポートすることができました。

本当にありがとうございました。

日本に来ることがあれば、ぜひ、遊びにきてください。

初めてのホストファミリー

東北Ⅱ(山形県) 大津 規彰

中山町役場から連絡頂き不安でしたが、こんなチャンスはないと思いホストファミリーに応募しました。どんな子が来るのか？まったく情報がない状態で祖父母を説得するのが大変でしたが、カタリーナが来ると積極的に交流してくれて良かったです。それと我が家の子供たちのコミュニケーション能力の高さにびっくりしました。これで海外留学って道筋も選択の一つになったようです。あとスマートフォンの通訳アプリのレベルの高さにびっくりしましたし、非常に助けてもらいました。やはりテキストのない勉強が一番刺激になることを改めて痛感させられました。考えるより行動ですね！子供達もですが私たちも大変いい経験させて頂きました。カタリーナとは SNS で繋がっていますので、これからもファミリーとして交流していきます。このような機会を作ってくださった関係者の皆様に感謝します。ありがとうございました。またホストファミリーしたいです。

ホストファミリー感想文

関東Ⅰ(千葉県) 結城 亜悠海

私は今回の日独スポーツ同時交流のホストファミリーとして様々な貴重な経験をすることができました。日本の文化や日本食を体験してほしいとしゃぶしゃぶなどを考えていましたが、資料にベジタリアンと書いてあり戸惑いました。なぜなら今まで身近にベジタリアンの方と出会ったことがなかったからです。事前に連絡を取ることができ肉は食べることができないが魚は食べることができるとわかりました。会話をする中でお寿司にチャレンジしたいとのことでウェルカムパーティーの後、お寿司屋さんに行くことができました。ソフィアはチャレンジ精神が旺盛で納豆や生魚に果敢に挑戦していました。一番美味しかったネタはマグロだそうです。部屋はあえて、和室を用意しました。ドイツ人は朝のシャワーを浴びると聞いていましたが、私たちに合わせて夜のみの入浴で大丈夫と言っていました。

翌日は、近所のパン屋さんに家族みんなで行きました。ドイツは硬いパンが主流なので日本の柔らかいあんパンがおいしいと言っていて驚きました。スイカ、梨、パイナップルと用意した中で梨を初めて食べたそうで、初めての食感で大好物になったと喜んでくれました。ファミリーデーの日にどのように過ごしたいか鴨川、海、鎌倉、都内観光、ディズニーシーと案を出しソフィアが選んだ場所は鎌倉でした。猛暑日だったので車で向かいました。朝ごはんにはいつも私と姉が学校に持参している母の手作りお弁当を用意しました。大船駅に車を止めて、江ノ電に乗り長谷寺、鎌倉大仏、鶴岡八幡宮、カップヌードルミュージアム、夜には豊洲のチームラボへと足を運びました。ドイツでは経験できない湿気が多い日本特有の暑さでしたが、とても楽しい一日だったと言ってくれたので安心しました。家では、私たち姉妹が習っている書道に挑戦してもらいました。漢字の意味を伝えながら、ソフィアに好きな漢字を選んでもらい、ソフィアは爽風愛、妹のキアラは希愛良と書きました。浴衣を着て庭で花火や、ヨーヨー釣りをして日本の夏を体験してもらいました。ソフィアはすべての体験が本当に素晴らしかったと言っていて、その中でも特に流しそうめんが印象に残ったそうです。文化や習慣の違う所に来てもすぐに溶け込みオープンで明るいつォフィアに巡り合えたことに感謝しています。

片言の言葉でしか伝えられなくても心と心が通じ合えば、言葉以上にわかってもらえるのだと実感しました。

そして学校のテストのために勉強していた英語が実生活でとても重要だと痛感し、英語をもっと勉強したいと思える機会になりました。このような貴重な機会を与えて下さった皆様には心から感謝しています。本当にありがとうございました。

ホストファミリーで感じたこと

関東Ⅰ(群馬県) 小林 武広

今回、ドイツスポーツユースホステルのホストファミリーを務めるにあたり、一番不安だったのが、食事面やコミュニケーションのことであった。7月30日に県庁で行われた歓迎レセプションでアンドレアスに初めて会ったときに緊張した面持ちで「いろいろな日本の文化を体験したい」とジュエスターを交えて伝えてくれた。

そのため、食事面や生活面でも特別な用意はせず、普段通りの生活の中で日本の文化を体験してもらうことに心掛けた。アンドレアスは好奇心旺盛で、食事面では自ら進んで箸を使い納豆や海苔、漬物などの日本食も積極的に食べてくれた。懸念していた言葉の面では英語の単語をジュエスターを交えることで最低限のコミュニケーションはとれ、日が経つにつれて多くの意思疎通ができるようになった。

8月1日のファミリーデーでは、日本の文化を体験してほしいかったので、栃木県の日光江戸村へ行った。江戸時代の家屋や生活の様子、忍者体験など多くの日本の文化に触れることで日本独特の文化に驚きを見せながら懸命に見入っていた。

そして最終日8月2日のサヨナラパーティーでは名残惜しい気持ちでいっぱいであった

が、最後にアンドレアスがハンブルクは大きな港町で夕日がきれいなのでぜひ来てほしいと話してくれた。そしていつかお互い会えることを約束してお別れをした。

3泊4日の短い期間であったが、本当に素晴らしい体験をすることができ、特に子どもたちは「異文化を尊重することの大切さ」や「世界に目を向けるきっかけ」になったと思う。このような機会を与えていただきまして本当にありがとうございました。

初めてのホストファミリー

関東Ⅱ(埼玉県) 米谷

私の家族は、私たち夫婦と子ども達3人の5人家族です。私は全くと言って良いほど英語ができないので、子ども達には少しでも英語を楽しく学んでほしいという想いから小さい時から英語を習わせていました。そのような中で訪れた我が家へのホームステイのオファー。このよう

なチャンスは二度と無いと家族みんな大賛成。ホームステイに向け家族みんな大張り切りでドイツ語や英語の練習をしたり、質問をみんなで考えたり、とてもワクワクしながらその日を楽しみにしていました。そこへいよいよ我が家にやってきたアンナ。子ども達は練習の成果をしっかりと発揮し、アンナと打ち解けていきました。しかしながら練習のネタも尽きてしまい、何を話したら良いのか、なかなか会話が弾まない時もありました。そのような中でも子ども達ながらにアンナと喋りたいことを整理し、時間がたつにつれて徐々に緊張も解け、会話ができるようになっていきました。アンナは子ども達や私達と一緒にダンスや体操で遊び、ドイツ文化などは携帯や本を活用し教えてくれ、すぐに我が家の一員となりました。ファミリーデーでは、アンナのリクエストに応え神社巡りから始まり風鈴を購入。きっと良い思い出になったはず。その後は我が家でパーティーをするため、大好きな抹茶のスイーツを買い楽しい一日を過ごしました。最終日には最初の緊張感が嘘かのようにアンナとの距離は縮まり、子ども達はアンナに抱きつきに行く等、家族みんなお別れがとっても寂しくなりました。最後はまた会おうねという約束をし、笑顔でお別れをしました。

なかなかこのような体験ができない中で、今回ホストファミリーを請負うことができ、私達家族はとても幸せだと感じました。

このようなチャンスをいただきありがとうございました。また次回チャンスがあれば、今回の経験を活かしホストファミリーに挑戦したいと思います。

人生初のホストファミリー経験を振り返って

関東Ⅱ(茨城県) 清水 幸子

縁あって我が家に滞在することになった Anna。

来日前にメールで、家族紹介やファミリーデーのアイデアについて情報交換ができました。「"duzen"できたらうれしい」と、ファーストネームでのやり取りをお願いしたところ、Anna も「大歓迎」と言ってくれ、また「お土産何がいい？」と尋ねてくれるなど、彼女のフレンドリーな雰囲気、とても気が楽になりました。“Spargel Suppe”(白アスパラガスのスープの素)をリクエストしたのですが、他にもドイツのパックやクリーム、ドイツ料理の素などたくさんのお土産を持ってきてくれました。

古河滞在は、全日程の後半ということから、疲れの蓄積などを考え、ファミリーデーは車で日光へ。古河よりは涼しく、風も吹いていたので、「私たちの気候」「華厳の滝がよかった、今日のハイライト」と自然好きな彼女らしい感想。寄り道して購入した、わらび餅入り抹茶ラテ、甘

くておいしかったね。

Anna は、娘や夫とは英語、私とはドイツ語で会話。切り替えは難しくないと言っていました、ややこしかっただろうな～と思います。地図帳を広げながら、Anna の住まいやオーストリアの家（祖父母の家だった）についての話や、ペット（犬、猫、馬）の写真、屋根裏に住むアライグマの話もとても楽しく聞かせてくれました。ボードゲームも一緒に楽しみましたね。

「数年前はメンバーとしてこの交流事業に参加し、今回はリーダー」とのこと。彼女は責任感にあふれていて、夕食後は、翌日の準備、メンバーへの連絡など作業をこなし、早く寝てしっかり休むことを大切にしていました。酷暑の中でのスケジュール、常にメンバーに頼られ、彼らに心を配る。先生でありお母さんのような Anna が、我が家で少しでもリラックスできただろうか？ そうであつたらうれしい、と今、心から願っています。Anna がくれたお土産でドイツ料理を作って、家族みんなで思い出話をしたいです。

忘れられない夏休み

北信越（福井県） 宮下 美由紀

息子の「やってみたい」の一言をきっかけに、初めてホストファミリーとして参加を決めたものの、直前までワクワクと不安が半々くらいで過ごしていました。ですが、終わってみると本当に楽しい時間を過ごすことができ、同時に寂しさを感じています。私たち家族にとってかけがえのない夏となりました。

小学生の娘は「ドイツの人は皆背が高くてびっくりした」「（かもしなどに）頭をぶつけていた」と、体格面での違いを感じたことが一番大きかったようです。言葉でのコミュニケーションは難しくても、身振り手振りで伝え、一緒に紙飛行機を作って遊んだことが印象に残ったようです。手巻き寿司やお好み焼きなどの日本食をおかわりして食べてくれたことも嬉しかったと話していました。

中高生の息子達にとっては、英語が「教科のひとつ」から「コミュニケーションツール」という認識が変わったことが大きかったようです。相手のことをもっと知りたいと思うものの、うまく伝えられないもどかしさを感じたようで、「もっと英語が話せるになりたい」という言葉がでたことは、親としては内心しめしめと思いつつ、いい刺激になったと感じました。また、それぞれ友達に声をかけ、文化祭を見据えての「ヲタ芸練習」や最終日のスポーツレクリエーション等で、交流体験を共有できたこともいい思い出になりました。

私自身は、長年押し入れにしまい込んでいた兜を部屋

に飾ったり、食事のメニューやどこを案内しようかなど、あれこれ悩む過程で、あらためて自分達の住む地域の魅力や伝えたい日本の文化を振り返る機会となったと思います。一方で、ふと「本人にどうしたいか、何が食べたいか聞けばいい」という、当たり前のことに気づいてからは、とても気持ちが楽になり、翻訳アプリをフル活用して、ドイツでの日々の暮らしや家族のことなどいろんな話を聞くことができました。

今回の受け入れ事業の日程が、オリンピックの開幕と重なったことも記憶に残る要因のひとつです。初日は男子バレーの日本対ドイツ戦を観ながら夕飯を食べ、その後始まった男子バスケットボールも対ドイツ戦。対戦国の人と自宅それぞれの国の選手を応援するというのは、不思議な感覚でしたが、スポーツを楽しむ気持ちは国が違っても何も変わらないと、あらためて感じました。

ドイツで人気のスポーツは、圧倒的にサッカーということでしたが、今回話を聞いたところ、ドイツの人にとってスポーツはとても身近で間口が広いものであり、例えば部活動などでひとつの競技を選ぶ日本と異なり、複数の競技を並行して取り組む人が多いことに驚きました。また、鬼ごっこをただで、派手に転んで痣をつくった運動不足の私と違い、ドイツでは社会人になっても、ライフワークとしてスポーツを楽しむ人が多いという話を聞き、気軽にスポーツに親しむことができる環境づくりについて考えるきっかけとなりました。

短い期間でしたが、我が家にとって忘れられない夏休みとなりました。素敵な出会いと体験に心から感謝いたします。ありがとうございました。

出会いに感謝

北信越（富山県） 北村 歩

「英語も上手に話せないし、ドイツ語なんて全然分かんがに大丈夫かな。」

ドイツと言う国名はよく聞いていても、文化や習慣もよく分かっていない。でも行ったことのない土地への興味と色々な国の人と交流したいという思いが大きく、2人と初めて会い、息子が2人をテーブルに案内してきた瞬間からワクワクが止まらなかった。

ローレンツとレナード。高校生の娘と同じ年代のイケメン2人。ハキハキしていて、礼儀正しく、いろんな事に積極的に取り組む2人と子供たちはたくさんの貴重な時間を共有した。流しそめんやスイカ割り、花火、お祭りに行ったりといった特別なことはもちろん素敵な思い出になったが、朝のランニングに一緒に行ったり、同世代の子どもらで、好きな映画や音楽の話をしたり、将来何

になりたいのか、今の自分はこういう状況で、こんな将来へ期待や不安があるといった話をしている姿、そんな何気ない日常のひと時を一緒に過ごせたこと、自然な気持ちの会話が出来た事こそが何にも代えがたい経験であり、お互いの心の距離をより近いものとしたのではないだろうか。「どこも行かなくていいから家で寝たい」だんだんうちの子になっていってくれたからこそ言葉だと私は思っている。

2人に出会えたこと、そこから広がる世界。人と人とのつながりはいつか大きな輪(和)となるだろう。まさに「出会いは財産」である。これからこの子たちはどう大きく伸びていってくれるのであろうか。ドイツを訪れる楽しみと一緒に大きく期待したい。そしてローレンツにレナード、

「いつでも(日本の家に)帰っていっちゃいね!!」

岐阜を楽しんでもらえたかな？

東海(岐阜県) 上手 菜帆

日独スポーツ少年団同時交流事業を通して、初めてドイツ人の受け入れをしました。4泊5日と短い期間でしたが、「thankyou」は日本語で何て言うの？ドイツ語は？というように、英語、日本語、ドイツ語をお互いに教え合って、楽しく交流することができました。

今回は2名の受け入れでしたが、2名とも食事に好き嫌いがなく、いろんな日本の食べ物に挑戦して、どれも美味しく食べてくれたのが印象的でした。初日はお好み焼きを食べに行きました。ドイツではタコを食べないという話を聞いていたので、海鮮を避けたものを注文しようとすると、食べてみたいと言うので、海鮮の入ったものを注文しました。そうしたら、タコは美味しいけど、イカは好きじゃない、と。何が違うんだ？と思いながらも、タコ食べられるじゃん。なんてことができました。

また、ファミリーdayは、高山と白川郷に行きました。ドイツでは和牛がとても高いという話を聞いたので、お昼ご飯には飛騨牛を食べました。とても気に入ってもらえたようで良かったです。ドイツからの長旅のせいもあり、2名とも疲労が溜まっていたようですが、なんとか岐阜での旅を楽しんでもらえたようで良かったです。

短い期間でしたが、送迎時に他のホストファミリーの方とお話することもできました。この交流を通して出会った方々とのご縁を大切に、これからも交流を続けていければ良いなと思っています。

最後に、各施設の方々、各市役所の方々のお力添えもあり、無事にこのホームステイを終えることができましたことに、感謝の意を込めて、心よりお礼申し上げます。

ありがとうございました。

夏の挑戦

東海(静岡県) 串田 智江子

高校1年生の娘から、ドイツ留学生を受け入れたいと話があった時は、驚きもありましたが迷いなく決断しました。普段は少し控えめな娘が「やってみたい」と意思表示してくれたのがとても嬉しかったのです。

彼女の名前はビアンカ。初対面、緊張しましたが、彼女のキラキラした笑顔と、翻訳アプリを使ったり手ぶり身ぶりで一生懸命会話をしたりしてくれる姿に娘もすっかり魅了されました。

ビアンカが滞在していた4泊5日間は、刺激的で楽しくて夢の様な時間となりました。まず親としてですが、娘が勉強してきた英語を駆使して必死でビアンカと会話する姿に感動しました。一番の心配は、やはり食事のことでしたが、どの料理にも「ナイス!」と言ってくれ完食で安心しました。私は勝手に学生だと思い込んでいたのですが社会人と聞き、主人とも仕事の話、あとお互いの国の事情、少子化問題、社会保障、教育や税金の違いなど踏み込んだことも知ることができ、ドイツは地に足が着いているなと感じました。

フリーの日は、主人、友達も参加し、白糸の滝、自然公園、水ヶ塚公園、上井出にあるドイツビールのお店、田子の浦の海、温泉、そして花火と盛り沢山でした。富士山は、ずっと隠れたままでしたが、最高の1日となりました。

最後に、このような素敵な経験をさせて頂き、太田川さんはじめ関係者の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

本当のファミリーとして過ごした3日間

近畿 I (滋賀県) 川添 栄計

ドイツからのホームステイ受け入れは、私たちにとっても初めてのことが多く、充実した3日間となりました。お互い少し緊張しての対面でしたが、とても気さくな、優しい少年で、ニックネームで呼んでほしいということでしたので、私たちは彼を「マックス」と呼ぶことにしました。マックスには滋賀県の観光地だけでなく、出来るだけ日本の日常を体験してほしいという思いがあり、イオンへ一緒に買い物に行ったり、ガチャガチャ、花火、イルミネーションなどたくさんの日本の日常を体験してもらいました。また、ポケモンやワンピースのアニメが大好きで、たくさんのグッズを買っていました。夕食に行った回転寿司には大興奮で、日本に来たら絶対に行きたかったと言っていました。

マックスが来る 3 日ほど前、受け入れの準備のため家の片付けをしていました。どの部屋に寝てもらおうか、家の中にゴミは落ちていないか、電気スイッチに英語表示を貼ろうかなど、マックスが来ることで家の中が一新され、私たちもとても新鮮な気持ちになりました。また、私の 2 人の子供たちにとって、とても楽しい思い出ができたようで、特に次男と一緒にゲームをしたり、ずっと一緒にマックスと過ごしていました。今思い返すと、もっとこうしてあげればよかったな、ということがたくさんあります。私自身が海外にホームステイをしていたときのことを思い出すと、ホストファミリーと過ごした何気ない一時が一番思い出に残っています。マックスの思い出に残るホストファミリーになれたかどうかはわかりませんが、機会があればいつかまた彼に会って、ぜひ感想を聞いてみたいです。

最後に、今回このような貴重な経験をさせて頂きましたこと、深く感謝しております。

初めてのホームステイ 近畿Ⅱ(奈良県) 武野 司

僕はドイツ人が来る前は、不安な気持ちでいっぱいでした。でも顔を見た瞬間、とても素敵な人だと思いました。家では一緒にゲームをしたり、ご飯を食べたりしました。ちょうどオリンピックがあったので、日本 VS ドイツの試合を一緒に見ました。日本を応援して良いのか、ドイツを応援した方が良いのか、悩みました。ドイツの選手がとても強かったです。

次の日、バスケットと一緒にしました。とても楽しかったです。特に 3 VS 3 が楽しかったです。他にもモルックやフロアーカーリングをしました。ドイツ人は僕と同じように初めてするのに、とても上手でした。

さよならパーティーでドイツのみんながパフォーマンスを見せてくれました。いろんなスポーツを表現するパフォーマンスでした。サッカーやバスケットやレスリングは分かったけど、ボートは分かりませんでした。

今回の交流を通して、英語が少し分かったし、ドイツのことも分かりました。次は僕がドイツに行きたいです。

第 51 回日独スポーツ少年団同時交流ドイツ団受入 家庭感想文 中国(山口県) 宮部

この度、日独スポーツ少年団交流事業でドイツ団員ホームステイの受け入れの機会に恵まれました。1993 年に初めて受け入れてから、3 回目となります。歳を重ねての受け入れでしたが、今回は孫たちと同年代ということで少し違った形ができるのかなと楽しみでした。

7 月 26 日夕、ウェルカムパーティーでジモン君と初対面。ブラジリアン柔術家ということでとても背の高い若者

でした。自宅へ帰りさっそく鴨居で「ゴツン」。帰るまで大丈夫だろうか。結局 4～5 回ぶつけたようです。

翌日から交流事業です。スポーツ少年団やハンドボールの小学生との交流。ハンドボールは楽しかったそうです。高校生との文化、剣道の交流。朝、自宅を出発する時、ジモンの漢字は「寺門」だよと教えたら、高校生に書道で「侍紋」と習って帰ってきました。さすが高校生、とてもいい漢字の名前をつけていました。

自宅での交流は毎日の夕方から朝と最後の 1 日でした。その間は近所の「土曜夜市」で輪投げをしたりかき氷を食べたり。バーベキューをしながら花火。近所の白崎八幡宮で宮司の説明を聞いたり。孫と宮島へ渡り、しゃもじの制作体験(キーホルダー作り)。日本文化満載の「山賊」での夕食。あっという間の 5 日間でしたが、お互いの国の事情を話し合えても楽しいひとときでした。今回はスマホの翻訳機能が活躍でした。

最後に準備・運営に携われた岩国市スポーツ少年団の皆様方、本当にありがとうございました。

ホームステイを受入れて

中国(広島県) 土井重 昌吾

当家には二名の女性の受入れを実施しました。

当家は私、妻、長女(中学 1 年生)、長男(小学 5 年生)に猫 5 匹の 9 人家族です。

私は指導者としてほとんどの日程に参加し、妻は事務局として全日程の段取りをした上、子供と共に全日程に参加したことから、慌たしい中でのホームステイの受け入れとなりました。

当社、全日程をこなしながらの受け入れは難しいし、子供との年齢も離れていることを懸念していました。しかし、受入日が近くなってくると、何をしたら喜んでくれるだろうか、どんなお土産を用意しようかなどと家族で考えている内に、不安よりも楽しみの方が大きくなってきました。ホームステイの受入は、道場で一緒に空手の練習を体験した後に、ホストファミリー宅に行く段取りでした。ですので、一緒に帰ってシャワーを浴びて貰っている間に、夕食の準備を家族で協力して行いました。メニューはベジタリアンでも食べれる手巻き寿司をメインに、天婦羅や素麺、漬物などでおもてなしをしました。一番喜んでいたのは、『枝豆』で、皮に入ったまま口に入れ、中身だけ食べて皮を出すという食べ方で、日本では当たり前のことを喜ぶ姿が微笑ましく感じました。

食事後はプレゼント交換をしたり、子供の得意なけん玉を披露したり、お土産に持って来てくれたカードゲームと一緒に遊んだり短い時間の中でも、日本語・ドイツ

語・英語・造語を駆使してコミュニケーションを取り楽しく過ごす事が出来たことで、家族みんなが受け入れを実施して良かったと実感し、本当にいい経験となりました。

ただ、ベジタリアンであることが分かったのは前日であったり、猫アレルギーであることが自宅に来てからと判明したりと、本来であれば、初めから分かっている情報が共有されていないことは、ホストファミリーとしては残念というか、危機的状況があったのは事実です。幸いにも当家は、食事メニューを前日に大幅に変更し、自宅に来てから判明した猫アレルギーも猫が独立した部屋にいるなどしたため回避することが出来ましたが、大切な団員を預かるためにも、正確な情報共有を早い段階でする必要があります。

ですから来年の受入団体に対しては、正確な情報を少しでも早く共有して頂くことを切に願います。

日独スポーツ少年団同時交流ドイツ団受入について

四国(愛媛県) 高橋 直樹

初めに、このような貴重な体験について、機会をいただきました関係者の皆様にお礼を申し上げます。

2泊3日といった短い期間でありましたが、様々な交流ができ、家族全員大変良い経験を行うことができました。

ホストファミリーとして、受け入れをすることが決定したのは、言葉や食事などについて、意思の疎通ができるのか不安がつきまといました。しかしながら、積極的に長女や妻が身振り手振りの英語やスマホの翻訳アプリを通じて、また大学生の長男には、英語で会話を交わしてもらい、お互い意思の疎通はできたのではないかと感じました。唯一私は、単語にて言葉を交わし、なんとなくではありましたが、理解をしていただけた気がしております。

夕食では、友人などを招き、大人数でのバーベキューやたこ焼きなどを、また、朝食でも日本食などふるまい、満足できる食事を準備することができませんでしたが、少しは喜んでいただけたのではないかと感じております。

2日目の午前中には、瑞応寺での体験に同行させていただき、ドイツ団の皆さんと座禅などを体験させていただきました。特に寺内の貴重な文化財などには関心を持っていたようで、スマホにて撮影している姿を見たときには、日本の若い子たちと同じ感覚なんだと感じました。

最終日には、ドイツから持参したお土産やポストカードを受け取り、家族全員で感激をいたしました。ポストカードには、ドイツの風景画像や家族の画像も掲載されており、生活環境やすばらしい風景なども見て取ることもできました。

言葉や文化が違うことで、戸惑いも多かったのですが、今回の交流によりかけがえのない体験をすることができたのは、子ども達を始め家族全員一生の財産になるのではと感じております。ドイツ団の皆さんには、遠く離れたドイツの地でも元気に勉学に励んでいただき、新居浜市に訪れたことや様々な体験を忘れずにいてほしいと感じております。

ホームステイを受け入れして

四国(高知県) 森本 小希

令和 6 年 7 月 30 日の対面式でホームステイをするピアさんとサリーマさんと初対面しました。2 人とも明るく話しかけてくれましたが、ドイツ語のため何を言っているのか理解できず戸惑いを感じました。通訳の方のおかげで、家族のことや今後の生活について話をする事ができ、少しずつ打ち解けることができました。

ウェルカムパーティーでは、ホームステイをするピアさんとサリーマさんと食事をし、日本の食文化について色々話をしました。

ホームステイ初日は一緒に犬の散歩をしました。日本の草花に興味があり道端の花の写真を撮っていました。なでしこの花が咲いていたので日本女子サッカー代表チーム名と同じであることを教えてあげました。田んぼの脇にある道に腰かけて振り向いた時の写真を撮って欲しいと頼まれたので私が 2 人を撮影しました。アニメの世界のような写真になりました。

夕食には唐揚げや天ぷらなど日本の定番料理を出しました。特に茄子の天ぷらに玉ねぎスライスと青じそのドレッシングをかけたものが好評でした。たくさん食べてくれる姿を見て嬉しくなりました。

翌日の朝食は味噌汁を出そうとしましたが、良い返事ではなかったのでハム、サラダ、果物などを用意しました。

夕食にお好み焼きとやきそばを 3 人で一緒に作りました。イカやエビが苦手だったり、鰹節の香りがダメだったり、食文化の違いを感じる場面もありました。

ホームステイを通して、言葉の壁は大きいと感じましたが、笑顔やジェスチャー、そしてスマホの翻訳機能の助けもあり、少しずつコミュニケーションが取れるようになってきました。私の名前を呼んでくれたり、日本語で「ありがとう」と言ってくれたりしたときは、とても嬉しく感じました。

私も、2 人が喜んでくれるような料理を作ろうと、いろいろ試行錯誤しました。料理を通して、文化交流が深まったように思います。

今回のホームステイを通して、ドイツという国に親近感がわき、いつかドイツに行ってみたいと思いました。

日独交流事業を受け入れてお世話された関係者の皆様お疲れさまでした。簡単ですがホームステイを受け入れた感想です。

ホストファミリーを経験して

九州(大分県) 高橋 晶子

「ホストファミリーをしてみる？」とスポーツ少年団に加入している小5の娘に聞きました。娘はとても人見知りですが、陸上を始めて少しずつ積極性が出てきました。

しかし、お客様を自宅に泊めるとなると話は別です。きっと気のない返事が返ってくると予想していました。

ところが、「ホストファミリーって何？」と興味を持ちました。説明を隣で聞いていた中学 3 年生の息子が、受け入れを表明すると「やってみたいかも」と娘から予想外の返事が返ってきました。

それからは、ドイツについて調べ、「どうしたら喜んでもらえるか？」について連日家族会議を開きました。

我が家では、「和」のおもてなしをすることにしました。和風の布を使った箸ケースや団扇を作ったり、プレゼントに甚平を用意したりしました。このような迎え入れる為の準備も楽しかったです。お二人もプレゼントを準備して下さっていて、お互いに出会う前から相手に思いを馳せていたのだと感激しました。

受け入れるにあたっては、2 つの点に心を砕きました。まずは食事です。ベジタリアンの方もいらしたので、悩んだ末に「精進料理」をテーマとしました。何が食べたいか伺うと冗談めかして「スシ」と言われたので、魚寿司を準備し、稲荷寿司を作りました。竹で装置を作った本格的な素麺流しやスイカ割をしました。これは、珍しかったのか楽しんでくれました。

翌日作った野菜の天ぷらは、大変好評でレシピを教えて欲しいと言われました。おやつのかき氷や冷たい水羊羹と白玉も美味しいと言ってもらえました。

2 日目の朝は体調不良の方の為に、出汁を使ったお粥を作ってみました。

次にコミュニケーションについてです。図書館で借りた本やスマホの翻訳機能を駆使しました。子どもたちは、連絡先の交換をして、今でもやり取りしています。それでも、もう少し流暢に英語を話せたら良かったなと拙い英会話にもどかしさを感じました。

振り返ると至らない点も多かったですが、家族が一致団結して取り組めたことや受け入れたお二人が、とても素敵な方たちなので、出会えたことも宝物となりました。

最後に、ご縁を結んで頂いたことに改めてお礼申し上げます。

感想文

九州(宮崎県) 飯干 正子

受入をしたドイツ団員 2 人は、とても素直でとてもフレンドリーで良い子でした。ドイツ語が分からない私たち、言葉を心配していましたが、私たちのつたない英語を理解してくれて助かりました。

夕食のバーベキューで、マスの塩焼きをしましたが、「とてもおいしい」、「滞在期間中で、一番おいしいご飯」と言ってくれたことが、何より私たちを喜ばせてくれました。夕食後の花火も楽しんでいただようでした。

※地方プログラム記載内容及びホストファミリー感想文については一部表記の統一等を除き原文ママで掲載

第Ⅲ章 実施概要報告

【日独スポーツ少年団同時交流シンボルマーク】



日独スポーツ少年団同時交流25周年にあたり、日本スポーツ少年団(JJSA)によって作られたシンボルマーク。

この交流のシンボルとして、日本スポーツ少年団(JJSA)およびドイツスポーツユース(dsj)が双方で使用する。

(1) 日本団派遣

① 実施要項

第51回日独スポーツ少年団同時交流実施要項〔派遣〕

本交流は、日独両国のスポーツ少年団の青少年および指導者の相互交流により友好と親善を深め、国際的能力を高めると共に、両国の青少年スポーツの発展に寄与することを目的に、2023年に調印した「日独スポーツ少年団国際交流協定書」に基づき、次のとおり実施する。

1. 主催
公益財団法人日本スポーツ協会日本スポーツ少年団
都道府県体育・スポーツ協会都道府県スポーツ少年団
ドイツスポーツユーгент(dsj)
2. 後援
スポーツ庁
3. 期日
2024年7月31日(水)日本発/ドイツ着～8月14日(水)ドイツ発/15日(木)日本着
◆日本団事前研修会:5月18日(土)～19日(日)(オンライン/全員参加)
◆日本団集合・結団式:7月29日(月)～31日(水) 2泊3日〔国立オリンピック記念青少年総合センター〕
4. 参加人数・グループ編成
日本団:100名〔11グループ97名(団員86名、引率指導者11名)、団長団3名〕
※グループ編成の詳細は別紙『日独スポーツ少年団同時交流パートナー編成(2024-2027)』のとおり
5. 共通テーマ
「スポーツ×SDGs」～スポーツが拓く社会の持続可能性～
6. プログラム
 - (1) 参加資格
〔団員〕以下の条件を全て満たし、都道府県スポーツ少年団本部長が推薦する者
① 令和5(2023)年度にスポーツ少年団に登録しており、令和6(2024)年度も引き続き登録する者
② 2000年4月2日～2008年4月1日生まれの者(派遣年度に16歳～24歳の誕生日を迎える者)
ただし、以下に該当する場合は、上記②を満たさなくても参加可とする
●令和2(2020)年度の第47回交流申込者として都道府県スポーツ少年団から日本スポーツ少年団に推薦されていた者で、令和5(2023)年度の第50回交流に参加していない者
●オンラインで開催した令和3(2021)年度の第48回交流および令和4(2022)年度の第49回交流参加者で、令和5(2023)年度の第50回交流に参加していない者
③ 次のいずれかに該当する者
1) 日本スポーツ少年団シニア・リーダー資格保有者
2) 所定の活動単位取得者(計20単位以上)
3) 都道府県スポーツ少年団本部長が特別に推薦する者
(将来、所属都道府県における日独スポーツ少年団同時交流受入をはじめとする国際交流に貢献する意欲があり、積極的に少年団活動に関わることが見込まれる者)
※ 過去に本交流に日本団団員として参加経験のある者も可とする
※ 各グループについて、当該グループ構成都道府県から人数枠を上回る団員の推薦希望があった場合、または当該グループの推薦団員数がグループ成立条件(指導者1名、団員3名以上)を満たさない場合の対応は、各都道府県からの推薦状況を踏まえ日本スポーツ少年団にて決定する。なお、全体の申込状況に鑑み、団員は本人が所属するグループとは別のグループから本交流に参加する場合がある。
④ インターネットによる通信環境および通信端末(パソコン・タブレット推奨)を有し、オンライン形式でのグループワーク、活動等に積極的に参加する意欲のある者。
⑤ 協調性があり、集団生活において規律を守ることができる者
⑥ 英語またはドイツ語等を使い、積極的に現地でのコミュニケーションを図る意欲のある者
⑦ 将来、スポーツ少年団指導者として活躍が期待できる者

〔引率指導者〕以下の条件を全て満たし、都道府県スポーツ少年団本部長が推薦する者
① 令和5(2023)年度にスポーツ少年団に登録しており、令和6(2024)年度も引き続き登録する者
② 次のいずれかに該当する者
1) 令和6(2024)年度にスポーツ少年団に「指導者」として登録し、スポーツ少年団の理念を学習した者

- 2) 令和6(2024)年度にスポーツ少年団に「役員」または「スタッフ」として登録している者で、日本スポーツ協会公認スポーツ指導者資格(「JSPQ資格」)を保有(日本サッカー協会公認C級コーチライセンス以上、日本バスケットボール協会公認C級ライセンス以上の資格を保有する者、令和5年度JSPQ資格養成講習会受講修了者を含む)し、スポーツ少年団の理念を学習した者
- ③ 日本を代表する立場の者としてふさわしい人格と行動力を有し、ドイツ滞在中の団員の心身両面のケアと成長をサポートできる者
- ④ インターネットによる通信環境および通信端末(パソコン・タブレット推奨)を有し、オンライン形式でのグループワーク、活動等に積極的に参加する意欲のある者
- ⑤ 英語またはドイツ語等を使い、積極的に現地でのコミュニケーションを図る意欲のある者
- ⑥ 原則として20歳以上、65歳以下の者(今後もスポーツ少年団で活躍できる若手が望ましい)
- (2) 経費
負担金 1人 25万円
- ① 海外旅行保険代、ドイツ滞在中の基本滞在費(宿泊費、食事代、施設入場料等)を含む。
- ② 次のものは参加負担金に含まれず、個人負担となる。
- 1) 渡航手続き(パスポート取得等)に要する経費
- 2) 【往路】居住地から日本団集合場所(国立オリンピック記念青少年総合センター)および【復路】羽田空港から居住地までの交通費
- 3) 現地における各グループ内共通経費および個人的諸費用
- (3) 事前研修会
- ① 日本団事前研修会(オンライン/全員参加)
〔期 日〕2024年5月18日(土)・19日(日) 2日間
- ※ やむを得ない事情により参加できなかった者には別途課題(調整中)を課し提出させる。
- ② グループ別事前研修会
日本団事前研修会終了後、共通テーマ・その他準備に関してさらに研修を積むため、各グループの引率指導者を中心にグループ別事前研修会を実施する。なお、期日や実施方法等はグループごとに決定する。
- (4) 日本団集合・結団式
〔期 日〕2024年7月29日(月)～31日(水)2泊3日 ※31日(水)日本出発
〔会 場〕国立オリンピック記念青少年総合センター
- (5) 推薦方法
別に定める推薦要領に基づき、都道府県スポーツ少年団から日本スポーツ少年団に推薦する。
※ 令和2(2020)年度推薦者、令和3(2021)年度および令和4(2022)年度参加者を優先して推薦するよう配慮すること。
- (6) 推薦期限
2024年3月11日(月)必着
- (7) 派遣者の選考
各都道府県からの推薦後、日本スポーツ少年団にて書類選考を行い、日本団派遣者を決定する。
- (8) 海外旅行保険
日本スポーツ少年団は本交流期間中((前後の各移動日を含む)、日本団全員を被保険者とした海外旅行保険に加入する
〔補償内容(予定)〕
- | | |
|-----------|--------------------|
| 傷害死亡・後遺障害 | 20,000千円 (2,000万円) |
| 傷害治療 | 3,000千円 (300万円) |
| 疾病治療 | 500千円 (50万円) |
| 賠償責任 | 5,000千円 (500万円) |
- (9) 参加負担金の返金
参加決定および参加負担金納入後、参加者本人の都合により本交流への参加を取り消す場合には、実費(公式ユニフォーム、航空券キャンセル等)がかかったものに関しては、それらの金額を差し引いて返金する。
- (10) 参加の流れ(推薦から日本帰国までの流れ)
- | | |
|-----------|--|
| ～3月11日 | 団員・引率指導者推薦(都道府県スポーツ少年団→JJSA) |
| ～4月上旬頃 | 決定通知送付(JJSA→推薦都道府県スポーツ少年団、参加者)
参加負担金納入(期限:日本団事前研修会まで) |
| 5月18日～19日 | 日本団事前研修会(オンライン/全員参加) |
| 6月～7月 | グループ別事前研修会、ドイツ側受入担当との顔合せ |
| 7月29日 | 日本団集合〔国立オリンピック記念青少年総合センター〕 |
| 7月30日 | 全体・グループ別ミーティング、結団式(予定) |
| 7月31日 | 日本出発(羽田空港) |
| ～8月14日 | 全体プログラム(前半)、地方プログラム、全体プログラム(後半)
ドイツ出発(8月14日フランクフルト空港→日本着:8月15日羽田空港) |

7. 個人情報および肖像権の取扱いについて

(1) 日本スポーツ協会は、本交流開催にあたり、以下の目的のために個人情報を取得する。

- ・ 交流の申込み手続きおよび参加資格審査
- ・ 交流運営上必要なプログラム編成および各種資料作成
- ・ 交流運営上必要な申込手続き
- ・ 報告書の作成
- ・ 交流運営に必要な連絡

(2) 日本スポーツ協会は、個人情報を以下のとおり共同利用する。

共同して利用される 個人情報の項目	・参加申込時及び参加決定後に提出される情報 ・交流中に取得した情報（交流中に撮影した写真および映像）
共同して利用する者の範囲	●運営団体 ・公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団 ・ドイツスポーツユース（dsj）、dsj 加盟団体 ●参加者が申込手続きを行う団体 ・当該都道府県スポーツ少年団 ※当該参加者が申込手続きを行う都道府県スポーツ少年団以外には提供されない
共同して利用する者の利用目的	●運営団体 ・上記(1)に記載の内容 ●参加者が申込手続きを行う団体 ・交流の申込手続きおよび参加資格審査
個人情報の管理責任者	公益財団法人日本スポーツ協会 会長 遠藤 利明 東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 11 階

(3) 参加申込書に記載されている個人情報の一部（顔写真、氏名、性別、生年月日、年齢、得意なスポーツ・趣味、住所）および参加者決定後に提供される個人情報（アレルギー情報）は、dsj を通じて、ドイツ滞在中のホームステイ先にも提供される。

(4) 取得した個人情報は、本交流の運営のため、旅行代理店に取扱を委託する。なお、日本スポーツ協会は、旅行代理店との間で個人情報の取扱に関する契約を締結し、適切な管理・監督を行う。

(5) 交流の様子は、参加申込書に記載されている情報（氏名、道府県、年齢）とともに主催者および主管団体を通じた公開、交流関係機関・団体および報道機関等による新聞・雑誌および関連ホームページ等への掲載、次回交流プログラムへの掲載等で公表することがある。

(6) 交流関係機関・団体又はこれらに認められた報道機関等によって撮影された写真、映像が新聞・雑誌・報告書および関連ホームページ、インターネット等によって掲載されることがある。

(7) 日本スポーツ協会は、本人またはその代理人から、保有する個人情報について、開示、訂正、追加、削除、利用停止、消去の請求があった場合、法令に則って、所定の手続に従い、誠意をもって対応する。また、本人から利用目的の通知を求められたときは、本人に対し、法令に則って、所定の手続に従い、遅滞なく通知する。これらの請求については、日本スポーツ協会 地域スポーツ推進部 少年団課 (jjisa@japan-sports.or.jp) まで連絡すること。

(8) 日本スポーツ協会の個人情報保護方針は以下 URL から確認すること。

<https://www.japan-sports.or.jp/privacy/policy.html>



② 日本団事前研修会(オンライン)

5月18日(土)		5月19日(日)	
団員	引率指導者	団員	引率指導者
30			30
12:00	Zoom入室		12:00
30	団長団・引率指導者 ミーティング (1h)		30
		Zoom入室	
13:00	Zoom入室	Zoom入室	団長団・引率指導者 ミーティング (30min)
30	開会式、オリエンテーション(30min) ・日独交流について、派遣スケジュール	30	グループ別ミーティング(1h30min) ・役割分担 ・グループスローガン ・グループ出し物 ・ドイツ国内での希望プログラム ・グループ別事前研修会 ・グループ荷物、土産品
14:00	アイスブレイク(30min) ・自己紹介、本交流参加の意気込みなど	30	
30	休憩	14:00	
15:00	レクチャー(1h) ・共通テーマ『スポーツ×SDGs』～スポーツが 拓く社会の持続可能性～ <講師> (一社)SDGs in Sports 井本 直歩子 氏	30	研修プログラム(1h30min) ・個人ワーク:課題作文のブラッシュアップ ・グループワーク:発表
30	休憩	30	
16:00	研修プログラム(1h30min) ・グループディスカッションの進め方 ・グループディスカッション(共通テーマ)	30	
30		16:00	渡航手続きについて(30min) ・西鉄旅行(株)から説明
17:00		30	事務連絡(30min)
30	派遣に関する確認事項(1h)	17:00	グループリーダー・引率指導者ミーティング (30min)
18:00	1日目終了	30	2日目終了
30	団長団・引率指導者 ミーティング (30min)	30	団長団・引率指導者 ミーティング (30min)
19:00	1日目終了	30	2日目終了
		19:00	

③ 日本団の編成

グループ	構成県	引率指導者・団長団			団員(5名以上)			小計 (引指+団員)	備考
		男	女	小計	男	女	小計		
北海道	01 北海道			0名			0名	0名	編成取り止め
東北Ⅰ	02 青森県			1名			5名	6名	
	03 岩手県								
	05 秋田県	1			1	4			
東北Ⅱ・ 関東Ⅱ	04 宮城県			1名			3名	6名	「東北Ⅱ」と「関東Ⅱ」を合併
	06 山形県				1				
	07 福島県				1	1			
	08 茨城県						2名		
11 埼玉県		1		2					
関東Ⅰ	09 栃木県	1		1名	1	2	6名	7名	
	10 群馬県				1				
	12 千葉県					2			
	15 山梨県								
北信越	16 長野県			1名		2	5名	6名	
	17 新潟県								
	18 富山県		1		1				
	19 石川県				1				
	20 福井県					1			
東海・中国	21 静岡県		1	1名	1		3名	7名	「東海」と「中国」を合併
	22 愛知県					1			
	23 三重県				1				
	24 岐阜県						3名		
	31 鳥取県								
	32 島根県								
	33 岡山県				1	1			
	34 広島県								
	35 山口県					1			
近畿	25 滋賀県		1	1名	1		5名	6名	
	26 京都府				1				
	28 兵庫県								
	27 大阪府				3				
	29 奈良県								
	30 和歌山県								
四国	36 香川県			1名	1		6名	7名	
	37 徳島県				1	1			
	38 愛媛県	1			2				
	39 高知県					1			
九州	40 福岡県			1名			6名	7名	
	41 佐賀県								
	42 長崎県	1				3			
	43 熊本県								
	44 大分県					1			
	45 宮崎県								
	46 鹿児島県					2			
	47 沖縄県								
団長団	団長	1		3名				3名	
	総務		1						
	庶務(JSPO)	1							
合計		6	5	11名	19	25	44名	55名	

(2) ドイツ団受入

① 実施要項

第51回日独スポーツ少年団同時交流実施要項〔受入〕

本交流は、日独両国のスポーツ少年団の青少年および指導者の相互交流により友好と親善を深め、国際的能力を高めると共に、両国の青少年スポーツの発展に寄与することを目的に、2023年に調印した「日独スポーツ少年団国際交流協定書」に基づき、次のとおり実施する。

1. 主催

公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団
都道府県体育・スポーツ協会 都道府県スポーツ少年団
ドイツスポーツユエント(dsj)

2. 後援

スポーツ庁

3. 期日

〔受入〕 2024年7月23日(火)～8月6日(火)

4. 参加人数・グループ編成

〔受入〕 ドイツ団：100名〔12グループ 97名(団員85名、引率指導者12名)、団長団3名〕

※グループ編成の詳細は別紙『日独スポーツ少年団同時交流パートナー編成(2024-2027)』のとおりにあたる。

5. 共通テーマ

「スポーツ×SDGs」～スポーツが拓く社会の持続可能性～

6. プログラム

(1) 受入日程

- ① 全体プログラム(前半)〔担当：日本スポーツ少年団〕
期 間： 2024年7月23日(火)～7月25日(木)
場 所： 関西を予定
- ② 地方プログラム〔担当：受入道府県スポーツ少年団およびそのグループ内〕
期 間： 2024年7月26日(金)～8月3日(土)
- ③ 全体プログラム(後半)〔担当：日本スポーツ少年団〕
期 間： 2024年8月4日(日)～8月6日(火)
場 所： 東京都

(2) 地方プログラム〔担当：受入道府県スポーツ少年団およびそのグループ内〕

地方プログラムの実施にあたっては、各受入グループ幹事県を中心とした委員会を設け、その計画と実行にあたる。

(3) 経費

- ① 「全体プログラム(前半・後半)」期間中の受入経費については、日本スポーツ少年団が負担する。
(各グループの離散・集合費含む)
- ② 「地方プログラム」期間中の受入経費については、受入道府県スポーツ少年団が負担する。なお、日本スポーツ少年団が手配する受入通訳の謝金は日本スポーツ少年団が負担する。

7. 個人情報および肖像権の取扱いについて

(1) 日本スポーツ協会は、本交流開催にあたり、以下の目的のために個人情報を取得する。

- ・ 交流の申込み手続きおよび参加資格審査
- ・ 交流運営上必要なプログラム編成および各種資料作成
- ・ 交流運営上必要な申込手続き
- ・ 報告書の作成
- ・ 交流運営に必要な連絡
- ・ 日本スポーツ協会は、個人情報を以下のとおり共同利用する。

共同して利用される 個人情報の項目	・参加申込書に記載されている情報 ・交流中に取得した情報(交流中に撮影した写真および映像)
共同して利用する者の 範囲	●主催・主管団体 ・公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団 ・都道府県体育・スポーツ協会 都道府県スポーツ少年団 ・ドイツスポーツユエント(dsj)、dsj 加盟団体 ●参加者が申込手続きを行う団体 ・当該都道府県スポーツ少年団

	※当該参加者が申込手続きを行う都道府県スポーツ少年団以外には提供されない ●参加者の滞在先 ・ドイツ滞在中のホームステイ先
共同して利用する者の利用目的	●主催・主管団体 ・上記(1)に記載の内容 ●参加者が申込手続きを行う団体 ・交流の申込手続きおよび参加資格審査
個人情報の管理責任者	公益財団法人日本スポーツ協会 会長 遠藤 利明 東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 11 階

- (2) 交流の様子は、参加申込書に記載されている情報(氏名、道府県、年齢)とともに主催者および主管団体を通じた公開、交流関係機関・団体および報道機関等による新聞・雑誌および関連ホームページ等への掲載、次回交流プログラムへの掲載等で公表することがある。
- (3) 交流関係機関・団体又はこれらに認められた報道機関等によって撮影された写真、映像が新聞・雑誌・報告書および関連ホームページ、インターネット等によって掲載されることがある。
- (4) 日本スポーツ協会は、本人またはその代理人から、保有する個人情報について、開示、訂正、追加、削除、利用停止、消去の請求があった場合、法令に則って、所定の手続に従い、誠意をもって対応する。また、本人から利用目的の通知を求められたときは、本人に対し、法令に則って、所定の手続に従い、遅滞なく通知する。これらの請求については、公益財団法人日本スポーツ協会ブランド戦略部(link@japan-sports.or.jp)まで連絡すること。
- (5) 日本スポーツ協会の個人情報保護方針は以下 URL から確認すること。
<http://www.japan-sports.or.jp/privacypolicy/tabid/102/Default.aspx>



② ドイツ団の編成

No.	ドイツ側 交流パートナー	日本側 交流パートナー	受入担当 都道府県	指導者・ 団長団		団員		合計		
				男	女	男	女	男	女	男女
1	ブランデンブルク	北海道	北海道	1	0	4	1	5	1	6
2	体操ユーゲント	東北Ⅰ	青森県、岩手県	0	1	2	5	2	6	8
3	バイエルンⅠ	東北Ⅱ	山形県、宮城県	1	0	4	3	5	3	8
4	柔道ユーゲント	関東Ⅰ	千葉県、群馬県	0	1	4	3	4	4	8
5	ヘッセン	関東Ⅱ	埼玉県、茨城県	0	1	5	3	5	4	9
6	スキューゲント	北信越	福井県、富山県	1	0	5	4	6	4	10
7	ヴュルテンベルク	東海	岐阜県、静岡県	1	0	3	5	4	5	9
8	重量挙げ	近畿Ⅰ	滋賀県、兵庫県	0	1	4	1	4	2	6
9	バイエルンⅡ	近畿Ⅱ	奈良県、大阪府	1	0	2	3	3	3	6
10	ザクセン・ザクセン ＝アンハルト	中国	山口県、広島県	1	0	6	2	7	2	9
11	ラインラント・プフ アルツ	四国	愛媛県、高知県	1	0	3	5	4	5	9
12	チェスユーゲント	九州	大分県、宮崎県	0	1	5	3	5	4	9
13	団長団	JJSA	山口県、愛媛県 宮崎県	1	2	0	0	1	2	3
				8	7	47	38	55	45	100

③ ドイツ団受入通訳一覧

No.	ドイツ側 交流パートナー	日本側 交流パートナー	通訳
1	ブランデンブルク	北海道	高坂 朋子
2	体操ユーゲント	東北Ⅰ	村田 晃
3	バイエルンⅠ	東北Ⅱ	土屋 友紀恵
4	柔道ユーゲント	関東Ⅰ／全体	秋山 大輔(※)
5	ヘッセン	関東Ⅱ	佐藤 的
6	スキューゲント	北信越	外村 瑠菜
7	ヴュルテンベルク	東海	岩間 敏之
8	重量挙げ	近畿Ⅰ／全体	竹之内 悦子(※)
9	バイエルンⅡ	近畿Ⅱ	クルーク ラウラ スザネ
10	ザクセン・ザクセン＝アンハルト	中国	坂東 あかね
11	ラインラント＝プファルツ	四国	竹内 優
12	チェスユーゲント	九州／全体	杉浦 智恵(※)
13	団長団	団長団／全体	阿部 利永子(※)

(※) 全体プログラム(前半・後半)の通訳を兼ねる。

(3) 日独スポーツ少年団国際交流協定書〔2024～2027年〕

日独スポーツ少年団国際交流協定書〔2024～2027年〕

日本スポーツ少年団（以下「JJSA」）とドイツスポーツユーгент（以下「dsj」）は、両組織間の国際交流を、2024年から2027年までの4か年継続することに同意する。

この国際交流は1967年以来実施されてきており、一般青少年教育としての成果を上げてきたばかりではなく、日本とドイツ間の友好関係にも寄与してきた。

また、この国際交流を機に、継続的な青少年交流のパートナーシップや姉妹都市関係が多く誕生している。2027年までの両組織間の国際交流の実施にあたっては、1977年より改定されてきた合意書・協定書およびそれぞれの附録の内容をふまえ、以下により協定書を締結する。

なお、2028年以降の両組織間の国際交流の継続については、本協定書の有効期限の前年である2026年から両組織間で協議を行うこととする。

I. 日独スポーツ少年団同時交流

1. 目的

本交流の目的は、ドイツ連邦児童青少年計画の基準および日本スポーツ少年団の育成計画に基づいた一般青少年教育を促進することである。同時に、本交流に参加する若者たちが、両国の文化・社会・政治・経済を知ることにより、友好と親善を深め、グローバル化した世界において、自分の現況と立場を認識する能力を身につけることである。

さらに、異文化適応能力の向上、青少年スポーツにおけるボランティア活動参加への動機付けを目的とする。

また、本交流を通して日独双方のパートナー同士の持続的な友好関係を促進・強化し、ひいては独自交流への発展の動機付けを目的とする。

2. 主催

日本スポーツ少年団／ドイツスポーツユーгент
道府県スポーツ少年団／ドイツスポーツユーгент加盟団体

3. 交流テーマ

本交流の目的達成と研修成果をより大きなものとするため、両組織間にて協議のうえ、「交流テーマ」を設定し、両国参加団員の研究課題とするとともに、少なくとも2か年継続する。

交流テーマは、様々な形態と方法によって実施することとする。

4. 事前研修

参加者は、本交流の目的を達成するために、各自自己研鑽に努めなければならない。また、訪問国の理解とグループワークのため、JJSA および dsj がそれぞれ実施する事前研修会に参加する。そこでは少なくとも次の分野が扱われる。

- 本交流の目的
- 交流テーマ
- 訪問国に関するインフォメーション（地理・歴史等）
- 訪問国の文化・慣習
- 訪問国のスポーツと青少年に関するインフォメーション
- 訪問地に関するインフォメーション

また、引率指導者のために、本交流の目的および引率指導者の役割をテーマとして研修会を別に行う。

なお、受入プログラムの責任者や通訳も、本交流の目的、内容、パートナーを理解するよう事前の打合せを行う。

5. 参加者と編成

- 派遣団の規模は最大100名とし、団長団、引率指導者、団員にて構成される。
 - 団長団は3名以内で構成し、全体を統括する。
 - 参加団員の年齢は、15歳から24歳までの範囲とする。
 - 団長団を除く、引率指導者、団員のグループ編成は、日本団は11グループ、ドイツ団は12グループに編成する。各グループの引率指導者は原則1名とする。
 - 欠員が10%に達する場合、両組織は事前に通告する。
- なお、派遣団の構成については、その実態を日独双方で確認のうえ、必要に応じて修正する。

6. 構成・パートナー

両国派遣団の構成およびパートナーの編成は、別に定める。

7. 時期・期間

本交流の時期は両国参加団員の夏季休暇期間中(ドイツ団基本日程:7月23日頃~8月7日頃、日本団基本日程:8月1日頃~8月16日頃)とし、期間については移動日を含めて最大16日とする。

8. 交流プログラム

本交流は一般青少年交流であり、「みんなのスポーツ」が重点的に扱われる。

異なる文化・言語を持つ双方の団員たちにとって、スポーツは「共通言語」といえることから、交流目的を達成するための手段として、スポーツを適切なかたちで積極的に取り入れる。

団員が訪問国での青少年交流やスポーツ体験、文化や社会について理解を深めるプログラム等を通じて、訪問国のスポーツや文化・社会、青少年活動に興味を持ち、協力的に参加するよう動機づける。また、本交流は持続可能(Sustainability)でインクルーシブ(Inclusive)な交流を目指し、世界情勢に基づいた重要なテーマを取り入れながら、その時々に応じた重要な課題やテーマを交流に取り入れる。

(1) 全体プログラム

交流プログラムには、交流の始めと終わりに JJSA および dsj が直轄する全体プログラムを設ける。

(2) 地方プログラム

交流プログラムには、各グループがそれぞれのパートナーを訪問する地方プログラムを設ける。なお、可能な限り、地方プログラムの期間中にグループの全員が同じ場所に宿泊する機会を設ける。原則として、数か所に分割する等、グループ活動に支障をきたすことは避けること。

青少年に身近なテーマでディスカッションが実施されることが望ましい。

団員に関する情報(スポーツ種目・趣味・健康に関する事項・希望)を交流開始前の十分早い時期に、受入先に提供する。

9. 青少年中心の運営

「青少年中心の運営」という原則に従い、団員は本交流の準備・実施・アフターケアにおいて、自ら積極的に行動し、交流に参加すること。

「若者が若者のために計画・運営する」という方針に向けて、受入側の青少年グループがプログラム作成および実施に参画できるよう努力する。

10. 民泊(ホームステイ)

訪問国の人・文化・生活を理解するうえで、民泊プログラムは非常に重要である。地方プログラムの作成にあたっては、民泊プログラムを取り入れる(数日間同一家庭に滞在し、ファミリーデイを設ける)ことが望ましい。地方プログラムの中での民泊は2回程度とする。

なお、参加団員の希望に応えられるよう、パートナー同士で訪問先家庭の家族構成について、交流開始前の十分早い時期に交換できるよう努力する。

11. 交流マーク

本交流 25 周年にあたり JJSA によって作られたシンボルマークは、交流のシンボルとして双方で使用する。なお、このマークは、地方の関係団体にも使用が許可される。

12. 通訳・言語

本交流の目的達成には、通訳の役割が非常に重要である。したがって、双方ともに適切な通訳を選任し、言葉の障壁を克服するよう努力する。

参加者は、日常会話程度の語学力(日・独・英語)の向上にも努める。

地方パートナー同士での直接的連携がはかれるよう、パートナー同士はこれまで以上に英語で情報交換ができるように努める。

13. 経費

国際交流の慣例により、派遣団の渡航に関する経費は派遣国、受入に関する経費は受入国が負担する。

14. 情報交換・伝達の仕方

- ・ 本交流に関する基本的事項は、現行のとおりの JJSA と dsj 間で協議・調整のうえ決定する。
- ・ 日独双方は、情報の簡略化・情報網の整備を行い、本交流の成功と事務処理作業の軽減に努める。
- ・ JJSA と dsj は、地方プログラムの効果的な情報交換のため、双方のパートナー(都道府県スポーツ少年団、dsj 加盟団体)の直接的連携を強化することに努める。
- ・ JJSA は都道府県スポーツ少年団の中に幹事県を置く。
- ・ dsj 加盟団体は、2 年間の本交流に関するあらゆる事項の窓口となる担当者を置く。
- ・ JJSA、dsj および双方のパートナーは、本交流の準備にあたり、オンラインツール等を活用し、円滑な情報交換・共有に努める。(日独双方で交換する情報については以下を参照)

(1) プログラム希望事項

(2) 写真付き名簿

(3) アレルギー・持病・疾患に関する情報

II. 日独スポーツ少年団指導者交流

1. 目的

本交流の目的は、JJSA および dsj の指導者が両国を相互に訪問し研修を実施することにより、それぞれの指導者の資質向上をはかるとともに、指導的任務への準備をし、日独スポーツ少年団同時交流の充実と、両国の青少年スポーツの発展に寄与することを目指すものである。

2. 参加者

派遣団の規模は、最大 10 名とする。10 名の中に組織を代表する団長を 1 名おく。

派遣団は、この本交流が青少年スポーツの今後の発展と青少年交流の資質の向上に寄与すべく、また情報交換および意見調整の場として、その時々必要性に応じて編成される。

3. 時期・期間

本交流は派遣と受入を隔年で実施する。期間は最大 2 週間とし、時期は毎年両組織間の協議で決められる。

4. 研修内容

本交流は、両国のスポーツ組織とその運営および課題、スポーツにおける青少年活動の実情などを研修するものである。

また、スポーツ・青少年に関すること以外にも訪問国の文化・社会について理解を深め、研修の成果をより充実させる。

講義による理論的説明の他、さらに地方におけるスポーツや青少年活動の実態を研修するプログラムを取り入れる。

5. 交流テーマ

本交流における研修成果をより大きなものとするため、両国にて協議のうえ「交流テーマ」を設定する。その際、参加者の希望もできるだけ考慮する。

また、両国指導者間における意見情報交換、フリーディスカッションの場を設けることが望ましい。

6. 通訳

本交流の目的達成には、通訳の役割が非常に重要である。正確な内容伝達のため、双方とも専門知識をもった通訳を選任する。

7. 経費

国際交流の慣例に従い、派遣団の渡航に関する経費は派遣国、受入に関する経費は受入国が負担する。

III. その他

1. 両組織は年に一度、役員レベルで事業の評価また今後の方針を協議する場を対面またはオンラインで設ける。対面で行われる場合は両国で交互に実施されるようにする。

1. それぞれの国内においても、両国間の今後の青少年交流の発展に、両組織ともに積極的に協力する。

2. 両組織は、将来の青少年育成に関する提携関係を開発・発展することに努力する。

3. 両組織間での青少年育成に関する提携関係は、青少年活動のグローバル化、またヨーロッパおよびアジアにおける発展に適応される。

4. この同時交流と、その文化政策上の意義が両国で認められるよう、両国政府機関へのコンタクトを今後も充実させる。

5. 本交流に参加する青少年が安全で、かつ安心して事業に参加できる環境を整備することを目的とした保護措置について別紙の通り定めることとする。

6. 本協定については両国の協議のもと、内容を変更することができる。

IV. 問題処理

本協定書について問題が生じた場合、または本協定書に定めのない事柄が生じた場合は、双方で協議し、互いに誠意をもって解決にあたるものとする。

2023 年 7 月 27 日

(4) 日独スポーツ少年団同時交流パートナー編成表(2024-2027)

No.	ドイツ側 交流パートナー	日本側 交流パートナー	構成県 (2024-2027)	定員
1	ベルリン ブランデンブルク	北海道	北海道	6
2	シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン 体操	東北Ⅰ	青森、岩手、秋田	8
3	バイエルン	東北Ⅱ	宮城、山形、福島	8
4	柔道	関東Ⅰ	栃木、群馬、 千葉、山梨	8
5	メクレンブルク＝フォアポンメルン ヘッセン	関東Ⅱ	茨城、埼玉	9
6	スキー 南バーデン	北信越	長野、新潟、富山 石川、福井	10
7	ヴュルテンベルク	東海	静岡、愛知、 三重、岐阜	9
8	潜水 重量挙げ	近畿Ⅰ ※1 ※2	滋賀、京都、兵庫	6
9	フェンシング モータースポーツ	近畿Ⅱ ※1 ※2	大阪、奈良、和歌山	6
10	ザクセン＝アンハルト ザクセン	中国	鳥取、島根、岡山 広島、山口	9
11	ラインラント＝プファルツ	四国	香川、徳島、 愛媛、高知	9
12	ノルトライン＝ヴェストファーレン チェス	九州	福岡、佐賀、長崎、 熊本、大分、宮崎、 鹿児島、沖縄	9
13	団長団	団長団	団長団	3
				100

※1: 受入は近畿Ⅰと近畿Ⅱの2グループ(3府県ずつ)に分かれますが、派遣団は1つの近畿グループ(6府県)として派遣します。

※2: ※1に伴い派遣団における近畿グループの定員数は12名(引率指導者1名、団員11名)とする。

(5) 日独スポーツ少年団同時交流における青少年保護措置

日独スポーツ少年団同時交流における青少年保護措置

日本スポーツ少年団(JJSA)とドイツスポーツユース(JDS)は、日独スポーツ少年団同時交流を実施し、その成功にむけて協力する。

本事業の目的は両国青少年の人格形成、両団体のスポーツによる青少年の健全育成における協力と交流の促進である。その際に参加団員が安全で、かつ安心して事業に参加できる環境を整備することは重要な課題である。

そのために、両団体とも共通の青少年保護措置の重要性を認識するものである。

青少年保護措置は予防的措置並びに不測の事態が発生した場合の対応方法を網羅するとともに、日独スポーツ少年団同時交流の実情に則したものでなくてはならない。

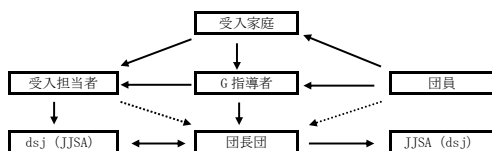
両団体はこの青少年保護措置を実施し、変更の必要性が生じた場合は、その都度両団体で協議の上、改善することとする。

1. 個人情報の取扱い

個人情報の取得は、利用目的を明確に定め、その目的の達成のために必要な限度においてのみ行うものとする。また、取得した個人情報については、利用又は第三者に提供してはならない。ただし、法令に基づく場合及び本人の同意があり、かつ業務遂行上必要な範囲においてはこの通りではない。

2. 緊急時の連絡方法と対応措置

緊急時において適切に対応するためには両団体での迅速な情報共有と対応策の検討が重要である。そのため、緊急時には以下の経路に則り連絡を取り、その都度適切な対応をする。



※実線・・・主となる連絡経路 破線・・・予備としての連絡経路

3. 参加団員のジェンダーに特有な関心(興味・欲求)への配慮

青少年の成長過程において、その性のあり方に基づく興味や経験は様々である。

そのため、本事業の実施に際しては、同性の指導者及び相談ができる立場となるための人選が求められる。

上記を踏まえ、そのような参加団員の年代の特徴に配慮し、両団体とも団長団、指導者及び班長の人選にあたり、男女混合の人選に配慮する。

4. 民泊家庭の選定と民泊家庭への事前研修に関する基準

民泊プログラムは同時交流を実施する上で、不可欠な要素である。

また同時に、適切な民泊家庭を選定することは容易ではないことも事実である。従って、民泊家庭の選定に際して、下記の事項について配慮する。

- ・ 民泊家庭を選定した団体は、その民泊家庭に対し、事前研修を必ず行い、本措置の内容について取り扱うこととする。
- ・ 参加団員は可能な限り、同性、同年代の青少年が最低1人いる家庭へ滞在する。
- ・ 未成年に関してはできる限り1家庭へ2名の滞在とする。

5. 暴力・ハラスメント・差別の防止及び対応措置

青少年に対しての、または青少年間での暴力、セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメント、差別を防止し、社会的、民族的、文化的背景、世界観、宗教、政治思想、性的傾向、年齢、性別に関わらず、すべての人間の尊厳を尊重し、フェアで平等に扱う。不測の事態が発生した場合には、両団体とも上記「2. 緊急時の連絡方法と対応措置」の内容に基づき問題解決へ向け積極的に取り組む。

団長団、指導者、団員、民泊家庭、通訳への事前研修では、本保護措置の他、必要と思われる事項に関し研修を行う。

6. その他

- ・ 両団体は、青少年、特に未成年者の心身に影響を及ぼすとされる、酒・タバコなしの交流を目指す。

●あとがき

51 回目を迎えた日独スポーツ少年団同時交流（派遣）が無事に終了しましたことを、心より感謝申し上げます。今回の交流は、両国のスポーツ文化を理解し合い、友情を深める貴重な機会となりました。参加者一人ひとりが、異なる文化や価値観に触れることで成長し、多くの学びを得られたことと思います。

この交流を通じて、スポーツの持つ力をあらためて実感しました。そこには国境を越えて人々を繋げ、共に努力し、協力する力が確かにありました。この素晴らしい機会に、日本団庶務として携われましたことは大変喜ばしく、誇りに感じております。私たち日本団は、日本各地から集まった仲間、またドイツの皆さまと共に過ごした時間を大切に、今後もスポーツを通じてさらなる国際交流の機会を創出していきたいと考えています。

最後に、この交流を実現するために多大なご尽力をいただいたドイツスポーツユースエントをはじめとする関係者の皆さま、そして日本団の皆さまに心より感謝申し上げます。今後とも、日独間の友好とスポーツの発展に向けて、共に歩んでいけることを楽しみにしております。

石田 翔太郎（第 51 回日本団庶務）

第 51 回日独スポーツ少年団同時交流（受入）の実施に当たり当協会と共催していただきました都道府県スポーツ協会並びに、ご協力賜りました市区町村スポーツ少年団をはじめ、単位スポーツ少年団、ホストファミリーなど、受入関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

各受入グループからご提出いただいた地方プログラムの報告書やホストファミリー感想文を拝読し、今年も多くの方々のご協力により本交流が成功裏に終了したことが分かりました。ぜひ、ドイツ団とできたつながりを今後も大切に保ち育ていただければと思います。

本交流は、1973 年に始まって以来、日本のスポーツ少年団とドイツの青少年スポーツ団体がお互いの国で交流することで、一般青少年教育や国際的な友好関係を育むことに寄与して参りました。その性質が今も変わらず受け継がれている一方で、日本を取り巻く社会情勢は大きく変化し、50 年以上続いてきた本交流もその社会情勢に併せて形を変えていく時が来たように感じています。ミーティングや情報・連絡交換などをオンライン化し、パートナーグループごとに密に連携をとることで、より早く正確な内容を伝達することが可能となりました。交流の独自化も視野に入れ、今後の交流の在り方を都道府県スポーツ協会と模索していきたいと思います。

近年、ますます多様性を帯びていくグローバル社会において国際感覚を養うことは今を生きる私たちにとって欠かせません。本交流が、携わっていただいた皆様にとって「多様な考え方や習慣を尊重する力」、「言語能力だけでなく非言語的なコミュニケーションスキル」などを備える一助となり、延いては両国のスポーツ界の発展につながることを願っております。

白波瀬 まゆ（ドイツ団受入担当）

第 51 回日独スポーツ少年団同時交流報告書

■発行日 2025 年 1 月 23 日

■編集発行 公益財団法人日本スポーツ協会 日本スポーツ少年団

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町 4-2 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 内

TEL03(6910)5814



公益財団法人日本スポーツ協会
日本スポーツ少年団

Japan Sport Association
Japan Junior Sport Clubs Association